

旅の終わりの、更にその先の物語。

しろまち

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

キタロー（P3主人公）とハム子（P3女主人公）がトリニティソウルの世界にやって来た。

大いなる封印により、死の顕現であるニクスを封じたP3主人公（キタロー）、P3P主人公（女主人公）。そして約束の日、アイギスや駆け付けた仲間達に見守られながら目を閉じ——再び目を開けると、知らない街に立っていた。

綾凧市というその街は、身体が表裏反転したような死体が特徴的なリバス事件と呼ばれる事件が相次いでいるらしいというが……。

内容は一文目の通り。その他の注意文などは前書きにて。

※p i x i vにて同内容を投稿済み。

キタロー&ハム子であってキタロー×ハム子（CP）ではありません。

8 / 25 : 完結しました。

目次

11 : 剛毅 (2)	152
11 : 剛毅 (1)	149
10 : 運命 (2)	144
10 : 運命 (1)	139
9 : 隱者	122
8 : 正義 (2)	111
8 : 正義 (1)	108
7 : 戰車 (2)	100
7 : 戰車 (1)	89
6 : 恋人 (4)	84
6 : 恋人 (3)	81
6 : 恋人 (2)	77
6 : 恋人 (1)	71
5 : 教皇 (2)	64
5 : 教皇 (1)	56
4 : 皇帝	41
3 : 女帝	26
2 : 女教皇 (2)	23
2 : 女教皇 (1)	21
1 : 魔術師 (4)	19
1 : 魔術師 (3)	16
1 : 魔術師 (2)	12
1 : 魔術師 (1)	6
0 : 愚者	1

21 : 世界 (2)	21 : 世界 (1)	20 : 審判 (2)	20 : 審判 (1)	19 : 太陽 (2)	19 : 太陽 (1)	18 : 月 (3)	18 : 月 (2)	18 : 月 (1)	17 : 星 (2)	17 : 星 (1)	16 : 塔 (4)	16 : 塔 (3)	16 : 塔 (2)	16 : 塔 (1)	15 : 惡魔 (3)	15 : 惡魔 (2)	15 : 惡魔 (1)	14 : 節制 (3)	14 : 節制 (2)	14 : 節制 (1)	13 : 死神 (3)	13 : 死神 (2)	13 : 死神 (1)	12 : 刑死者
290	282	277	265	258	253	248	242	238	232	226	222	219	217	213	210	207	200	193	187	183	181	177	171	159

2
2
∴
宇宙



296

2
1
∴
世界
(3)



293

0・愚者

目を閉じた、その瞼に。

……輝く蝶が通り過ぎた。

『……………次は綾凧。あやなぎ綾凧駅……………』

音楽を流すイヤフォン越しに、電車のアナウンスが聞こえて来る。

知らない駅名だ。窓ガラス越しに映る景色も見覚えは無い。

行き先は知らされども他には何も分からず控えめに揺れる電車が少し高い建物の陰に入ると、車内へと反射したガラスを通して少年と同じく外を見る少女と目が合った。

音楽が次の曲へと変わる。流れる景色と共に視線が流れて隣に居る少女へと移り、互いに直接顔を見合わせた所で目の前のドアが開いた。

綾凧駅と繰り返すアナウンスを背景に、乗客が次々と電車から降りて行く。それに半ば押し出されるようにして少年と少女も電車から降り、駅から出た。

外は既に陽が暮れて、暗くなり始めている。

元々そこまで往来も盛んでないのか、それとも時間帯の為か、行き交う人々は全く居ないという訳ではないがとても多いというまでもいらない。勿論、目の前で通り過ぎる人々も、駅の外も、少年と少女には見覚えの無いものだった。

見知らぬ街で、声を掛けて来る者は居ない。駅前のほぼど真ん中で突っ立った姿に怪訝な目を向けていく者は居るが、それだけだ。まるでその他の人々と同じように、ただの通行人人のように思われているようだった。ただ行き交う人々を見ているだけでも時間は過ぎ、傾いていく陽につれて影も伸びていく。

そうして幾程経っただろうか、実際はそこまで長時間経っている訳でもない中で、少年は少女と共に歩き出す。

首許から垂らしたイヤフォンを耳に掛け、プレーヤーのスイッチを

入れる。充電はフル。懐かしくも聞き慣れた音楽が流れ、見知らぬ街のざわめきとを隔てる。

知らぬばかりの中で、よく馴染んだ音。しかしそれを引き裂いたのは、プレーヤーの音量よりも高く大きく鳴り響くサイレンの音だった。

けたたましいサイレンの音が重なり合い、プレーヤーの音楽どころか他の物音すらも遮って足下を震わせる。足元から伝わる鳴動の気配が膝から指先、そして心臓を震わせるのとほぼ同時、視界に映った揺らめきに少年と少女は走り出していた。

「ふああ……はあ、ダル……って君達!? そっちは通行禁止——」

擦り抜けた刑事らしき男の制止が背中に聞こえて来たが、それに耳を傾ける事無くただ走る。

夜陰を染める赤色のパトランプに明瞭としないノイズ混じりの無線、サイレンの音と混じり合う中で歩道橋の階段を駆け上がった。

中段の踊り場から、橋桁まで。段を上がる毎に歩道橋全体が大きく揺れ、足裏から響く振動も動かす身体と同じく鼓動を跳ね上げさせる。

夜闇を照らす筈の電灯は明滅を繰り返し、やがて微かな火花を散らして消えて一段暗闇へと誘う。

そうして周囲の照明が落ちた歩道橋の橋桁上に最初に見えたのは、倒れ伏した警察官らしき人々と、見知らぬ男の背中。そして、その男に組み伏せられた女性と——中空に揺らめく「もの」だった。

半透明の人型らしき「もの」が、同じく半透明の女性型の「もの」を組み伏せた女性から引き剥がすようにし、黄色めいた幾筋の糸で絡め取って己が内に取り込もうとしているように見えた。

その行為がどのような名を持ち、何の意図を以て行われるのか、少年も少女も知らない。だが、その行為によって引き起こされる意味を、少年と少女は知識を越えた領域で理解した。

したがって、行動も意識的にというよりも無意識に近かった。歩道橋を駆け上がった足に勢いをそのままに人型の「もの」を従えた男の背中へ向けて走り出し、腕を振り上げようとして——そして、振り上

げた手の先に握られたものを見て、動きが止まった。

いつの間に。まさしく、そんな形容が相応しかった。

何故、「それ」が此処に在るのかは分からない。先程まで、「それ」を取り出した覚えも無い。

しかし、酷く手に馴染む「それ」の名前を、「それ」の使い方を、少年と少女は忘れようも無くよく覚えている。

故に「それ」を使って今するべき行動に、一片の躊躇いも無かった。銀色のスライド部分に刻まれた「S・E・E・S」の文字が、月光を受けて鋭く煌めく。

「死」の衝動を沈めた礎たる魂が波立つ。心の海から打ち寄せるのは、懐かしくも決して忘れ得ぬ始まりの「仮面《ペルソナ》」。

銃口はこめかみへ。指先は引き金へ。

染み付くように馴染み過ぎた所作で、心の海に揺蕩う「自分」を喚んだ。

『——ペルソナ！』

我は汝、汝は我。

召喚器の引き金を引くと同時、青い欠片が飛び散ると共に少年と少女、それぞれから一体ずつ「もう一人の自分」が現れる。

豎琴を携えた幽玄の奏者——オルフェウス。

喚び掛けに応じた二つの姿が顕現し、そして自分の意思に従って動きを生じさせる。

女性型の「もの」を取り込もうとする存在の背に向かって、携えた豎琴を振りかぶる。気配に気付いた男が少年と少女の方を振り返り、同時に男が従える「もの」も振り向いたが、遅い。

打撃音らしい音は響かなかつたが、衝撃がすっかり暗くなった空に浮かぶ雲を切り裂く。空を覆った雲が薙ぎ払われた事により、冴々とした月光が降り注いだ。

オルフェウスの攻撃を受けた「もの」が、その衝撃によってか捕らえていた女性型の「もの」を離す。女性型の「もの」は少しずつ半透明であった色彩を薄くし、やがて男が組み敷いていた女性と重なるようにして消えていく。

そしてそれは、男の方も同じであった。男が従える「もの」がオルフェウスの攻撃により、その体躯を揺らしながら徐々に輪郭を薄めていく。数秒後には先程の女性と同じように、ふらつく男の身体と重なって消えていった。

深く呼吸を漏らすと、それに合わせて喚び出したオルフェウスの姿も消えていく。ただ完全には消えずに心の浅瀬を揺蕩うような感覚を覚えつつ、少年と少女は召喚器を下ろした。

「オイコラ何やってんだ!? 通行規制しとけって言っただろうが!」
「イヤだつてあの子達が勝手に……」

静寂は一瞬だけ。けたたましいサイレンの音と警察官と思しき者達の声に、はつと我に返る。同じくして、複数の足音が歩道橋を駆け上がって来るのが聞こえた。

仰向けに倒れた女性が小さく呻くのが耳に届く。意識は回復していないようだが、見た限りでは目立った外傷は無いようだ。

ならば男の方は、と視線を向けると、その瞬間に目の前に幾枚もの純白の羽根が舞い、少年と少女の視界を塞ぐ。

風と共に巻き上がる羽根に思わず少年と少女が目を瞑って立ち竦み——『瞼の裏に』ちらついたモノに目を見開いた時には、既に羽根の名残も男の姿も無かった。

「君達、そこで何をしている!?!」

背中に刺すような鋭い声を向けられ、少年と少女は思わず肩をびくりと揺らす。お互いの顔を見合わせ、視線が合ったその一瞬後。

逃げよう、という両者が下した判断は完全に同じ且つ即座だった。声を向けられた反対側へ向かって、走る。後ろは振り返らない。「オルフェウス」は自分だが、振り返った先にエウリュディケは居ないと思うので振り返る事もしない。絶対面倒臭い事になるという少年と少女の思考が一致し、双方とも無言で近付く足音や向けられる声から離れようと全速力で歩道橋を駆け下りた。

変わらず鳴り響くサイレンの音が煩い。音楽プレーヤーの電源はいつの間にか切れていた。道路脇に停まったパトカーに通行人達が何事かと時折立ち止まったり囁いたりしている。少年と少女はその

人波の間を縫うようにしながら、やがてサイレンの音も遠ざかって人通りも少なくなつて来た所で、少年と少女はほぼ同時に足を止めた。息はほとんど切れていない。故に呼吸を整える事に使つたのは数秒のみで、そこから一度息を深く吸つた後に改めて少年と少女は互いに向き合つた。

『ねえ』

これからどうしようか。

そう声を向けるのも、全く同じタイミングだった。

1：魔術師（1）

綾風市内のファミレス。

店内のボックス席の一角で、神郷家の三兄弟は夕食を食べる事になつた。

「連絡寄越さない兄貴が悪いんじゃないか、閉め出し食らってたらどうするんだよ」

「こうして迎えに来ただろう。それに鍵と番号は変えていないと言つた」

「……そんなん覚えてない」

叔母の許から綾風市へ来た神郷家の次男と三男、慎と洵の許まで引受人代わりとなつている長兄の諒が迎えに行く手筈だつた。

しかしながら迎えにどころか連絡も中々付かず、先に住まいの方へと行ってしまおうか——そんな風に決めかけた所で、ようやく諒が迎えに来たのだつた。

諒の言によると、これでも当初よりも早くに終わった方らしい。折り返しの連絡も無く、ようやく迎えに来た時点でもかなり遅くなつていたというのにこれで更に遅くなつていたというのなら、とんだ待ちぼうけになつていたではないか。

再会の喜びよりも気恥ずかしさ故にいつい不満の言葉が出る慎と、久々の再会にも関わらず明らかに素っ気無い諒。折角の兄弟揃つての夕食だというのに、気まずさが流れる空気に洵が眉を寄せて少し困つた顔でファミレス内を見回すと、入り口辺りで新たな客が入つて来た所だつた。

些か夕食時には遅い時間とはいえ、それでも店内は現在満席状態らしい。店員が制服姿の男女に対し、ウェイティングボードに名前を書くよう案内していた。

「洵？ どうした？」

兄が怪訝に呼び掛ける声を聞きながら、洵は制服姿の少年と少女を見つめる。

黒を基調としたブレザー型の制服。男女故に当然の事ながら全く

同じではないが、デザインはよく似ているから恐らく同じ学校の制服なのだろう。

見慣れない。それもあるのかもしれない。ただ、それ以上に。

「同じ……？」

不意に口から零れ落ちた眩き。それを聞き取ったかどうかは分からない。しかし洵が思わず言葉を漏らした直後、入り口近くに居た少年と少女が全く同じタイミングで洵の方へ振り向いた。

少年と少女が、はつとしたような、何処か驚いたように目を見開いてから、洵の方を見ると今度は怪訝そうに目を瞬かせている。

振り返るタイミングといい、その所作は少年と少女どちらも揃ってそっくりで。まるで双子のようだとも思えるかもしれない様を、しかし洵は洵達だから故に見つめた少年と少女を「同じだ」と感じた。

「洵」

少年と少女を見つめたままの洵に、再度兄から声が掛かる。それに洵は我に返ると兄達の方へ振り向き、しかし少年と少女の方へまた視線を向けて店員に声を掛けた。

「あの。ここ、相席でも大丈夫です」

「はっ？ お、おい洵……」

「良いでしょ、諒兄ちゃんも慎兄ちゃんも」

思わず声を上げ掛けた慎の言葉を遮るようにして、洵は半ば強引に兄達へ同意を求め。

兄達の事、いきなりだったとしても見ず知らずとはいえ何か確執がある訳でもない者達を邪険に扱うような事はしないと分かっている。洵の突然の言葉にも、慎は戸惑いつつ、諒は相変わらず表情を変えずに頷いた。

「構わない」

「まあ……そりゃ、別に良いけどさ」

予想通りの答えに思わず洵の顔に僅かな笑みが零れつつ、再び店員や少年と少女の方へ向き直す。

先客である洵達が相席の提案と了承を受け、店員が少年と少女を洵達が座っている席へ案内する。

「ありがとうございます。席、お邪魔します！」

「助かったよ、ありがとうございます」

やや勢い良く頭を下げて明るく言った少女は慎と洵が座っている側へ、軽く頭を垂れるに留めて短く礼を告げた少年は諒が座る側の席へ腰を下ろす。6人掛けのボックス席の為、座るスペース的にはちょうど良くなった。

店員が改めて水とおしぼり、それから一旦引いたメニューを持って来る。少年と少女がそれらを受け取りながらもその一方で洵の方へ視線を向けている事に気付いて、洵は訝しげに眉を潜めた。

「……ええと、あの、何……?」

やはり突然声を掛けたのはまズかつただろうか。恐らく面識も無い筈だろうに相席を持ち掛けたのだから、不審に思うのは当然だ。そう思った洵が控えめに伺った所、少年と少女は洵の呼び掛けに最初に声を掛けた時と同じように数度瞬きを繰り返してから首を横へ振った。

「あつ、ううん、何でも。知り合いに声がちよつと似てたから、びつくりしただけ」

「見た目とかは二人とも全然違うから、気にしなくていいよ」

二人、と洵が何か言葉を出すよりも早く、少年の言葉に少女が呟く。然程大きくも無かつた筈の少女の呟きを聞き取った少年がメニューから視線を持ち上げ、少女と視線を合わせる。その面がどちらも鏡合わせのように、その癖無表情にも見えた。

「僕はそう」

「そっか」

短い言葉に返す言葉も短く、そして淡々と。再びメニューの方へ視線が落ちた少年と同じく、少女もメニューを見た。

「ところで自分の所持金確認した？」

「……。……した」

「いや確認したの今だよな」

少女の問い掛けに無言で財布の中を確認した少年に、思わず慎が突っ込む。相席を了承したがそれ以上は干渉しようとしていなかった

た諒ですらも、何処となく呆れたような目を少年へ向けていた。

「それはどうでもいいから」

「良くないと思うんだけど……」

「あつ、すみませんオーダーお願いします」

「これとこれご飯大盛りで」

「話聞かないタイプって言われませんか？」

空気読み人知らずか。

相席しているだけで知り合いではないのだから和気藹々とする必要性は確かに無いのだが、愛想が悪いというよりもマイペースが過ぎて困惑する。

雰囲気独特というか、浮世離れしているというか——どんな表現が正しいのか分からない。ただ、同年代だと思っ慎から見ても、この少年と少女は確かに洵が気にするように意識の何処かが惹かれてしまふような感覚があつた。

何故だろう。思えども、慎に思い至るような心当たりは無い。故に泡のように浮かび上がった疑問は消える事無く、口に含んだ水と共に飲み込む。

ブレザー型の制服姿の少年と少女。この綾風市内の学校の生徒だろうか。それならこれから転校する身としては、同じ学校ではないにしても地方独特の雰囲気というのもあるだろうから何か訊いてみようか。

食事中は邪魔してはいけないから、食事が終わったらタイミングで

……

「……食べるの早くないか」

特に少年の方は二人分くらい、それもライス大盛りで頼んでいた筈だが、もうほとんど残っていない。同じファミレス内のメニューであるから然程ボリュームは慎達が頼んだものと変わらない筈だから、少年と少女の食べるペースがおかしいという事になる。

「別に。普通だけど」

「そうかなあ……」

何の事も無しに言う少年の言葉に、洵が控えめに呟く。多分普通で

はないと思う。

制服姿だという事から年嵩は恐らく慎と同じくらい。慎も体格が良いという程でもなく自分としては平均的だと思っっているが、少年はそれよりも些か細身に見える。二人分の量をペロりと平らげるようには見えない。勿論、少女の方も同じだ。宇宙並みの胃袋でも持つているのだろうか。

そんな慎や洵の思考を余所に、随分と少なかつた残りも少年と少女は綺麗に完食する。

「御馳走様」

「御馳走様でした!」

神郷家が少年と少女の分まで勘定を負担する訳ではないのだと勿論分かつていたものの、あつという間に、その上まだまだ余裕そうな少年と少女の様子に何となくこちらの財布事情を心配してしまう気分になってしまったのは何故だろう。慎の視界から外れた所で、諒がひっそりと伝票を一瞥してから眼鏡のブリッジを押し上げていた。

「席、ありがとう」

「助かつちやつた」

「え、あ、ううん。空いてたし……」

我に返つたように洵が遅れて反応を返すのも確認しないまま、少年がそれじゃ、と伝票を手にとつて席を立つ。同じように、少女もおしぼりで軽くテーブルを拭いてから立ち上がった。

「ちよ、ちよつと待つてくれ!」

思わず出た声は、思いの外音量が大きかつたらしい。近くの席の客達が一斉に声の主である慎の方へ向いて、何とも居たたまれない恥ずかしさが込み上げる。呼び掛けた先である少年と少女も、不思議そうに慎の方を見ていた。

どうしよう。

呼び止めたは良いが、その後どんな事を言ったら良いのか分からない。元より、反射的に呼び止めてしまったのだから尚更だ。他の客は直ぐに慎から意識を外したようで視線は少なくなったものの、問題は呼び止めた先である少年と少女。そちらは変わらず慎の次なる言葉

を待っているようで、しかし他に何を言うべきかも分からずに当の慎自身が困惑する羽目になる。

「未成年だけで夜遅くまで出歩くのは関心しない。早く帰るように」そんな風に慎が一人で軽く焦っていた中で、慎が改めて言葉を出すよりも少年と少女へ掛けられた声に慎は、え、と声の方へ振り返る。声の主は兄——諒だった。

諒は訝しげな慎の方へ一瞥のみを寄越し、改めて少年と少女の方を見る。恐らく面識もない筈だが、大人として、一警察官として一応声を掛けておこうと思ったのだろうか。慎はそう思うものの少年と少女を見据える諒の顔が慎には相変わらぬ素っ気無い無表情に見えて、しかしそれだけではないようにも思えて直接問う事は出来なかった。

「確かに」

「えーっと……善処します?」

対して、少年と少女が返したのはあまり信用ならなさそうな返答。他人の事ではありながら、慎は思わず心配になる。やっぱり諒も心配に思つて声を掛けたのかもしれない。弟の洵も、明らかにこれはあんまりアテにならないな、とでも言いたげな呆れた顔をしていた。

しかしながら、単に同席になっただけの関係。世間話どころか挨拶らしい挨拶もしていないような間柄だ。言う筋合いも言われる筋合いも無いのはもったもな所で、結局信用ならない言葉を残されたまま、慎達は少年と少女を見送った。

「……何か不思議な心地がする」

「……そうだな」

ぽつりと呟いた洵に、諒が同意する。

久方に再会してから素っ気無く、何を考えているのか分からない長兄の思考が今少しだけ共感出来たような気がして、慎は少年と少女に對して不思議だ、と洵と同じ感想を改めて心中で呟いたのだった。

1：魔術師（2）

空には月が浮かんでいる。

欠けの無い丸い満月。月色とも呼ばれるような、淡い青を宿した色だ。あの見慣れ過ぎた青緑色ではない。

まだ日付が変わるような遅い時刻でもない。だがファミレスで注意されたように、制服姿の男女がうろつくには不審に思われても仕方ない時間だろう。幸いにも巖戸台ほど人の流れは多くはないようだから、駅に居てもあからさまに不審気に見て来る者も居なかった。

繁華街らしい駅前から離れると、随分と喧噪から掛け離れた場所も多い。静かだとも言っている。今は人も周囲には居ない。

駅と比べて、照明の類も少ない。視界に映る街灯の明かりは不規則に明滅し、辺りを照らしてはまた暗闇に戻すを繰り返している。

そんな頼りない街灯の光につられたのか、こんな夜に羽を瞬かせる――あれは。そう認知した瞬間、街灯の下に佇む姿が映って目を見開く。

「……イゴール」

名を呼ぶと、ベルベットルームの主であるその者はぎよろりと見開いた目を動かして少年と少女を見た。

「――御久し振りで御座いますな、お客人方」

長い鼻の下にある口から紡がれる声は、あの青いベルベットルームで聞いた声。

しかし、今少年と少女が居るのはベルベットルームではない。綾風市という街の、人通りも少ない一角。エレベーターを思わせる室内でもなく、扉らしきものを開いた覚えも無い。イゴールの目の前にあるのもアンティーク調の執務机などではなく、地味な布で覆っただけの長机に見えた。

これではまるきり、怪しげな辻占いだ。見た目が怪しいのは否定出来ないが。

「お客人方の知りたい事は、承知しております」

「その為に、此処に居るんでしょう？」

問うと、イゴールは少年と少女に向けていた目を僅かに逸らす。

是とも非とも言えない。そうかもしれないが、それだけではないかもしれない。何処となく古びた印象を受けるテーブルクロス上にある三つの仮面を見て、少年と少女は思う。同時に、疑問を知りながらも全てを提示してくれるとも限らない事も。

それでも、知らぬ事を幾らかは教えてくれるだろう。そうして、幾ばくかの沈黙を経て前に手を組み直したイゴールが口を開いた。

「まず、此処は貴方がたの知る世界ではありません」

既に感じている事かと思いますが、と眩き、続ける。

「しかし、全く別の世界という訳でもありません。例えるのなら、平行世界——数多に枝分かれした可能性であり未来のひとつ、といった所でしょうか」

未来は一つではない。過去に行った事が今に繋がるように、今の行動が未来がどうなるかわ変わる。

過去に行った事が異なるだけで、在る今も、未来も違う。その積み重ねによって、かつての起点は同じでも帰結する所が全く異なる可能性も有り得るのだ。

更に極端に言うのなら。そう、たとえば、「ある一人」が「男」か「女」か——それだけでも、変わる事はあるだろう。

イゴールが言うには、今居る世界はそういつた枝分かれした未来であり世界なのだという。

「何が異なるのか、何を違えた故の枝分かれした未来なのか。それは、お客人方で確かめるのがよろしいでしょう」

それもまた、お客人方の旅路なのですから。

旅路。ベルベツトルームで、それから答えを見据えた戦いの中で、聞いた言葉だ。

知恵の実を食べた人間は、その瞬間より旅人となったように。アルカナの示す旅路を巡り、未来に淡い希望を託して、そして。

——いかなる者の行き着く絶対へ、向かう衝動をこの魂を以て封じた筈だった。

なのに何故、と自然に浮かぶ疑問にいつの間にか伏せていた目を持

ち上げた所でイゴールと目が合い、イゴールは再び言葉を続ける。

「今、あらゆるものの可能性が閉ざされ、途絶えようとしています。

……そう、再び訪れようとしているのです」

その言葉に、思わず少年と少女の表情が固く強張る。

何が、とは敢えては紡がれない。言われずとも相対し、体験したのだから知り過ぎる程に知っている。

遙か古代、生命に死を与えたといわれ、そして死そのものでもある存在——ニユクス。そのニユクスを地上へ君臨させない為、人々の破滅的願望でニユクスを呼び起こさない為、己の命を代償とした「大いなる封印」を施した。当然、ペルソナ使いを導くベルベツトルームの主たるイゴールも知っている筈だ。その上で、イゴールの言葉の意味を考えるとするのなら。

この命を軛として、全ての生命が死に消える未来を封じた。ならば、逆を言うのなら。人々が死に近づく衝動が強まったのなら——封とした魂もそこから離れた。故に「此処」に在る。そういう事なのだろう。

だが、そもそも何故世界に死が迫り来る危機が訪れる事になったのか。

「……関係、あったりする？」

イゴールを、否、厳密にはイゴールの周りの空間を見て、問う。

かつて少年と少女が出会ったこの老人が座していたのは、夢と現実、精神と物質の狭間の場所であるベルベツトルーム。青に統一されたあの部屋は影時間時のタルタロスとも異なる特殊な空間らしく、その内装は訪れた者の精神の在り方によって異なるらしい。という事は、他にベルベツトルームへ訪れた者も、あのエレベーターのような内装以外にも存在するらしいという事なのだが、住人以外の者と会った事が無いので分からない。

しかし、今少年と少女が居る空間は、他と隔絶した空間とは言い難い。目の前の長机はともかく、周囲の景色は綾風市街の一角だ。

何故、ベルベツトルームではなく街の一角に現れたのか。イゴール以外の住人はどうしたのか。

問い掛けにイゴールが暫し目を机上へ落とし、そこから言葉を紡ぐその前に。

「!?!」

急に差し込んで来た感覚に思わず頭を跳ね上げ、少年と少女は走り出す。

あの時。この綾凧市の駅に着いて、鳴り響くサイレンの中で映り感じたもの。それと同じだった。

己に宿すもうひとつの自分のように振り返る事は無く、少年と少女の姿が夜闇に溶けていく。

「……今の私どもには、かつてのようにお客人方を導く事は出来ません。ただ、貴方がたに——アルカナの導きがあらん事を」

既に見えなくなってしまう少年と少女の背中へ向けて、イゴールは静かに告げる。

机上の三つの仮面はいつの間にか無く、代わりに「死神」のタロットが一枚、逆さ向きで置かれていた。

1：魔術師（3）

夜闇の中を駆ける。

都心ほどは整備されていないがそれなりに舗装されたコンクリートの道を走った先にあつたのは、工事現場。明かりも付いていないそこは夜間工事などは行われていなさそうで、周りの照明は街灯と月明かりくらいなものだ——と、空を仰いだその先に。

「う、うわああっ!?!」

人が飛んでいた。

言葉に表すと荒唐無稽そのものだが、そうとしか言えなかったのだから致し方無い事だろう。工事現場から何かが飛び上がったと思うと、それは物凄い勢いで何処かへ飛び去って見えなくなる。そしてそれは、人の姿をしていた。否、厳密には人と、人の姿をしていたものだった。

「人って飛ぶんだね」

「なるほどな……?」

意外と、でもないが、まだまだ常識としては考えられない事があつたらしい。勿論驚きはしたが、今日で既に驚愕の閾値は疾うに越えてしまつて、感想がどうにも間抜けになつてしまつた。

それより、人の姿をしたものともかく、人の方はあまりの勢いによく姿が捉えられなかったのだが、何処かで見た上に何処かで聞いた声だった気がする。何処だっただろうか、と思えども、

「今はどうでもいいか」

「そうだね」

取り敢えずそつとしておこう。そういう事にした。ついでに工事現場に向かう際に入れ替わりに見知らぬ男女達とも擦れ違つたが、そちらも気にしない事にした。あちらが些か警戒するような目を向けてもいたが、直ぐに逸らされてしまつた上にそちらも何処かへ急いで行つてしまつたので知る術は無い。声を掛けても良かったのだが、ついでに人が飛ぶ様を目撃してしまつたのでうっかり此処で飛んで行つてしまつた人を知らないか、と言つてしまいかねない。流星にそこまで

したら駄目だろうという自制心はあった。

人が飛ぶという言葉の時点で問い掛けとしては間違えている事には少年と少女は気付かないまま、工事現場の中へ入る。

内部に人の気配は無い。地面には鉄骨やら資材が散乱し、頭上には仮囲いが不自然に破られたような形跡があった。

何かあった、もしくは何か居た、のは間違いない。だが、今は居ない。他には何も、と少年と少女が改めて上部に穴が空いた場所の直下に目を戻すと、先程には確かに居なかった姿があった。

幼女——否、少女だろうか。どちらなのか分からない。どちらにも見える。臍脂色の少し波があった髪に、白いワンピース——それが、同じ赤系統の服、どちらか。それだけなら、否、それだけでも一人工事現場内に佇んでいるには不自然だが、更にそれよりも不自然な点があった。

幼女、もしくは少女の足下。そこに「影」は無く、そして足は地面に付いていなかった。

つまり、浮いている。その事実を改めて認知した所で、目の前の姿がゆつくりと少年と少女の方へ向いた。

感情の薄い、寧ろ感情が滲んでいないかのような無表情。整った容貌であるのに能面を貼り付けたような顔の双眼が、少年と少女を映した。

途端、仮面を被ったように固まった表情が歪み、口唇が噛み締められる。口紅を塗ったかのように髪と同じく濃い赤の口許が開かれながらも呼吸音は漏れず、代わりのように白い羽根が辺りに舞った。

周囲に鳥は居ない筈なのに、突然産み出たかのように白い羽根が周囲を埋め尽くすかのように巻き上がる。音も無いのに音すらも覆い尽くさんとするばかりのそれに少年と少女が咄嗟に再び召喚器に手を掛けた所で、全く別の声が割り込んだ。

「駄目だよ」

瞬間。

夜闇よりも濃い「影」が、辺りに舞う白い羽根を食らい尽くすように広がる。そうして少年と少女が瞬きひとつ経る頃には赤髪の幼女

もしくは少女の姿は無かった。

代わりに、広がった「影」が新たに「ヒトの形」を作る。

そしてその姿は、

「ファルロス」

「綾時」

少年と少女が口にしたのはそれぞれ別の名前で、しかし。

「こんばんは」

白と黒のボーダー上下を纏った少年、それから黄色いマフラーを巻いた青年の姿がテレビの砂嵐のようにぶれてから不自然に重なり、けれども口から紡がれる声はひとつで全く同じだった。

1：魔術師（4）

綾風市内のマンション。綾風市内でも比較的高収入層らしい立地にある、新しめのマンションに少年と少女は来ていた。

住所は携帯電話に、鍵は制服のポケットの中に入っていた。当然の事ながら、少年と少女にその心当たりは全く無い。住所と鍵の存在を指摘したのは、ファルロスであり望月綾時でもある存在だった。なお、ファルロスでもあり望月^{もちづき}綾時^{りようじ}も少年と少女と共に居る。今は、綾時の姿で固定されていた。

イゴールが用意してくれたのだろうか。あの鼻で、じゃない、恐らく「力を司る者」達と同じく人あらざる存在であろうに、住居手続きが出来たのか。そもそも、少年と少女の存在は既に亡い筈であるのだが。

しかしながら、住居が確保されているというのは正直有難い事であるのだろう。疾うに親戚縁者は居ないし、この地に知り合いも居ない。制服姿だったから、未成年と思われる事確実である上に所持金も限られて来る。普通に生理現象もあったから、衣食住の住があるのは安心する所ではあった。

エントランスを抜け、携帯電話と鍵に記された番号の部屋に辿り着いて鍵を開ける。ガチャリ、と特筆すべき所も無い解錠音の後、玄関扉を開けた。

玄関先の照明は扉を開けた時点で自動で付いたが暫くするとまた自動で消えたので、どうやら人感式らしい。

玄関先以外の照明は見る限り付いておらず、人の気配は無い。玄関から靴を脱ぎ、最も近くに位置するリビングの電気を付くと、夜に慣れた目には少し眩しい照明が部屋を照らした。玄関口以外にも電気が通っているのなら、他の場所のライフラインも問題無さそうだ。

「それじゃ、まず――」

「眠い」

「先お風呂入って良い？」

「良いけど勝手に部屋決めてるよ」

「え、普通にスルーする？」

綾時のツツコミを聞き流し、間取りを確認する。思う以上に広い上に部屋数も多い。マンション自体も高所得者用だとは何となく感じていたが、部屋もそれに相応しいようだった。

ふあ、と欠伸をかみ殺す。今日だけで随分と走った。これだけ走ったのは、久しぶりで——本当に、いつぐらいぶりになるのだろうか。制服の上着を脱ぐと、何か拗ねているような面持ちが視界に映る。仕方無い。そんな思考が思わず浮かんだのも、仕方の無い事だろう。故に少年と少女は、それぞれの行動へ移す前に綾時の方へ向き直した。

「ねえ、綾時」

「また、明日。そう言える？」

言葉は短くも、紡ぐ速度はゆっくりと。

問い掛けられた綾時が意表を突かれたように目を見開いてから、少しだけ眉根を下げながらも微笑んだ。

「……そうだね。今の君達にも、此処の明日もまだ、あるよ」

その答えに少年と少女は同じタイミングで小さく首肯し、再び言葉を紡ぐ。

「分かった。それならまた明日」

「明日、また話そう」

告げて、綾時の答えを待たずに少年と少女はそれぞれ別の部屋へと入っていく。

綾時は少年と少女が部屋に入っていくのを見送り、そしてまた、緩やかに笑んでから目を伏せた。

「今日はゆっくり休むといい。……おやすみ、また明日」

部屋の壁に掛けられた掛け時計の針がカチリと動き、深夜0時を示す。

空に浮かんだ丸い月は淡い月色を保ったまま、厳かに今日が昨日へ、明日が今日へ変わり行くのを見守っていた。

2：女教皇（1）

放課後を知らせる鐘の音で、目を覚ます。

結局転校初日からほぼ丸一日中寝こけていた上に、声を掛けて来た女子に対して何処かで会った事あるか、とナンパ紛いな事をしでかすなんて、我ながら豪胆に過ぎるとまだ寝ぼけ頭のまま慎は頭を搔く。

「まあ、まだ今日はラッキーだったよな」

「小田桐先生の授業でもあったら絶対大変だったよ」

「あの、体調が悪いなら休んでいた方が……」

呆れと安堵を滲ませて色々な意味で心配されたクラスメイト達に改めての自己紹介も兼ねつつ、慎は昨夜起こった事を思い出していた。

夜、久々過ぎる神郷の家に帰り、少しコンビニにでもと出掛けた先。

工事現場で具合の悪そうな男に声を掛けたら、その男から半透明の何かが現れて襲い掛かって来て、やられると思ったと同時に、自分から――

「いや、何かズボアアアと。それで、その後何かおねえさんに追い掛けられてシユパアアツと」

「分かる」

「なるほどなー」

「イヤさっきの分かるのおかしくね?!」

突然入り込んで来た同意の声に、慎の説明を聞いていたクラスメイトが代わりに突っ込んで慎もそちらへ目を向ける。

やっぱり自分でも何言っているのかよく分からないよな、それにしても良いツツコミだったな、と思ったのも束の間。目を向けた先に居た姿に、慎は思わず驚きで大声を上げた。

「あつ、き、昨日の!」

ガタリ、と勢い良く立ち上がる様に、今度は周囲の生徒達が目を丸くする。

「……神郷君、お知り合いなんですか?」

まだ少し目を丸くして驚きながら尋ねて来るのは、藍色の髪と瞳を

した大人しげな少女、守本^{もりもと}叶鳴^{かなる}。対してアフロ髪をしたツツコミが得意そうな男子生徒の榊葉^{さかきば}拓郎^{たくろう}は、先程の発言もあつてか疑わしげな視線を寄越した。

「ホントか？ またさつきみてーにナンパじゃないだろうな」

「だからそんなんじゃないって。昨日、ちよつと……ファミレスで見掛けただけで」

実際は見掛けた、ではないのだが、そこまで説明する必要性も無いだろう。その説明に三つ編みを結んで纏めた女生徒、茅野^{かやの}めぐみはまだ些か訝しげながらも気を取り直して少年と少女の方を示した。

「神郷君、直ぐ寝ちゃったから覚えてないと思うけど……同じように今日、転校して来たの」

「同時に三人も転校だなんて、珍しいですよね」

「そうそう。それに、噂じゃ物騒な事件も起こっているらしいって……私の先輩も、通り魔に遭ったりして……こんな時に、って思うよね」

「そうなのか……あ、俺は神郷 慎つていうんだ」

めぐみにつられるままに慎が少年と少女へ目を向ける。

昨日も見えた姿。制服は風の杜学園のものではない、黒を基調としたものだ。今日転校して来たばかりだというから、まだ手続きが追い付いていないのだろうか。

少年と少女も同じように、並んで慎の方を見る。

性別は男女で違う上に髪も瞳の色も全く違うのに、身に付けたイヤフォンか風の杜ではない揃いの制服の為か、それとも全く別の何かの為か、慎にはやっぱり少年と少女が「同じ」に見えていた。

そして、

「有里 湊」^{ありさと みなと}

そう少年——湊が名乗り、

「有里 美奈子」^{ありさと みなこ}

少女——美奈子がそう続けた。

2：女教皇（2）

幾度目の転校だろうか。

慣れ過ぎて、経験し過ぎてもう数える気にもならない。それこそどうでもいい。故に転校という事自体には何の感慨も浮かばなかったが、再び高校二年生を経験する事は初めてだったので些か不思議な心地にはなった。

風の杜学園なぎもり。綾風市にある学校で、中等部と高等部に分かれている。

中等部があるからか多少敷地は広いような気もするものの、月光館と比べて然程変わった所は無さそうだ。通いの他、遠方から入学して来た生徒の為の学生寮もあるらしい。一クラス辺りの学生数も少ない事もあって、寮住まいを選ぶ生徒はあまり多くなく、寮自体の部屋数もあまり無いらしいが。

それを聞いて、寮、と思い出すのは特別課外活動部の専用寮。

あの場所はどうなったのだろうか。タルタロス——もとい、影時間が無くなった為に、特別課外活動部の拠点となる専用寮は必要なくなった筈だ。あそこには観測の為のモニタールームもあったから、一般が使うには難しい。今なら、否、今でなくとも盗撮で色々と問題になりそうだな、とも改めて思い出す。あそこで仲間達のあれこれを覗き見た事に関しては時効だと思いたい、と色々逸れまくった思考が巡った。

ともかくも、転校初日からクラスメイトに聞いた限りで、最も気になる点といえば。

『——影抜き。そうだろうか？』

綾時ちよつと黙ってて。

心の中から語り掛けて来る声に、湊と美奈子は同時に容赦も無く黙らせた。何となく拗ねた気配を感じた気もするがその辺りの空気は読まない。

ファルロスでもある綾時は湊と美奈子とは違い、この綾風市では実体を持っていなかった。

何故、とは思わない。ニユクスが再び目覚めようとしているのなら綾時が居るのも不思議ではないし、しかしまだ完全に目覚めていないという事ならば実体が無いというのも然もありなんという所だろう。自由に行動も出来ないらしく、居ない時もあるようだが直接姿を見せる時以外は湊と美奈子の「心の海」に間借りする形で存在しているのだった。

10年近く封印という形で身の内に宿っていただけあって、「君達の中に僕が居るんだよね」と綾時に言われても違和感は起こらなかった。ちよつと煩い出戻り同居だな、とは思ってしまったが。……決して、少しだけ懐かしい気持ちにはなっていない、と思う。

それはさておき、と湊と美奈子は綾時が告げた単語を改めて自らでも反芻する。

影抜き。

この綾風市内で流行しているという、奇妙な行為。聞く限りまるで麻薬や覚醒剤のようなドラッグなのかとも思われるが薬の類は使用せず、しかし依存性に陥る可能性まであるのだというそれは正しくドラッグのようでもあった。

催眠的なもののだろうか。クラスメイトと垣間見た時はいかにも怪しげな、というものでもなかったし、クラスメイトのめぐみが過敏に警戒するようなものにも見えない。流行の類には別段敏感という訳でもないので殊更な事もあるかもしれないが、流行するようなものとは理解出来なかった。

とはいえ、と湊と美奈子には「理解出来ない」上で、思考を巡らせる。

ぶつちやけ、綾時がわざわざ言ってくる時点で怪しい。絶妙に信用ならない信頼さで、勿論また拗ねている気配の綾時は綺麗に無視して、現状として手近にある不審な部分を疑うのは当然だろう。しかしながら影抜きに関して口酸っぱく注意して来るめぐみには「どうでもいい」「興味無い」と答えたが、手掛かりらしいものはそれしか無い以上、何かしらのアプローチはしてみないといけない。

そこまで考えた所で、綾時がふふ、と笑う。

「綾時？」

『感じない？』

何を、と更に問いを重ねる前に、心の海へ打ち寄せる波に瞠目する。
『分かるだろう？』

打ち寄せる波を、己の内から生まれた「仮面」が押し返す。

そして押し返した波がぶつかり、位置を知らせる。

さあ、と囁く綾時に促されるまでもない。押し返した波の先。打ち寄せた波。心の海を震わせる、波の源へと湊と美奈子は駆け出した。

廊下を駆け抜けるなど教員に注意されてもおかしくないが、運良くなのか気付いていないだけなのか窺めるような声は聞こえて来ない。擦れ違う他の生徒達も、眉を潜めて見送って来る程度だ。元より注意された程度では足を止める気はさらさら無かった中で、渡り廊下から見えた「もの」に足を止める事となった。

「あれは……」

開き掛けたその先が思わず止まってしまったのは、何に対しての躊躇いなのか。

「……今、影時間じゃない……よね？」

頭上にあるのは、蒼天と太陽。決して、夜闇と青緑色の月ではない。己の奥深く、魂が震えるような感覚がする中で見つめた先。

人の身体から抜け出たような半透明の人型。ふわりと浮いたその身は人の形をしていながらも、決して「人間」そのものではなく。

駅近くの歩道橋の上で。工事現場に向かう途中の空で。そしてたった今、この綾風市という街で見たそれらに対して、表す言葉は忘れようもなくよく知っていた。

——ペルソナ。

「……あの時みたいだ」

ニユクスの影響が、影時間が、現実の時間を侵食していった時のように。

イゴールが告げたかつての危機、その波が足下まで打ち寄せるのを思い知らされたようだった。

3：女帝

カラオケに行く事になった。

行くのは転校して来たばかりの慎と、拓郎、めぐみに叶鳴。それから、同じく転校生の湊と美奈子の六人だ。

見た目の割に面倒の良い拓郎に、世話焼きなめぐみ。控えめながらもよく気遣って来る叶鳴。彼等は転校して来たばかりの慎に対して親切に接してくれた事もあって、一緒に行動する事も多くなった。

「有里達はよくカラオケ行ったりするの？」

「……割と？」

「学校帰りに行ったりしたよ」

湊と美奈子に対しても同様だ。少し意外と感じたのは、見た目通り快活でアクティブな美奈子とは反対に淡泊でクールな印象の湊が結構自分から話し掛けに行くタイプだった事だった。基本的な態度が落ち着いているのは変わりないが、人付き合いを嫌っている訳ではないらしい。今もごく自然に会話の輪の中に入り、口数少ないながらも相槌を打っていた。

「へー、じゃあカラオケ、結構自信あったり？」

「兄妹的にどうなんだよその辺？」

拓郎がからかうように問うと、湊と美奈子が揃って釈然としないように、些か形容し難い珍妙な顔になる。

どうしたのだろう。からかわれた事に対して、という訳ではなさそうだが、他に妙な事でも言ったのだろうか。

そんな慎の疑問を余所に、湊と美奈子はあまり興味無さそうに首を傾げた。

「さあ」

「聴いた事無いから分かんない」

「聴いた事無いってどういう事だよ？」

今は一緒に行動している事が多いが、男女という事で前の学校は別々の交友関係があったのかもしれない。それなら聴いた事無いかもしれないな、と何となく納得し掛けた所で、続けた言葉に納得が綺

麗に押し流された。

「一人で行くものじゃないの?」

「何で一人!」

「勇気が上がる」

「何の!」

何故かカラオケは勇気を上げる為のもの、という妙な認識があるらしい。

そんなやり取りを挟みつつ、放課後向かったのは駅近くのカラオケ店。他に客は男の一団くらいしか無いらしい空き具合で、少し広めの個室を取ってカラオケを楽しむ。

「ねえ、それ私のドリンクだよな?」

「もう飲んだ」

「そう言ってお前、茅野のも守本のも飲んじまってたじゃねーか」

「あ、あの、有里君、私は気にしてないですから……」

洵も誘ったら良かったな、とカラオケ用の端末を操作しながら、慎は思う。兄である諒との諍いで洵にも気まずい思いをさせてしまったから、軽々しく声を掛けるのを躊躇ってしまったが洵の兄として自分が躊躇してばかりなのは良くないだろう。少し冷めた部分がある所為もあってか同年代との交友はあまり無いらしい洵だが、この面々となら上手くやれそうだ。

ついお節介だとも思われてしまいそうな所まで思いかけた所で、めぐみが席を立つ。

「ちよつとトイレ行って来ようかな……」

「あ……それなら私も……」

続けて叶鳴が腰を上げ、それを見て拓郎が鷹揚に頷きながら手をひらひらと振った。

「おう、分かった。こっちはテキトーにしとく。男同士で話す事もあるし、な?」

拓郎に同意を求められ、慎は曖昧な笑みを浮かべて頷く。めぐみが呆れた視線を投げているのも視界に入って、ちよつと居心地悪い。

話したい事がある——のはある意味間違っではないものの、その

言い方はどうなのだろう。男同士というのならば湊も含まれているのだが、と湊の方を見てみると、湊は湊でめぐみと叶鳴と共に部屋を出ていつていた。

「トイレだって」

一人残った女子である美奈子が、ジュースを啜って湊の代わりに答える。その顔は些か不満げだ。毒防御付けといたのに、と妙な事を呟いていた。

「曲、選んで良い？」

「え、ああ。順番とか気にしなくていいと思う」

カラオケの選曲用端末を美奈子に渡すと、そこで拓郎が近付いて耳打ちして来る。その所為で、美奈子が端末を操作しながらもまだ何処か怒ったような顔付きで扉の外を見ている事までは気が回らなかった。

「なあ、影抜ききの時のアレって……」

テレビの液晶から流れるちよつと怪しげな通販番組のCMを流し見しながら、慎は拓郎の言葉に音無く頷きを返す。

そうして口許がひとつの単語を紡ぎかけた所で、唐突に美奈子が勢い良く部屋を飛び出していった。

「あ、有里!」

前置きも無く部屋から出て行ってしまった美奈子に、慎と拓郎もそのままにしておく訳にもいかずにその後を追う。

やや慌ただしく出た個室から、通路を掛けて見えた先。そこにはめぐみと叶鳴を己の背に庇うかのように立つ湊と、それに向かい合う数人の見知らぬ男達の姿があった。

「どうした？」

拓郎が声を掛けると、めぐみと叶鳴、それから三人と向き合っていた男達がこちらを見る。めぐみと叶鳴は困惑した表情で、男達は些か気まづげな表情で。ただ一人、湊だけがこちらを見ようとはしなかった。

聞こえなかったのだろうか。慎が有里、と呼び掛けようとした所で、一足早く先に到着していた美奈子の顔を見て呼び掛けを飲み込

む。

こちらを見ようとしない湊と美奈子の目と表情。どちらも男達へ静かに向けられながらも、酷くそっくりで——思わず気圧されてしまうような圧があった。

「あ、あの、それが……」

「この人達が話し掛けて来て、でも有里君が……」

どうやら、めぐみも叶鳴も湊の態度についてよく分からないらしい。ならば、と慎と拓郎は見知らぬ男達の方へ目を向ける。

男達は慎と拓郎の視線を受け、というよりも湊と美奈子からの視線から逃れるようにやたらと大仰に手を振りながら視線を逸らした。

「い、いや、それは、その子達可愛かったからちよつとナンパ的な？」

そんな大したもんでもなくて、なあ？」

「そつ、そうそう、嫌がってたり彼氏持ちだったら流石に手え出さないからさ！ 悪かったって！」

彼氏ではないが、この場合面倒になるのでその辺りは訂正しないでおく。

つまり、ナンパ目的でめぐみと叶鳴と声を掛けようとした所で、湊が牽制したと——そういう事だろうか。その割には、男達の言い分に益々視線が鋭くなった湊と美奈子に説明が付かない。

警戒するのは分からなくもないし、理解出来るが、それにしたつて攻撃的過ぎるのではないだろうか。とはいえこの場に到着するまでの経緯もよく知らない慎では迂闊な事も言えず、同じく困惑した顔でこの場を見回す。

どうかしたもののか——とそう思った所で、ふ、と湊と美奈子の顔が同時に上がる。

直後、耳に響いたのは人の悲鳴のような声と——心の内に、何かが押し寄せる感覚。

「な、何?！」

「……な、なあ、さっきの声、あいつじゃ……?！」

困惑しきりの場で、男達のうちの一人がそう声を零す。どうやら先程の声に心当たりがあるらしい。

「知り合いつぽいなら、様子見に行つた方がいいんじゃないやねえか？」
少なくとも、このまま突つ立っているよりは幾分かマシだろう。

拓郎がそう促すと、男達はまだ湊と美奈子の方を見るのを避けるようにしながらも自分達が取つたらしい個室へ向かう。個室はこちらからでも見える場所で、ドアは開きつぱなしになっていた。

そういえば、こちらにも部屋を出る時ドアを閉めただろうか。そう思ったのも、束の間。

「う、うわああっ!？」

男達の叫び声に驚き、同時に嫌な胸騒ぎが駆け抜ける。

「茅野と守本は此処で待っていてくれ」

拓郎と目が合う。慎はそれに頷き返し、めぐみと叶鳴に一言告げると男達が居る部屋へ向かう。この時点で、湊と美奈子は既にこの場を離れて部屋目掛けて駆け出していた。

部屋の前で立ち尽くしたり、へたり込んだりしている男達の顔色は揃って悪い。通路自体は広くないので、大の大人が数人たむろするだけで結構通行の邪魔だ。流石に口に出すような事はせず、少しばかり苦労して男達を退かして部屋の中を覗くと、慎も男達が言葉を失う理由が理解出来た。

数人用のカラオケ店の個室。その中に在ったのは赤々とした血溜まりと、まるで皮膚の表裏が反転したかのような人型——否、死体だった。

「なっ……」

少し遅れて部屋の中を見た拓郎も、慎と同じように絶句する。

リクエスト待機中のカラオケ画面の音楽が酷く場違いで、しかし鼻腔を刺激する鉄のような匂いと赤々とした鮮血が目の中の転がる現実を知らしめる。あまりにも非現実的な光景に、慎は何処か奥底から揺さぶられる感覚に思わず身体をくの字に曲げて手で口許を覆った。

「オイ、大丈夫……」

「全く、ダサイよね。大した事ないっというかさ」

自身も顔色を悪くしながらも拓郎が慎を気遣うように顔を覗き込もうとした所で、小馬鹿にしたような声が響いて顔を上げる。

声がした先を辿ると情けなく立ち尽くしたり座り込んでいる男達とは少し離れた場所で、一人の見知らぬ少年が些か生意気そうな面でのこの場の者達を見回していた。

「この間の誰だったかも——何だったっけ、そうそう、『しょっぺえ』とか何とか言つてた割には大した事無かつたしさ」

「……待て、今の言葉……」

恐らく誰に言う訳でも無いであろう少年の言葉に、拓郎が目を見開いて聞き咎める。

しかし少年は拓郎に構う事無く相変わらず何処か小馬鹿にしたような表情のままその場から離れ、拓郎は通路にたむろする男達を押し退けて少年の後を追った。

「待てよ、オイ！ さっきの言葉！」

「拓郎!? どうしたんだ、いきなり……って、待てって！」

拓郎の様子豹変に驚いて慎が呼び止めようとするものの、既にその背は遠い。

一体どうしたんだ、と困惑する慎の横を、更に湊が擦り抜けた。

「この場、よろしく」

「え、ちよっつ、有里まで!?!」

湊が声を向けたのは美奈子に対してだったが、同じくあつという間に駆けて行った様に慎の当惑が更に深まる。

「ああもう！ 訳分かんないって……！ ごめん、二人連れ戻しに行つて来るから！」

もう何が何だか。翻弄されつ放しの思考のまま、ある意味引き摺られるようにして慎も後を追いつける事にする。慎も慎でこの場に残す言葉としては足りてない事に、頭が回りきつていなかった。

カラオケ店を出て、外へ。初動が遅れた為に、少年と、それを追う拓郎の姿はもう見失つてしまっている。

何処へ行つてしまったのだろう。困り顔でつい途方に暮れそうになると、先に店を出ていた湊と目が合った。

「いきなり出て行くなんて、驚いただろ。拓郎も一体どうし……」

「飛ぶのってどうやるの」

「はあ!？」

「まあどうでもいいけど」

「何が!？」

ついうっかり叫び返してしまったが、飛ぶ、という突拍子もなさ過ぎる言葉に慎は思わず首を捻る。

飛ぶ。そういえば、何か変なものが——ペルソナが出た時、飛んでいた。あれはどうやるのだろうか、否、あの時湊は居なかったのだから、知らない筈だろう。確かに飛んでいけたら便利かもしれないが、とついつい思考が逸れてしまっている慎の横で、湊は周囲を見回す。それから。

「あっ!?! だ、だから待ってっ—」

再び、唐突に走り出す。飛んではいかなかった。

また前置きも無しに駆け出していった湊に、慎は再度慌てて後を追う。これでまた姿を見失いでもしたら大変だ。

湊は迷い無く駆けているように見えて、時折何処か確認するような素振りも見える。何か心当たりでもあるのだろうか。思うが、慎には追い掛けるだけで精一杯だ。既に呼吸も荒く足も覚束なくなりつつある慎とは反対に、湊は呼吸を乱す事も無く汗一つ掻いた様子は無い。身長的には慎よりも少し低い湊だが、体力的には随分と差があるらしい。

「あ、有里、ちょっと待ってっば……」

喉が痛くなって来た。慎が流石に限界近くなって来た所で、不意に湊の足が緩む。

多少、合わせてくれたのだろうか。また随分と人気の無い所まで来てしまったようだ。

肩で息をしながら慎がそう思って顔を上げると、目の前に少年と拓郎の姿が見えた。

「拓郎!」

余裕そうな態度の少年と向き合う拓郎は、少年とは反対に余裕無く膝を付いている。それから、半透明の人型のような「もの」が少年の身体から抜け出るように出て来るのが見えた。

「あれはっ……」

「……!? 駄目だ、来るんじゃないっ！」

多少色彩や造形は違うが、前に慎が遭遇したものと同じ。

だとするのなら、と自然と背筋が粟立つ感覚に引き攣れた声が漏れてしまった所で、こちらに気付いた拓郎が目を見開いて制止の声を上げたのが聞こえた。

あれが、あの時と同様の性質を持つものならば。不敵な笑みを浮かべた少年の頭上に浮かぶ半透明のものから、幾筋もの黄色い線が湧き出て来る。そしてその線や人型らしきものの腕は、拓郎へと向けられていた。

「お前もそのトモダチとやらとおんなじようにしてやるよ！」

少年が声高らか宣言し、それを合図として半透明の人型が腕を振りかぶると共にその身から湧き出た黄色い線が拓郎に襲い掛かる。

助けなければ。思うが、ずっと走り続けて来た足は縛れるばかりで役に立たない。拓郎も半透明の人型から向けられる脅威に対して腕を前にして身体を守ろうとしていたが、到底役に立つとは思えなかった。

——その中で。ただ一人、それに立ち向かう者が居た。

駆け出した足は逃げる事無く、前へ。目は半透明の人型へと逸らす事無く向けたまま、湊は腰元へ手を添える。

「えっ……」

何を、と問う前に、慎は自らの目を疑う。

湊の手が添えられた腰元。そこは白いベルトが巻かれ、片側にホルスターが付けられている。

ただ、そこには「何も無かった筈なのに」、湊がそこへ手を添えた瞬間、一丁の銀色に光る銃が突然現れたように見えた。

更に、慎が困惑したのはそれだけではない。そのいきなり現れたように見える銃のグリップを湊は掴み、続けてまるで手慣れたように自らのこめかみへ銃口をあてた。

「ジャックフロスト！」

引かれる引き金。目の前で、鮮血とは正反対の静謐な青い欠片が

舞った。

湊の呼び掛けに、湊の内側から抜け出して来たように青い帽子を被ったゆきだるまのようなマスコットが現れる。

あれは、ジャックフロスト——自販機や、ゲームセンターのプライズで偶に見掛けるマスコットそっくり、というよりもそのものだ。確か湊もジャックフロスト、と呼んでいた。

ヒーホー、という掛け声でも出しそうなジャックフロストは、湊の傍に浮いたまま両手を前へ突き出す。

瞬間、氷雪が吹き荒れた。

突然発生した氷雪はまるで意思を持ったかのように真っ直ぐに前方へ向かっていき、先んじて拓郎を襲おうとした黄色い線を弾き、氷の壁を作る。

「なっ……お前、何なんだよそのペルソナはっ!？」

少年が驚愕と苛立ちが混じった声を上げ、湊はそれに答ええない。代わりに拓郎の許へ駆け寄り、片腕で制しながら背の後ろへ庇うように立ち回る。

あれが、あれもペルソナ？

妙に可愛らし過ぎないか、いやそんな事を考えている場合じゃない。我に返った慎は少しだけマシになった足で、遅れて拓郎の許へ向かう。

「拓郎、大丈夫か？」

「あ、ああ……悪い。だけどよ、アレは……」

ざっと見た所、拓郎に大きな怪我は無さそうで少しだけ安堵する。慎に助け起こして貰いながら拓郎がどれを示すべきか迷ったように眼前に在る存在を示すが、慎も明確な答えを述べる事が出来ずに首を横に振るしかなかった。

ひんやりとした冷気は、先程までであった氷壁の所為か、それともただ意識がそう感じているだけか。分からないまま慎達に背を見せる湊の方を見ると、ジャックフロストの拳が先程襲い掛かって来た線達とは遅れて振り上げられた半透明の人型の腕を殴り飛ばしていた。

「うっ……!？」

可愛らしい見た目に反して、中々強力な一撃だったらしい。半透明の人型が弾き飛ばされ、少年もシンクロしているかのようによけ反る。

少年が先程とは打って変わって忌々しげに歯噛みし、些かふらつきつつ再び半透明の人型を差し向けた。

向こう側が透けて見える事から実体が無いようにも見えるが、まとも当たったなら無事には済まされないだろう。似たような脅威に晒された事のある慎には分かる。しかし人型ではありながら人では決して有り得ない腕を振り下ろして来る半透明の人型に対し、湊が怯むような様子は全く無かった。

一撃、二撃、確実に軌道を見極め、回避していく。その所作は、明らかに手慣れて——そう、まるで初めてではないかのようだった。

「クソッ……！」

対して、少年の方はそういった相手に対して慣れていないようだ。思い通りにいかない状況に、苛立ちと焦りを隠せなくなっている。

経験がある者と、無い者。どちらが有利なのかは自明の理だ。

次第にモーションが大雑把になっていく攻撃の間を、湊は確実に避けながら踏み込んでいく。そこに恐れは無い。その恐怖は、今は此処には無いとばかりに。

半透明の人型が振り下ろした腕が地面を抉る。湊はそれを躲し、攻撃動作によってがら空きになった半透明の人型の脇を擦り抜け——少年の脇腹を、思い切り殴った。

「うわ……」

「スゲエなアイツ……」

思わず、慎の方まで痛そうな声が漏れてしまった。拓郎も何か感心したように呟いている。

スポーツマンとかアスリートタイプな体格でもないのに、素人目でもやたら腰の入った拳だったというか何というか。本当、見掛けによらない。

そんな慎と拓郎の感想を余所に、まともに殴打を食らった少年は身体を前へ折り曲げてよろめく。半透明の人型も姿が薄れつつあり、勝

負が決まりそうだった。

「ぐっ、う……！　ふぎげ、るな、よ……！　まだ——……っぐ、あ、あ……!？」

忌々しげに身体を折った少年が湊を睨み付けながら悪態を吐く様子が、途中で苦しげな呻きに変わった。

苦悶の呻きを漏らし、頭を押さえ、身体を不自然に震わせる。見開いた目が焦点を失い、滲み出た脂汗が肌を伝って地面に落ちたその時。

先に捉えたのは、何処からか這い出て来るかのような嫌な感覚。次に見えたのは、少年の足下、厳密には足下の影から何かが湧き出て来る様子だった。

「なっ、何だありや……!？」

瞳目する拓郎の声を背で聞きながら、湊の表情が僅かに強張る。

足下の影から出て来た何か——それこそ「影」なのだろうか。「影」は更にその領域を広げ、ついには形を成す。その姿は、真っ黒い影の中から茫洋としたような表情の仮面を被った頭とヒトの腕を突き出した形をしていた。

「動けるなら、下がってて」

少しだけ振り向いた湊が、慎と拓郎に言う。片方だけやや長めの前髪から覗く瞳が慎と拓郎を一瞥し、改めて「影」と向き合って慎と拓郎からは見えなくなる。

「オ、オイ、幾らなんだって、オレだって……っつ、てて……」

「拓郎はあんまり動かない方がいい。だけど有里、さっきのは……」

「さっきのじゃないから」

今度の言葉は振り向かずには告げられた。

果たして、正しく意味が通じているのか。それすら確かめられる事も無く、「影」は湊へ襲い掛かる。黒く、ヒトに似ているが人間の腕よりも太い。振りかぶって空気を裂く音が鋭く聞こえた。

破碎音。だが破碎されたのは地面のみ。湊は素早く横に回避し、反対側から襲い掛かる次撃も少し頭を逸らして避ける。

やっぱり、手慣れている。先程、少年との対峙の時もそう感じたが、

今の「影」との対処に慎は更に確信を深めた。幾ら運動神経が良かったり、度胸があつたとしても、ただそれだけではここまで冷静に対処は出来ないだろう。それ以上の何か理由があるから、としか思えなかつた。

それを今、湊に問う事は出来ない。そんな場合ではないという事くらい、慎にも分かつている。

だが、何か出来ないだろうか。下手に手を出すのは湊の邪魔にならないと分かつていても、冷たく突き放して来る兄を思い出させるようで苦しかつた。

慎は湊を襲う「影」を見てから、今は苦悶に呻く少年の方を見る。少年の足下、影は不自然に伸び、それは「影」と繋がっている。あれは、少年の身体から抜け出た半透明の人型と何か関係があるのだろうか。分からない。分からないが、完全に独立していないという事は、何かしかの理由がある筈だ。

正直、恐怖はある。自分はタフガイという訳でもない。けれども、奥底に打ち寄せる何かを、想いを後押しした。

「……ペルソナ」

何故なのかは分からない。しかしどうしてか酷くしつくりと来る呼び掛けに応えるように、自らの内から現れるものを見た。

あの時も——どの時だろうか？ 不意に掠めたデジャ・ヴに慎自身も分からない奥底がさざめきつつ、呼び掛けに応じてエメラルドグリーンの色をした半透明の騎士のような「ペルソナ」が中空を駆けていく。

携えているのは、半透明ながらも大きな剣。透けた見た目通りのそれを騎士姿のペルソナは振り上げ、地面に伸びた影を断ち切った。

「オルフェウス」

騎士姿のペルソナが影を断ち切ると「影」がぴたりと動きを止め、それを見逃さなかつた湊の声が響く。

再び舞い散った青い欠片と共に現れたのは先程の青い帽子のゆきだるまではなく、豎琴を背負った球体関節人形のような姿。赤いマフラーを巻き、白髪が顔の半分を隠したその姿は何処か、湊によく似て

いた。

オルフェウス、と呼ばれた豎琴を背負う人型は両腕を掲げる。掲げられた両手の中心にみるみる内に赤々とした炎が宿り、やがて人の頭ほどの大きさにまでなったそれをオルフェウスという名のペルソナは目の前の「影」に向かって放った。

「うおっ……!?!」

火の玉が「影」にぶつかった瞬間生まれた風圧に、慎は思わず腕で顔を庇う。拓郎も同じように、少し身を逸らしていた。

熱風が髪の毛を捲り上げていく。その勢いが静まった頃、腕を下ろすと共にいつの間にか閉じてしまった瞼も上げるとそこに「影」の姿は跡形も無くなっていた。

「ッ、はあ、僕は、何を……はあ、クソっ……こ、んな時に……!」

はっ、として、慎は少年の方を見る。少年は瞳の焦点が戻りながらも、苦しそうに呻いている。先程までの事は覚えているのかどうか分からないが、胸元を押さえつつも湊を睨み続けていた。

「まだやる気?」

湊が静かに言う。問う、というよりもほとんど独り言のようだ。無感情に、それこそどうでもいいかのように。

これでは逆に、と慎が湊に何か声を掛けようとした所で、けたたましいサイレンの音とパトランプの光が飛び込んで来た。

「ああ、コレあっちの方が楽だったんじゃないかなあ……失敗した」
炎とはまた違う鮮烈な赤色に瞬きを繰り返しながらそちらを見ると、停車したパトカーから些か軽薄そうな細身の男がぼやきながら出て来る。パトカーから出て来た、という事は、恐らく刑事だろう。あまり真面目そうには見えないが。

その刑事らしき男が周辺を見回すのにつられて慎も辺りを見回すと、少年はもう居なくなっていた。

「また伊藤さんにどやされますよ」

細身の刑事に続いて、パトカーから出て来た長身の刑事が些か困ったようにそう諭す。こちらは真面目そうだ。

「分かってるって、榎崎さん。あの人、苦手なんだよね……似てて」

榎崎、というらしい刑事にひらひらと手を振りながら、細身の刑事が溜め息を吐く。最後の小さな呟きに言うような苦手、とも嫌っているだけとも感じ取れない揺らめきに慎が怪訝に視線を寄せていると、慎達の許へ榎崎が近付いて来た。

「綾風署の榎崎なつさきという。先程、カラオケ店で起こったリバーズ事件——反転死体の事について、君達にも話を……」

「——慎！」

そこで、榎崎の言葉を遮って鋭い声が飛ぶ。

怒鳴り声とはまた違った厳しい声に思わずそちらへ振り向くと、そこには慎の兄である諒が居た。

「兄貴!？」

げえ、と細身の刑事が嫌そうな声を出したのが聞こえた。榎崎という刑事も、諒が来た事に驚いているようだ。そういえば、兄は綾風署の署長でもあったか。

どうして、諒が此処に。もしかして、心配して迎えに来てくれたのだろうか——そんな淡い思いを抱いた慎の一方で、近付いて来る諒の顔付きは険しくなるばかりだった。

「諒兄ちゃ……」

「だから、帰って来るなど言っただろう！」

慎の呼び掛けを遮り、諒が声を張り上げる。厳しい声と共に腕が振り上げられ、平手を覚悟して咄嗟に目を瞑った慎だったが、暫く経つても何も感じない違和に再び目を開ける。するとそこには、慎に諒の掌が届く前に諒の腕を掴んだ湊が割って入っていた。

「……有里……?？」

「君は……」

慎と諒、二人が同時に呆然と呟く。

「やめた方がいいと思う」

突然の乱入に、諒も少なからず驚いたようだ。恐らくだが、湊の顔を見て以前会った事があるという事も思い出しているのだろう。

続く言葉も無く呆気にとられている慎と諒を挟んで、湊は諒の腕を離す。

慎は湊に、諒との事を詳しく話した訳ではない。最初にファミレスで会った時は兄弟揃ってだったが、その時だってまともに話はないなかつた筈だ。だから、湊も慎と諒との関係は然程分かる事は無い筈なのに。

けれど、とその先にく言葉を探し出せず、まるで何事も無かつたかのようにイヤフォンを耳に掛けた湊を慎はただただ見つめていた。

4：皇帝

綾凧署で事情聴取を終え、その帰り。湊と美奈子は、俺のべこ——牛丼屋に来ていた。

カラオケボックスでのリバーズ事件、それから外での出来事について事情聴取を受けていたら、随分と遅くなってしまった。警察の方も遅くに未成年だけで帰すのも良くないと判断して帰りは送るとの事だったが、湊と美奈子はそうなる前に一足早く綾凧署を出たので送って貰う事はしていなかった。

「私も毒防御付けてたのに」

「それはもういいだろ」

運ばれて来た並盛りの牛丼を前に美奈子がぶつくと、特盛りの牛丼を前にした湊が事も無げに返す。

随分と遅い時間の為か、他に客はほとんど居ない。湊と美奈子が入店してからも、入って来たのは一組の男女くらい。店員も一人の、いわゆるワンオペ体制というやつだろうか。

いただきます、と食前の挨拶を済ませて、牛丼を食べ始める。食べるなら出来立てが一番だ。

「海牛の牛丼食べたくなった」

「いつも満員だったから、あんまり行けなかったよね」

ここの味も悪くはないが、かつて食べた味が少し恋しくなる。

他店の味と比較するという若干店にとっては失礼かもしれない言葉を交わし、その後は黙々と食べる。食べながら喋るといふ無粋はない。

それよりも、と問い掛ける先は心の内側。

——どういう事。

ペルソナ使いの事、シャドウの事。カラオケボックスで起きた反転死体の事も諸々含めて、全部投げ付ける。

『どういう事、というのなら、そういう事になるのだろうね。ただ恐らく、シャドウの出現は「此処」ではな本来存在していなかったのだろうかと思うよ』

心の内側から綾時が答える。綾時の言葉は、湊と美奈子にしか聞かえていない。

酷く曖昧な言い方だ。もつとも、綾時とて全てを知っている訳ではないのだから曖昧な言い方になってしまっても仕方ない事かもしれない。シヤドウの上位存在であり、死たるニユクスの宣告者であるといつても、全てを関知している訳ではないのだろう。結果として影響を与える事はあつても、そうなる事を見越しているという訳ではないのと同じように。

ただ、全てが分かっている訳ではないとしても。分かる事もあるのだろう。故に紡がれた応答に、湊と美奈子は思考を巡らせる。

あの時の事と、綾凧市での事。それから、今日起こった事。何となく分かつてはいたものの、首を突っ込まずとも巻き込まれるとは。否、これもあのベルベットルームの住人達の言葉を借りるなら、それも試練であり運命というやつだろうか。

幾ら勇気は上げきつたといつても、いつだって「何も思わない」訳じゃないのに。

脱いだ筈の仮面が再び浮き上がって来るようで、湊と美奈子は牛丼を掻き込むペースを速める。このままでは、折角の食事が味気なくなつてしまいそうだった。

「御馳走様」

「御馳走様でした」

食後の挨拶も忘れない。きつちり綺麗に平らげて、会計を済ませて外に出る。

勿論所持金は足りていた。地味に気になつていた金銭面については、現在寝起きしているマンションに生活費という書き置きで置いてあつたのを使っている。湊と美奈子は一度も会つた事が無いのだが、どうやらあのマンションには世帯主というか、家主らしき者が居るらしい。現在未成年である湊と美奈子の名義であるようなマンションの一室を借りられるとは思つてなかつたが、イゴールが諸々直接の名義人となつている訳ではない事に少し安心する。流石に何というか、イメージがあるというか。なお、定期的に置かれる生活費はちよつと

桁数多く間違えているようではあった。まさかブリリアントなご身分ではないだろう、と思いたい。

それはさておきとして、牛井屋を出て向かうのはその寝起きしているマンションではない。そちらとは反対方向、人気の無い場所を目指して歩く。とはいっても、いまだこの辺りは土地勘が然程無い為、人気の無い場所といったら足は自然とこの綾凧に來た初日に赴いた工事現場だった。

とうに陽は暮れて、辺りはすっかり暗くなっている。

赴いた工事現場も、既にこの日の施工時間を終えたようで静まり返っている。また無断侵入になってしまいう事に心中で謝罪を述べておきながら、少し深く息を吐いた。

「……気付いてたのか。壮太郎そうたろうが言うだけはある」

ある程度ひらけた場所まで歩いてから立ち止まり、振り返ると薄暗い中から男が一人、女も一人、現れる。男は湊の方を見遣ると、少しばかり感心したように片眉を上げた。

ずっと尾けられていたのは分かっていた。

恐らく、警察の事情聴取が終わった頃からだろう。あの時はまだ他の面々も居た為に誰へ向けていたのか分からなかったので、こうして湊と美奈子だけになる時までこちらからあからさまな反応を示す訳にはいかなかった。警察に送って貰うのを断ったのもそれが理由だ。ちなみに牛井屋に寄ったのは単純にお腹が減っていただけである。空腹は良くないので仕方無い。

「見てた」

目の前の男女を見据えて、言葉短く言う。

カラオケ店で、反転死体に出くわした時。

何を、誰を、見ていたのかまでは分からない。それらを含めて、確かめる為でもあった。

「……何の用？ 言いたい事とか、訊きたい事とかあると思ったのだけど」

訊き方があまりにも直截なのはどうしようもない。元より、そういう駆け引きに長けていない自覚はある。

こちらとしても尋ねたい事は色々ある中でまずは相手の出方を伺うと、男は女と一つ領き合った後に話を切り出した。

「——自分の中に、他人とは違うものがあると分かっているだろうか？」
誰の事だろう。

つい浮かんだ疑問符と共に、こてん、と揃って首を傾げると、自分の内側に居る綾時が噴き出したのを感じた。

僕の事かな？ 挨拶した方がいい？ デスの姿の方がそれっぽく見えるよね？ と要らない方面でやる気を出し始める綾時に座つてろ、とすげなく心中で返していると、その間の沈黙を肯定と取ったのか男は更に言葉を続けた。

「その力、何の為にあるのか知りたくはないか？」

「どうでもいい」

「興味無い」

ペルソナ。

心の奥底に漂う「もう一人の自分」であり、「仮面」。

神話や伝説、歴史上の英雄や神々の姿を取る事が多く、人智を越えた困難に立ち向かう為に同じく特異な力を持つ。あのベルベツトルームの住人曰く避けられぬ「死」に向き合う為の心であり、その恐怖から心を守る為の鎧であるともいうが、それもペルソナの一面にしか過ぎないのだという。

人が時と場合、状況によって振る舞いを変えるように。己が纏う「仮面」も変わる。複数のペルソナを使い分けるワイルドの素質とも違う。

ただ、自分達が見ていないだけで。自分が見ていたくない自らの一面であったり、何かに対しての強い感情を向けた一面であったり。心の海から生まれ出た「自己の人格」を、纏めてペルソナと呼ぶのだろう。

故にとつくの昔に教えられた「ペルソナ」について今更知りたいと思われても、既に知っているのだからわざわざ知りたいとは思わなかった。

揃ってにべもない返事を投げ寄越す様に男は多少予想していたの

か肩を竦めた後、上着から手を出して身を低く構えた。

「……そうか。壮太郎を退けたらしいその力、あの方も興味があるらしい。その為に、少々強引になるが我々に付いて来て貰おう——沙季さき！」

男の呼び掛けに男の身体から半透明の巨体が抜け出て来るのと、それまで男に寄り添うようにして立っていた女が動き出したのは同時。

両サイドに大きな腕を持った半透明の巨体は湊の前に立ち塞がり、一方で沙季、と呼ばれた女が身を低くして駆け出し、美奈子へ向けて腕を伸ばす。その身体からは薄く、赤い髪をした半透明の人型が抜け出て来るのが見えた。

「悪いけど——」

「私、お姫さまなんかじゃないから」

腰のホルスターから召喚器を取り出し、引き金を引くまで一瞬。

「ヨモツシコメ」

喚び出されたのは、黄泉の国に住まうという鬼女。ヨモツシコメが細長い体躯と同じく垂れ下がった黒い髪を振り乱しながら、目の前に迫る脅威に対峙する。

美奈子に向かって伸びて来る手。迫る半透明の人型——ペルソナの腕を、ヨモツシコメの振り乱した髪の毛が大きく振り払った。

「……!?」

ペルソナの腕が弾かれると共に、美奈子を捕らえようとした沙季自身の腕も硬直して引っ込む。怯んだように一度足を止める沙季とは反対に、美奈子の行動は止まらなかった。

続けて放ったのは風の魔法。生み出された荒れ狂う強風に押され、周囲の物が散乱する中で沙季が美奈子から距離を取る。沙季がペルソナと共に後ろから飛び退くのを視認したまま、今度は美奈子の方が前へ駆け出した。

先程の風で、周りは資材が派手に散らばっている。工事現場の作業員に対しての罪悪感に心中で謝罪を呟きながらも、美奈子は地面に散らばった資材のひとつ——ウッドスティックを蹴り上げた。

細長い棒状の木材が目前の中空に浮く。その柄を掴み、更に前へ。

駆けつけた勢いを殺さぬまま腰の位置で水平に構え、沙季の眼前まで迫ると重なった半透明の人型ごと真一文字に薙いだ。

「うっ……い！」

辛うじてペルソナが盾としての役目を果たしたらしく、しかしかといつて無事にも済まずに沙季が横薙ぎに飛ばされて地面に膝を付く。赤髪のペルソナも顕現を維持出来ず、強制的に引き戻されるように沙季の中へ引っ込む形となった。

「沙季……」

「気を緩めてる暇、あるの？」

美奈子の反撃に男が気を取られた数瞬。はっと男が湊に向き直ろうとするが、湊にとって男の挙動は遅過ぎた。

いつそ振り向かないまま美奈子の方に向かうなら、まだマシだったかもしれない。否、結局あちらも同じ事か。そう、どちらも——「同じ」なのだから。

既に行われた召喚により、顕現したジャックフロストの拳が男から抜け出た半透明の巨体——ペルソナとぶつかる。男のペルソナの方がジャックフロストよりも巨軀ではあったが、不意打ちに近い形となった一撃をまともに食らった男のペルソナは男と共に大きくよろめいた。

足で蹴った地面が軽やかな音を立てる。美奈子の薙いだウッドステイクの先が地面に落ちていた鉄パイプを掬い上げ、湊はそれを拾い取った。

「くっ……まさか、二人ともペルソナ使いとはな……しかもこの力、確実に特A潜在クラス……」

並び立った先に、体勢を戻した男と身を起こした沙季の姿が映る。ワンモア出来る所をわざとせずに済ませたのだ、こちらとてまた知らない単語が出て来て、訊きたい事が増えてしまっただけでどうしてくれると言いたくなる。本当に言ったりはしないが。

壮太郎という少年と戦ったのは湊だけだった。ペルソナ能力があると思っただけだと思っただけだろう、故に共に居る美奈子を人質に取る事で湊に同行を強制しようとした——そういう思惑だった

のだろう。残念ながらと言わなければならないが、上手くはいかなかったし容易くそんな事を許す心算も無かったが。

男と沙季が険しい顔で湊と美奈子を見据えて来る。湊と美奈子としては仕掛けて来たから反撃したに過ぎない正当防衛の心算であるのに、結構に酷い反応だと思う。

「……統馬とうま」

沙季が男の名を呼ぶ。湊と美奈子と対峙したまま、統馬と呼ばれた男は重く頷いた。

「成程。一人とも、その上それだけの力を持っているというのなら、他者の手など借りる必要は無いという事か」

別にそんな心算は無いのに、勝手に決めないで欲しい。

思わず些か顔を顰めてしまっても、統馬という男が気付いた気配は無い。何やら一人合点し始めた様に、ちよつと面倒臭くなって来てしまった。

「だが、こちらの邪魔をする奴らに力を貸すような事になっても厄介ではある。それとも、既に協力者か、そちら側なのか？」

「何それ。知らない」

「知らない……？？ それなら、一緒に来て貰う事くらいしてくれても良いんじゃない？」

「そつちの事もよく知らないから」

そもそも、先に問答無用で人質取ろうとしてまで仕掛けて来たのはそちらだろう。よく知らない者にいきなり襲われて、やり返すのは至極当然の反応だと思う。そうしなくとも、何となく何処ぞかの理事長やら半裸男を思い出してしまつて素直に頷く事も出来なかった。

つい思い出してしまったついでに改めてぶん殴つてやりたい気持ちまで蘇つて来て密やかに自らを宥める湊と美奈子を余所に、統馬と沙季は怪訝と警戒を交互に織り交ぜた視線を向ける。

「どちらも知らないというのならば——」

「だから、知る為に『此処』に居る」

統馬の台詞を途中で断ち切るように、湊は鉄パイプで中空を切る。鉄パイプの少し曲がった先端を地面から少し浮いた所に下ろした湊

と、ウツドステイツクを垂直に持ちながらトントンとローファーの踵で地面を叩いた美奈子は統馬と沙季を見据え直した。

言葉を引き裂いた後に紡がれる吐息は、夜の外気のように冷たく。

「殲滅する?」

「大量破壊は、無しにしておきたいけど」

対称的、正反対とも言える印象の顔が全く同じ、静かな「死」の気配を帯びる。

それはまるで、魂を刈り取る死神のように。

いかなる者にも来たる絶対的な気配に眼前の者達が一瞬にして硬直し、身を震わせ、そして弾かれたように動き出す。それはまるで、己の震えを誤魔化しているかのようでもあった。

統馬と沙季から、再びペルソナが姿を現す。あのペルソナは、一体何に對しての「仮面」なのだろう。分からない。此処はかつての場所でも時間でも無い以上、あの時と同じ意味ではないのだろう。ただ、今向かって来る意味は皮肉にも同じかもしれない、と思えた。

先に立ち塞がったのは、統馬のペルソナ。身体から抜け出たような状態になっている分を抜いても些か大きな体躯を前に、美奈子は再び召喚器の引き金を引いてヨモツシコメを召喚する。

再度喚び出されたヨモツシコメが、巨体の人型を前に身体をくの字に折り曲げて人ならぬ叫びを上げるかのような体勢を取る。それと合わせるようにして、目の前の空気が波打って歪んだ。

「そちらのペルソナは、こちらに對しては非力なようだな!」

警戒に統馬が一度足を止めるも、眼前が波打ったかのようになりながらもダメージは無いと判断したらしく動きを再開させる。そのまま、好機とばかりに己のペルソナである巨体の腕を美奈子へ振り下ろした。

振り下ろした巨体の腕の動きによって、風圧が生まれている。このまま無防備に受けたのなら、無事に済まされない事がよく伝わってくる。しかしその前提が成り立たないであろう事を知っている湊は、美奈子の前に振り下ろされる巨体の腕を鉄パイプで受け止めた。

「……………?!」

統馬の顔が歪む。ペルソナである巨体の腕をそのまま力任せに振り下ろそうとしているようだが、巨体の腕は鉄パイプを構えた湊と均衡を保ったまま。この時点で、想起しているよりも力が出せていない事に気付いたようだ。

今此処に、いつも共に戦ってくれた仲間や、的確にサポートしてくれた仲間は居ない。けれど、共に戦った時の経験まで失われた訳ではない。海牛の牛丼をよく食べていた先輩が何故かやたらやっていたな、と少しばかり色々複雑な気分が過ぎていく。

「統馬！」

沙季がもう一人の仲間の名を呼びながら、己のペルソナが従える幾本もの剣を向ける。その間に、美奈子はペルソナの切り替えを行った。

「ヴァルキリー！」

向かい来る剣の軌道を見切り、ウッドスティックを振るって弾く。

先程の黒く長い髪が人型を成したような姿のヨモツシコメとは異なる、駿馬に跨がり双剣を携えた勇猛な戦乙女の姿に統馬と沙季の目が驚愕に見開かれた。

「俺達の他にも、複合ペルソナを……っ、ぐ！ どれだけペルソナを奪ったら、これ程の力に……!?!」

「ペルソナを……奪う？」

巨体のペルソナの腕と均衡を保たせていた鉄パイプを湊は下から振り上げて払い除け、直ぐ様美奈子が接近を許さぬようスラッシュで牽制する。

思い出すのは、初日に歩道橋で見た光景。

人の身体から抜け出たような半透明のものを、同じく半透明のものがまるで取り込んでいるかのようにだった。

あの半透明の人型らしきものは、この二人の発言からペルソナなのだを知った。今、統馬と沙季の身体から表われている存在と、歩道橋で見たものはどちらもペルソナという存在。更に先程の統馬の言葉を踏まえた上で、改めて歩道橋で見た状況を思い返す。

あれは、他者からペルソナを奪っていた？

まるで、「仮面」を剥がすように。だとするのなら、と思考が、カラオケ店の個室で見た反転死体と怪しげな少年とを繋げる。

あの壮太郎とかいうらしい少年は、統馬という男と沙季という女と知り合いらしい。仲間、といった方が適切なのかもしれない。ならば反転死体とはただの変死体ではなく、ペルソナを奪われたが故の成れの果てだとするのなら。

「あの身体が裏表になった死体と、君達の目的と『やっている事』。関係ある？」

「だとしたら、どうする」

逆に問い返され、無言になる。

答えられぬ事をあちらは分かっていたのだろう。それもそうだ。このペルソナというものは、一般的には知られていない特異かつ超常的な力とも呼べるものだ。そんなものが世間にごく当たり前に認識されていたら、それこそ世界の認知がまるきり変わってしまう。

あの時は、極秘裏ではあるが桐条を通して内々に警察の協力もあった。今はどうなのか分からない。大々的に公表されてはいないようだが、実はあの時よりもっと大きく関わっていたりするような事もあるのかもしれない。

ただ、それを知る術も関わる伝手も今の湊と美奈子には持っていない。一見、そこらの高校生にしか見えない湊や美奈子が例えば警察に何かを言った所で、荒唐無稽過ぎてまともに取り合って貰えないのは明らかだった。

「なら、シヤドウは……」

「……シヤドウ？ 何の事だ」

「え」

思考を巡らせたまま滑り落ちた半ば無意識の呟きに対し、怪訝に返った言葉に我に返って短く声が漏れる。訝しげに見返す表情に、恍けているような様子は無かった。

シヤドウを知らない。否、知らないというよりも、むしろ。

——シヤドウの存在自体、本来なら存在しない？

綾時のあの言い方は、そういう意味だったのだろうか。

現在、心の内で静観を決め込んでいる綾時がちよつと憎らしくなる。今姿があつたら殴っている所だった。だからかもしれないが。

既に出て来た単語やら何やらでキャパシティオーバーになりかけてはいるが、だからといって思考を放棄する訳にはいかない。此処に自らが在るのだから、その意味の為に思考する。

シャドウの出現。それは、かつてニクスが降臨し掛けたように「死」が世界を覆い付くさんとする事態によるものだった。この綾風市という場所がかつての巖戸台と同じ事態になろうとしているが為に、シャドウも出現した。その流れなら理解出来る。

しかし、シャドウの出現が本来イレギュラーだというのなら。否、そもそも湊と美奈子の存在自体がイレギュラーだ。綾風で起こっている異常な事態の他に、それ以上に尋常でない事態であるからこそ湊と美奈子が此処に在るのだとしたら。

「何を知っている?」

「さあ」

返す調子が素つ気無くなってしまったのは、仕方の無い事だと思いたい。何を、と訊かれても何を答えたらいいかも分からないし、正直こつちが知りたいくらいだ。

あの巖戸台とこの綾風とを比べて幾つかの、幾つもの相違点が頭の中を行き交つて絡まっっていく。けれど、点と線は繋がって来ない。

今分かるのは、この綾風市内で起こった反転死体の事件が目の前の方達——ペルソナ使い達が関係し、しかし彼らはシャドウという存在を認知していない、という事くらいだろうか。それも暫定的な認識だ。単にシャドウという名称で呼んでいないだけかもしれない。

気を抜くと散漫になりがちな頭の中を整理しようと、静かに息を吸い直す。分からない事だらけでも、今日の前に在る状況に目を逸らす訳にもいかない。

「アークエンジェル」

再び剣を向けようとした沙季に対し、湊はペルソナを切り替えてエンジェルアローを放つ。だが命中は目的ではない。狙いは足下に絞り、一度行動が止まるのを見通す。統馬の方も美奈子が鋭くウツドス

ティックを突き出して、突撃を躊躇らわせているのが見えた。

次の行動に移させる心算は無い。大天使の名を持つ天の兵士が剣を掲げ、そこから放たれたのは広範囲に広がる雷の魔法だった。

夜闇に眩い閃光が数瞬、辺りを照らす。回避行動を許さない紫電が、統馬と沙季をペルソナごと縛った。

「そっちの知っている事と目的、教えて欲しい。全部」

問い掛けがどんどん雑になっていく自覚はあるがもう諦めた。伝達力が欲しい。

先程の攻撃で感電状態にしたから、直ぐの行動は難しい筈だ。揃って膝を付く統馬と沙季に、湊も美奈子もそれぞれ鉄パイプとウッドステイックを突き出す。体力も気力もまだ充分に余裕はあるが、無限大という訳でもないから温存しておくに越した事はない。

「くっ……」

湊と美奈子に見下ろされた統馬と沙季が、呻きながら見上げて来る。

感電よりも悩殺状態の方が良かっただろうか。そんな風にペルソナの切り替えを検討し始めた所で、唐突に統馬の方が苦しみ出した。

「うっ、ぐ、うう……い！」

「統馬！……こんな時に……！」

苦悶に満ちた呻きが大きくなる。それに合わせるかのようにして、背中を丸めた統馬の身体から再び半透明の巨体が抜け出て来た。

しかし、半透明の巨体はまるで制御が効いていないかのようにその身が膨らみ始め、身の内から何か零れ出しているように黄色い光が漏れている。その光は無数の人の形のようにも見え、それを収めた半透明の巨体は内側からの圧力に苦しんでいるかのように暴れ出した。

巨体が滅茶苦茶に腕を振り回し、地面へ振り下ろす。狙いが定まっていないが故に見切りやすいが無差別な軌道に、湊と美奈子は一旦その場を飛び退いた。

突然の異変に直面しながらも、湊と美奈子はどうするべきか暴れる半透明の巨体を見つめて考える。

再度動きを止めた方が良さだろう。そう判断し、湊と美奈子が手持

ちの鉄パイプとウツドステイックを握り直して――

「……!？」

打ち寄せる得体の知れない感覚に、背筋が粟立った。

それは恐怖であり、熱望だったのかもしれない。けれど確とは分らなかった。理解を超えた何か、思考を越えて心の内へ這い寄って来た。故に心の鎧とも言える「仮面」は、そちらへ意識を向ける事を優先させた。

施工時間ではない工事現場に照明はほとんど付いていない。月明かりも雲で隠されて充分ではない夜、意識と目を向けた先は数メートル先も分からないような、深い霧がかかったような暗闇で。

それ程までに暗過ぎて、人どころか何が居るかどうかすら分からないのに――『見ていた』。

「……」

浅く、掠れた呼気が漏れる。それによって我に戻り、同時に雲が流れて月明かりで少しだけ周囲が明るくなった。

改めて目と意識を向ける。そこに在ったのは、工事現場によく置かれているマネキン。背の高い浅黒い男ではない。特に変哲も無く佇んでいるそれに、無意識に強張っていたらしい肩の力が一気に抜けた。

絡んでいた糸が解けるように緩みきった意識のまま、随分と遅れて対峙していたペルソナ使いの二人の方へ目を向ける。しかしそこには、統馬と沙季の姿は無かった。

どうやら逃げられたらしい。些か気落ちしてしまったものの、あまり尋問の類に慣れていない為に上手く話を引き出せる自信も無かったので、まあいいかという思いも無くはなかった。

周囲にもう、不穏な気配は感じない。手にしていた鉄パイプとウツドステイックは元の片付けられていた所に置き直しておく。他にも周囲は資材やらが散らばっていたので、取り敢えず湊と美奈子で申し訳程度に綺麗にしておいた。半分くらいは自分達の所為ではないのだが、このままにしておくのも流石に良心が咎める。朝、やって来た作業員達は荒らされたような現場にさぞ驚く上に迷惑を被らせてし

まう形になるだろう。それこそ、警察沙汰になるくらいには——とそこまで考えて、ふと、そういえば、と思いつく。

綾凧市に足を踏み入れた初日、あの歩道橋の上で。女性がペルソナを奪われようとして所を助けた時。

あの場所には、既に警察が到着していた。襲われている女性と、襲っている男の他、地面に倒れ伏した幾人かの警察官の姿も見掛けた。周辺を立ち入り禁止にしていたのも知っている。

つまり、何処までの範囲としてなのか、どういった認識下なのかまでは分からないが——警察は反転死体の事、あのペルソナ使い達が行っている行為の事を知っている。知っている上で、メディアをはじめとする一般には知らせていない。

それから、ペルソナ使い達は警察ではなく他に邪魔をする者達が居るといふ事も言っていた。邪魔をする者達、とはシンプルに考えるとペルソナを奪う行為であり反転死体を出す事を止める者達の事なのだろう。そういった者達が、警察と協力して動いているのかもしれない。

あの巖戸台の時の、桐条と同じように。

頭に掠める単語が感情を揺さぶりながら、湊と美奈子はあらかた場を片付け終える。その手には、この場所に来た時には確かに落ちていなかった筈の一錠のカプセルがあった。

「……………これさ」

「……………うん」

互いに交わす言葉は短い。

交戦したペルソナ使い達が居た場所にあった一錠のカプセル。見た目には何の変哲も無さそうなそれはしかし、拾った状況を思うと捨て置く訳にはいかなかった。

懸念事項がまた一つ増えつつ、湊と美奈子は工事現場から出る。拾ったカプセルは取り敢えず湊が制服のポケットに入れておいた。後で何か別の保管方法を考えておかないといけない。

工事現場から出て、現在の住まいであるマンションの方角へ足を向ける。

もう、随分と遅い時間だ。まだ充分に明るいがそれなりに傾き始めた月の下――

「やあ。お疲れ様」

ひら、と手を振って、綾時が湊と美奈子を出迎える。

そんな綾時に、

「殴られてくれない？」

「殴ってもいいよね？」

なお拒否権は無いものとする。

同時に持ち上げられた二人分の拳に、綾時のひえ、という引き攣つた声が暗闇に溶けていった。

5：教皇（1）

尋常ならざる事柄が起きていても、時間はいつだって等しく流れていく。

「なあ、今日帰りに……あ、今日バイト入れてたわ」

「自分から言い出しといて何それ」

「馬鹿じゃないの」

「っていうか、馬鹿でしょ」

「何で二回言った!?!」

「……真似?」

「誰のだよ」

コントのようなテンポの良いやり取りに、叶鳴がくすくすと笑い声を漏らす。慎もつられて、小さく噴き出してしまった。

カラオケ店での反転死体の発見、それに続く怪しげな少年との邂逅。他にも一口には言い表せない程の出来事や事柄に遭遇しながらも、慎は今までと然程変わらない日々を過ごしていた。

あんな事があつたというのに、新聞もテレビもそれらしい事は一切報道していない。それに相変わらず、兄の諒からは何も聞かされないままだった。

「でも、今日は俺も洵の付き添いで病院に行かなくちやならなかったから……ごめんな、拓郎」

「洵君の付き添い……ですか?」

「ああ。といつても、今は単なる健診みたいなものだから」
10年前。綾風市で起こった鉄道事故によって、妹の結祈を喪うと共に洵も頭部に重篤な怪我を負った。その際に受けた脳外科手術によって洵は奇跡的に一命を取り留めたのだが、今も定期的な経過観察が必要となっていた。

定期的に病院に通う必要があるとはいえ、特に何か障害が残っているような事も無く。今までも問題無かったから、と他の皆を安心させる為にも緩く首を振って言うのと、暫く何か考えていたためぐみが声を掛けて来た。

「ねえ、神郷君。その病院って、中央総合病院？」

「そうだけど、どうかしたのか？」

脳外科という専門の都合上、どうしても行く病院は限られる。

問われるままに慎が頷くと、めぐみはまた少し考えた後に話を切り出した。

「なら、ついでで良いのだけど……お見舞い、一緒に付き合ってくれないかな」

「お見舞い……って、いつだったか通り魔に襲われたっていう先輩の事か？」

「うん。悠美先輩……田坂先輩っていうんだけど、ようやく面会出来るくらいになったみたいで」

拓郎の確認にめぐみが説明を続ける一方で、慎はめぐみが口にした名前を心中で反芻する。

田坂 悠美。

自宅の、兄の諒が使っているパソコンの中にあつたデータに記されていた名前だ。あのカラオケ店で知り合った伊藤という刑事の言葉も気になって、つい兄のパソコンデータを見てしまったのだが、その中にはA潜在者というリストの中に先程めぐみが口にした田坂の名前と、拓郎の知り合いであるらしい岡崎おかざき孝司たかしという少年の名もあつた。

あのカラオケ店での事件、もつと言うのならばそこで出会った怪しげな少年がその岡崎に何かした——それこそ、カラオケ店で見た反転死体のように到底信じられぬ事をした、らしい。だからあの時、拓郎は酷く激高したのだろう。らしい、としたのは、動揺しきっていた当の拓郎が「今も何処かで生きている」と信じる事にしたからだ。自分の目で死を確認していないのなら、死が確定されないのと同じように。

故に、岡崎という少年は今も行方不明のまま。他にも少なからず、行方不明者が居るらしい。そんな中で兄が所持していたリストに記されていた人物の名の一致に、慎は気に掛かってしまった事もあつて提案に頷く事にした。

「分かった。洵の定期検査が終わった後に、俺もその田坂先輩のお見舞いに行こう。後で洵に訊いてみる」

そういう訳で後から洵に訊いてみた所、洵からお見舞いに行きたいという旨の了承を得られたので放課後、洵の診察と併せて病院に向かう。

結果から言うと、健診は特に問題も無く終わった。経過も順調で、このままなら定期的な通院もしなくても良くなるらしい。今までも特に何かあった訳ではなかったが、今回も何事も無く終えられて慎は少しほっとする。当の洵からは、心配し過ぎと呆れられてしまったが。

この綾風市立中央総合病院は、名前の通り綾風市で最も大きな病院だ。今日も通院や診察をするであろう者達で混み合っている。今は意識不明の患者——特に多くは無気力症と呼ばれる者達を受け入れているらしい。

無気力症。この綾風市やその周辺都市でこの所よく見られる精神疾患をそう呼ぶらしい。発症した者は動く事どころか喋る事もままならなくなり、果ては衰弱していつたまま死んでしまうのだという。治療法は確立されておらず、原因も分からない。

10年前、同じく綾風市で無気力症が多発した時からいまだ詳しい事は分かっていないらしい。洵の脳外科手術を行ったのもこの綾風市立中央総合病院であり、偶々綾風市に訪れていた医者だったのだという話を明かされた際に、並行して聞いた事を慎は思い返す。

そういえば10年前——と、洵を担当した平賀という年若い医師が見せた何処か考え込むような表情が少しだけ頭の中で引つ掛かりながらも一階の受付付近に来てみると、人の邪魔にならない壁際で並んで立つ湊と美奈子の姿を見つけた。

「あ、慎兄ちゃん。あそこ。……こんにちは」

「だな……お待たせ。待たせたか？」

「別に、そうでもない」

「今来たところ！」

何故か何処のデートの待ち合わせかという慎の言葉に、湊と美奈子

もお決まりな言葉で返して来る。

めぐみの先輩の見舞いは、提案しためぐみの他、慎と洵、湊と美奈子で行く事になった。

拓郎は話題に出していた時の通り、バイト。叶鳴は放課後、英語教師に呼ばれてしまつて一緒に行けなくなつてしまつた。成績優秀な叶鳴の事、何か学業面で問題があつての事ではないとは思うが、何だろうか。

明日にでも訊いてみよう。そんな風に考えていた慎の袖を、洵が引つ張つて慎は我に戻る。

「めぐみさんの先輩が居る病室つて、何処なの？」

「あつ、そうだな。ええと……」

こうしてたむろしていても邪魔なだけだろう。めぐみは先に先輩の病室に行つていているという事らしい。

病室番号は聞いていたのでそれを口にするものは、はた、と別の問題に行き当たつて沈黙する。どの病室かは聞いたが、そこへどうやって行くのか聞いていない。

思わず黙り込んでしまつた慎が湊と美奈子を見ると、湊と美奈子も揃つて首を横に振る。そうしてどうしようか、と思つた所で、湊が病院のスタッフらしき者の姿を見つけてそちらへ向かつた。

「訊いて来る」

「あ、有里つ……ご、ごめん」

申し訳無きそんな慎の声を背中に聞きながら、湊はこの病院のスタッフらしき青年の方まで近付く。

「すみません」

声を掛けると、青年は湊に気が付いて湊の方へ振り向いた。

「はい、何です……」

恐らく何ですか、と言いかけた青年の言葉が、湊の姿を見て中途半端に止まる。

どうしたのだろうか。凧の杜学園の授業が終わつてから、現在寝起きしているマンションには寄らず見舞いの為に駅内の花屋だけに寄つて来たので制服のままだ。何処かで汚してしまつた覚えもなく、

TPO的にも問題無い筈だが、と月光館の制服を纏った湊は軽く首を傾げて青年を見返した。

少し珍しくも感じる灰色の髪。特に前髪は綺麗に切り揃えられていながらも眉毛を隠していて、ちゃんと前が見えるのだろうか。湊は自分の事を思い切り投げ捨てて疑問に思う。

「病室、どうやって行くのか知りたくて」

続けて見舞いに行く予定の病室番号を口にするのと、青年は我に返ったように丸くしていた目を何度か瞬きさせた後に、ああ、と声を出した。

「ああ、そこなら——」

綾凧市内で最も大きな病院だけあって、広く少し構造も分かり難いらしい。青年の、分かりやすい説明に湊は耳を傾ける。

——何処で会ったっけ。

何処かで、ではなく、何処で。僅かだが明らかに違う意味合いを持つ疑問。

「今、その階は水回りの点検中だから、水道を使うのなら上か下の階を使うといい」

青年の丁寧な説明を聞きながら、泡のようにどうしてか浮かび上がった思いに湊は青年を改めて見る。

手にしているのは掃除用具。患者や見舞客がそんな物を持っているとも思えないから、普通に考えて清掃スタッフという所だろう。行き方の案内も分かりやすく、こういう説明は慣れているのかもしれない。このくらいの伝達力が欲しかったな、とちよつと思ったりもした。

「ありがとう」

「どういたしまして」

病室までの行き先を頭に叩き込み、青年に軽く頭を下げて礼を言う。

案内は慣れているのかもしれないが、元々の業務ではないのだからあまり引き留めるのも良くないだろう。言葉も最小限に、湊は青年から離れて慎達の方へ戻っていく。

青年の名札に書かれていた、「瀬多 総司」という名は湊の記憶に無かった。

だからきつと、ただのデジャ・ヴなのだろう。

「お待たせ。訊いて来た」

「訊いて来てくれてありがとな、有里」

そうして、四人で病室まで向かう事にする。

先に病室までの行き方も伝えておいた。言葉自体は、湊が青年にして貰った説明とほぼ同じだが。

分かりやすい説明もあつて途中で特に迷う事も無く、めぐみの先輩である田坂 悠美が入院している病室まで辿り着く。病室の前で軽くノックをすると、先に病室に行っていためぐみが答えた。

「皆、ありがとね。悠美先輩、さつき話してたクラスメイト達と、その弟君」

「えつと……お邪魔します」

「こんにちは」

病室の扉を開け、中に入る。病室は個室のようでベッドは一つしかなく、そこには一人の女性が居た。

その女性——田坂 悠美はめぐみの問い掛けに反応したかのようにはんの少し顔を動かすものの、何処かぼんやりとした様子のままだ。瞳の焦点も何処か合っていないようで、そんな先輩の反応に声を掛けためぐみが顔を歪めて何とも言い難い表情になる。

「お見舞いの花も持って来てくれたの？ 花瓶、何処にあつたっけ……」

「水入れて来るね。この階は水道使えないんだっけ」

「そう。頼んだ」

めぐみから花瓶を受け取りつつ、花束を持っていた美奈子が湊を見る。湊も同じく美奈子と目を合わせながらも、お互いに表面上の言葉以外の意味を以て頷いた。

めぐみの先輩だという、今この病室に居る女性。あの女性は湊と美奈子がこの綾風市に訪れたばかりの時、歩道橋で男に——もつと言うのなら男のペルソナに、襲われていた女性だった。

曰く、一命は取り留めたものの精神的なショックが大きいらしい。慎と洵、湊と共にめぐみからの説明を聞き、花瓶に水を入れる為に一度病室を離れた美奈子は小さく息を吐いた。

水道を使うなら、上か下の階。どちらでも良かったので、特に深い意図も無く下の階へ下りていく。

病棟は静かだ。めぐみの先輩、悠美が居た階も静かだったが、この階はもっと静かに思える。入院患者ばかりなのだろうから一階の受付付近と比べたら当たり前なのだろうが、それを差し引いてもまるで人が居ないかのようなだった。

床に自分の足音が反響していくのを聞きながら、美奈子は水を使う為にトイレは何処かと見回す。

——そしてふと、ある一病室の扉が開いているのが目に留まった。廊下に並んだ病室の扉。その内の一つだけ、扉が開け放されている。風で開いてしまったのか、それとも誰かが開けっ放しにしたままにしたのだろうか。分からない。けれども、美奈子の足は何故か気になって扉が開いていた病室まで向いていた。

この病室も個室だ。階こそ違えど同じ病棟内である為に悠美が居た病室と内装は変わらなかったが、病室に足を踏み入れた瞬間どうしてか埃っぽく感じて美奈子は思わず顔を顰める。

衛生管理は医療において、決して軽視されるべきものではない。然るべき清潔さは保たれている筈であるし、悠美が居た病室は病院らしい清潔さを感じたというのに。

病室内を見回してもそう目立つ不潔さがあるようにも思えなかったのに埃っぽいように感じてしまった事に首を捻りつつ、美奈子はベッドに横たわる人物を見つめた。

年嵩は美奈子と変わらないか、少し年上かもしれないくらいの少年。美奈子が病室へ足を踏み入れても起きる気配は無く、その瞳は閉じられたままだった。

悠美の病室に行く際、この病院は無気力症をはじめとした意識不明の患者を多く受け入れているらしいと慎から聞いていた。この少年も、何らかによって意識不明となっている患者なのだろうか。

何も知らず、何も分からない筈で、きつとそうである筈だと思いがらも、美奈子は改めて病室を見回してから少年を見る。

静かな、寧ろ静か過ぎる周囲において、少年の呼吸すらあるのかどうか分からなくなりそうだ。何処からも、誰からも隔絶されて、忘れ去られて。生きているのかも、生きていたとしても目覚めるかどうかも分からなくて。そうだとしたら、それはまるで。

心の奥底に沈んだ重石に美奈子は口許を引き結び、強く首を横に振る。滲み出す感情が、音の無い溜め息となって漏れた。

病室に備え付けられてあった洗面所を拝借し、持って来た花瓶に水を入れてそこに花を生ける。続けて、ベッド近くのサイドテーブルに置いてあった花瓶を手を取った。

サイドテーブルに置いてあった、というよりは、置きっぱなしになっていた花瓶。うつすらと表面に埃が被っていて、当然のように何も生けられていない。美奈子はその花瓶を軽く洗って拭いてから、中に水を入れてサイドテーブル上に戻す。

空だった花瓶に挿したのは、一本のウォールフラワー。

無機質で色の無い病室に、ほんの僅かに色が差す。美奈子は少しの間だけサイドテーブル上の花と少年を見つめた後、悠美の病室へ持つていく為に生けた花瓶の花を抱えて今居る病室を後にする。

ベッドのネームプレートに記された「来栖くるす 暁あきら」という名の少年を、残した花が僅かな間だけでも見守ってくれよう託して。

5：教皇（2）

掠める夜風が少し冷たく感じる。

外気よりも熱の籠もった息を吐き、そして些か低い気温の空気を吸い込みながら、湊と美奈子は暗闇から這い出たような影——シャドウとの戦いを行っていた。

「エンジェル」

召喚器の引き金を引くと青い欠片が飛び散り、ペルソナが顕現する。

金の髪と白い翼を広げた天の御使いが行った加護を受け、目の前の手だけのシャドウが文字通り振るった手を避ける。狙いが外れて倒れたように甲の部分を見せた手だけのシャドウに対し、続いて湊が召喚器の引き金を引いた。

「ベリス」

先程の天使とは対称的な、赤黒い馬を駆る甲冑姿の悪魔が赤々とした炎を放つ。

まるで地獄の業火とも言わんかのばかりの攻撃を受けて燃える手だけのシャドウに、湊と美奈子はそれぞれ剣と薙刀を振って切り伏せた。

どろり、とシャドウが泥のように形を崩し、青緑色ではない月の光のあたらぬ陰の中に溶けていく。

それも束の間、新たに現われた長い髪をたなびかせる首だけのシャドウに美奈子は風の魔法で接近を防ぎ、湊が間髪入れずにペルソナによる連撃を食らわさせて攻撃の隙を与えぬようにする。

更に背後から飛んで来たシャドウからの矢を振り向きざまに美奈子が払い、その間に距離を詰めた湊は跳躍した勢いを以て弓を構えたシャドウを頭から叩き斬った。

『うん、この近くにはもうシャドウは居ないみたいだね』

他と同じくシャドウがどろどろと形を崩壊させて消えていく中で、心の内側に在る綾時が告げる。周辺に脅威が無い事を知ると、湊と美奈子はひとつ息を吐いてそれぞれ構えていた武器を下ろした。

空を見上げると、電灯の明かりが少ない中で月明かりが眩しく感じる。ただその色はある意味で見慣れた青緑色ではなく白く蒼褪めて冷えた色だった。

ここは巖戸台ではなく、今は影時間でもない。

その事実が示すものに言い様の無い感情が湧き上がるのを自覚しながらも音には出さずに飲み込み、湊と美奈子はいさつきまで振るっていた武器を布で包んで隠す。それから一応周囲に人もシャドウも居ない事を確認してから、寝起きしているマンションまで戻る事にした。

湊がこの綾風で初めてシャドウと交戦してから、夜にシャドウが現われるようになった。シャドウは無気力症になっていている者達の近くに出現する事が多く、つまりはこの綾風市で出現したシャドウも無気力症を引き起こすものでもあるという事だろう。

シャドウの場所はおおよその場所ならば綾時がいち早く感知出来ているので、湊と美奈子はそれに従って現場に向かっている。流石、と言うべきではないのだろうが、シャドウの上位存在であるデス故なのだろう。あまり褒めると調子に乗るので、綾時には言わないようにしているが。

「お腹減った」

「今日はラーメンの気分かなあ」

あれから、この綾風に来たばかりの時から、イゴールには会っていない。ベルベットルームにも入っていない。故にベルベットルームの住人にも会っていないが、と湊と美奈子は制服のポケットに手をあてる。

制服のポケットの中。その中には、湊の方には白金細工のしおり、美奈子の方には白檀香のしおりが入っていた。

かつて、力を司る者との手合わせで——正直ちよつと思ひ出したくはないが——貰った物。そのしおりはペルソナ全書のような役割があるようで、湊と美奈子はそのしおりを使って自らのペルソナの管理をしていた。ちなみに一部を除いて引き出す時はしっかりと所持金が何の仕掛けでか減っていた。ちよつと多過ぎる生活費を貰っている

身ではあるが、何か釈然としない。

なお、今手にしている武器は寝起きしているマンションに置いてあった段ボールの中に入っていたものである。宛先は掠れて読めなかったが、発送元は「闇ネットたなか」と書いてあった。何やっているんだ、たなか社長。あの時も結構そこそこ怪しかったし、冷静に考えて普通にシャドウを倒せるくらいの武器を売ってたりするのはアウトだったんじゃないかと今更に思う。流石に剥き出しのまま持ち歩くのは宜しくなろうと布で包んではあるが、これでも結構怪しいのではないのだろうか。巖戸台の時は影時間の中だったからそんな心配は無かったのだが、もしも職務質問にでも遭ったらどう誤魔化したら良いだろう。怪しまれた時にどうにかこうにか誤魔化したり隠したりしていた経験のある者が居たら、是非とも教えて貰いたいものだと思う。普通、武器を持ち歩く事などは多分他に無いだろう、とは思ってはいても。

寝起きしているマンションについては、相変わらず家主と顔を合わせ事も無い。ただ巖戸台の寮に居た時と同じくらいには少しだけ住まいに対する遠慮が減って、置いてあったこの武器やらパソコンを勝手ながら使うくらいにはなっていた。

パソコンを使うといつても、巖戸台に居た時もネットゲームくらいにしか使っていないだったので何かをやったという程でもない。した事と言えば、軽くネットニュースを見るくらいだった。ちなみにパソコンは特にパスワードも設定されていないセキュリティガバガバ具合だったし、ブックマーク内の闇ネットたなかには買うなら今しかないという衝動に駆られる所だった。本当、何やっているのだろうか、たなか社長。

聞き覚えあり過ぎるメロディのトラップに嵌まりそうになりつつも、湊と美奈子はこの綾風市を主として起こった事やその噂話を多少なりとも知る事が出来た。

この綾風市で頻出する無気力症患者に、10代後半中心の若者達の行方不明。

カラオケ店で見た反転死体の事は日頃のテレビ上でのニュースと

同じく取り上げられているような所は無かったが、怪しげな噂にはなっているようで今は跡地になっているらしい何かのサイトの掲示板には解決を望むかのような書き込みも見られた。

この綾風市で見られる無気力症は、10年前にもあったらしい。

10年前——と過ぎる感情を抱えながら、足は人通りの無い場所からそれなりに人の出入りのあるショッピングモールの近くまで辿り着く。

「あ、自販機。飲み物買っていこう」

「僕は剛健美茶で」

ショッピングモールの駐車場まで来た所で、自販機を見つけて立ち止まる。

湊と美奈子が自販機の前で少し前屈み気味になった所で、不意に駐車場に停まる二台の車が視界に映った。

駐車場に停まる車。それ自体は別段、珍しくも何もない。しかし横に並んで停まった二台の車の窓が開けられ、片方の車からもう一方へと何かを手渡されるのを見て目を見開いた。

あれは、と思わず声に出かかるのを、寸での所で飲み込む。だが、意識は目に映ったものに釘付けになっていた。

車のパワーウィンドウが閉められ、走り出す。駐車場から走り去っていく車は湊と美奈子に気付いた様子は無く、しかし湊と美奈子は一方の車に乗った人物が見えて再び驚きに息を飲み込んだ。

—— 神郷 諒。神郷 慎と洵の兄である人物。

それに、その諒がまるで人目を忍ぶように受け取っていたのは。

「あれって……」

「あれは、ひいらぎ製薬の……」

と、そこで声が聞こえて来て湊と美奈子は周囲を見回す。

先程の二台の車よりもやや離れた場所。そこに一台の車と、二人の男が乗っている。男達は湊と美奈子が見ている事に気付き、車から降りて近付いて来た。

「くんばんは」

「お仕事お疲れ様です！」

「えっ、あ、ああ……こんばんは」

先んじて湊と美奈子から声を掛けると、長身のまだ若そうな男の方が困惑しながら挨拶を返す。

こういう時は先手必勝に限る。構える事も無く応対した湊と美奈子に面食らったらしい長身の男が、やや困ったような顔をして同じく近付いて来る壮年の男の方を見る。まるで助けを求めるとかのような長身の男の態度に、壮年の男は呆れたように溜め息を吐いた。

車から出て来た二人の男。湊と美奈子には見覚えがあった。二人は綾凧署の刑事で、壮年の男の方が伊藤、長身の若そうな方は榎崎といった筈だ。伊藤と榎崎も湊と美奈子の事は覚えていたようで、伊藤は榎崎の隣まで近付くと二台の車が走り去った方を見遣った。

「お前等、さつき……いや、何でもない。それより、未成年がこんな時間まで外に居るのは感心せんな」

「確かに……君達、何してたんだ？」

何かを問い掛けて首を横に振り、途中で止めて別の言葉に擦り替えたらしい伊藤の言葉に、榎崎も頷いて湊と美奈子に問い掛ける。

先程、走り去った二台の車。一方の車に乗っていた綾凧署の警察官でもある筈の諒の事、諒が受け取っていた容れ物に入った錠剤の事について問う事を止めたらしい。恐らく、警察関係者でもない湊と美奈子に余計な邪推をさせない為なのだろう。

「課外活動です」

「あっ、良かったら飲み物どうぞ」

ついさつき買ったばかりの飲み物を刑事の二人に半ば押し付ける形で渡しつつ、カンスト勇气の心持ちで言つてのける。

課外活動。巖戸台のS・E・E・Sは「特別課外活動部」だったから、一応嘘は言っていない。

長物を持つていたとはいえ、布をきつく巻いて中身を隠していたのも幸いした。二人の刑事は堂々し過ぎたのが逆に不審気に思った様子を滲ませながらも、それ以上問う事はしなかった。

「あのカラオケの時の犯人、見つかったんですか？」

「……悪いが、それは守秘義務にあたるんだな」

テレビドラマのようにそう軽々は教えてくれないらしい。そこは予想通りだったので、特に気には留めない。

「じゃあ、この辺りの美味しいラーメン屋」

「はあ？ 何言ってるんだ」

「まあまあ、伊藤さん。このぐらいの歳の子達で、部活動帰りならお腹が減ったっていうのは仕方無いですよ」

突然に方向展開した話題に伊藤があからさまに怪訝に顔を顰め、榎崎が困ったように笑って宥める。

取り敢えず事件の事についてはしつこく訊かれるような事も無いらしい、と判断したのか、やや呆れながらも伊藤は思案するように手を顎にあてて唸った。

「道案内じゃねえんだから……全く。ラーメン屋ってえと、このショッピングモールの裏手側に一軒あったな」

「あ、知ってますよ。確かその女店主は元スパイだとか、裏メニューにバナナチャーシューがあるとか何とか……」

「ありや単にからかってるだけだろ、ただの噂話を本気にするな」

「ちよつと気になるかも」

「それどつちの事言ってる？」

すっかり話題がおかしな方向に流れてしまい、伊藤は何度目かの溜め息を吐くと湊と美奈子へ向けて犬猫を追い払うかのように手を上下に振った。

「ともかく、だ。未成年が遅くまでうろついてるんじゃない。今度こそ補導されない内に帰れ。……行くぞ、榎崎」

「あつ、はい。事件の事は教えられないけど、何か気付いた事や思い出した事があったらいつでも連絡して来てくれて構わないから。それじゃ、気を付けて帰るように」

「はい」

「分かりました」

警察官らしい言葉を残して乗っていた車に乗り込む伊藤と榎崎にこちらも素直に頷いておきながら、二人の刑事が去っていくのを見送る。

後には駐車場には湊と美奈子だけが残り、静寂と共に掠める風の冷たさを自覚する。

まるで人目を忍ぶように、ひいらぎ製菓とかいう所とやり取りをしていた諒。その諒が受け取った見覚えのある菓。更に、同じ警察でありながら諒の動向を調べているかのような刑事達。

新たに疑問が降りて来ながらも、しかし。

「ラーメン食べに行こうか」

「うん」

今は空腹を満たすのが先。

そうして同じく駐車場を後にし、向かったラーメン屋で食べたバナナチャーシュー……ではなく牛丼ラーメンは、とても不思議な味がした。

6：恋人（1）

授業終わりの放課後。

他の生徒達が帰り支度をしながら日々の他愛無い話をするのを、慎は特に聞き耳を立てる訳でもなく耳に流していく。

今度また転校生が来るとか、ちよつと有名なアイドルのライブイベントがあるとか、何でもスポンサーであるひいらぎ製菓はこの綾風市が地元だったからでラッキーだとか、もしかしたら雑誌の取材とか受けるかもしれないとか何か。

耳に入るのは取り留めも無い話題ばかりで、あのカラオケ店で起こった事件の事など誰も知らないようだ。諒が何も教えてくれないのは相変わらずだったが、伊藤という刑事も捜査状況が芳しくないのか、それとも別件で忙しいのか大した話は聞けないままだ。新聞やニュースでも取り扱っているような様子は無く、流石に慎でもあの時の事はメディアには伏せられているのだろう、と考えられる程であった。

「やっぱりあの時の事、全然知らされてないままなんだな……」

「……そうだね。ちよつと噂っぽいにはなっているみたいだけど、何年か前に何処か……何処だっけ、何処かでも変な事件があつて、それで騒ぎになった事もあつただけど結局いつの間にか聞かなくなっちゃったし……確か逆さま……何だったっけ、拓郎、覚えてる？」

悩ましげに溜め息を吐いたためぐみが近くに居る拓郎に問い掛けたものの、拓郎からの返事は無い。帰り支度もそこそこに、まるで話が聞こえていなかったかのようにはんやりとしていた。

「ちよつと、拓郎？」

「へっ、う、うわっ!? 何だよ、びっくりさせんなって……」

「いや、さつきから普通に声掛けてただけ……」

そこで我に返ったかのように大仰に仰け反る拓郎に慎は呆れつつも、まだぼんやりしているような心ここに在らずといった様子に些か心配が擡げる。

「拓郎、どうしたんだよ。いつもと違うっていうか……何かあったの

か？」

「いや、別に……」

別に、という割には明らかに歯切れの悪い様子に、めぐみかふと思
い出したように声を上げる。

「あー、あれでしょ。朝、女の人に声掛けられてたんだよね。それで
しょ」

「まあ……」

「えっ、それって所謂逆ナン……ってやつか？」

「そんなんじゃないのー！」

目を丸くして驚く叶鳴と慎に慌てて拓郎が声を張り上げて否定す
るも、直ぐにはあ、という重い溜め息に変わる。

「いいからもう帰ろうぜ。ほとんど俺達だけじゃねーか」

露骨に話題を逸らされた感はあるものの、確かに教室内に居る生徒
の数は随分と少なくなっている。そこまではない心算だったが、考
え込んでいたり話していたりする内に随分と経っていたらしい。

慎自身は洵を迎えに行く予定だったのもあって、自分も途中で止
まっていた帰り支度を進める。

「私も部活、行かないと……あっ！ そうだ、叶鳴。また影抜きなんて
しないでね。この間、空き教室で影抜きやってたのが見つかって、学
校でも処分厳しくなるらしいんだから」

「それ、俺も知ってるぜ。小田桐が……」

「小田桐先生、ですよ。榊葉君」

「へいへい。小田桐先生が見つけたんだっけか？」

「そうだよ」

「合ってる」

頭を掻きながら何人伝手なのかも分からない話を思い出して言う
拓郎に、湊と美奈子が頷く。その間髪入れない肯定に、慎は思わず不
思議そうに首を傾げた。

「あれ？ 有里達はもう他から聞いてたのか？」

「資料運ぶの手伝ったから」

「そんなとこ」

事も無げに言われた返答に、慎もつられてふうん、と相槌を打つ。湊と美奈子、どちらも学校内外問わず慎達以外とも話し掛けたりだの何だのしているようだから、それでだろうか。

「でもまあ……仕方無いよね。小田桐先生ってさ、厳しいもんね」
「あれは煩いってやつだろ」

如才無い拓郎の言い方を窘めつつも、ともすれば煩いとも取られかねない評価であるのは否定しないのか、めぐみも肩を竦める。

慎自身、苦手ではないが得意でもないので曖昧な首肯をするに留めつつ、でも、と慎は湊と美奈子の方を見た。

「けど、有里達には当たりが柔らかいって言うか……他より、優しい気がする」

弟の洵程ではないし、当の洵からは呆れられる事もあるが、そこまで鈍くも無い心算ではいる。それほど注視している訳でもない上に何となく程度ではあるのだから、ただの気の所為とも思えない印象を口にする慎に、叶鳴とめぐみ、拓郎はピンと来ないのか怪訝な顔をした。
「そうでしょうか……？」

「んー……まあ、有里君と有里さん、どっちも成績良いから……？」
「そういうや有里達から、結構話し掛けにも行ったりしてた気がする。けどよ、それって度胸あるっつーか、ああいうの好きじゃねえとか、苦手じゃねえのか？」

成績が悪い訳でもなく、かといって教師に媚を売るような性質でもない。

それなのに、苦手とする生徒達も多い教師相手にも隔てなく関わろうとしているのか。何気無く振った問い掛けに、湊と美奈子は同時にきっぱりと否定した。

「それは無い」
「そんな訳無い」

別に、とか、そんな事無い、とか。そんな言葉ではなく。

否定の言葉には違いなくとも、秘められた意味は明確に違っているように。

言葉少なくとも明瞭にもたらされた否定に慎はどうしてか自分が思

いの掛け違いをしているような気がして、胸の奥底がぎわめく。

どうしてだろう。自分は何か思い違いか、それとも思い出せない何かか――

「ともかく！ 影抜きなんかやつちや駄目なんだからね！ 叶鳴、わかった!?」

「は、はいっ。ご、ごめんなさい！」

「話がループしてんぞ」

パン、と景気良く打たれた柏手に慎は我に返り、それまでの思考も霧散する。

ぼんやりとしているのは、拓郎だけではないかもしれない。密かに嘆息を零しながら鞆にノートや教科書を仕舞っていると、鞆の底にくしやくしやになった紙を見つけた。

「これ……」

鞆の中に教科書類を仕舞うと入れ替わりに底にあつた紙を取り出し、皺を伸ばして広げる。それは少し古びた手紙で、以前に家の物置を掃除した際に見つけた物だった。

掃除した際に取り敢えずで鞆の中に突っ込んでおいたのだが、色々あつた所為で今の今まですっかり忘れていた。

「神郷君？ それ、お手紙みたいですけど……」

「……ああ。掃除した時に見つけてさ。何となく気になって……両親宛に、子供が書いた小説の挿絵を描いて欲しいって」

絵本作家だった両親。慎が幼かったのもあって、両親が絵本作家としてもどのような活動をしていたのかもあまり覚えていない。兄の諒ならば覚えているのかもしれないが、まるで両親の話の避けているかのように話が出る事も無かった。

そんな中で、両親に宛てて出された手紙。自分が知らない両親の事を知りたくて、気付いたら鞆の中に仕舞っていた。そのまま仕舞い込んでしまつて忘れていたのは、ご愛敬という訳にはいかないかもしれないが。

「……ふーん。でも聞いた事ねーな、そういう話」

「私も聞いた事無いかなあ……」

「そうですね……他のお手紙とかは無かったですか？ それか、出来上がった本とか……」

手紙の中に書いてあった話の概略に揃って覚えが無いと振る拓郎とめぐみに同じく覚えが無いと頷きながらも問い掛けて来る叶鳴に、慎は首を横に振る。

「無かったんだ。……もしかしたら、返事も出していないのかもしれない」

便箋の消印は10年前。日付も、両親が死んだ時よりも少し前だ。それにあの時、両親は他の絵本を手掛けていて——浮き上がり掛ける何かに、しかし同時にそれを阻害する何かに、慎の頭がずきりと疼く。

まただ。また、何か大事な事を忘れているから思い出しそうで、けれど思い出せないのとは違うようで。痛む頭と心の奥底に半ば振り払うように頭を振り、何でもないように取り繕おうとした所でふと慎は湊と美奈子へ意識が向いた。

慎が手紙の事を話す間、湊と美奈子は何も言っていないかった。単に聞き役に徹していただけか、それとも気を遣っているだけで然程楽しい話題でもなかったから何も言わなかったのか。

確かに別段聞いても楽しい話ではなかったな、と少し反省して慎が謝罪を口にしたかけた所で、それまで黙っていた湊と美奈子が同時に慎を見て口を開いた。

「連絡してみたら？」

意味を理解するまで、数瞬掛かった。

連絡をする。何処へ、何を。この手紙の差出人へ、絵を付けて欲しいという話の事を。

「で、でも、随分前の事だし、それにこの手紙に書いてある話じゃ、話の終わりは……」

つい鞆の中に突っ込んでしまうくらいには、気になっていたのは事実だ。

死んだ息子が書いていた小説に絵を付けて欲しい、という子供の母親の願いが書かれた手紙。神木、という差出人に慎自身は面識が無

く、この手紙もかなり前のもの。その上、手紙の内容を読む限りでは、と些か後ろ向きな言葉ばかりが出てしまう慎に対し、湊と美奈子はまるで構わずに言葉を続ける。

「知ってる」

その言葉は明瞭ともたらされたにも関わらずあまりにも小さく、慎にしか聞き取れなかった。

しかし他の者には聞こえずとも確かに言葉を聞き取った慎が思わず湊と美奈子を見ると、湊と美奈子が浮かべた表情に慎は次句を紡ぐ息が詰まった。

特に意味も無く述べられた何気無い言葉でも、軽い冗談でもない。故に何故、という疑問が出てしまう程に、そして揃って浮かべたその表情を何と形容するのか分からずに。

ただどうして、と何に對してなのか分からずに漏れた慎の言葉に、湊と美奈子は静かに返す。

「生きた意味、だから」

6：恋人（2）

慎は洵を迎えに、めぐみは部活に。叶鳴は用事があるらしい。そういう訳で、湊と美奈子は拓郎と帰る事になった。

「そーい、やまだ制服の手配、出来ていないのか？」

「そーみたい」

「他人事かよ。……ま、今更制服変わっても、今のをすっかり見慣れちゃまってるから変な感じにはなりそうだよな」

拓郎は寮住まいなので、共に帰るといつてもそこまで長い同道ではない。

他愛ない会話を交わしつつも教室に居た時と同じく何処かぼんやりとしている拓郎、それから学園を出た時から感じる視線に湊と美奈子は互いの目を合わせた。

「どころでさ」

「ん？」

「ずっと付いて来てるけど、いいの？」

すつ、と視線がやや離れた後方に向かう。するとそこには、こちらの視線に気付いて慌てて物陰に隠れながらも完全に隠れずにちらちらと視線を送っている女性が居た。

女性は学園から出た時から、ずっと湊と美奈子、拓郎の後を付いて来ていた。女性に対して、湊と美奈子に面識は無い。とすると、何かあるとするのなら拓郎の筈だ。朝、めぐみが拓郎に声を掛けた女性が居たと話していたから、それなのだろう。

「ああ、いや、その……まあ、そうだな……」

湊と美奈子の視線を追い掛け、女性を視界に入れた拓郎が問いに歯切れ悪く返す。

女性は姉にしては歳がやや離れており、母というには近過ぎる。逆ナンだとしても、お互いこんな妙に気まずい状態には中々ならないだろう。

足を止め、女性と拓郎の間に挟まれる形で湊と美奈子は二人を交互に見遣る。現状では、女性と拓郎の間に何があつたのか知る由も無

く、拓郎に判断を任せるのみ。

そうして暫くした後、頭を掻き毟って何やら悩んでいた様子の拓郎が大きく溜め息を吐いた。

「……悪い。ちよつと大事な用事思い出しちまってき、先帰ってくれ」

「いいの」

確認は、先に帰る事に対してではない。

何に、とは付けられずにただ向けられた言葉に対し、拓郎は思わず面食らったかのように目を瞬かせる。そこから数瞬後、まるで自分を奮起させるかのように両手で自らの頬を叩くと、力強く頷いた。

「……ああ。これは多分、俺の問題だ。だから俺が向き合わなきゃならねえ」

「……分かった」

返る答えに、湊と美奈子がそれ以上紡ぐ言葉は無い。

了承を受け取った拓郎は通学鞆を持ち直すと、身を翻す。完全に身体が後方へ向く前に、拓郎は湊と美奈子へ向けて手を振った。

「……ありがとな。また学校で会おうぜ！」

拓郎が湊と美奈子から背を向け、駆け出していく。向かう先は分かっていたので湊と美奈子も引き留めず、軽く見送るのみに留めて歩みを再開した。

「何処行こうか」

「買い出しとか？ トイレットペーパーのストック、結構少なくなつてたし」

「ああ……歯磨き粉もそろそろ搾り出すの辛くなって来たから、新しいの買つていいかな」

寝起きしているマンションの家賃やら光熱費は湊と美奈子の知らない所から引き落とされているようなのだが、日々寝起きしている以上、普通に生活用品は消耗する。自動的に補充されているという事も無く、その辺りは自分達で調達しておかないといけなかった。

多めに貰い過ぎている生活費のお陰で、予算的な問題は無い。何が不足しそうかとあれこれと考えながら歩いていると、ふと前方に見

知った人物の姿が見えた。

「あれは……」

凧の杜学園の制服を着た、大人しげな女生徒。叶鳴だった。

多少距離もあった為か、湊と美奈子の存在に叶鳴が気付いた様子は今の所無い。前方に居る叶鳴は何かを探すようでありながら、何処か目の焦点が合っていないかのようにも見えた。

「……」

そのままふらりと何処かへ向かう様子の叶鳴に、湊と美奈子がお互いに顔を見合わせたのは一瞬。ほとんど同時に頷き、やや距離を保った状態で叶鳴の後を尾ける事にした。

今日は用事があるといって、先に帰ったのではなかったのか。用事といっても色々あるのだろうから、早めに終わったという事もあるかもしれない。しかし湊と美奈子が見た叶鳴の様子に、そういった他愛の無い理由ではないのだと経験に近い既視感が教えていた。

凧の杜学園から離れ、学生達がよく遊びに寄るような繁華街を離れ、中心部から些か離れた人通りも少ない場所。都市部近郊でも、賑わっている所から少し離れるとすっかり寂しくなってしまうのは珍しくない、そういった場所に入った所で叶鳴の前に現われたのは見知らぬ若者達だった。

若者達は制服を着ていない。湊と美奈子に覚えは無い。見た目で判断するのは良くないと知っていても叶鳴とはあまり縁の無さそうな出で立ちで、余計にちぐはぐ感が際立つ。

まずは様子見と物陰に隠れつつ叶鳴と若者達のやり取りを傍観していたものの、その中で「影抜き」という単語が出ると同時に、湊と美奈子は前へ飛び出した。

「なっ、お前ら何だよ!?!」

「お二人とも……どうして……」

湊は叶鳴の前に立ち、美奈子は叶鳴を背に庇う。突然の乱入に叶鳴と若者達、どちらも同時に驚愕に声を上げた。

「影抜き、って聞こえた」

「何だ、その子と同じで興味あるクチか? そうそう、今すぐ急ぎで

やって欲しいって言うから……」

「止めろって、言ったよね？」

若者達の言葉を遮り、叶鳴に詰問する。

ずっと前から、めぐみが口を酸っぱくする程に言っていた。聞いていない筈も、知らない筈も無い。つい今日も言われていたではないか。それなのに外部の者を利用してまで、否、学校内での制限が厳しくなったから外部の者に頼るようになったのか。

「それ、は……」

茫洋としていた叶鳴の瞳が揺らぎ、頼りなく視線が伏せられる。

胸の前で合わせ組まれた手は、何処にも居ない何かに対して祈るように小さく震えていた。

6・恋人（3）

繰り返し流れるCM音楽。あまりにも流れ過ぎて耳に入り過ぎて、つい口ずさむどころか身体ごと反応してしまいそうになる。

あの怪しげな欲の友と同じく変な力でも働いているのだろうか、と思いつつ、湊は綾風市内のスーパーに来ていた。

影抜きをしようとしていた叶鳴は美奈子に送っていくよう任せた。叶鳴が呼び出したという影抜きサークルの若者達は適当にあしらったのでその後はよく分からないが、正直どうでもいいので特に気にもしない。美奈子はその後で寄り道したい所があるらしく、本日の買い物と夕飯作りは湊の担当という事になったのだった。

「何しようかな……」

生鮮食品コーナーをうろつきながら、ぼんやりと呟く。

特に何が食べたいのとかリクエストも無く、何でもいいが自分達の事ではありながら一番困る状況下。取り敢えず米はあったよな、と何の指針にもならない事を思う。

スーパー内は夕食前の時間帯だけあって、そこそこの人の入りようだ。カートを引きながら手際良く品物を買ってカゴに入れていくご婦人が横を通り過ぎていくのを眺めていると、ふと野菜売り場の所に立つ姿に目を瞬かせた。

「あ」

「……え？ 君は……確か病院で……」

思わず声に出すと、声が聞こえたのか視線の先の人物が湊の方に振り返る。そこには、病院で病室の行き先を訊いた人物——確か、瀬田総司と聞いたか。その人が居た。

総司の方も湊に気付くと、覚えがあつたらしく眉を隠した前髪の下で目を瞬かせている。お互い目が合ったからにはそのまま無視するのも居心地悪く、湊は総司の許まで近付いた。

「どうも」

「……ああ。君は買い物……だよな、ここスーパーだし」

軽く湊が頭を下げると、総司も会釈を返す。

多分、総司の方も買物だろう。このスーパーは病院からそう遠くもないので、綾風市内かその近郊に住んでいるのなら近くのスーパーを利用するのも別段おかしくはない。総司の台詞通り、ここはスーパーであるし、バイトのような見た目もしていないので目的は買物以外の何物でもないのだろう。

故に当たり前と言えば当たり前の確認に同じく当たり前のように湊は首肯を返し、改めて総司を見た。

病院で見た時は作業着にも似たような格好だったが、今はラフな普段着といった装いだ。ブランドがどうのとかは湊には分からないので、その辺の思考は投げ置く。改めてみるとやはり若いが確実に湊よりは年上で、そして「やはり」何処か不思議な感覚がした。

その感覚が何なのか、湊には分からない。恐らく、総司本人に言った所で分かる訳もなく、困らせてしまうだけだろう。それは分かっていたので、湊は別の話題を口にする事にした。

「……キャベツ」

「えっ。あ、ああ、特売だったから」

唐突に放たれた一単語に再び総司が目を瞬かせたものの、直ぐに理解が及んだように自身が持つ野菜を示す。

総司が持っていたのは、一玉のキャベツ。近くの棚には本日特売日という赤文字と一緒に、多分普通よりもかなりお安いであろう値段が明記されていた。

「……でも、キャベツって丸々一玉は一人だと中々消費し切れないって言うよな」

ふと、まるで誰かの言葉を思い出すように、総司が困った笑みを浮かべて言う。

それはただの何気ない世間話のようで、それにしてもひどく深い霧に隠れた影を見るようで、しかし湊は何故なのか判別する事も出来なまま静かに首を振った。

「どうかな、今は一人じゃないから」

「……そうか」

返す総司の声音が落ちる。やはりと言うべきなのか、ただの世間話

の相槌にしては何かが見えそうで、逆に何も見えない。

どうしてだろう。どうしてそんなに、と疑問に思いながらも上手く言語化が出来ず、けれども湊はだけど、と逆接の言葉を続けた。

「でも献立に悩むのは同じだ。だから、何か良い献立、一緒に考えて欲しい」

そう言つて、湊は自身もキャベツを手取る。

分からない、と迷つて、悩んで。けれど、共に探す事も出来るから。

そんな意味を込めた訳ではないけれど、手にしたキャベツ越しに見た総司の顔が僅かに驚いた後、ほんの少しだけ微笑つたように湊には見えていた。

6：恋人（4）

風の杜学園のグラウンド、その片隅。

部員数の多い部活動がグラウンドの大部分を使用している中で、湊と美奈子が向かったのはストリートダンス部が活動している一角だった。

「あつ……こんにちは」

「有里さんに有里君？ どうしたの？」

最初に洵が湊と美奈子に気付き、続いて洵に何か話していたためぐみが気付いて振り返る。洵とめぐみの他には、同じストリートダンス部らしき女生徒が一人居るのみだった。

「……見学？」

「と、差し入れ！」

こてん、と湊が首を傾げ、美奈子が抱えていた飲み物を差し出す。学園内の自販機で買ったものだ。つい、癖で多く買い過ぎてしまった。

「あれ？ その子達、先日転校してきたばかりっていう子？」

「あー、確かに転校生だけど、それは別のっっていうか……洵君と、お兄さんが転校して来た時に、ちょうど転校して来た方です」

「一学年に四人も転校生とか珍しいよね。……あ、差し入れありがと」先輩らしき女生徒も近付いて来て、湊と美奈子を眺めてそう感想を漏らす。確かに先日、また新しく転校生がやって来たばかりな上にまだ湊と美奈子は月光館学園の制服のままだ。そちらと混同してしまってもおかしくはない。

一学年、それも一クラスに一年の内で自ら含め三人転校生がやって来た身としては、転校生がやって来る頻度については取り敢えず口を噤んでおく。また転校生、と月光館でも言われていたような気はした。

「めぐみさんから、ストリートダンス部の説明して貰ってたんだ」

「他の部と比べたら部員も少ないけど、結構自由なんだよ」

洵がこの場に居る理由を説明し、めぐみが困ったような笑い混じり

に肩を竦める。

見た所、めぐみと共に居る先輩らしい女生徒の他に部員らしい姿は無い。部といっても、同好会のような位置づけなのだろうか。

そうして湊と美奈子もついでにストリートダンス部の活動について話を聞き、暫く経った所で時計を見た洵がめぐみや先輩の女生徒に向かつて頭を下げた。

「あ……そろそろ帰らないと。慎兄ちゃんが待ってるみたいで……僕はこれで失礼します」

「そっか、入部は勿論見学もいつでもいいからね！」

「めぐみ、私達も今日はこのくらいにしとこっか。片付けは私がやっておくから、先に帰りなよ」

「えっ、すみません、ありがとうございます！」

帰っていく洵を見送った後、先輩らしい女生徒がめぐみに声を掛ける。先輩からの気遣いにめぐみは恐縮しながらも、自らを鼓舞するように肩の力を入れ直して大きく息を吐いた。

「先輩の部員も増えるし、もつと頑張らないと！ 合宿とか、悠美先輩だって良くなってるみたいだし、きつと……」

自らに言い聞かせるように零れる言葉が後になるにつれ弱くなり、めぐみはそれを振り払うように大きく首を振る。それから、きつ、と眉と共に顔を上げると先輩の女生徒、更にふと思いついたように湊と美奈子の方を見た。

「……あ、そういうえば叶鳴の事、教えてくれてありがとう。それじゃ舞子先輩、お先に失礼します！」

勢い良く頭を下げ、めぐみはグラウンドから寮がある方向へ走っていく。何処か考え込むように鞆から携帯を取り出すめぐみの後ろ姿を暫く眺めた後、残された湊と美奈子へ向けて先輩の女生徒——
大橋 舞子おおはし まいこが声を掛けて来た。

「えーと、帰り、ちよつと良い？」

然程時間を要しなかった片付けを終えた後、湊と美奈子は舞子と帰る事にする。

「うーん……後輩に奢られるのは先輩としてちよつと変な感じ」

「普通のたこ入りのたこ焼きだけど」

「たこ入りじゃないたこ焼きつてもうたこ焼きじゃなくない?」

「世の中にはたこじゃないのが入ってるたこ焼きがあつて」

なお何が入っているのかは知りたくないもので謎のままだ。

途中で立ち寄ったたこ焼き屋で買った普通のたこ焼きを摘まみながら、湊と美奈子は舞子と共に帰途を共にする。勿論、舞子とは住まう場所が違うので、途中までだが。

「はふっ……でも美味しい。たこ焼きなんて、久々に食べたかも」

熱々のたこ焼きを頬張り、差し入れのモロナミンGで喉を潤す。そうしてやや落ち着いた所で、舞子は話を切り出した。

「……うちのストリートダンス部さ、私とめぐみと……あと今は入院してる三年の悠美つて子が部員でね。今もだけど部員が少ない分、結構距離が近くて、特に悠美とめぐみは仲良かったの」

現在入院している三年の、悠美という先輩。それは前に、湊と美奈子も見舞いに行った田坂 悠美の事だろう。もしかしたら、めぐみも舞子に湊と美奈子が見舞いに行った事を話したのかもしれない。

舞子が言うには、一年の時のめぐみは今と比べて少し荒れていたらしい。それを悠美が根気強く、そして真摯に向き合って立ち直らせたのだという。なのでめぐみは悠美の事を強く慕い、悠美もめぐみの事をよく気遣っていた。

「まるで、姉妹みたいだね」

悠美と比べると舞子とめぐみとの距離は近くはないと舞子は自分でそう言いながらも、それでも何となく分かる事はあるのだと言う。

「めぐみ、お母さんと気まづいみたいで。……私も、両親が離婚してるから何となく他人事には思えなくて」

ぼつりと漏れた舞子の言葉を、湊と美奈子はただ黙って耳を傾ける。

「お父さんもお母さんも大好きで、離婚して欲しくなくて頑張ったつもりなんだけど、結局駄目で……きつとどっちもどうしようもない事情があるっていうのは、分かったの。でもね、やっぱり、どうして! っと思っちゃって余計に気まづくって……あ、ごめんね、こんな

話しちやって」

「気にしてない」

「嫌じゃないから、平気」

堰を切ったように流れ出した自らの言葉に我に返ったように舞子が途中で言葉を切り、湊と美奈子に頭を垂れて謝罪する。それを湊と美奈子はそれぞれ首を横に振って否定すると、舞子は少し困ったように眉を下げてから何処か安心するように胸を撫で下ろした。

「めぐみの事も、友達だからって本人の居ない所でこういう事を話するのは良くないって思ってるけど……何でだろう、知って欲しかったのかな。私もね、何だか不思議なんだ。つい話したくなるっていうか、話してもいいんだって思えて」

ついさつき知り合ったばかりなのにね、と舞子が湊と美奈子を見る。

「勝手だけど、でも……だからめぐみの事、よろしくね」

「うん」

「勿論」

真剣に頼み込む舞子に湊と美奈子は頷き、

「だから舞子も頼りにして。友達みたいに」

「舞子ちゃんもどーんと頼っちゃって。姉妹みたいに！」

それぞれ躊躇い無く、言葉を口にする。

躊躇無く、明瞭に言い切った湊と美奈子の言葉に舞子は呆気に取られたように目を丸くし、暫く言葉を失う。そして数秒後、思わず堪え切れないとばかりに笑い出した。

「もうっ、こっちが先輩なのに。それにいきなり名前呼びとか凄い度胸……」

でも、と呟く声音に、過ぎ去った懐かしさがほんの少し滲むのを湊と美奈子は感じながら、続く舞子の言葉を静かに聞く。

「悠美とめぐみは姉妹みたいに仲が良くて、ちよっと羨ましかったの。でも私には、お兄ちゃんとお姉ちゃんが出来たみたい」

年下だけど、と。

そう言って笑う舞子を、湊と美奈子はただ見つめる。浮かび上がる

想いを心の海に沈め、手許のたこ焼きのすっかり冷めた温度を感じながら。

7：戦車（1）

窓から、流れていく景色を眺める。

車内のラジオや高速内の電光掲示板を見る限り、目立った渋滞も無い。これなら順調に着けそうだと慎は車内に居る面々を見ながら表情を緩ませた。

話は、温泉旅館の宿泊券が当たった事から始まった。

当たたのは湊と美奈子。宿泊券を当たた事自体も勿論凄いが、湊はスーパーで貰ったふくびき券で、美奈子は駅内の花屋で貰ったふくびき券でそれぞれ別々に引いて同じ一等の四名グループ一泊の宿泊券を当たたのだというから驚きだ。

「タダで行けるんなら文句はねーけどよ、どんな強運だよ」

「本当、すごいですね」

「そう言われても」

困る、というように続く湊と美奈子は実際ちよつと困った風で、何か仕込みだのそういうのがある訳でもなさそうだった。

それぞれ四名分の宿泊券を当たたので、合計八名分の宿泊招待となる。

当たた当人の湊と美奈子、二名では明らかに少な過ぎる。めぐみがそれならば、と漸く退院出来たという先輩である悠美の退院祝いを兼ねて、当たった温泉旅館へ行こうという運びになった。

「あ……そういうえば、悠美先輩へのお見舞い、有里さんと有里君、あれから何度か行ってたんだったね」

「ええ……花も、いつも持って来なくても大丈夫なのに」

「そんな高いの買ってる訳じゃないみたいだから」

「ついでだと思って」

少し後方で交わされる話にへえ、と相槌を打って耳を傾けながら、慎は兄や弟の事を思い出す。

兄の諒や弟の洵に、この旅行の事は勿論話してある。今も兄の諒とは話をする事も多くなく、今回の旅行の件も勝手な事はするなど反対されるのかと思ったのだが——おそろおそろの切り出した慎に対して、

諒は素っ気無くも「構わない」と了承の旨を出して来た。てつきり駄目だの一点張りかと思つたので、あまりにもあつさりとした返答に思わず慎が聞き返してしまつたくらいだ。

どういう風の吹き回しだろう。いや、許可を出してくれたのは良かったとは思っているが、拍子抜けしてしまつたというか。尋ねた時は驚きが先行していたので、諒の様子をつぶさに観察する余裕も無かつた。

諒からの許可を得た後に洵も一緒に行くか、と言つてみたのだが、洵からは行かないと断られてしまつた。僕に気にせず楽しんで来て、と言われた時は弟に気を遣わせてしまつたのかと少し落ち込んだのだが、洵はどうやら諒の事を気にしているらしい。

洵曰く、「久々に会つた時よりも顔色良さそう」だとか——慎からしたらその辺りはよく分からなかつたが、洵が言うならそうなのだろう。綾風署の署長という立場故、忙しいであろう事は容易に想像がつくものの、その中で少しだけでも余裕が出来ているのなら慎としても嬉しい事だつた。

そんな事を慎がつつらとと思っている内に、車は高速から降りて一般道を走っていく。法定速度を守りつつ国道沿いを走っていると、目的地がある市内まであと何キロ、と書かれた看板が見えた。

「温泉、有名なんですって?」

「そうそう、信玄の隠し湯だとかで由緒正しい謂われがあるそうです……まあそこまで運転するのは僕なだけけど」

「運転出来るのは戌井さんしか居ないんですから、仕方無いですよ」
旅行に行く事になつたのは、ふくびき券で当てた人数分の通り八人。湊と美奈子、慎に拓郎、めぐみと叶鳴、退院祝いを兼ねてという事で悠美に、旅行先までの保護者兼運転手の戌井いぬいのぼる暢のぼるという男の八人だつた。

「温泉か……」

「処刑だね」

「されなかつた?」

「私女子だけ?」

「何かずるい」

温泉、と聞いた湊と美奈子が何やら物騒な事を言っている。処刑つて何だ。温泉というワードに対して不穏過ぎやしないだろうか。思えど、何となく聞かない方が良さそうな気がして慎はそつと聞かなかった事にした。そつとしておこう。

何か聞かない方が良い気がする事柄には思考を逸らした所で、慎はそういうえば、と運転席でハンドルと握る戌井と後方に座る湊と美奈子を見遣る。

風の杜学園の学生寮の管理人である戌井と、湊と美奈子。湊と美奈子は寮住まいではなかった筈なので、戌井とは初対面の筈だ。だからなのだろうか、今の所誰かを挟んで話がぼつりぼつりとあるくらいで、何処かよそよそしく感じる。

——珍しいな。

湊と美奈子は慎以上に行動力もあるようだし、戌井も少し前に知り合つて話した限りでは多少軽薄そうではあるものの気の良い人物だと思ふ。それなのに感じる何処か妙な距離感というか感覚は、一体何なのだろう。もしかしたら知り合つた際に何かあつたのかもしれないが、一番最後に合流した慎では何があつたのか分からなかつた。

「先に旅館に行つて、チェックイン済ませて来るよ。戻つて来るまで適当に過ごしているといい」

温泉旅館があるという市よりも手前にある、おきな沖奈市という街で戌井は他の七人を一旦車から降ろす。

この市は旅館のある市よりも発展しているらしく、娯楽施設も幾らかあるようだ。予定よりも道程が順調だったので、空き時間が出来てしまったらしい。

「どうしましょう……」

「ここで待つてるよりは、時間決めてそれまでは自由時間つて事しない？」

確かに、待つには時間が長く掛かるかもしれないし、色々施設はあるという事だからそれまで自由に見て回るのは良い案かもしれない。

そうと決まると、一行はそれまで何をしようかとあれこれと考え始

めた。

「ここ、結構あつちじゃ見ない服売ってんだよな……ちよつと見てみっか」

「悠美先輩、あつちに海があるみたいですよ。ダンスの動きも見て欲しいし、行きませんか？」

「あつ、ちよつと、めぐみつたら……」

「ねえ、走って回るのは難しそう？」

「ちよつとそれは……駄目みたいですね……。じゃあ、私はこの子連れてこの辺りを散歩していますね」

「そっか、じゃあね」

そんなこんなで、慎が近くのトイレに行つて戻る頃には既に他の皆の姿は無かった。

周囲を見回すと、この近くを歩いていると言っていた叶鳴の姿も、成井が旅行先にも連れて来た飼い犬らしい姿も無い。皆、思い思いに過ごしているようで、慎は自分はどうしようか、と思案を巡らせつつも取り敢えず歩き出す事にした。

ここ、沖奈市という街は見た所、綾凧市とそう変わりない規模の街に見える。綾凧市よりも高層の建物が少なくらいか。

特に何か目的意識も無く、ぶらぶらと進めた慎の足は潮風に誘われてやがて海辺まで辿り着く。海近くの看板には、七里海岸、と記載されていた。

本格的な海水浴シーズンではない為か、海岸沿いの道路を歩き交う車は少なく、海辺にも人は居ないように見える。もう少し目を凝らすと、遠目にめぐみと悠美の姿が見えた。

めぐみと悠美、二人は海辺で座りながら何か話しているようだ。そういうえば海に行こう、と一旦解散する前にめぐみが悠美に言っていた気がする。

ここからは会話は聞こえない。聞かない方が良さだろうし、今は下手に話し掛けない方が良さだろう。慎はそう思って、二人には声を掛けずに砂浜に出ながらも一人ぼんやりと海を見つめた。

波間は穏やかだ。太陽の光を受けて、海面が眩しく輝いている。海

独特の潮っぽい匂いが鼻腔を攪り、海風が柔らかく髪を撫でていった。

天気も良くて、海を眺めるには絶好ともいえるだろう。ゆらゆらと揺れる波間に、思考までが何処かを揺蕩う感覚がする。

「……昔も、海に行った事あったよな……」

そう、ずっと昔。まだ慎が幼くて、両親も居て、綾凧に家族皆で住んでいた頃。

あの時に見た海は、もつと寒くて、それにもつと赤く——……視界一面に、鮮やかな赤が広がって、それから。

——それから、どうなった？

誰とも、何とも分からない奥底からの囁きが聞こえる。誰かが呼んでいる、叫んでいた。赤く紅く、あの時に、あの場所で飛び散ったのは。

ぶわり、と身体中の穴という穴から冷や汗が噴き出す。自分の心臓の音が煩い。全身が震え、上手く呼吸が出来ずに喉が引き攣る。足下がぐらぐらと揺れる。否、揺れているように感じているのは足下だけではない。頭も、目の前も、覆い隠していた何かが音を立てて剥がれて更にそこに隠れたもつと大事なものが暴かれてしまうようで。

あの時もただただ頭の中が一杯になって、それは赤い色と同時に引き剥がされたのが——

「——お手上げ侍！」

「うわあぁっ!?!」

前触れも無く唐突に目の前にじゃあくな何かが現われて、慎は思わず叫び声を上げて尻餅を付く。

勢い良く砂浜に着地した尻が痛みを訴えつつ混乱した思考のまま何事かと顔を上げると、そこには湊と美奈子が立っていた。

「立てる?」

混乱状態で湊と美奈子を見上げる慎に対し、湊が手を差し出す。

静かにこちらを見つめて来る湊と美奈子の視線を受け、慎が漸く冷静さを取り戻すとまだ煩い鼓動を感じつつも湊の手を借りて立ち上がった。

「あ、ああ……悪い。助かる」

ついさつきまで、自分は何を考えていたのだろう。何かを考えていた気もするが、もう思い出せない。服をじんわりと濡らした何かでの汗も既に乾き始め、今は僅かに頭痛の名残のような感覚があるだけだった。

寄せては返る波のように引かれる微かな違和感は残りながらも、分からないものは分からずに軽く頭を振って気にしないように努める。ちなみに、したたかに打ち付けた尻はまだちよつと痛かった。片手で尻餅を付いた際にボトムスに付いた砂を払いながら、慎は改めて湊と美奈子を見る。

「えーと。……何持つてるんだ？」

「ジャアクフロスト。……のぬいぐるみ」

「釣り竿。貸してくれるっていうから」

ジャアクフロストというらしいぬいぐるみを抱えて答えたのは美奈子で、釣り竿を持ちながら答えたのは湊。

尻餅を付く前、目の前に何かじゃあくなフェイスが見えた気がする。あれは美奈子が持っていたジャアクフロストのぬいぐるみで、不意打ちのドツキりに掛かったのだな、と慎は自分に起こった事を大分遅れて理解した。

びつくりした。何も驚かせなくとも良いだろうに、と慎は思うが、同時にそんなにぼんやりしていたように見えたのだろうか、とも思う。

「というか、今まで何処行ってたんだよ」

釣り竿を持っている湊は、この場所が海だという事を考えるに多分その辺で釣りをしていたのだろう。実際、湊は釣りを、という言葉少なな答えを返して来たので、美奈子の方はと問いを向ける。

慎から問いを向けられた美奈子は緩やかな瞬きの後、抱えたぬいぐるみと共に軽く首を傾げた。

「ゲーセン。三体取れなかった」

「いや三体も要らなくないか？」

「三体要求された時の為に」

「だから普通三休も要らなくないか？」

保存用とかそういう類なのだろうか。湊までやたら真剣に頷いているものだから、慎は自分の感覚が間違っているのかという気さえして来る。

そんな風にいつだかに見たジャックフロストよりもワルな顔をしたぬいぐるみを眺めていると、美奈子が慎へ示すように抱えていたジャックフロストを軽く掲げた。

「要る？」

「えっ」

「お土産」

意味を理解するまで、数秒掛かった。

お土産。誰が、誰への。誰が、はこの場では間違いなく慎。ならば誰へ、は、と思考が巡って、はっと慎は我に返る。

思い浮かんだのは、間違いなく兄と弟の事だった。

「……いや、いい。洵だけじゃなくて兄貴の分もあるし、折角なら自分で選びたい。でもありがとな」

「そっか」

今此処で土産物を探しに行くのは時間的に難しそうだが、温泉旅館のある所でも土産物のひとつくらいは扱っているだろう。そこで、何か探してみよう。兄の諒が喜ぶ様な想像も出来ないし、弟の洵もあれはあれで結構評価に厳しい所があるから、慎のセンスではあまり自信は無いが。

気を遣わせてしまった事に謝罪を込めつつ慎が礼を告げると、美奈子は気にした風も無く首を振る。そうして「置いておくの？」「少しの間だけ」と美奈子と言葉を交わしていた湊が、慎と湊自身が持つ釣り竿とで視線を行き来させていた。

「……お土産……」

「それで手に入る土産はあげるのも躊躇うし貰うのも困るからやめような」

やがて先にチェックインを済ませて来た戌井が戻って来て、一行は沖奈市から再び温泉旅館へ向かう。

温泉旅館があるという市は途中で降りた沖奈市の近隣に位置している。沖奈市から山を越えた所に稲羽市いなばと呼ばれるその街はあり、綾凧市や沖奈市よりも小規模の市のように見えた。

「あれ？ 有里達、まだ来てないのか？」

温泉旅館に着いてから、旅館内の土産コーナーで兄と弟への土産を選んで来た慎は案内された部屋へ戻るとまだ揃わない姿に声を上げる。

湊と美奈子は、稲羽市に入って少しした所で途中で車から降りている。湊が沖奈市で釣り竿を借りたらしい人物は稲羽市に住んでいるとかで、返す時は稲羽市まで来て欲しいとの事だった。なので湊と美奈子以外の六人は先に温泉旅館に来た訳なのだが、陽が暮れ掛けた頃になっても湊と美奈子は旅館へは訪れていなかった。

「大丈夫でしょうか……迷っていたりとか……」

「市内じゃ旅館はここしかないから、場所が分からなくても誰かに訊いたら分かりそうなんだけどね。降りる時も大丈夫って言ってたし」
慎と共に一旦旅館の部屋から離れて戻って来た叶鳴が心配そうに呟き、室内ですっかり寛いでいる様子の戌井がのんびりとぼやく。

稲羽市内唯一の旅館であり、ふくびきの賞品になるくらいにはそこそ有名ならしいこの場所は、地元民ならほぼ皆知っているようなものらしい。ここに来る途中に住民らしい人の姿はあまり見掛けなかったが、全く人が居ないという訳でもないから湊と美奈子ならば適当に誰か捕まえて場所を尋ねそうな気がする。

否、そもそも車を降りる時に大丈夫と言ってた上に、方向音痴という訳でもなさそうだし———と思つた所で、ふと慎の頭に疑問が浮かぶ。

あの時の大丈夫、は、「どの意味での」大丈夫を示していたのだろうか。単純に場所は把握しているから大丈夫という意味だったのか、それとも別の意味か。思えば、稲羽市に入った辺りから、美奈子が何だか落ち着き無さそうだったように思う。あれは単に旅館に近付いて来たから、期待やらで落ち着きないのだろうと自分も少し浮かれていた。なのでそう判断してしまつていた。

もしかして車酔いとか、少し具合を悪くしてしまっていたのかもしれない。湊が途中で降りると伝えて来たので、気に掛けるまでの時間も足りなかった。

「もう直ぐ夕飯時だし、気になるよな」

「何の話？」

「だから、有里達がまだ来てないから——って、うわっ！ 遅かったじゃないか！」

「色々見てて」

いつの間に。今さつきか。振り返った先に話題にしていた湊と美奈子が立っていて、慎は思わず飛び退く。

まだ戻って来てないから心配だ、と話していた人物達が普通に話に入って来たら、驚いたって仕方無いだろう。何か知らせてくれたら良かったのに、と思えども、つい少し前に慎と叶鳴が部屋に戻ったばかりでもあったので出入り口は開いたままだ。湊と美奈子からしたら、知らせるも何も無いのかもしれない。

「でも、良かったですね。遅くなったらどうしようかと話していましたから。それで、ええと……」

安堵に胸を撫で下ろすような仕草をした叶鳴が、湊と美奈子を見て次は困惑で口籠もる。

叶鳴がつい戸惑ってしまったのも無理は無い。部屋に来た湊と美奈子、その口は動いて——というか、明らかに何か食べていた。

「……何食ってんだ？」

「牛じゃないビフテキ」

「それビフテキじゃなくない？」

「雨の日特製肉丼も食べてみたかった」

「夕食これからだけど!! まだ食べる気!?!」

色々見てたとは答えていたが、色々食べ歩きもしていたらしい。

どうやら杞憂に終わったようで何よりだが、そんなに色々食べて夕食は大丈夫なのだろうか。否、大丈夫な気がする。何ならお代わりまでしそうな気もした。

胃袋への心配も杞憂に終わりそうな気をひしひしと慎が感じてい

ると、ピフテキ串を食べ終えた湊と美奈子が慎の方へ視線を向ける。慎が怪訝に眉根を寄せると、その視線が少しだけ落ちた。

「お土産、買った？」

「あ……うん。喜んでくれるかどうかは分からないけどさ」

湊と美奈子の視線の先には、慎が旅館の土産物コーナーで買った土産がある。

土産に選んだのは、豆絞りとおまもり。染物がこの稲羽市の伝統工芸品のひとつでもあるらしく、選んだ豆絞りもおまもりの布地もそれを扱ったものだ。おまもりに関しては一緒に土産物コーナーを見ていた叶鳴も興味を持ったようで、慎は叶鳴にも色違いのおまもりを買って渡していた。

そんなこんなで全員揃って暫し部屋で寛いでいると、「失礼いたします」という声と共に着物姿の女性が入って来た。

艶やかな黒髪に、雪のように白い肌。楚々とした所作は日本人形か、まるで大和撫子そのものよう、そういえば若女将が美人だという所でも有名らしいよ、と車内で話していた戌井の言葉を慎は思い出す。

着物姿の女性は部屋の中に居る皆を見回すと、丁寧且つ深々と頭を下げた。

「本日は、この天城旅館をご利用頂き誠に有難う御座います。私は――」

「……雪子ちゃん？」

女性が自分から名乗る前にぽつりと呟かれた言葉に、女性も含めて皆の視線が声を漏らした方へと一斉に向く。

小さくも響く声を上げたのは、こちらも少し驚いたように目を丸くした美奈子だった。

「え？ は、はい、私は……この天城旅館の若女将をしております、
天城 雪子です」

「えっ、知り合いなのか？」

言葉に詰まりながらも肯定する女性、雪子と美奈子を交互に見ながら慎が問うと、美奈子が何かはつとしたように息を飲んでから少し目

を逸らした。

「……随分前に、泊まった事があって」

「お客様でしたか……申し訳ありませんでした。再度のご利用、有難う御座います」

「ううん」

申し訳無さそうに謝罪する雪子に美奈子が首を横へ振るのを眺めながら、慎は稲羽市に入った時の美奈子の様子を少し合点が行く。前に来た事があったのか。それなら行く時に話してくれても良いような気はするが、随分前にと言っていたから、詳しい所までは覚えていなかったのかもしれない。

気にしてないから大丈夫、と言いなながらもそれきり口を噤んだ美奈子とそれを黙って見つめる湊が何故か気に掛かりつつも、慎達は若女将の雪子による旅館やこの稲羽市についての話に耳を傾けた。

「――泉質は酸性ラドン泉。疲労回復、筋肉痛緩和、冷え性改善等……是非とも当館自慢の温泉を堪能下さい。ただし、露天風呂は男女で入浴可能な時間が異なっておりますので、お気を付け下さい」

付け足された最後の注意に、へえ、とほとんどの者が相槌を打つ中で、湊と美奈子がやたらと神妙に頷く。

「くれぐれも間違えないように」

「間違えたら処刑だね」

「だから何で処刑とかそんな物騒な事になるんだよ」

7：戦車（2）

影時間にしては遅く、夜明けにはまだ少し早い。

招かれるままに意識を此岸に戻すように目を開けると、敷いた布団の傍らで綾時が湊と美奈子を覗き込んでいた。

「早く行った方が良い」

何を、と訊く前に、綾時がそう告げる。

明るくなるには早い時刻の気温はやや低く、肌寒い。行儀が悪いのも承知で浴衣を脱ぎ捨て、簡単に着替えを済ませてから部屋を出る。この旅館の客室はほとんど離れの為に渡り廊下から夜間用の出入り口にまで向かった所で、背後から駆けて来る音に湊と美奈子は振り返る。そこには、慎、拓郎、めぐみの三人がこの時点で既に息を切らせて走って来ていた。

「有里……!?!」

「どうしたの？」

問われる前に、逆に問い返す。質問する間にも、外へ出る準備の手と足は止めない。

先んじて問いを向けられた三人はお互いに顔を見合わせた後、些か返事に迷うように戸惑いがちに声音を落とした。

「それは、その……」

「……何だか呼ばれた気がしたような、つてか……」

「そ、それより！ 悠美先輩が居なかったの！ 何だか胸騒ぎがして……」

不安気に声を上げたためぐみの言葉に、湊と美奈子の表情が同時に強張る。

「分かった」

「一緒に探そう」

所持品は最小限に。靴を履いて外に出ると、外で柱に繋がれた老犬が緩く脛を開ける。

白い体毛は歳経た為にやや色褪せて、落ち窪んだ眼が今はじつと湊と美奈子を見つめていた。

「……お前はここで待っていてくれ」

伏せた老犬の目線と合わせるように屈み込み、短くそう告げる。

時間は等しく流れても、その感じ方や与える影響はそれぞれ違う。それが人と犬とでは、違いも尚更だろう。

小さく告げた言葉に老犬はクウン、と一鳴きし、瞼を閉じる。まるで分かっている、と言っているようで、それが微かな寂寞を伴いながらも嬉しかった。

「悠美先輩、何処に行っただら……」

「とにかく、手分けして探してみようぜ」

「じゃあ、俺はこっちの方を探してみる。見つかったら連絡するって事にしよう」

何処に居そうかという心当たりも無く、人数が居るのなら周辺を手分けして探すのが一番だろう。慎、めぐみ、拓郎がそれぞれ別々の方角に向けて走り出し、湊と美奈子も同じく悠美を探すべく動き出した。

とはいっても、湊と美奈子も悠美が行きそうな場所の見当が付いている訳ではない。故に手始めに、湊と美奈子を叩き起こした存在へ心中で問い掛けた。

『残念だけど、僕にも分からない。ただ、死に向かう気配を感じたから』

綾時にも場所までは分からない、という答えを聞きながら、同時に告げられた言葉に焦燥が高まる。

死に向かう気配。つまりそれは、死にたいという意識の表れ。悠美が死のうとしているという事だった。

早く止めなければ。綾時が死に向かう気配、と言うのなら、まだ死に至ってはいない。まだ間に合う。心の中の『死』を思い、故に焦りばかりが募りそうな自らを制する。

慎、拓郎、めぐみが探しに向かった方向とは別方向、ちょうど商店街がある方向へ向かって湊と美奈子は悠美の姿を探す。

まだ夜明け前という時間帯の為か、商店街に人の気配は無い。誰か、住民を見つけて尋ねるのも難しそうだ。どの店もシャツターが下

りている。旅館に向かう前に色々見て回った時にもここには立ち寄ったが、その時もシャツターが下りた店は少なくなかった。

この辺りには居ないのだろうか。他の場所を探した方が良いのかもしれない。一旦、何処か見晴らしの良い場所で、と湊と美奈子が周囲を見回した所で、物陰から何か顔を出したのが見えた。

商店街の中にある神社の一角。鳥居の柱に居たのは、こがね色の毛並みにピンと立った耳、赤の布地にハート柄の前掛け、左目辺りと右目の上辺りに傷のある――

「……キツネ?」

ちよつと目付きの悪いキツネだった。

周囲に、他の人や他の動物の姿は無い。この一匹だけだ。山もそれなりに近いから野生だろうか、と思うものの、それなら前掛けなんてものはしていないだろう。飼いキツネ、というのも聞いた事は無いが。

現われたキツネは鳥居の柱の陰から、湊と美奈子の方へ向かって来る。警戒するような様子は無い。随分と人慣れしたキツネらしい。

どうしたのだろう、と思えども理由が分かる訳もなく、ただ目の前に行儀良く座って見つめて来るキツネに湊と美奈子は膝を折った。

「あのさ、人を探しているんだ」

「髪の毛が肩ぐらいで、私達と同じくらいの女の子。ここの人じゃないの」

どうしてこんな行動に出してしまったのかは正直、湊と美奈子でもよく分からない。ただ、何となく――否、同じように思えてしまったからだろうか。

傍から見ると動物相手に真面目に話し掛けているという奇妙な状況で、しかしそれを指摘するような人間は周囲に無く。静かに湊と美奈子の問い掛けを聞いたキツネが、コーンと頷くように高く鳴いた。

「知ってるの?」

「何処で見掛けたの」

言葉を重ねると、一鳴きしたキツネが湊と美奈子を再びじつと見つめる。

まるで値踏みするように、否、値踏みしている目だ。そう感じると、湊と美奈子は揃って迷い無くキツネへ一万円札を差し出す。細かいのを出すのは面倒臭かった。

キツネは目の前の一万円札へ暫く鼻先を寄せると、それを前足で押さえてから何処からか数枚の葉っぱを取り出す。そしてその少し大きめの青々とした葉を、湊と美奈子へ差し出した。

お返しか何かだろうか。取り敢えず受け取っておこう、と湊と美奈子がキツネが啞えている葉っぱを受け取ろうとすると、その内の一枚を取り損ねて葉が宙に舞った。

「あ……っ」

葉が宙を舞い、近くに落ちる。それを拾い直そうとすると、葉は風に揺られてまた少し離れた場所に落ちた。

何だか葉に弄ばれているような気分になりそうになっていると、そこで先程のキツネがまだ湊と美奈子を見つめている事に気付く。その視線に湊と美奈子がキツネを振り返り見つめると、キツネは地面と中空を遊ぶように揺れ動く葉を鼻先で示した。

「……追い掛けろって事？」

コーン、という甲高い鳴き声で答えが返って来た。

キツネの言葉は、否、他の動物の言葉も解せる訳ではないが、多分肯定だろう。

思案は刹那にも満たず、湊と美奈子は領きの代わりにキツネの頭を撫でる。何処か心地良さそうに目を眇めるキツネに暫し表情を緩めた後、再び身体と目は地面と低空で遊ぶ葉に向いた。

「ありがとう」

礼を紡ぐと共に、風に揺れる葉を追い掛けるように走り出す。背後から、もう一度キツネの鳴き声が聞こえた。

葉は夜風に揺れ、湊と美奈子を誘う。一つ所に留まらず、しかし湊と美奈子が追い付けない程に遠くにもいかず。まるで意思を持っているかのようだった。

商店街を抜け、そこから何処まで走ったのだろう。分からない。しかしそこまで長くは走っていないと思いたい。まだ夜は明けられない

がらも少しだけ夜闇が薄くなつて来た頃、少し離れた川沿いに出た所で葉が大きく舞い——それに視線がつけられた先に、人の姿が見えた。

コンクリート製の橋の上。道路に面した高欄を越えてそれを背にし、直ぐ真下に流れる川をぼんやりと見つめる悠美の姿があった。

——飛び降りるつもりだ。

行われようとする意味を理解し、みるみる内に心臓から血が引いていくような錯覚が襲う。

早く止めなければ。そう思い、更に走るペースを速めた所で湊と美奈子が走っていた方向とはそれぞれ別の方向から、慎と拓郎、そしてめぐみが橋に居る悠美に向かっていくのが見えた。

「悠美先輩！」

息を切らせためぐみが叫ぶが、悠美にその声が届いているような様子は無い。虚ろに、頼りなく高欄を背に立つ悠美は、身体も魂も生から離れようとしているようだった。

一刻の猶予も無い。気ばかりが急きながらも足を止めぬ一方で、湊は念の為にと持参していた召喚器を腰から引き抜いた。

「ヤタガラス！」

喚び出したのは、太陽のアルカナに属する三本足の鳥。付け替えた仮面から、スクカジヤを最も悠美に近かつたためぐみに掛けた。

「え!?! な、何!?!」

「——茅野! 急ぐんだ!」

自身に掛けられたものが何なのかは分からなくとも、何がしかの變化は感じ取つたのだろう。おろおろと当惑するめぐみへ、慎の鋭い声が響く。

思わず慎の方を見ると、慎は言葉無く頷きを返す。めぐみも慎の叱責にも似た声を聞いて我に戻ると、強く地面を足で蹴った。

橋の高欄を越え、めぐみが悠美へ手を伸ばす。だがめぐみが悠美の腕を掴んだ時には、悠美は橋から離れて川へと身を投げていた。

「茅野! 田坂先輩!」

悠美が川へ目掛けて身を投げ出し、その腕を掴んだめぐみも上から下に落ちていく重力に引かれて川へ落ちていく。めぐみは咄嗟に悠

美の身体を自分の方へ引き寄せたものの、落下に逆らう事までは出来なかった。

川はそこまで大きくもなく、天気も良かったからか増水もしていないし流れもそこまで急ではない。だがそれは気休め程度にしかない。それが無事を示すものであるとは、誰の、何の保証も無いのだから。

「クシミタマー！」

二人分の重さが落下に速度を上げて、川目掛けて真つ逆さまに落ちていく。それが水中に消える前に、川面に接触する前に美奈子はペルソナによる強風の魔法を放った。

ブースタ付きの強風。シャドウを容易く切り裂く威力も持つ風はしかし、今はそれが目的ではない。

巻き上がった風が重力に逆らい、川へ落ちて行こうとするめぐみと悠美の身体を捕らえて川面から岸へと押し出した。

「茅野、田坂先輩——っ、うっ……！」

「いつ、てて……」

風によって浮き上がった身体は川から地面へ、落下先から着地先へ変わる。やがて風の力が失われると少しだけ滞空した後、再び重力の支配を受けて下に落ちていくめぐみと悠美の身体を橋下の川辺まで駆け寄った慎と拓郎が受け止めた。

無事に受け止めたは良いものの少々勢いが強過ぎたからか揃ってしたたかに尻を地面に打ち付けたらしい慎と拓郎の呻き声を聞きながら、めぐみは悠美を強く抱き締めた。

「悠美先輩！」

「……めぐみ……っ？」

落下の際に気を失ってしまったらしい悠美の目が開き、緩やかな瞬きと共にめぐみを見る。

声も小さく、いまだ何処か茫洋としている悠美に、しかし怪我も無く間近に伝わる呼吸や体温にめぐみは益々抱き締める腕の力を強めた。

「駄目……！ 駄目だよ、悠美先輩、だって、そうしたら、私……！」

口から零れる言葉は上手く文にならない。ただただ感情ばかりが先行して、頭の中で纏まる前に溢れる思いが堰き止められずに流れていく。間近にある悠美の顔が、めぐみには潤んで揺らいで見えていた。

「だってまだ、話したい事一杯あるのに！ 新しい部員も入りそうで、こうして一緒に色々過ごして、だから、だから……！」

沢山伝えたい事がある筈で、けれども何から言って良いのか分からずに結局まともな言葉にはならない。後半の方はもう、嗚咽に近かった。

「めぐみ……」

まるで迷子のように取り縋って泣くめぐみを、悠美は言葉少なく見つめる。

これまで全力で走って来たのだろう。身体は汗ばんでいて、呼吸も鼓動も荒い。漸く陽が昇り始めた時間において些か冷えている身体で、けれども抱き締める腕の力の強さと温かさ、それ以上に五感を越えて伝わる感覚に悠美はそつとめぐみの背を撫でた。

「……ごめん。めぐみ、ごめんね……」

それは泣きじやくる妹をあやす、姉のように。

川原で抱き締め合っためぐみと悠美に拓郎が自分の上着を脱いで羽織らせてやるのを視界の端で捉えつつ、湊と美奈子は川岸よりも離れた場所に立つ人物に声を掛ける。

「ねえ、何やってるの」

慎や拓郎、めぐみや悠美達が居る川岸と、湊と美奈子が居る場所とは些か距離が離れている。姿は視認出来るが、声までは聞こえない距離だ。

故にこの距離で、向けられる問いが聞こえている人物は他に一人だけ。

静かに、沈黙を許さない言葉を向けられた目の前の人物——戌井は僅かに肩を強張らせながらも、その面に軽薄そうな表情を浮かべて片手で頭を掻いた。

「……ああ。起きたら皆居ないものだから驚いたよ。全く、最近の若

者は起きるのも早——」

全て言い終えられる前に。

湊は召喚器のグリップで戌井がもう一方の手に持っていたビデオカメラを叩き落とし、美奈子が地面に落ちた拍子に外れたビデオカメラの記録媒体を踏み潰す。

一体、いつからそこに居たのか細かくは分からない。悠美を助ける方に必死だった。なので気付いたのはめぐみと悠美が慎と拓郎によつて受け止められた直後くらいだが、ビデオカメラを持った様子からそれより少し前には既に居たのだろう。

ほぼ一瞬で行われた一切躊躇いの無い行動に戌井が目を見開き、面から軽薄そうな色が消える。代わりに向けられたものを真っ向から見据え、再び問い掛けと呼び掛けを向けた。

「何やってるの、って訊いているのだけど」

奥底のさざめきに、知らぬ振りの仮面を着けて。

——ねえ、乾^{けん}。

8：正義（1）

授業の終了を知らせるチャイムが鳴る。

程良く滲んだ凝りと疲労感に軽く伸びをした後、慎は他の生徒達と同じく帰り支度を始めた。

「なあ、この間のテストの紙、知らねえか？」

「はあ？ 返却の時に普通に受け取ってただろ？」

「この辺にあつた筈なんだけだよ……」

教科書を鞆に入れてしているとそんな事を訊いて来る拓郎に、慎は怪訝に眉を寄せる。振り返った先に居た拓郎は、何やら鞆の中や床を探すように身を屈めていた。

慎も一応周囲の床やらを見回してみるものの、テスト用紙らしきものが落ちている様子は無い。再びまだテスト用紙を探しているらしい拓郎へ目を向けると、ちょうど叶鳴とめぐみ、湊と美奈子が近付いて来た。

「神郷君も榊葉君も、どうしたんですか？」

「ああ、拓郎がこの前のテストを何処かにやっちゃったみたいでさ。探しているんだ」

問い掛けに答えると近付いて来た四人も暫く辺りを探してみたものの、これといった収穫は無く揃って首を横に振られた。

「ありませんね……」

「間違えて捨てちゃったんじゃない？」

「いやそんな筈ねーって……捨てたんならまだしも、もし誰かに見つかったらハズいだろ」

「そう？」

「別に」

やや気まずげに頭を掻く拓郎の言葉に対して、すげなく返す湊と美奈子に思わず慎は何とも言えない気分になる。湊と美奈子は転校して早々のテストから学年トップを叩き出していた。きつと比較してはいけないのだろうと思う。

他の者達も何となく思考は同じだったのか、呆れたような空気が流

れ出したので些かわざとらしくも咳払いをして気を取り直す。

「そ、そういえばさ。この所、学校内の設備点検多くないか？」

新たな話題として挙げたのは、学園内で行われている設備点検。この所、学園内のあちこちで点検中だとかで立ち入り禁止になっている場所が多い。学園というハコモノである以上、定期的なメンテナンスが必要だというのは勿論分かるのだが、それにしてもこの所立て続けなのではないのだろうか。少し遠目に見ただけでも管やらが奇妙に曲がっているのもあり、つい疑問に思ってしまった。

「まあ、確かに……ここってそんなに古くないのよね」

「じゃあやつばアレだろ？ 幽霊の仕業って噂」

にやり、と何やら訳知り顔で囁くように言う拓郎の言葉に、数秒沈黙が流れる。

幽霊。口の中で単語を転がすと、慎は自分でもやつぱり何とも言えない顔になってしまふのが分かる。他の皆は、と思つて反応を伺つてみると、めぐみは明らかに呆れた半目になっているし、叶鳴もきよとん、と不思議そうな顔になっている。湊と美奈子は何とすら思つていないような、スンとした無表情だった。

「えつと……幽霊、ですか？」

暫く流れた沈黙におそろおそろと叶鳴が問い返す。幽霊、という言葉葉に怖がつているというよりも、戸惑いやよく分からない、という方が正しいような反応だった。

「そうそう。色々と言われてんだぜ？ いじめを苦にして自殺した女生徒が夜中の学校を彷徨つているとか、昼間なのに疾走する人体模型や白骨標本とか」

「人体模型と白骨標本は僕」

「部屋に持つて帰つちやつてたなあ」

「はあ」

いや何か変な事言わなかったか。湊と美奈子がおかしな事を言うのは時々ある事だが。

唐突に飛び出した妙な発言に他の三人の視線も湊と美奈子に向き、しかし向けられる視線をもともせず湊と美奈子は言葉を続けた。

「確かめてみる?」

「いや何を」

「だから、幽霊」

「肝試しってヤツだな! いいじゃねえか、今夜早速行ってみようぜ」
幽霊、確かめてみる。何を。ここの所の学園設備のメンテナンスの多さが本当に幽霊の作業なのか、それともそもそも幽霊が居るのかどうかを確かめてみるという意味なのか。

色々な意味で意味がよく分からず、こてん、と首を傾げている湊と美奈子をただただ眺めてしまった慎の一方で、拓郎が乗り気に声を上げる。先程までテスト用紙を探していた筈なのだが、それはもうすっかり意識の外のようだ。

気も早くあれこれと算段を付け始める拓郎に少し押されつつも、慎も何だかんだで些か浮き立つような気分になっているのを自覚する。

八十稲羽の温泉旅館に行っていた間、洵は偶々休みだった諒と過ごしていたらしい。洵から聞いたのみだが、一緒に映画を見に行つたとか、お昼は牛丼を食べたとか——兄の諒と弟の洵はそれなりに仲良くやっていたらしい。少し嬉しそうだった洵に微笑ましい気持ちになる一方で、もやもやとした気持ちも抱いてしまった。何だか仲間外れにされたような、まるで拗ねているような気分で、思っていたよりもまだまだ自分は子供なのかもしれない、と慎は思う。だから肝試し、なんていう幼稚にも思える事にもつい楽しそうだという気持ちがちよつと浮かんでしまったのも、自分はまだまだガキっぽい証拠なのだろう。

「じゃあ、洵にも誘ってみるか」

「ええっ、神郷君まで?」

「まあまあ。でも、楽しそうですね」

賛意を示す慎にめぐみが驚きに声を上げ、叶鳴が宥めながら穏やかに微笑む。

それを湊と美奈子が眺めつつ、夜の学園に集まろうという事になったのだった。

8：正義（2）

そんなこんなで、夜の凧の杜学園。

陽も沈んで些か肌寒くなって来た外気に一応着込んで来た上着の襟元を直しつつ、校門の前で他の者達が集まるのを待つ。

昼間は多くの生徒達で賑やかな学園だが、今は夜。当然、授業時間外でもあるので昼間の喧噪とは程遠く静かなものだ。外の街灯も控えめで、空を見上げると星がよく見えた。

「あ、来た」

「こんばんは」

「こんばんは、有里先輩達」

集合予定時間近くになると、段々と面々が集まって来る。特に遅刻するような面々でもないので、ほぼ集合時間になると同時に全員が揃っていた。

「よ、よよよし、行くか！」

「何で言い出しつpegが及び腰になってんのよ」

「イヤ別にそんなんでもねーし！ 単にちよつと冷えるからだつて！」

確かに昼に比べると少し冷えるが、ガタガタ震える程でもないと思う。

学園に入る前から何やら腰が引けている拓郎と、それを叱咤するめぐみに少し違うも懐かしい気分になっていると、そこでちようど慎と目が合った。

「有里達、落ち着いているんだな」

「別に。変わり映えしないし」

「変わり映えって何だよ……」

見た所、迷宮に変化する訳でもないし、シャドウが出て来る事も無い。夜の学園というシチュエーションも別段新鮮みは感じない。タルタロスは月光館学園が影時間中に変化したものだったから、夜に学園に行くという事自体は片手で数え切れない程なので既に慣れ切つてしまっていた。

「まあ……でも確かにちよつと冷えるし、入るなら早く入った方がいいかも」

「大橋先輩はどうして此処に？」

「あつ、そうですよ！ 舞子先輩まで……」

何故かどんどん学園から離れていこうとする拓郎を冷めた目で見ていためぐみが、洵の問い掛けによつて思い出したように声を上げる。

この場に居るのは湊と美奈子、拓郎にめぐみ、叶鳴に慎。それから慎が誘った洵と、舞子。

洵については慎が話して誘ったからだと分かるが、何故舞子まで。その疑問を向けられると、舞子はちよつと困ったように笑って肩を竦めた。

「ほら、めぐみってば部活の時にこの事話してたでしょ？ 私も気になって……悠美からも、めぐみの事を気に掛けてあげてって言われているし」

「悠美先輩まで……」

言葉を失つためぐみの頬が、仄かに赤くなる。続く言葉は無く、代わりに目の前でぎゅっと手を握り込んだめぐみに舞子は微笑みながらめぐみの肩を柔らかく叩いた。

「つーかさ、どうやって入るよ？ 閉まってんじゃね？」

今は登下校でも授業時間でもない夜。確かに言う通り、普通は施錠されていてもおおかしくはないがそれを言うには発言主がよろしくない。

言い出しつぺの癖に今更帰る隙を伺っている拓郎を横目に、湊と美奈子は校門に手を掛ける。軽く力を入れると、少し重い音を響かせながら校門が開いた。

「あれ？ 開いてる……？？」

「じゃあ入ろう」

「マジで入るのかよ!？」

「なら帰ったら」

「そ、そうは言ってねえだろ！」

そもそも肝試しというなら校舎内に入らないと話にならないのではないか。そろそろ外に居るのも少し寒くなつて来たので、取り敢えず屋内に居たい。

さつきと校舎内に入った湊と美奈子に続く形で、他の面々も校舎内に入る。辺りは暗い。当たり前前だ、今は授業中でもないのだから電気が付いている筈も無い。

「特に何も無さそうですけど……」

「そりゃあね……あつ、でも見てここ、点検中つてなつてた場所だよね？」

めぐみの呼び掛けに持って来ていたハンディタイプの懐中電灯を向けると、空調の配管部が奇妙な形に曲がっているのを見つける。

あまりじつくりと校舎内を見た事は無いが、こんな風ではなかった筈だ。流石に、こんなに奇妙にねじれたような状態の配管があったら少しくらいは意識を向ける筈。デザインの的なものでもなくねじ曲がった配管の接合部から亀裂が入っている所からしても、元々の形状ではないのだろう。

「何だこれ……どうしたらこんな風になるんだ？」

怪訝そうにまじまじと配管を見る慎の言葉に、湊と美奈子は確かに、と頷く。

明らかに経年劣化ではない。一方で、人為的に依るものとも思えない。少なくとも、こんな室内で取り外しもせず、専用の大型の機械も無さそうな場所で出来得るものではないだろうと想像に難くなかった。

だが何が原因に依るものか、と言われても、全く分からない。

故に目の前の奇妙にねじくれ曲がった配管をもつと調べてみよう
と配管へと手を伸ばした所で、後ろから鋭く声が掛かった。

「——おい！　そこで何をしている!？」

「う、うわあああつ!？」　出たつ、でたあああつ!？」

「近い」

「近い」

正直、背後から掛かった声よりも間近に響いた拓郎の叫び声が煩

かったし、しがみ付かれてちよつと鬱陶しかった。

うっかり間髪入れずに眩きを漏らしながらも一行が声のした方へ振り返ると、そこには一人の男性が立っていた。

「ごっ、ごめんなさい！ えつと、あの……あつ、小田桐……先生？」
「君達は……」

咄嗟に謝つたためぐみが、声を掛けて来た人物の姿を視界に認めて少し怪訝そうに首を傾げる。

声を掛けて来たのは、この風の杜学園で教師をしている小田桐だった。

小田桐は手持ちの懐中電灯で一同の姿を確認すると、些か険しく眉を寄せる。制服姿ではなかったが、多少はこの学園の生徒の顔くらいは覚えていたのだろう。そんな顔だった。

「こんな時間に何をしている。下校時間はとうに過ぎているが？」
「えつと、それは、その……」

もつともと言えばもつとも過ぎる詰問に、当然の事ながら正直に言う訳にもいかずに全員の言葉が詰まる。

しどろもどろに回答に詰まって視線を彷徨わせる生徒達に小田桐は溜め息を吐き、続いて疑義を持った目で近くにあるねじ曲がった配管と生徒達を見た。

「……まさか」

「何もしてない。出来ると思う？」

「自分で見て確かめて」

続き掛けた言葉を、音として発される前に湊と美奈子は前に立ち塞がって遮る。

状況として確かに怪しいと思われるのは仕方無いだろうが、やってもない以上素直に頷く訳にはいかない。それに、疑わしいのは夜中の学校に居る事くらいだ。一同が持つて来たのは財布と携帯、懐中電灯くらいなもので配管やら他の学校設備をどうにか出来る用具など持つて来ていなかった。

小田桐を真っ向から見据える湊と美奈子に、目を見開いた小田桐だけでなく後ろからもざわめく気配を感じる。そうして数秒そのまま

になっていた所で、不意に後ろに居た慎が声を上げた。

「……洵？ ……洵が居ない」

「えっ!？」

振り返って確かめてみると、確かにそこに洵だけが居なかった。

「ええっ!?! ちよつ、ちよつとさつきくらいまで一緒に居たよね!？」

「一体何処に……」

「他にも誰か居るのか?」

「俺の弟なんです。中等部の生徒で……洵！ 何処に居るんだ!？」

皆で洵の名を呼んでみたり、懐中電灯で周囲を照らしてみたりするものの返事も無い上に姿も見えない。

校門から校舎に入る時には一緒に居たと思うのだが、それからはどうだっただろう。いまいち覚えが無い。

いつの間にか居なくなってしまった弟に顔を真っ青にする慎とそれを氣遣わしげに見つめる叶鳴の姿を数秒見つめた後、湊と美奈子は再度小田桐の方へ振り返った。

「手分けして探そう」

「え、あつ……いや……まあ……そうだな。勝手に入り込んだ件はともかく、生徒が他にも居るのならこのままにしておく訳にもいかな
い」

突然言葉を向けられた小田桐が一瞬言葉を失い、それから暫く唸った後に渋々と頷く。

探すのなら、手分けして。ただあまりバラけるのも良くないという事で、結局二つのグループ——慎、叶鳴、拓郎、めぐみの四人と、湊、美奈子、舞子、小田桐の四人という形で分かれる事になった。

「ひいひい、うわああああ……!」

「元気だなあ」

「元気だねえ」

「あれを元気で済ませていいのか?」

「めぐみ、大変そう」

元気な叫び声が遠くから聞こえて来る。

多分、という副詞を付けなくとも、あれは拓郎だ。断続的に耳に届

いて来る悲鳴に暢気に湊と美奈子が眩くと、小田桐が呆れたような視線を向けて来た。状況的にも切迫してはいないだろうと思うので、特にそう心配する事も無いと思うのだが。

今の所、いつの間にか居なくなっていた洵はこちらでは見つからない。もう一グループの方も元気な拓郎の悲鳴が聞こえているし、見つかったら連絡が来る手筈なのでまだ見つからないのだろう。

「小田桐先生は、この時間にどうして学校に？」

「学園の設備点検が続いているだろう。その関係で、教師らが持ち回りで夜間も巡回を行っている」

舞子の問い掛けに小田桐がそう答え、溜め息を吐く。

幾ら設備点検の為とはいええ、わざわざ教師らが夜に見回りを行う事などあるのだろうか。夜間に学園は入った湊と美奈子が言える事ではないと流石に自覚はあるものの、説明にしては不十分過ぎる。しかし、それは小田桐にも分かっていたのだろう。だからこそ詳細な説明まではしなかったのだろうという事も理解出来るので、敢えてそこから先は追及しないでおく。

「大体、幽霊だとかバカバカしい。大方、見間違いだろう」

「確かに、別に運んでるの隠してた訳じゃなかったし」

「ちゃんと後で堂々と返しに行ったのにな」

「ねえ、何か違う話してない？」

そもそもあれはベルベットルームの住人からの依頼の為なので、別に好きこのんでやった訳でもない。

他にも色々やったなあ、と生温い心持ちになった湊と美奈子を、舞子だけではなく小田桐までが何か変なものでも眺めるような視線を向けていた。

まだちよつと何処か遠くからの悲鳴を聞くのにもすっかり慣れ、懐中電灯で周囲や足下を照らしながら洵を探す。廊下は勿論、トイレから空き教室まで。中等部の一階の教室にも入ってみたが、やはり言うべきなのか洵の姿は見当たらなかった。

「居ないね」

「うーん……飽きちゃって帰ったとかは無さそうだけど……」

「それならまだ良いが。……全く、ふざけた噂が流行るのも風紀が乱れている所為だろう」

再び嘆息を零した小田桐が、気難しげに眉間に皺を寄せる。

「影抜きだとかいう遊びも、何処の誰が広まらせたのかは知らないが……」

「……でも、そういうのをする気持ちは分かる気がするかも。あつ、わ、私は勿論影抜きなんてしてないですよ!」

胡乱な目を向けられて慌てて否定しながらも、舞子は少し視線を落とす。吐息を零すと、僅かに空気が震えたのを感じた。

「こういう夜中に一人で居ると、何処か違う場所に迷い込んだみたいで、それが知っている世界じゃないみたいで——」

紡ぐ言葉が全て言い終えるよりも前に。

湊は舞子の前に被さるように身を挺し、美奈子は小田桐の腕を引いて頭を低くさせる。

直後、頭上の蛍光灯が砕け散った。

割れる前、消灯されていた筈なのに一瞬だけ点灯した所為で教室内が僅かな時間明るくなる。刹那の明滅の後、破裂音が響いて蛍光灯の破片が床に散らばった。

「なっ——」

「伏せてて!」

思わず顔を上げ掛けた小田桐の頭を美奈子は押さえ、

「まだ立っっちゃ駄目だ」

「え、つきやあつ!?!」

湊も舞子の眼前を手で制すると、窓際のガラスが立て続けに割れた。

蛍光灯と同様、ガラス片が辺りに勢い良く飛び散る。窓が割れた為に外から風が入り込み、冷たい風がカーテンを強くはためかせた。

蛍光灯が割れる前の不自然な明滅は一瞬のみ、あとは暗闇のまま。風も収まると、湊と美奈子は周囲を確認してから小田桐と舞子を見た。

「怪我は無い?」

「二度外に出よう」

このまま教室内に留まっているのは良くない。そう判断して視線を落とした先に見た小田桐と舞子の表情は、どうしてか二人とも同じだった。

目は見開かれ、口許は半開き。微かな呼吸に混じって言葉は無くとも何かを言いそうで、けれども紡がれるべき言葉が何なのかは湊と美奈子には分からない。

きつと、突然の事に驚いて怯えてしまったのだろう。周囲の暗さにつられて過ぎる思いをそう差し替えて、湊と美奈子は小田桐と舞子の腕を引いて一旦教室から廊下へ出た。

「中、見て来るね」

「分かった」

腰元のホルスターに手を掛けて再び教室内に入っていく美奈子に、湊は頷いて見送る。余計な事は言わない。既に心の内に在る綾時が知らせていたので、その行動の意味は知っていた。

青い煌めきは一瞬。直ぐに元の夜の暗さに戻り、美奈子も教室から出て来る。今度は美奈子から湊へ領きを寄せて来るのを確認すると、小田桐と舞子が口を開いた。

「君は——」

「……ねえ」

「凄い音がしたけど大丈夫だったか!？」

しかし、二人の問い掛けは途中で遮られる。

慌てたように口を閉ざした小田桐と舞子に少し眉を寄せながらも、湊と美奈子は声が出した方を見る。そちらには、慎と叶鳴が駆け寄って来るのが見えた。

「こっちは平気」

「いきなり蛍光灯とガラスが割れて……」

「えっ」

驚いたように声を上げる慎と叶鳴に事情を聞いてみると、あの後めぐみと拓郎ともはぐれてしまった慎と叶鳴は仕方無く二人で洵を探していたらしい。そこでこちらと同じように教室内に入った所で、突

然ガラスが割れたり辺りの物が倒れてしまったそうさ。慎と叶鳴に怪我は無いという事らしいが。

「そちらでも、同じような事が起きるなんて……」

「……地震か、局地的な竜巻かもしれない。この所の設備不良もその為だろう」

「でもっ……」

少し視線を落として首を横に振る小田桐の言葉に、慎が思わず何かを言い掛けて俯く。

地震や竜巻。そうは思えない。ただ、他に何の原因があるのか。それを言えない以上、異論を唱えても意味が無いと思ったのだろう。地震や竜巻の所為だと言った小田桐自身がそうは思っていないという事も、察したのかもしれない。

明らかに不自然な現象に対して湊と美奈子は沈黙を保ったまま、それ故に耳に届いた靴音に音がした方へ目を向けた。

「……慎兄ちゃん」

「洵！」

控えめに呼び掛けながらひよっこりと現われた洵に、慎は慌てて駆け寄る。洵も、兄の他に人の姿を認めると軽く頭を下げて近寄った。

「一人で勝手に何処か行ったら駄目だろ!? 皆探してたんだからな」

「怪我は無いですか? 合流出来て良かった」

「うん……心配掛けてごめんなさい」

流石に兄らしく叱る慎に洵もしおらしく慎や他の者に頭を下げて謝ると、新たにめぐみと拓郎とも合流する。

めぐみと拓郎の方も、慎と叶鳴の二人とはぐれてから二人で探していたらしい。もつとも、拓郎がめぐみに縋り付いているような格好になっっている事から、及び腰な拓郎をめぐみが引き摺っていたという方が正しいかもしれない。

「あー、もー、何だよー。スツゲエ音したし、やっぱゆ、ゆ、ゆうれ……」

「ちよつと拓郎! いい加減離れて……って、うわっ、ガラス割れてる!?! 大丈夫だった!?!」

「そうなんだ。俺達の方もガラスが割れたりしてさ……拓郎や茅野は

大丈夫だったか？」

「これが大丈夫に見えるかよおお……」

「ええつと……」

「情けない声出さない！ 洵君も見つかって良かった」

拓郎とめぐみは大丈夫そうだ。怪我をしているようにも見受けられない。拓郎の腰は抜けているかもしれないが。そこはまあどうでもいいだろう。多分。

「めぐみ、大変だったね……」

「……はあ。君達はもう帰りなさい。もう留まっている理由も無いだろう」

「でも、小田桐先生は」

恐らく始終あんな感じに拓郎に縋り付かれていたであろうめぐみを同情気味に眺めていた舞子が、溜め息混じりな小田桐の発言に顔を上げる。

「言っただろう、教師は持ち回りで巡回をしていると。この状況をそのままにしておく訳にもいかない。此処の処理は大人しく教師に任せて生徒は帰るべきだ」

確かに、普通は教師に見つかった時点でこの時間に居てはいけない生徒達は帰らされる所だ。それが引き延ばされていたのは、洵が途中で居なくなってしまったから皆で手分けして探す事になったからに過ぎない。全員が合流出来たのなら、もう生徒達は帰るべきなのだろう。幾ら不審な出来事が気になるといっても、一介の学生に何が出来ると言われてしまうし、事実それが正論に違いなかった。

今度は誰もはぐれないように、と揃って校舎から外へ出る。肝試しとしては些かの消化不良な終わり方だが、仕方の無い事だろう。校門へ向かいながら校舎の方へ一度振り返り、湊と美奈子をやはり何か言いたげに見つめる小田桐の方には向かず、ガラスが割れた教室の方向を確認するに留める。

それから再び前方へと向き直る前に、校舎ではない方角を見つめる洵に目を向けた。

「……大丈夫？」

何が、とは問わず、ただそう紡いだ問いに対して、

「……多分」

何が、と同じように言わぬ答えを洵が返して視線を逸らす。

その言葉と共に、誰かのテスト用紙が風に吹かれて何処かへと流れていった。

9・隠者

外は少し気温が低めなもの、日差しがあるお陰か暖かく感じる。天気も良い。天気予報の通り、傘も要らないだろう。風に乗って来る潮の匂いを感じながら、湊と美奈子は海沿いにあるイベント会場に来ていた。

ここはこの地域でも有数の観光スポットだ。この場所の名前の由来にもなっている大型帆船が海沿いに停泊しており、そこを中心として周囲には遊具やバーベキュー場、展望台も存在している。普段も多くの人で賑わうというこの場所は、今日は特に人が多く居るようだった。

「おつ、有里達！ こっちだぜ」

待ち合わせ場所にほぼ時間ぴったりに辿り着くと、既にそこには慎と洵、めぐみや拓郎、叶鳴の姿があった。

「守本は慎達と一緒にだったんだよな。一緒に来るって言ってなかったけどよ」

「ああ……洵と来る途中、道端で守本を見つけて」

「ぼうつとしてたけど、大丈夫？」

少し心配そうな慎と洵の視線を受けて、叶鳴が困ったように首を傾げる。

「ええ……めぐみさんと榊葉君に差し入れを持って行こうと出掛けた筈なのですが、いつの間にかあんな場所に……」

「差し入れ？」

「あー、朝ちよつとな」

めぐみと拓郎は午前中、他の場所で何かやっていたらしい。

他にも他愛ない話を交わしながら、一行はイベント広場に向かう。ここは公園のような場所の他、ちよつとしたイベントにも使える広場があった。

イベント広場は既に人が集まっており、結構な賑わいだ。全員、無理して前列に行こうという意見も無かったので、程良くステージ上が見える位置を探す。ベンチ席の用意はそれ程無く、特に座りたいとい

う事も無かったので落ち着いたのが運営側のテントに程近い場所になった。

「何やるんだっけ」

「聞いてただろ!? 今日、りせちーが来るつつつて!」

「りせちーつて?」

「知らないの? アイドルの…:あ、でも、確かに久々に見るかも。長い事休業してた事あるんだっけ」

聞いた事がある気がする。つい最近のような、そうでもないような。

ふうん、と相槌を打っていると、ステージ上に今日のメインであるらしいアイドルが立つのが見えた。

別段特に惹かれるようでもない挨拶を前列のファンらしき声援が交じりながら聞いていると、こちらに向かって一人の女性が近付いて来た。

「ねえ、キミ達ちよつと良いかな?」

「何ですか?」

見覚えは無い。他の者も特に知り合いという訳でもなく、近付いて来た女性を不思議そうに見返していると、女性はバッグから名刺を差し出した。

「あつ、ゴメンね。私はこういう者よ」

女性が差し出した名刺を慎が受け取り、他の者達はそれを覗き込む。

名刺には、「キスメット出版 月刊情報誌『クーレスト』編集記者・

天野 舞耶あまの まい」と書いてあった。

「へえ、こういうイベントとかにも来るんだな」

「榊葉君、御存知なのですか?」

女性が差し出した名刺を共に覗き込んでいた叶鳴が問い掛けると、ああ、と拓郎が頷く。

拓郎によると、ティーンズ向けのそこそこ人気のある雑誌らしい。拓郎のバイト先のブランド服も偶に載っているそうで、それで知っているという事だった。

説明を聞いて改めて女性を見ると、プレス用の腕章を付けている事に気付く。ステージ近くの地元ケーブル局らしきカメラマンも同じような腕章を付けていたので、女性も同じようにこのイベントの取材にやって来たのだろうか。

湊と美奈子と視線が合った女性——舞耶は、にっこりと笑みを向ける。化粧つ気は無さそうだが間違いなく美人と言えるであろう顔に引かれた、ワインレッドのルージュが弧を描いた。

「あら、ウチを知っているのね。嬉しいわ。取材といっても、ウェブ掲載の方なのだけどね」

紙媒体の雑誌の方には、あまりこういったイベントを取り上げる事はないらしい。担当の編集記者も舞耶一人だけとの事だった。

「簡単な感想をくれるだけでいいの。ああ、勿論、顔出しはさせないわ。直ぐ終わるから、ね？」

「まあ、俺達で良かったら……」

「そうですね……それくらいなら……取材の御仕事も大変でしょうし」

個人を特定するような情報は出さないという説明の上で、他の皆も揃って舞耶の取材を受ける事にする。

取材と言っても、内容はイベントについての簡単な感想と知ったきつかけの聞き取りなどで、どちらかといえばアンケートに近かった。恐らくだが、他の者達にも訊いているのだろう。読者ターゲットでもある10代が固まっていたので、多く意見を求めるにはちようど良かったのかもしれない。なので全員分でも取材は然程時間は掛からず、ステージ上で特別パフォーマンスが始まって少ししたくらいに終わる。

広場がポップ調の音楽を響かせる中、聞き取り内容を纏めた舞耶は改めてこの場に居る者達に笑い掛けた。

「助かったわ、ありがとう。それじゃ、キミ達もイベント楽しんでいてね」

チャオ、と手を振って舞耶が人混みの中に紛れて去って行く。

何処か包容力があって、まるでお姉さんのような。そんな印象を残

しながら舞耶を見送った後、一同はステージ上で行われる特別パフォーマンスへ目を向ける。

生憎と歌には詳しくなかったので、曲名を聞いてもどのくらい人気があるものなのかはよく分からない。ただ、キャッチーな曲調はイベントにはぴったりのようで随分と盛り上がっているように感じた。

「……洵、どうしたんだ？」

「……ううん、何でもない」

隣で、ひそひそと慎と洵が言葉を交わしているのが聞こえる。

どうやら、洵はステージ上ではなく何処か他の事を気にしているようだ。しかし洵の視線の先を追ってもそこに在るのは協賛したらしいひいらぎ製菓のテント席くらいなもので、ちょうど盛り上がりのサビに入った事もあって人の頭に隠れて様子はよく分からなかった。

洵の様子を少し気にしつつも、ステージ上のパフォーマンスは続く。盛り上がりも中々だ。イベントの終了時刻と照らし合わせても、まだまだ続きそうであった。

「お花摘んで来る」

「トイレだつて」

「空気読み人知らずしないで」

じろり、と美奈子が湊を半目で睨む。

「僕も小腹空いたから何か買って来る」

念の為に他の者達にも何か要るかと訊いた所、特に無い、という事なので、その場を離れるのは湊と美奈子だけになる。

ステージ上のパフォーマンスを楽しむ他の観客の邪魔にならないように気を付けつつ、それじゃ、と簡単に一言残してから、湊と美奈子は一旦ステージが見える場所から離れた。

空の下、帆船が浮かぶ海面が陽光に反射してきらきらと煌めいている。

擦れ違う人々の表情は明るく楽しげで、とても無気力症候群が増えているという風には見えない。

けれども、それは「今の所」というだけかもしれない。いつ、再び世界が死の影に覆い尽くされるのかも分からない。生と同じように、

死もいつだって共に在るのだから。

忘れ得ぬ死を思いながらも、湊は小腹を満たせる店を探す。美奈子とは既に別れていた。

広い上に休日なだけあって、敷地内にはキッチンカーや屋台も出ている。しかし何となくこれといって心引かれるものが無く、どうしたものかと思う。

屋内のカフェやレストランに入るのは流石にどうか思う程度の良識はあるので、もう少し探してみようかと視線を巡らせた所で一人の青年と目が合った。

「あ」

音に出た声が、前と同じになったのは多分偶然だ。

湊と同じように、青年——総司も気付いたのだろう。ただ通り過ぎるには距離が離れておらず、目も合ってしまった以上そのままというのも気が咎めたのか総司が湊の方へ近付いた。

「どうも」

「……ああ。君は今日どうし——」

問い掛けに言葉ではなく、腹の音が答えた。

ぐう、とあまりにも素直過ぎる主張が響く。問いが途中で止まったという事は、多分総司にも聞こえていたのだろう。湊と総司の視線がほとんど同時に湊の腹元に向き、その視線が持ち上がると再び両者の目が合った。

「……良かったら、なんだが」

近くのベンチに座り、総司が持っていた布包みを開ける。

現われたのは、二段のランチボックス。フタを開けると、明らかに手作りだと思われるおかずやおにぎりが詰め込まれていた。

「いいの？」

「いいんだ。つい習慣で作って出て来たけど、今日は仕出しが出るみたいだから要らないっていうのも思い出して」

尋ねると、困ったような笑みを浮かべて総司が肩を竦める。

習慣で作って、今日は仕出しで。とすると、この弁当は元々誰かに作っていたものなのだろう。それも習慣、と言っていたから、毎日で

はないかもしれないが日常的にという事になる。今日もそんな風に乗って、弁当を持たせている誰かが忘れてしまったと思っただけよとしたが、今日は偶々弁当が要らない日だと途中で思い出してしまった——という所か。以前、スーパーで出会った時には一人暮らしだとキャベツ一玉の消費に困るとか言っていたが、あれは単なる雑談だったか——それともやっぱり、他の誰かの事を言っていたのだろうか。しかし幾ら必要が無くなってしまったといえど、良いのだろうかと思ふものの、当の作っただけらしい総司が良いと言っているのだから、それ以上湊が言える事は無い。腹が空いていたのも事実なので、有難く弁当を頂く事にする。

「美味しい」

「ありがとう。良かった」

総司が安堵したように、ほっと胸を撫で下ろす。

実際、弁当は美味しかった。湊的に量はちよつと物足りないが、昼食ではなく小腹を満たすにはちよつと良い。目に見えて鮮やかだとか何とか映えするとかいう訳でもないが、しつかりと彩りはあるし栄養バランスが考えられていた。

何となく、荒垣先輩を思い出す。多分家庭的な味とはこういう味なのだろう。もつと心的なハードル低い事を言うなら、食べても倒れない手作りは有難い。食べたら瀕死という事態など、他にそうそうないとは思ふが、いや、あるかもしれない。今は気にしない方が良さそうだ。

「今日はどうしたんだ？」

「アイドルが来るから、一緒に見に行かないかって」

「ああ……そうか、そうだったな」

些か距離のあるイベント広場の方を見て、総司は静かに呟く。

ステージ上で行われているであろうパフォーマンスに対する歓声の熱に対して、呟きを漏らした総司の表情は全く正反対。それも冷たいのではなく、暗い。僅かに伏せ気味になった灰色の瞳が、陽を通さない分厚い暗雲のように曇っていた。

——どうしたのだろう。湊としてはおかしな事を言っただけはない

心算だから、湊の言葉によってもたらされた何かによつての反応だ。けれどもそうだとしても、何かの不釣り合いのように見えた。

暖かな晴天ではなく、暗い曇天。それがどうしてか今にも泣き出してしまいそうにも見えて、湊が総司へ声を掛けようとする、別の声がかかった。

「あれ？ 君、何してるのさ」

呼び掛ける声に、傍らに座る総司の双眸が僅かに細まる。そこから、顎を掬い上げるようにして声がした方へ顔を向けた。

「渡し忘れたと思つて持つて来た弁当、食べて貰つていたんです。――

――サボりは駄目ですよ、足立さん」

「……ちゃんと仕事だよ、一応」

湊が少し遅れて声の方へ顔を向けると、そこには何処かやる気無さそうな男が溜め息を吐いてぼやいていた。

男――足立には見覚えがある。綾風署の刑事だった筈だ。

発した言葉から推測するに、総司とこの足立という刑事は互いに顔見知りらしい。見た目からすると親子でも兄弟でも無さそうで、病院の清掃スタッフと刑事とはどういう関係性だろう。何かの事件絡みで知り合つたのだろうか、それにしても――

「ホント、可愛くないよねえ。……で、君は行かなくていいワケ？」

「貴方がそれを言いますか？」

分かつている癖に、とでも言いたげな。そんな言葉は音として紡がれずに、口唇の動きだけで止まる。咎め、詰る響きは果たして、どちらになのか。分からない。

総司の、眉を隠す前髪の直下にある双眸が再び灰色の色を濃くする。それを見返す、足立もどうしてか無表情に見えて。

緊迫とまではいかない。だが和やかでもない。妙な距離感で、それは湊ではいまいち想像し難い総司と足立との関係性によく似ている。よく空気読み人知らずと言われるが、どうしてだろう、何故かよく伝わって来る気がする。ただ、それが何なのかは分からない。それでもどうしても気になって両者を見てみると、不意に携帯の着信音が鳴った。

湊のではない。総司のでもないようだ。となると、と残る一人へと目を向けると、ちょうど足立がスーツの胸ポケットから鳴り響く携帯を手に取った所だった。

「はい、足立です……今何処について、えっ、いやいやサボってなんかないですってホントに！」

相手方の話し声は勿論聞こえないが、同じ刑事からなのだろう。それも恐らく、足立よりは年上か立場が上か。どうにも話をしている者からも、些か真面目ではないと思われるようだった。

「……はい、ハイ、勿論聞いていますってば。分かりました、今から向かいます……はー、参っちゃうよ、全く……」

暫く何やら色々と話した後、通話を切った足立が愚痴っぽい溜め息を吐く。

今から向かう、と電話口で答えておきながらもまだ些かグダグダとその場で面倒そうに頭を掻き毟った後、足立は湊——というよりはその隣に居る総司へと顔を向けた。

「それじゃ、僕は若者に構っている暇無いから」

「ちゃんとお仕事して下さい」

「うつるさいなあ、もうー」

少し前までの何とも付かぬ表情は何処へやら。穏やかな表情で手を振る総司に、足立が益々嫌そうに顔を歪める。

しかしながら、流石にいつまでも此処に留まっている気ではなかったらしい。何やらぶつくさ言いながら去って行く足立を見送った所で、湊はふとある事に気付いた。

「……あ」

「どうし……誰か待たせていたのか？」

「忘れてた」

つい、のんびり弁当を食べていたが、時間としては結構経っているのではないか。否、実際結構経っていると思う。すっかり意識が何処かに行ってしまった。

美奈子もトイレなど女子とはいえそこまで長く並んでいた居る訳でもないだろうし、ステージの方に居る者達もテイクアウトで何か

買って来る程度だと思っっているだろう。

そろそろ自分も戻った方が良いかもしれない、と思いながらも、湊は食べかけの弁当を見る。途中で話し掛けられていた事もあって、まだ弁当の中身が少し残っていた。

当然のようにこれくらいで満腹になる胃袋は持っていないし、残すなど勿体無い。何より美味しかったし、と眼下にある弁当を湊が見つめていると、湊の様子を見守っていた総司が声を掛けた。

「……残り、よかつたら持って帰って食べて貰っても構わないか？」
「えっ」

思わず聞き返してしまった。

残りを食べるのは一向に構わないが、良いのだろうか。このランチボックスは使い捨ての物ではないから、そのまま捨てる訳にもいれない。だから、という湊の懸念も予想していたらしい総司は、頷いて言葉が続けた。

「容器は……綾風の中央病院でバイトしている時でも、それかさっきの、足立さん……綾風署の刑事なんだ。その人に渡してくれても大丈夫だから」

フルネームは足立^{あだちとおる}透^{とおる}というらしい。それは割とどうでもよかったが、やっぱりこの目の前の青年——瀬田 総司とはどういった関係なのだろう、と改めて疑問が生じる。

綾風署の刑事。それは、以前に他の場所でも会っていたから知っていた。苗字が違う事から恐らく兄弟や親子関係でもなく、先程の妙な距離感といい、その人に空の容器を渡せばいいと言う所といい、ただの知り合いに片付けるにしては少しばかり難しいのではないかと思う。勿論、湊の方とて一概に説明しきれるものばかりではないと自覚していたし、深く詮索するものではないというのも分かってはいたが。

「分かった。洗って返すよ」

「気にしないでくれ。作った分が無駄にならなくてよかった」

結局、疑問は表に出されなのまま。まだ中身の残る弁当と同じく、フタを閉めて仕舞う。

それじゃ、とやって来た方向を辿るように去って行く総司を暫し見送り、湊は美奈子と合流しようとしてベンチから立ち上がった。

一方、トイレを済ませて来た美奈子は小腹を満たす物を買って来るという湊を探すべく周辺を見回していると、そこで何やら立ち話をしている一組の男達に意識が留まった。

この辺りには人通りにそれなりに居て、通りすぎる人々一人ずつにいちいち気を留める事は無かっただろう。ただ偶々聞こえて来た話に、どうしてもそのままにして流す事が出来なかった。

「あとは金が振り込まれんのを待つだけだ」

「……なあ、本当に上手くいくのか？」

男達の会話や様子が分かる程度の距離に居ながらも、その場に留まっても不思議ではないように人との待ち合わせをしているようなフリをして会話を盗み聞きする。この場に留まっているような人々は居ないものの人の通りは多少あるので、美奈子の存在に関して男達に不自然には思われていないようだった。

「自分の息子達が可愛けりや条件呑むだろ。何だ、今更怖じけ付いたのか？」

「別にそうじゃねえって」

男達のやり取りを最初から聞いていた訳ではないが、それでも多少なりとも推測出来る事はある。

金が振り込まれるのを待つ、自分の息子達が、そんな言葉に、やや視線を外した男達と共に美奈子が素早く周辺へ目を巡らせると、少し離れた位置に二人の10歳前後の男の子らが遊んでいるのが見えた。あれが息子達、とするのなら、兄弟だろうか。

まさか、というこの思いがただの勘違いであると良い。だが、そんな思いは得てして無情に裏切られるものである事も分かっていた。「そうはいってもよ、こんな『心の怪盗団』って……何だったか？ いつだったかに流行ったので名乗り騙るって……そりゃ、何処とも知らねえヤツよりかはマシつつつても」

男達の一方が、胡散臭そうにポケットから何やらカードらしきものを取り出して目の前でひらひらと翳す。

注視するのは流石に怪しまれるので、男が取り出したカードがどんなものなのかまではよく分からない。その代わりというように、美奈子は先程確認した兄弟の子供達の前へ飛び出した。

「ねえねえ、お姉さんも遊びに混ぜてくれる？」

いきなり話し掛けて来た面識の無い者に、子供達が驚いて警戒するのは無理ならぬ事だろう。だが、そんなものは些細な事。女は度胸、ならぬ、勇氣は漢だ。

自分よりも年下に対しての扱いなら、これまでも経験がある。意識してカンストしきった魅力も併せて、美奈子は子供達を自分のペースに引き込んだ。

「あー！あれとか楽しそうだからやってみない？」

一先ず、この子供達を安全な場所へ連れて行った方が良い。男達から引き離さないと、とアスレチックのある広場の方へと誘うように装って子供達を連れて行くとする美奈子の前に、あの怪しげな会話をしていた男達が立ち塞がった。

「オイオイ、困るなお嬢ちゃん」

威圧的に声を掛けて来る男に対し、美奈子は当然のように無視。子供達を背中に庇いつつ、怯えた様子の子供達へと尋ね掛ける。

「知り合い？」

「パパの知り合いだって、でも……」

「知らないおじさん、だね」

恐らく、子供達を連れ出す為にそう言っただけで、実際は知り合いでも何でもないのだろう。

——ならばこれは、誘拐だ。

子供達から男達の方へ視線を戻し、美奈子はその場を立ち去る事もせず仁王立ちで向かい合う。

「いやいや、俺達はその子供達のお父さんの知り合いなんだって、少し面倒を見てくれて頼まれてるんだよ」

「じゃあ、知り合いって言うなら今、連絡取って。確かめるから」

出来ないだろうけど、とまでは流石に言わないが、男達が一瞬言葉に詰まったのは見逃さなかった。

話し声は大きくしていない。だが、何か言い合っているのなら少なからずの人々が何事かと気にする筈。それはこの男達にとって、決して望む所ではないだろう。

男達の言葉から考えられる、誘拐と脅迫行為。それは勿論、許される事ではない。

けれどもそれとは別に、深く、心の奥底で怒りにも似た衝動が沸々と煮えたぎっている。

思い出されるのは、男達が口にした「心の怪盗団」という言葉。その名を使つたらしいという事。

よく知っている訳ではないと思う。その筈は無いと思う。けれども、しかし、と抗する想いは、確たるもので。

——「心の怪盗団」は——「彼ら」なら、きつとこんな事などしない、と。

だから、と許せないような、そんな思いのままに、美奈子は目の前の男達を強く睨む。

一步も退く氣の無い美奈子に対し、男達が思わず気圧されたように一步下がる。だが、このまま後に引く訳にもいかなかったのだろう。

男二人の内、少し血氣盛んそうな方が無理矢理美奈子と子供達を引き離そうと手を振り上げた。

子供達に危害を加えさせる訳にはいかない。美奈子は少し身を屈め、備えようとし——

「そこまでだ。綾風署まで来て貰おう」

男の手は振り下ろされる事は無く、別の手によって阻まれた。

美奈子と男達の間、スーツを着た一人の男性が立っている。赤々とした少々派手なシャツをスーツの下に着たその男性は、男の手を掴みながら美奈子と子供達の方へ目を向けた。

「お巡りさんが来たから、もう安心だ」

ここは笑う所なのだろうか。割と本気でちよつと悩んだ。

赤シャツに黒スーツ、更にサングラスという出で立ちは下手すると色々事情ある筋の人かと思いかねない。しかしながらお巡りさん、という事はどうやら男性は警察官のようで、サングラスの奥にある瞳を

美奈子と子供達から鋭く男達に向けるとそのまま掴んだ男の腕を捻ってその場に取り押さえた。

「ひっ……い！」

手慣れた確保劇に、もう一人の男が引き攣った声を上げる。

美奈子と子供達はカウントに含まないとして、二対一の筈であるが警察相手にまともにもやり合う度胸まではなかったのだろう。取り押さえられている男を見捨てて、もう一人の男が逃げようとする。

このままでは逃げられる。そう思うよりもどちらかといえば感覚に従って、美奈子は咄嗟に近くの壁に立て掛けてあつたホウキを手にとった。

呼吸は一息。柄頭は下に、そこから逃げようとする男の足下に向けて、搦り上げるように足払いを掛ける。当然、美奈子の行動など頭に無かつたであろう男は容易に足払いに引つ掛かり、無様に地面に転がった。

「え!? 何なのこの状況!？」

色付き眼鏡の男性の登場から僅かに遅れて、若干やる気が無さそうな雰囲気のある男が駆け付けて来る。あちらは覚えがあつた。綾風署の刑事だつた筈だ。

ちよつとやる気無さそうな男はある意味当然といえば当然のようによく分からない状況に出くわして困惑しながらも、色付き眼鏡の刑事の指示を受けて慌てて地面に転がった男を取り押さえる。双方動きを封じられるともう抵抗する気力を失つたのか、男達は呻きながらも大人しくなつた。

「……危険な行動は慎むように」

「ごめんなさい」

咄嗟にしても、流石について、で済ませるには手際が良過ぎたかもしれない。色付き眼鏡の刑事が何やら物凄く疑わしそうな目で見たが、何とか必死に気付かないフリをして受け流す。

流石に確保を手伝う事まではせずにホウキを立て掛けてあつた位置へ戻してそのまま眺めていると、背の後ろに庇っていた子供達が不意に声を上げた。

「パパ！」

「とうさん！」

子供達が向けた声の方へ目を向けると、そこには息を切らせて此方へ走って来る男性と同じく駆け付けて来る諒の姿があった。

「お前達……！ 無事で……！」

子供達の姿を見て目を潤ませる男性に、何か見た事がある気がするな、と思うと、そういえばステージの協賛席に居たような気がする、と次いで思う。確かひいらぎ製薬の社長で、社名の通り柊ナントカと言った筈だ。名前までは忘れたが。

「……何かあったの？」

「そっちも何持ってるの」

「弁当。食べかけ」

お互い抱き合って無事を確かめる親子の姿に少し温かい気持ちになつていた所で、食べ物を買に行った筈の湊も戻って来た。ただ食べ物を買に行くだけならばそこまで掛からない筈なのだと思うが、一体何処まで行っていたのだろう。その上、店売りではなさそうな包みまで持っていた。

事情については美奈子自身も深く知っていると、訳でもないので多分、という前置きを付けて軽く流して話すに留める。視線を下に落とすと犯人らしい男が持つていたらしい薄いカードが地面に落ちていて、美奈子は湊に事情を話しつつそれを拾い上げる。湊は美奈子が赤いシルクハットの描かれているそのカードをポケットを仕舞う様を眺めながら、黙って事情を聞いていた。

そうしている間にも、この場の騒ぎに通行人達の目に付くようになったのか、にわかには辺りが賑やかしくなる。スーツ姿とはいえ警察官が三人も居る上に、うち二人はそれぞれ男達を取り押さえているという状況なのだから、目に付くといえは当たり前だ。

「……あ！ もう、何処まで行ってたの!？」

そんな少しばかり騒がしい場の中で立っていたら、多少他の目に付きやすくもなるだろう。掛けられた声に湊と美奈子が声の方向へ顔を向けると、ステージパフォーマンズを見ていた筈の慎や洵、めぐみ

や拓郎に叶鳴の五人全員が揃って駆け寄って来た。

「イベントは？」

「もうとっくに終わったっての」

尋ねると、拓郎が呆れたように返す。

すっかり意識に無かったが、結構な時間が経ってしまったらしい。考えてみたら、とつくにステージイベントが終わってしまったいてもおかしくはない。イベントが終わってもいつまでも戻って来ない湊と美奈子を、他の皆が探しに来たという事か。

取り敢えず探させてしまった事と恐らく心配させてしまったであろう事は素直に謝った所で、慎を見ると慎は同じくこの場に居た諒を見つめていた。

諒は少し前までは他の刑事二人と話していたが、今はひいらぎ製薬の社長である柊と何やら話していた。

ここに来た時は共に居たし、実際に誘拐と脅迫行為があったのなら警察に相談もしているのだろう。だとするのなら話をしている事は何の不思議も無いが、それにしても何処か違和感があるように思えた。

慎の視線に諒が気付くよりも、柊の方が慎とその隣に居る洵に気付いて慎達の方へ身体を向ける。遅れて諒も、慎と洵の方へ振り向いた。

柊は慎と洵を見て、何やら驚いたように目を見開いている。面識があるのだろうか。一方で慎と洵は柊の事にそこまで親しい面識は無さそうで怪訝そうな顔をしており、諒はそれを思惑の読めない無表情で見つめていた。

暫しそんな不可思議な状態が続いた後、柊は固い面持ちで諒と向き合う。

「……私が知っている限りの事を話そう。私達の……大人達の過ちを、子供達にまで背負わせるべきではない」

そう言って、柊は息子達の頭を撫でながら首を振る。

「それは諒君、君にもだ」

「……」

向けられた言葉に、諒は無言。感情の読めない無表情は、敢えて零れ出してしまいそうな感情を押さえ付けているようにも思えた。

「……兄貴、帰ろう」

沈黙が支配していきそうな場の中、慎が諒に告げる。少し不安気で、しかし決心したような表情で諒を見つめる慎に諒も慎の方へ目を向けてからその視線を外した。

「いや、俺は……」

「署長。ここはもう僕達だけで事足ります」

首を振り掛けた諒の言葉を遮ったのは、色付き眼鏡を掛けた刑事。慎と諒が反射のように揃って色付き眼鏡の刑事の方へ目を向けると、色付き眼鏡の刑事は慎とその隣に居る洵を視界に認めて目を細める。

サングラスのレンズで少々分かり難いが、慎と洵を見つめるその眼差しは何処か羨むような、悔いているような、何か眩しいものを、否、何か眩しいものと重ねて見ているようで。

「……家族を、大事にした方がいい」

「……しかし」

「ですから、問題ありません。いくぞ、足立君」

「ええつ、あー、はい、分かりましたって……周防さん、待って下さいよお」

なおも難色を示す諒の言葉を断ち切り、周防というらしい色付き眼鏡の刑事が取り押さえていた男を立たせて何処かへと連行していく。もう一人の刑事、足立も周防に急ぎ立てられ、慌てて確保していた男を引つ張りながら後を付いていった。

ひいらぎ製薬の終親子も、後日警察に事情聴取に来るという事で一旦は帰される事となった。そして後に残るのは、ステージを見に来た七人と諒のみになる。

「……一緒に帰ろうよ、諒兄ちゃん」

洵が諒に歩み寄り、そつとその腕を取る。更にもう片方の手を慎の腕へと伸ばして、諒と慎の間に洵が挟まる形となった。

「ほら、もうこんな時間」

空の色は、赤みを帯びた橙色。もう夕方だ。

ステージ広場でのイベントも既に終わった為、行き交う人々もこれから帰るのだろうという印象を受ける者達が多い。海面とその上に浮かぶ帆船の帆が夕陽の色に染まる中、見つめて来る慎と洵を諒は暫く言葉無く見つめ返した後に頷いた。

「オレ達も帰ろうぜ」

「そうですね、もうこんな時間……」

「帰る頃にはすっかり暗くなってそう」

神郷兄弟達のやり取りを見守っていた拓郎とめぐみ、叶鳴もほつと胸を撫で下ろして互いに頷き合う。

「こ、こら、洵、引っ張るなって。危ないだろ」

「こうして一緒に帰るのって、久し振りだね」

「……そうだな」

はしゃぐように少し跳ねた洵の言葉に、諒の小さく静かな同意が空気に溶けていく。

そうやってそれぞれの帰途についていく皆を見送り、湊と美奈子も現在寝起きするマンションに戻る事にする。

「戻ろうか」

「うん」

その頃にはもう陽が落ちて夜に傾きつつある空の下は、肌を刺す風が少し冷たかった。

10：運命（1）

放課後。

今日の授業が終わり、慎は叶鳴と共に職員室へ向かっていた。

「えっ、スピーチコンテストの代表？ 凄いいじゃないか」

「そんな……希望者が出なかったから、良かったら、という事だったの
で……」

叶鳴も職員室に用があるという事で、職員室へ向かいがてら叶鳴の
用事を聞いてみたのだが、叶鳴は英語のスピーチコンテストの代表に
選ばれていたらしい。

そういえば、前からちよくちよく授業後に叶鳴が教師と話していた
のを見掛けていた。訊いてみようと思いついてうっかり忘れていた
ままだったのだが、そのスピーチコンテストの件だったらしい。今、
職員室に向かっているのも、その為なのだという。

「いや、守本は凄いよ。他の皆にも話して、コンテストの日に応援に行
くように誘ってみる」

他に希望者が居なかったから、と叶鳴は謙遜して話すが、教師から
薦めがあったという事は叶鳴自身が評価されているからに他ならな
い。

きつと、皆なら賛成するに決まっている。まだコンテストの日は先
だが、今から話しておいた方がいいだろう。

「……ありがとうございます。神郷君も皆さんも無理しなくていいで
すからね」

すっかり直ぐにでも他の者達へ話してしまいそうな慎に、叶鳴は少
し困ったように眉を下げながらもくすくすと小さく笑い声を零す。

つい浮かれた心持ちが表に出過ぎてしまったのだろう、大人しい叶
鳴にも笑われてしまった事に我に返って慎はちよつと居堪れなくな
ると他の話題を口に出した。

叶鳴に話したのは、洵の授業参観の話。

今度、中等部で授業参観が行われるらしい。時間割の関係で授業が
ある慎は勿論、諒も仕事で行けないだろうと思っていたのだが——何

と、偶々授業参観のプリントを目にした諒が「行く」と言ったのだつた。

「でも、良かったですね。洵君、きつと喜びます」

「……まあ、そうだけど」

てつきり無碍に扱われると思つたら、何故か了承されて逆に戸惑う。最初、聞き間違いかと思つたくらいだ。

後から改めて本当なのかと尋ねた時、頷きながらも何か呟いた諒が気になるもの——洵も、驚いてはいたが嬉しそだった。

洵は今日、部活に行つている。めぐみが所属するストリートダンス部だ。部活に入った為に、共に帰る事も前よりも少なくなった。人よりも繊細な所があつて人見知りがちな洵が、部活に入つてからは洵なりに楽しんでゐるらしい事に安心する一方で、慎は些か複雑な気分になる。自分はまだ兄離れも、弟離れも出来ていないのかもしれない。

そんな風にして話を交わしながら職員室に辿り着き、慎は教師——小田桐の許へと向かう。

「授業の事で質問か？」

小田桐は椅子に座つたまま慎の方へ向き直り、問い掛ける。

肝試しの一件から、慎達も多少は以前よりも顔を覚えられた気がする。とはいつても、だからといつて特別な何かがあるという訳でもないし、職員室にわざわざ来るといふ事はほとんど無いので話を切り出すのは少し緊張した。

「あー……いえ、その、実は……」

小田桐に打ち明けたのは、以前に家の物置を掃除した時に見つけた手紙の事。

両親宛に送られた手紙。息子が書いた小説に挿絵を付けて欲しいというもので、それに対してもつと話を聞いてみたい——もし叶うのなら、自分がその絵を描かせて欲しい。そう伝えたいが、どんな文面として書いたら良いのだろうか——慎が職員室にまで来たのは、そんな思いからだつた。

「それで、連絡取つてみたら、つて……有里達が……」

「……そうか」

有里達、と慎が言うと、小田桐の目許がほんの僅かに細まる。

やっぱり、湊と美奈子に対しては小田桐の態度が何処か柔らかくなる気がする。それもあの肝試しの一件から、一層——否、それとはまた違って、他に何か加わったような。

勿論今そんな事を訊ける訳もなく、ただ何となく慎の感覚に引っかけただけに留めて目の前の用事のみ集中する。

今の時分、手紙を書く機会なんて中々無い。どうしたら良いのかと悩んだ末、教員ならばと思ったのだが、授業外の事であるから迷惑だっただろうか。相談を持ち掛けたは良いが、慎は次第に不安になって来た。

「……どのような事を書くのかは考えてあるのか？」

「えっ、あ、は、はい！ 一応、ルーズリーフに……」

流石に、書きたい内容まで全然考えていないという愚までは犯していない。言葉遣いも何も無い箇条書きではあるが、文章を纏めたルーズリーフを出す。

慎から文章の書かれたルーズリーフを受け取った小田桐は暫くそれを眺め、ふむ、と一息吐いた後、再び慎に返した。

「それなら、時間があるのならば此処で書いてみるといい。一度に添削まで行った方がいいだろう」

「あ、ありがとうございます！ えっと、じゃあ、書き出しから……」

引き受けてくれるらしい。思わず大声と共に頭を下げると、小田桐は大袈裟だ、と少し顔を顰めた。

隣の机と椅子を借りて、慎は新しいルーズリーフに一先ず文面を書き連ねていく。規律に厳しい姿勢から生徒達からは疎まれがちな小田桐だが、日々の授業の教え方自体は分かり難いものではない。頭を悩ませながら文面を考える慎に対して、的確に助言を与えていた。

ああでもないこうでもない、とうんうんと唸りつつ、シャープペンを走らせてから、どれ程経っただろうか。何とか手紙の文としては格好が付く形になった所で、ここでの用事を終えたららしい叶鳴が近付いて来た。

「神郷君、どうですか？」

「あ、守本。俺も一段落付いた所だったから……小田桐先生、ありがとうございました」

「これくらいなら、礼を言われる程でもない。挿絵については、造詣は深くないので力にはなれないが」

絵についての造詣。そういうえば、この綾風市で洵の診察をして貰った医師は絵も嗜んだ事があるとか言っていたような気がする。両親の事で話していた時に、聞いたように思う。

今度、洵の定期健診の時にでも訊いてみよう。頭の端でそう思いながら、小田桐へ改めて礼を言うと言葉と叶鳴と共に職員室を出た。

小田桐のお陰で、文面はほぼ出来上がった。あとは本番、送る用を書くのみだ。

「そうだ、守本。購買に便箋買って売ってたっけか？」

「どうでしょう……でも、もう閉まっている時間ですよ」

「あ、そうか……コンビニ探したらあるかな……」

既に夕刻。帰っている生徒も多く、叶鳴の言う通り購買はもう開いている時刻ではない。

別段、今すぐ、という訳でもないのだが、忘れない内に買っておきたい。普段買わない物であるので、購買にあったかどうかすら覚えも曖昧だ。頻繁に使うものでもないから、家にも置いてないだろう。

パトス溢れる詩を綴る訳でもないからシンプルなデザインのもので良いのだが、流石にその辺の紙やらノートを切ったもので書くのは失礼だと分かっている。小田桐にもそこはきっちり注意をされた。

「神郷君、それなら……駅前の本屋に行きませんか？ あそこは文具コーナーがあったので、便箋も置いてあるかもしれませぬ」
「守本は良いのか？」

ふともたらされた叶鳴の提案に、思わず慎が尋ね返す。

言葉からして、叶鳴の時間を奪ってしまう形になる。その懸念が顔に出ているのだろう、慎の言葉に叶鳴は穏やかに微笑んだ。

「はい。私も、スピーチコンテストの参考に、って先生が薦めていた本を探そうと思っていましたから」

そういう事なら、叶鳴の時間を奪ってしまうという事も無いだろ

う。本屋までは共に行つて、後は別々に用事を済ませたら良い。

洵には携帯で本屋に寄るといふ旨を伝え、学園を出ると慎は叶鳴と本屋へ向かうのだった。

10：運命（2）

心の底が波立つ。

衝動とも感情とも言えぬそれを何と呼ぶのか分からず、けれども身体はそれに急かされるようにして突き動かされる。

外の空気は澄んでいた。その上いやに静かで、そんな時は雪が降る前触れなのだと聞いたのは、何の噂か、テレビか、ネットからだっただろうか。

以前、アイドルのライブイベントがあつて来た事のある場所。その、海沿いに掛かる大きな橋。少しだけ巖戸台のムーンライトブリッジに似ていて、あの青緑色の月が浮かんでいやしないだろうかという思いすらも擡げて来る。実際には厚く暗い雲に覆われて、月は見えなかった。

それから「影」も——……否。

上へと仰いだ視線の先。そこにはひとつの姿が在った。

赤い髪の幼女。今は幼女の姿だ。着ているものも、髪と同じ色の服ではなく白い病院着のようなものだった。

赤髪の幼女は、眼下に見える筈の湊と美奈子を見ていない。見た目にはそぐわない固まった表情で、髪をなびかせながら中空に浮いていた。

声は発せられない。湊と美奈子が赤髪の幼女を見つめても、反応を返す事は無い。これはただ気紛れに浮かび上がった泡沫——「影」に過ぎないのだというように。

中空に浮かぶ赤髪の幼女の身体が傾ぐ。頭と足、その位置を反転、まるで身を投げ出すかのよう。

真下はコンクリートの地面。普通の人間ならば、頭から落ちたのなら到底無事には済まされないだろう。赤髪の幼女の身体は妨げるものもなく落ちて行く真下、湊と美奈子が反射的に動いた身体で手を伸ばし掛けたその先に。

——光が生まれ、そしてそれも束の間、どろり、と月下に闇が原形質の塊と変わった。

「！」

そこから生まれた、否、存在した同色の鉤爪が襲い掛かる。伸ばし掛けた手はそれぞれ武器を掴み、向かい来る脅威が害を成す前に斬り払う。

手応えは感じたが、音は生まれぬ。薙がれたそれは再び夜の内に溶け、瞬きひとつ分の時間を経て現われたのは車椅子に乗った一人の男だった。

「——君達が、あの者達を退けたというペルソナ使いか。成程、確かに興味深い」

男が湊と美奈子を見つめ、言葉を紡ぐ。その口許は、全く動いていなかった。

あの者達。恐らく、湊と美奈子が対峙したペルソナ使い達の事だろう。確か、統馬という男は「あの方」と上位の命令系統に値する人物を示唆していた。だとすると、「あの方」とはこの男の事を示すのだろう。

びりびりと空気を通して、否、物質的なものを越えて痺れるような感覚が伝わって来る。それが何なのかは考えない。思考し、意識してしまったら、それに支配されてしまいそうだった。

『気を付けて』

自らの内から、綾時が囁く。シャドウの上位存在である「デス」でもある綾時がそう言うという事は、この目の前の男は。

『彼は、もうヒトじゃない』

——「人間」から、逸脱した存在なのだ。

「何が目的？」

駆け引きの類は得意じゃない。それでも、この男の思惑を知る為に問い掛ける必要があった。

この綾風市で起こっている無気力症候群。肉体が表裏反対になっってしまったかのような反転死体に成り果てる、他人のペルソナを奪うという行為。「影抜き」だとかいう妙な遊びも、この男が関わっているのかもしれない。今まで綾風市で出会ったペルソナ使い達から察するに、誰もかれもと無差別に襲っている訳ではないようだった。悠美

や拓郎の友人だという岡崎という少年もだが、ネットから噂されている行方不明者、つまりペルソナ使いに襲われて反転死体となつてしまった者達は主に20歳前後、「影抜き」が流行っているのも主に10代の若者達。「影抜き」が、ペルソナ使い達のターゲットとなる何かしらの基準になつていっているのではないか。

「この世界を、どう思うかね？」

問い掛けに対してそんな問い返しが出来て、何の心算かと眉を潜める。

訝しむ湊と美奈子の様子に問い掛けたにも関わらず男は意識を向ける様子は無く、言葉を続ける。

「この世界は、今生きる人々にはそぐわない。」

世界に蔓延っているのは、人々にとつては苦しく辛く、悪いものばかり。多くがあらゆる事柄から目を背け、自分の都合の良いものだけを感じる。何かを決定する事すら苦痛に感じ、他の誰かや何かに任せきりにしていたいと思つてしまう。各地で起こっている無気力症候群は、「自らも消えてしまいたい」という者達が願つた結果なのだ。

それはとても不幸だ。ならばどうしたら良い？——簡単だ。差違があるから、そう感じる。ならば、その境を無くしてしまえばいい。そう思う意識も、思わずとも底に抱く無意識も。

「今こそ意識と無意識を融合させるその時だ、と。」

「そんな事はさせない」

それは自己の喪失だ。

何も感じなくなつてしまえば、何も生み出されなくなる。そして後に待つのは緩やかな滅び——ニユクスの到来と同じく「死」だろう。

それを望む者も、多様に在る意思のひとつなのだから存在するかもしれない。だが、この男は人為的に人々の意識と無意識、それらが存在する世界そのものを変革させようとしている。

積み重なつた大衆の意識が、認知が、人非ざる存在を引き寄せ、成す事はあつても。

「ヒト」如きが人智を超えたモノを完全な制御下に置こうとするなど、傲慢に過ぎるだろう。

だからなのだろうか。この男は既に「ヒト」ではないと、綾時は言う。人間であったが、男はこの男の語る目的の為に人間という軀を捨てたのか。

到底、理解出来るとも、理解したいとも思わない。そんな事を思おうものなら、と奥底に沈むものが思考を拒みながら、湊と美奈子は目の前の男を見据える。

「協力は出来ない、と?」

「当然」

「当たり前だ」

——迎え来ようとする世界の、人々の滅びを、起こさせない為だったから。

きつぱりと決裂の言葉を返す湊と美奈子に男は感情も薄く目を伏せ、再び目を開く。男の背後から眩しい光を感じ、湊と美奈子、そして男もまた、背に受けた眩しい光の方向へ振り向きながら小さく呟いた。

「それは残念だ。彼も——」

男の声を、最後まで耳が聞き取る前に。男の背後から感じた眩しい光が生み出した影——湊と美奈子から見ると男の前にあたる場所から、シャドウが出現する。

通常のシャドウよりも大きい。色は夜のように深い闇色。泥から成形したかのように外形を作りながらもその端から崩れていく、そのちぐはぐなシャドウの姿はあの巖戸台で戦った大型シャドウに似ていた。

数は二体。エンペラーとエンプレス——二体一対。ならば、と湊と美奈子は同時に召喚器を構え、引き金を引く。

「オベロンー!」

「ラクサーシャー!」

それぞれの弱点は覚えていた。故にオベロンはエンペラーに雷撃を、ラクサーシャにはエンプレスへと斬撃を放つ。

夜の帳を雷光が照らし、冷えた空気を剣が裂く。そうして生まれた衝撃と土埃が静まると、そこにはもう男の姿は無かった。

——逃げられた？

『そうなるね』

男が居た場所、正確に言うのならシャドウが出現する直前に感じた眩しい光。その方向。そこには先程の男ではなく、新たな人物が車から降りて来た所が見えた。

綾凧署の署長であり、慎と洵の兄である神郷 諒。眩しく感じた光は、車のヘッドライトだったらしい。今は少し光量も落とされていて、周囲に照らすものといえは橋の電灯のみ。橋下のライトアップはこちらに届くには遠い。ただその中でも、互いの顔が見えるには充分だった。

こまつばら けいすけ
小松原 啓祐。——あの人は、死んだ筈だ。俺が……。

ほんの微かな、独白にも似た諒の言葉は最後まで続かなかつた。ただ聞こえなかつただけかもしれない。

それに湊と美奈子はいく口を開き掛け、結局やめて口を閉ざす。きっと、言えた事ではないから。

僅かに震えた口許から白い息が漏れ、空気に溶けていく。

あの男の名前は、諒の眩きが正しいとするのなら小松原というらしい。それがどんな人物なのか、湊と美奈子は人名に詳しくないから分からない。ただ、諒は少なからぬ何かを知っている事だろうという事は分かった。

そこから諒は湊と美奈子を見て、微かに眉間の皺を深くする。湊と美奈子から、進んで言葉を発する事は無い。流石にこの状況下で、自分から何か言えるとは思ってはいない。

ただ、向けられる諒の視線を逸らすように見つめた橋下の海面は。行き場を失った大量の白い羽根が、水面を覆い尽くさんばかりに揺蕩っていた。

11：剛毅（1）

——それは、予感でもあり、予兆でもあった。

『急いで。あまり良くない状況みたいだ』

心の内で、綾時が急かす。急かされなくても分かっている。背中から這う得体の知れないこの感覚は、一体何と呼んだら良いのだろう。

「誰かが、世界の『死』を望んでいるの？」

『違うよ。寧ろ、逆に「死」という「絶対」を否定する意識に近い。でも、「生きたい」というポジティブ・マインドでもない』

「分かり難い」

もつと簡潔に言え、と文句を投げ付けるものの、綾時からそれ以上の説明はない。代わりに、ほんの少し悲しそうで寂しそうな、複雑な気配が心の底に流れていくだけだ。

授業は当然のように、途中ですっぽかして来た。そもそも、間は開いているとはいえ二学年の授業内容は一度聞いているので一回くらい抜いたところで問題は無い。

寝起きしているマンションから、武器も取って来た。本当は綾時が急かす場所へと直行したいところなのだが、「何」が待ち構えているのか分からない。腰元の召喚器だけでは心許無かった。

明確な「何」が起こるのか、それは分からない。だが、忌避すべき何かが起ころうとしているのは間違いない。だからこそ、此処に在るのだから。

思い出すのは、綾風の大きな橋で遭遇した小松原という男が語った事。無意識と有識との融合。それが行われたら、この世界は、人々は「死」を迎えると同義だ。だからこそ、こうして綾時が知らせているのだろう。

——否、それだけじゃない？

ふと沸いた思いに、心の内に在る綾時は静かで悲しげな気配のみで返す。答えの言葉こそないが、否定が無いという事は肯定の意だ。

それだけではないのなら、何が——誰の死の気配を、綾時は感じ取ったのだろう。

分からない。分からぬまま思考を巡らせ、街中を走り続ける。

学園を飛び出してから、ほとんど走り通しだ。体力もある方だが、それでも目指す場所は遠い。タクシーを拾おうか、否、途中までだとしても、その途中で何が起こるのか分からない以上、一般人を巻き込む訳にはいかない。

どうするべきか選択に迷い、けれども気ばかりが急ぐ中で。

カチン、と直ぐ傍で音がした。

大きな音でもない筈なのに何故だか不思議とよく耳に響いて、自然と身体ごと目が音の方へ向いた。

そこに居たのは、一人の青年——いや、少年だろうか。湊と美奈子、双方とそれ程年齢は変わらないように見える。湊と美奈子よりも長身である事と、険しげに寄った眉根が少しばかり年上のように見させているのかもしれない。それに、何処かで見掛けた事のあるような——そんな面影を感じた。

湊と美奈子、両者の視線が一瞬だけ互いに交わされる。どちらも覚えは無い。着ている制服も、凧の杜のものでもなければ月光館のものでもない。故に誰、と問い掛けるよりも早く、青年が口を開いた。

「使え」

そう言つて移動させた視線の先には、一台のバイク。

キーは既に刺さっている。湊と美奈子がバイクを見る間に青年はメットインから二人分のヘルメットを出し、湊と美奈子の方へ投げて寄越した。

「行くぞ」

「うん。あの！ありがとうございます！」

疑問に思う暇は、今は無い。故に湊は短くすべき事を告げて、ヘルメットを被るとバイクに跨がる。美奈子もまた、湊の言葉に小さく頷くと青年に向けて礼を放つてからヘルメットを被った。

シートに跨がり、ハンドルを握るのは湊。美奈子はその湊の後ろに座り、腰へ腕を回す。サイドカーがある訳でもなし、バイクは一台のみなのだから致し方ない。

エンジンが掛かる。力強い駆動音と共に、震動が身体を揺らした。

前を向く。前方は信号の無い横断歩道があり、今ちようど一人の見覚えのある女性が歩道から横断歩道を渡ろうとしている所だった。

あれは確か、前にイベントで会った——舞耶という雑誌記者。

湊と美奈子が舞耶の存在に気付くとほぼ同時、舞耶の方も不意に顔を上げて湊と美奈子の方を見る。

今はイベントの時のように私服ではなく制服姿である上に、湊も美奈子も既にヘルメットを被っている。勿論声を掛けた訳でもなかったが、舞耶は湊と美奈子を見つめてから今まさに横断歩道を渡ろうとした足を止めた。

視線が逸らされ、ルージュの引かれた口許に浮かんだのは月のような微笑み。横断歩道の前で立ち止まったまま、鞆から手帳を取り出してぱらぱらと捲っている。それはまるで、横断歩道を通り切ろうとしている湊と美奈子の存在に気付いていないかのよう——気付いていないフリをしているかのようだった。

「……急ごう」

「うん。……そうだね」

美奈子が腕に力を込め、湊はそれに頷いてからヘルメット越しに小さく舞耶へ頭を下げて前へ向き直す。

「ところで、運転した事あるの?」

「一回、美鶴のバイクに乗った事が」

「それと免許は」

「舌噛むよ」

答えが無いとはそういう事だ。そもそも、抗議も何も言っていない状況でもない。

従って、ただ今は向かうべき所へとバイクを走らせた。

11：剛毅（2）

冷えた外気が、吐く息を白く変える。

空は灰を被ったような曇り。それがまるでこの先行きを示すように、零れ落ちそうになる感情に歯を食い縛って堪える。

綾時の導きに従って、辿り着いたのは人気の無い高原。時期が時期なら、季節の花々で観光客等も賑わっていたのかもしれない。しかし今は酷く荒涼とした空気が漂い、綾時に言われるまでもなく湊と美奈子もただならぬ気配を感じ取っていた。

バイクを適当な所へ停め、少し高さのある高原の道を走る。その先には、あの橋の上で出会った小松原という男と——諒が居た。

どうして、諒がこんな場所に。他人の事は言えないというのは放り投げて、思う。今日は洵の授業参観の日ではなかったか。洵の授業参観に諒が行ってくれるのだと、今朝も慎が嬉しそうに話していたのに。

『——心残りを、作っておきたかったのだと思う』

心の奥底、綾時が告げる。そのほんの少し悲しげな気配に、綾時が「それだけではない」と示していたのが誰なのか悟った。

諒と小松原、両者は対峙し、どちらも半透明に透けた存在——ペルソナを召喚させている。そしてその形勢は、明らかに諒の劣勢だった。

小松原の背後に控えた、巨大なペルソナから放たれた幾本もの鋭い刃が諒を襲う。諒もペルソナを駆使して撃ち落とそうとしているが、如何せん数が多過ぎる。

このままでは——そこから導かれる結果を今は想像せず、行動を以て蹴り飛ばす事を選んだ。

「ネコシヨウグン！」

「ナーガ！」

電光石火で第一波の攻撃を薙ぎ払い、来たる次撃を雷撃が撃ち落とす。

驚きに瞠目する諒の方へは振り向かない。諒には背を向け、湊と美

奈子は小松原の前へと向かい合った。

思わず身体が強張ってしまうのは、どうしたって仕方の無い事だろう。心の内から波立った感覚が押し返されて、緊張が更に高まるのを感じる。目の前の男、小松原にはまるで生気が感じられない。それだけでも異様ではあるが——何よりもその後ろに、まるで「影」のように伸びるモノ。

向こう側が透けて見える半透明の体躯は大きく、戸建一軒分程の丈はある。中心部から幾筋もの光る線のようなものが伸び、一本一本が意思を持つかのように動く。一際突き出た天頂部が底知れぬ深淵を表すようにゆらゆらと波打っていた。

これはまるでペルソナではなく——シャドウのようだ。

否、ペルソナもシャドウも、元々は同一のもの。集合的無意識の内の精神の一部であり、自己の側面でもある。ただ異なるのは、それがペルソナ使いという存在の制御下にあるかどうかだ。

目の前に居る小松原という男が、この異様な風体のペルソナに振り回されているというようには見えない。だが湊と美奈子は、小松原は「既にヒトではない」という綾時の言葉を覚えていた。

『自分の異なる一面を否定すればシャドウとなり、受け入れればペルソナとなる。けれど、彼は違う。彼は、それらを自らと認めるのではなく——自らを、肉体を持たないそれらとした』

卵が先か雛が先か、そうにも聞こえるような言葉だが、実際はそんなものでは済まされないとこの事を今まさに目の当たりにする。

おおよそ、常人には理解出来ない行為だ。肉体と精神——魂は必ずしもどんなものでも同一ではなく、その言葉が存在するように分かれていた事を何よりも湊と美奈子は理解しているが、同時に無関係では居られないという事も何よりも知っていた。

正しく常軌を逸した行いだ、だからこそ小松原は無意識と有識との融合などという事を行おうともしているのだろう。それが可能なのだと示すように、何よりも自らの肉体と共にヒトという制約を捨て去って。

召喚器のグリップを握る手に力が籠もる。ここで小松原を止めな

ければと、誰に言われる訳でもなくただ心の奥底からそう直感した。異様な見た目のペルソナ、異形のそれは標的を湊と美奈子に定める。貌の無い頭頂部が震え、空から降り出した雪が薄ら積もり始めた地面が抉れた。

顎下を狙うように、直下から闇色の鉤爪が襲い掛かる。湊はすんでの所で当たる前にバックステップで躲し、鉤爪を斬り払うように剣を振るう。美奈子はその間を縫うように前へと駆け出し、薙刀と合わせた二連牙を放った。

攻撃が異形めいた巨軀に吸い込まれる。鉤爪の攻撃をやり過ぎした湊は自らも続けて二連牙を放つも、その隙間を突いて光る幾筋の線が飛び出す。美奈子は湊が召喚器から剣を握り直すよりも、線の脅威が届くよりも早く薙刀を自分の方へ引き寄せ戻す動きと共に襲い来る線を巻き込んで薙ぎ払った。

「あれは……」

剣に持ち替え直した湊が、美奈子の薙刀に絡んだ幾本もの線を断ち斬る。そこから改めて間合いを取ると、異形の内部から何かが零れるように出て来るのが見えた。

人型をした半透明の姿。見た覚えがある。この綾風市に来た初日、歩道橋で悠美を襲っていた男の身体から表出していたペルソナだった。

どうして、このペルソナがこの異形のペルソナから出て来るのか。まさか同じワイルドの才能、否、違う。湊と美奈子とは違う。

あの統馬とかいうペルソナ使いが、複数のペルソナを使いこなす湊と美奈子をワイルドではなく違うものと思えば違えたのと同じように。これはワイルドの才故ではなく、複合ペルソナというものなのだろう。それも、統馬が語った通りだとするのなら——他人から、あの歩道橋で見た男から、ペルソナを奪ったという事。

新たに現われた人型のペルソナが襲い掛かって来る。湊と美奈子は一拍のみで呼吸を合わせ、ほぼ同時に左右から向かって来た光の線を放って来た腕ごと斬り落とし、湊は半透明に透けた胴体部へアサルトドライブを差し向けた。

攻撃が命中し、半透明の人型のペルソナが傾いで消えて行く。

こんな風に他人からペルソナを奪って、反転死体を生み出し、目的を果たそうとしているのか。胸中に苦い思いが広がり、しかし不意にある事にも気付く。

小松原の目的は無意識と有識の融合。小松原自身の他に統馬や沙季、壮太郎というペルソナ使い達を指揮下に置いて、他人からペルソナを奪っている。ペルソナが奪われた人間は反転死体となり、襲われる基準に「影抜き」の何がしかの要素が関わっている。警察は隠蔽しているようだが、ネットなどで既にリバーズ事件についての事は噂になっていった。その密やかな噂が人々の不安を煽り、無気力症候群を引き起こし——世界や人々に「死」を招き、それが小松原の言う無意識と有識の融合になる。

「……でも、それだと効率が悪過ぎる」

幾ら、狂人の世迷い言であり沙汰だとしても。それなりの筋が通っていないとならない。

思い出されるのは、先程倒した半透明の人型のペルソナとその元々の持ち主であったらう男と出くわした歩道橋での事。あの場には男と悠美の他、その場に倒れている警察官達が居た。リバーズ事件の事は世間には公表されてはいないが警察の間では捜査されているのだろう、とすると、あの時に倒れていた警察官は悠美を襲う男を確保しようとして返り討ちにされた可能性が高い。

湊と美奈子は己のペルソナを、ペルソナ使いではない人間に対して向けた事はない。だが、ペルソナは自らの心の鎧でもあるという。ならば、その心の鎧が無い状態で精神の一部とも言えるペルソナの攻撃を受けたらどうなるのか。

『心に、精神に直接ダメージを受ける。まるで無気力症候群に近い、廃人状態になる』

湊と美奈子の思考を引き継いで、綾時が淡々と残酷な答えを突き付ける。

そう。わざわざ対象を絞ってリバーズ事件を引き起こし、人々の不安を煽る事で無気力症候群を広げなくても、ペルソナを顕現する素養

の無い者達を片端から襲えば良いだけの話なのだ。それだけで無気力症候群の患者は増え、顕在化もしやすくなるのなら人々の不安だつて起こしやすくなる。ペルソナを覚醒させる可能性がある人間は無気力症候群になり難く、警察に協力しているらしい勢力に対ペルソナ使い候補として引き抜かれる恐れもあったのだろうが、未覚醒の状態ならまともにペルソナ使いへの対応も出来ないだろうから、「ついでに」襲つたら良いだけの事。その方が、わざわざ狙うよりも標的がバラける分、警察の捜査も攪乱出来る筈だろうに。

何処か、何かが良い違っている。全てを知る訳ではなくとも感じる違和に、今まで背後で無言で居た諒が口を開いた。

「……無意識と有識の融合、それ自体は目的ではなくただの過程に過ぎない」

諒の眼差しが、険しく小松原を見据える。

「無意識と有識という領域を、この現実に取り寄せるのも。素質ある者達を襲い、ペルソナを奪っていたのも。全ては、貴方は『彼女』を――」

「――黙れ！」

諒の言葉を、小松原が激しく遮る。先程まで一言も発しておらず、まるで幽鬼のようだったというのに、今は眼球が零れそうな程に目を剥き出しにしてこちらを睨んでいた。

瞬間、全身を震わせるような殺気が目の前から吹き上がる。それと同時に、真っ黒い鉤爪と光る線が襲い掛かって来た。

「フォルトウナ！」

「カハク！」

風が軌道を定めて切り刻み、炎が巻き上がって焼き尽くす。だが、足りない。今までよりも襲い掛かって来る数が段違い過ぎる。ペルソナ召喚と共に武器を振るって弾き返しているものの、それだけでは目の前の異形のペルソナへは刃は届かない。

「私だけではない！ 人々が、人間が望んでいるのだ！ 逃れられぬ不安に、この世界から消えてしまいたいと！ ならばそれを叶えてやろう、と！」

頭を振り乱し、小松原が叫ぶ。その瞳は既に焦点が合っておらず、何か違うものを、否、それすら見えていないかのようだった。

「そんなの、貴方が勝手に決めないで！」

「そんな風に、望んでいる人ばかりじゃない……！」

地面を這って襲い掛かって来る鉤爪を氷結で止め、生み出した氷の塊を足場にして前へ駆ける。

異形のペルソナが攻撃を受ける度にその身から姿の異なった半透明の人型が零れ、溢れていく。自らの意思を失ったように同じく襲い掛かるそれらを斬り伏せながら、召喚器を握り締めた。

「故に私を止めると？ ふ、ふははははは！ 実に……ああ、実に愉快で皮肉な事だ！ それこそ傲慢、自分勝手極まりないという行為ではないか！ 死の運命に逆らうなどと！」

嘲弄が酷く耳障りで、不快で仕方無い。

「ああ、ああ、そうだ、だから私は、その為に——」

本当なら、とうに動かなくなっている筈の身体と心臓。思えば痛過ぎて堪えられないから目を閉じると、瞼の裏に心の海から浮かび上がった黒い檻褸の外套を纏った骸骨が、しやらりと鎖を鳴らした。

「——『死』なら、もう抱いてる」

だから、もう言葉は聞きたくないと。

「アレス」

「ジークフリード」

引き金を引くタイミングは同時。被る仮面を替える事で、思っていたい自分を変える。

鉤爪の動きを止めていた氷塊が溶けていく。狂乱の軍神と勇猛な英雄が放つのは、広範囲にまで及ぶ強烈な斬撃。

「紅蓮華断殺！」

剣が、刃が、鉤爪と幾筋もの線を、異形を斬り裂いていく。千々に刻み、裂いて、降り積もる雪を巻き上げて払っていく。

そうして中空に巻き上がった雪が再び変わらず空から降る雪と共に地面に落ちていく頃には、小松原も、異形のペルソナの姿も無かった。

腹の奥に、まだヘドロのような嫌なものが溜まっている気分だ。何処までもこびり付いて来るようで、吐き気を催して来そうなそれを無理矢理飲み下す。堪えた所で、留まったまま何も変わらないとしても。

「うっ……い」

背中から聞こえた呻き声に、慌てて振り返る。その先には、膝を付いた諒が苦しそうに顔を歪めていた。

小松原との戦闘を優先した為に、諒の状態まで鑑みるのが後回しにしてしまった。ここに来る前に、大分負傷してしまったのかもしれない。

先ずは治療を、とペルソナチエンジをしようとした所で、諒の身体から現われたペルソナが大きく腕を振りかぶった。

「っ……い」

ペルソナ召喚を中断し、後ろへ飛び退いて距離を取る。反射的に構えを取りながら諒を見ると、諒は苦悶に満ちた表情で胸を押さえており、その身体からはペルソナが忙しなく透明度を変えていた。

諒のペルソナが腕を振りかぶり、手近な地面を叩く。地面が大きく抉れ、同時に諒が腕を押さえて苦しげな声を上げた。

——ペルソナの暴走。

こちらへ放たれるペルソナの砲門からの攻撃を避けながら、起こった事態に戦慄する。

明らかにペルソナの制御が出来ていない。制御の出来ないペルソナは使い手の意思を離れ、辺りに脅威を撒き散らすだけではなく使い手自身をも危険に晒す。

暴走を静めなければ。思うも、問題はその方法だ。ペルソナの暴走自体は見た事がある。だが、それをどうするのかまでは——脳裏に過ぎる選択肢はどうしても選ぶ事が出来ず、しかしどうするべきかわからずに居ると、新たな声が響いた。

「——兄貴——」

湊と美奈子が駆け付けた方向から、こちらへ向かって。息を切らせた慎が、走り寄って来るのが見えた。

12：刑死者

授業参観の日。兄、諒は来なかった。

だから代わりに慎は拓郎やめぐみ、叶鳴と共に洵のクラスまで授業を見に行ったのだが、その時間は慎達のクラスも授業のまったただ中は授業参観が終わり、自分のクラスに戻って来た慎達に待っていたのは教師からのお説教だった。

勿論、洵の為とはいえ授業を抜け出すのは宜しくない事だとは分かっているのですが、こんこんと降り注ぐ教師からのお説教を甘んじて受けてから教室に戻ると、そこに湊と美奈子の姿が無かった。

今日、湊と美奈子は休みではなかった筈だ。洵の授業参観に行く前、つまり授業参観が始まる前までは教室に居た気がする。

どうしたのだろう。他のクラスメイトに確認してみても、知らないという答えだけ。何故だか言い知れない胸騒ぎが慎を支配しながらも、授業を抜け出してしまった為に教師からそれ以上の中座は許されずに仕方無く授業に戻る。

そんなまいち座りの悪い心境のまま午後の授業を過ごし、授業が終わると慎は風の杜学園を出る。洵はめぐみと共に部活だ。結局授業が終わってから居ない湊と美奈子の事は気掛かりとしてありながらも、慎は綾風署へ向かおうと校門を出た。

授業参観に行くと言いながらも、結局来なかった諒。警察官という職業上、約束していても難しい事だつてあるだろう。それくらいは慎にだつて分かっている。

けれども、連絡のひとつくらいしてくれただつて良いのではないかい——そんな思いで居ると、不意に携帯が鳴った。

「もしもしっ！」

ろくすっぽ液晶画面も見ず、半ば反射のまま通話ボタンを押して電話に出る。

受話口から、ノイズに混じって声が聞こえて来る。聞き覚えのある少し低いその声を、兄の諒だと思った慎は通話口に向かって捲し立てた。

「兄貴!? 今何処に居るんだよ、今日洵の授業参観だって聞いてただろ!? それなのに、連絡も無しに——」

しかし返って来たのは、この綾風市の小高い場所にある高原の名前。繁華街でもなく他の周囲に何か目立ったものがある訳でもないその場所名のみを告げられて、慎は一気に混乱に陥る。

「は!?! ちよつ、ちよつと待てよ、兄貴! 洵の授業参観にも来ずに、何でそんな……」

『早く行け』

「はあ!? 何だよその言い草! って、もしもし!?!」

混乱のまま問い返しても、返って来たのは素っ気無いとも思える言葉だけ。慎の言葉を断ち切るように通話は切れ、後には無機質な電子音が届くのみだ。

何の連絡も無いまま洵の授業参観にも出ず、電話が掛かって来たと思えば言うだけ言って慎の言葉など一切聞かずに一方的に話を終える。理不尽にも程があるではないか。

一体何処に向けたら良いのか自分でも分からないもやもやとした気分を抱え、慎は電話口で言っていた場所をもう一度口の中で反芻する。本当、何だっそんな所に居るのだろう。顔を合わせたら絶対抗議してやろうと決めながらも、綾風市内を走る路面電車に乗ろうとした所で慎の脇に一台の車が止まった。

「……慎君?」

「映子姉ちゃん? どうして……」

車のパワーウィンドウが下がり、自分へと声を掛ける人物を見て慎は目を丸くする。

二階堂にかいどう 映子えいこ。北日本監察医務院の監察医で、慎や諒、洵とも昔からの家族ぐるみでの知り合いだ。この間、一緒に出掛けた時は綾風署に向向しているのだと聞いていた。

映子も慎を見て驚いたように目を瞬かせた後、乗って、と慎に車へ乗るように促す。そのやや急くような言い方に戸惑いつつ、慎は車の後部座席に乗り込むとシートベルトを締めながら助手席に乗る映子へと改めて声を掛けた。

「映子姉ちゃん。あのさ、兄貴から電話が掛かって来たんだ」

いきなり電話が掛かって来て、行き先だけ告げられて一方的に切られてしまった事。電話口から聞いた場所を慎が口にするると、映子は運転席でハンドルを握っていた刑事の男に目配せし、男もまた頷いてハンドルを切った。

法定速度はきっちり守ってはいるものの何とはなしに急いでいる感のある車に揺られながら、慎は映子から映子達も諒を追っているのだと聞く。そんな中で偶然とはいえ出会った慎から諒の居場所を聞くとは、何たる福音というものか。

「え……じゃあ、映子姉ちゃん達は兄貴が何処へ行ったのか、どうやって調べる心算だったんだ？」

今はこうして慎が聞き受けた早く行けと言われた場所に向かっているが、聞く限りでは映子達は諒の居場所を知らないまま探していたという事になる。その疑問に、映子は少し顔を曇らせながら答えた。

綾凧署で諒と擦れ違った伊藤刑事によると、諒は車で何処かへ出掛けたらしい。行き先までは分からなかったが諒の車にはGPSが付いているから、今はその位置情報を使って追っているのだという。

それは、法律的に大丈夫な事なのだろうか。

あまりその辺りには明るくない慎ですらそんな懸念が浮かび上がるものの、それ程までに今はそう言っていられない状況なのだろう。そう思うと、胸元に燻ったままの言葉にならない焦燥がますます強まるようだった。

それにしたって、諒はどうして恐らく一人であんな場所に行つて――居るのだろうか。それも、行くと言っていた洵の授業参観の日に、慎や洵どころか職務上で関係ある映子や他の刑事達にも何も言わずに。

「……兄貴は、いつだってそうだ。俺達には何も言ってくれない。関係無いって、突き放して……」

慎には分からない。諒が何を考えて、行動しているのか。洵の授業参観に行くとき答えた時だって、確かに少し様子がおかしいとは感じたが諒から何も言ってくれなかった。

あの時、もう少し慎が食い下がって問い詰めていたのなら。諒は話してくれただろうか。否、そうはならなかっただろう。

きつと、俺達の事なんて邪魔だと思っていたんだ。

「……僕には、弟の君の思いは分からないが」

膝の上で作った拳を強く握り締める慎に対し、ふと、運転席から声が掛かる。

バックミラー越しから、運転席でハンドルを握る男と慎の目が合う。男の顔には見覚えがあった。綾風署でもだが、アイドルを見に行った時にも居た刑事だ。確か、周防と呼ばれていた気がする。

「……少しは署長の顔も立ててやってくれないか。弟に心配を掛けさせてしまうような、不甲斐ない兄なのだと思われなくなかったのだから」

「だからって……俺だって、洵も……弟だって、兄の力になりたいと思う」

何か出来ると思える程、思い上がってはいない。寧ろ、何も出来ずに足手纏いになってしまいかもしれない。そう思っているかもしれないから、諒は慎や洵を遠ざけたのかもしれない。だとしたら、そんな諒の思いを踏み躪る行為なのかもしれない。

それでも。兄に、諒の力になりたいという思いと、邪魔に思われているようにとも、ただ兄の事を思っているからと——そう伝わっているように、思いたくて。

ただただもどかしい思いばかりが募る中、車は慎が伝え聞いた高原まで辿り着く。雪が降り出して地面が浅く白くなり始めた緩い坂道を駆け上がっていくと、そこには諒の姿があった。

「——兄貴——」

思わず口から出た声に、視線の先、諒が振り向く。

否、振り向いたのは諒だけではない。湊と美奈子も居る。どうしてこんな所に諒と、と慎が思っていると、諒の身体から、半透明の大きな砲身のような腕を持った「モノ」——ペルソナがこちらを見定めたかと思うと大きく咆哮した。

「ぐっ、う……うう……うう……！」

諒が苦悶に呻く。そして諒が苦しむ程、諒の身体から現われたペルソナが暴れる。それは無理に押さえ込もうとするのを、反発しているかのようなだった。

砲身のようなペルソナの腕が強く振り下ろされ、地面を大きく抉る。地に積もった雪が舞い上がり、益々視界を悪くさせた。

「諒！」

「二階堂君、危険だ！ 近付くべきじゃない」

明らかに尋常ではない様子に映子が諒の許へ駆け寄ろうとし、周防が前に出てそれを止める。慎に対しても同じだ。降りしきる雪の中、走り出しそうになった慎を険しい顔付きの周防によって前を遮られた。

危ないのは分かっている。これが安全な状態だとは、誰も思いやしないだろう。だが、目の前で諒が、兄が苦しんでいるのに。それを黙って見ているといえるのか。それに、と周防に制止されながら見た前方、湊と美奈子の姿があった。

湊と美奈子は、どちらも厳しい顔付きで諒のペルソナと対峙している。何か現代日本とは思えないような武器っぽい物を携えているが、今はそれを使っている様子も無い。理性を失ったように暴れ狂う諒のペルソナに対して、慎達の方には向かわないように回避しつつも誘導しているようだった。

だが――

「うっ……！」

「っ、あ……！」

避けながらも、それ以外の行動を躊躇っていたのだろう。僅か一瞬、諒のペルソナが更に激しく腕を振り、そこから放たれた衝撃のよなものが湊と美奈子を襲う。放たれた方角には慎達が居た為に回避を取らなかつた湊と美奈子はペルソナの攻撃を受け、何メートルか吹き飛ばされた。

何とか受け身は取ったようだが、湊と美奈子、どちらも地面に膝を付く。攻撃を受けた際に何処かを掠めたのか、雪原に点々と赤い血が落ちた。

「あ……」

雪降る空、白く地面が染まる中で零れた血の赤さが一際鮮やかに網膜に焼き付く。

ああ、あの時も——雪が降る中で、赤い血が舞った。

「……あの時……？」

頭の中に掠めた思いに、誰よりも慎自身が呆然と呟く。

あの時、あの時つていつだ？ 10年前の綾凧市。10年前のあの時も、雪が降っていた。

海に居た。寒い日だった。まだ幼かった慎と、父と母と、それから諒と。

他愛ない日々。それがずっと続くと思っていた。それが崩れたのは、あの時。

中空に絡め取られた二人の男女。父と母の身体から浮かび上がる半透明のペルソナ。酷く苦しむ父と母を救いたくて、助けたくて、自分は「仮面」を呼び起こして——それから。

鮮やかな赤が、雪降る地面に舞った。目の前で血が飛び散った。二人の男女が、父と母が。

そうしたの自分、その所為で父さんと母さんは。

急速に慎の身体が、冷えて来る感覚がする。上手く頭が働かない。どうして今まで忘れて、どうしてこんな今になって、思い出してしまったのか。

分からない。ただただ呆然と立ち竦むしかない慎には、自分に向けられる声が酷く遠くに聞こえた。

滲む視界の中、いまだ暴れる諒のペルソナが砲身状の腕を向ける。その射線上には、慎だけではなく映子や周防、湊と美奈子も居た。

「慎……映子……逃げろ……」

微かに聞こえる諒の声が酷く苦しげで、まともな言葉にならずに苦悶の唸りに変わる。

ペルソナによる攻撃の気配。いち早くそれを察知した湊と美奈子が、少し危うくなった足取りで慎の前に立つ。それは諒の警告を聞きながらも、決してそれを選ばず慎達を庇うようだった。

どうして。先程、湊と美奈子もペルソナの攻撃を受けたばかりなのに。幾ら何がしかの心得があるからといって、無事に済むとは限らないだろうに。逃げた方が良いのに、と思う反面、心の奥深くで正反対の思いが去来する。

——駄目だ。

逃げるな、と心の海に揺蕩う自分が囁く。

諒を、兄を止めなければ。このままでは、兄は皆を傷付けてしまう。そんな事があってはならない。自分のように——自分の大切な人々を、失わせるような事をさせてはいけない。

けれども今度は、自分は父と母だけではなく兄までこの手で失わせてしまうのではないか？

過ぎる恐れが、行動を躊躇わせる。どうしたらいい、このままではいけないと分かっているのに、一体こんな自分に何が出来るという？ 目の前に広がる情景が、スローモーションのように酷くゆっくりと動いている気がする。砲身状の腕を向ける諒のペルソナの動きが僅かに止まったように、否、その動きが少しズレたように思えたのも瞬間、慎は気付くと自らの「仮面」^{ペルソナ}を意識から呼び起こしていた。

「ッ——ペルソナ……！」

自らの内から、半透明の騎士姿のペルソナが現われる。

これが、もう一人の自分というのなら。自分の大切な人々を傷付けさせないという想いを乗せて、慎は願う。

エメラルドグリーンの体色が前を遮る周防を擦り抜け、更にその前に立った湊と美奈子の頭上を飛び越す。そして携えた大剣は、暴れ狂う諒のペルソナを一薙ぎした。

大振りの一閃。騎士姿のペルソナの攻撃を受けた諒のペルソナの動きが止まり、泡沫に帰るように姿がゆっくりと薄らいで消えていく。そうしてその不確かな像すらも完全に見えなくなり、地面へ向かって身体を傾けていく諒の姿に慎は慌てて駆け寄った。

「諒兄ちゃんー！」

傾く身体が完全に地面へと倒れ込んでしまう前に慎は前方から諒の身体を抱き留め、同じく追い付いた映子と周防が両脇から支える。

「慎……」

「諒兄ちゃん、俺っ、俺の所為で、父さんと母さんが……！　なのに俺、ずっと……！」

呼び掛ける諒の顔が酷くぼやけている。否、違う、ぼけやているのは、慎自身の視界だ。

きっと、兄は知っていたのだ。諒もあの時、あの場所に居たから。それなのに自分はずっと、今まで忘れて、覚えていないままで。

何故忘れてしまったのだろうか。あまりにも辛過ぎたから？

それはただの言い訳ではないのか。辛過ぎるのは、それを目の当たりにした諒だって同じだった。だけど、忘れてしまっていたのは自分だけだった。決して忘れてはいけない、自分の過ちなのに。

こんな自分を、弟を、嫌ったって、疎んだって仕方が無い。だから諒は、慎を遠ざけたりしたのだ、と。

感情がぐちゃぐちゃになって、上手く言葉が紡げない。次第に嗚咽に変わり、言葉すらままならなくなった慎を諒は強く抱き締めた。

「違う……！　あれは、お前の所為なんかじゃない。絶対に！」

腕の中、強く否定する兄の熱を感じて慎の目からまた涙が溢れる。

そうやって、どれ程時間が経ったのだろうか。漸く呼吸も気持ちも落ち着いて来た所で映子からハンカチを差し出され、慎は皆に思い切り恥ずかしい姿を晒してしまった事に気付いて顔を赤くする。もう既に随分とみっともない顔となってしまったのでハンカチで顔面周りを拭く所作もそこそこに、諒の方を伺うと諒も随分と落ち着いたようだった。

「迷惑を、心配を掛けたようですまなかった」

諒が左右に居る映子と周防に謝り、映子は少し涙ぐみながらも微笑む。周防もまた、小さく首を横に振った。

「いえ。……兄想いの、良い弟さんだ」

「……ああ。弟達の兄で在れて良かったと、そう思うのはおかしいだろうか」

「いいえ。弟を尊敬する、兄が居たっていい」

間近に褒められて、つい込み上げて来そうになった恥ずかしさと照

れ臭さを誤魔化そうと慎は視線を巡らせる。その慎や諒から少し離れた位置に湊と美奈子が居るのを視界に収め、多少落ち着いて来た事もあつて疑問が湧き出て来た。

「あ……そういえば、有里達は何でここに？」

しかも、授業をすつぽかしてまで。今まで長らく忘れてしまつていた出来事を思い出した事や兄の方に意識を取られてしまつていたが、考えてみるとどうして湊と美奈子がここに居るのか分からない。顔見知りといつても、そこまで親しくはなつていないだろうから諒が教えたという事も無いだろう。慎自身にしても電話があつたから、ここに来られたのだ。

「バイク、使えつて貸してくれた人が居たから」

「いや、移動手段じゃなくて」

そつちも確かに気になりはするが、何でここに居るのか、その目的というか。分かつて言っているのか、それとも普通にボケているのか分からない。

「大体、ここに来た時にはバイクなんて見掛けなかつたぞ」

「……え」

「ちゃんと停めた筈、だけど」

湊と美奈子が目を瞬かせ、視線を彷徨わせる。慎もその視線を追い掛けてみるものの、そこにやはりというべきかバイクは見当たらない。慎がここに駆け付けて来た時も同じだ。ここは現在、観光シーズンでもないから他に出入りがあつたらそれなりに目に付く。車を停めた時にも諒が居ないか周囲はしつかり確認したが、バイクがあつたような覚えは無かつた。

わざわざそんな嘘を吐くとも思えないから湊と美奈子を疑う心算は無いが、そこに無い以上無かつたと言うしかなく。心なしか釈然としないような表情をしている湊と美奈子の様子は気になりつつも、続いて慎は諒へ声を掛けた。

「兄貴もさ、この場所と早く行けつて言うだけ言つて電話切るとかあんまりだろ」

駆け付けた時には尋常ではない様子だったので、その前もかなり状

沈的には余裕が無かったのかも知れないが、それにしたってもう少し一言くらいあっても言いだろうに。

やや落ち着いた事もあって、甘えも混じって拗ねたように口唇を尖らせて慎は抗議してみるものの、諒から返って来たのは怪訝な顔だった。

「電話？ 何の事だ」

「え、だって、携帯に……」

電話が掛かって来たから、と慎は自分の携帯を取り出して着信履歴を確かめる。

液晶画面に連ねられた電話番号。その最新の着信履歴の番号は——
— 慎自身の携帯番号だった。

自分の携帯電話に、自分の携帯電話番号で掛けた？ 有り得ない。普通、あの急いだ状況下であったとしても、そんな事はしない。する意味などない。した所で何になる、古く廃れた何かの占いでもあるまいに。

電話が掛かって来た時は、慌てていたから着信番号を確かめる余裕も無かった。だが、慎は確かに掛かって来た電話から声を聞いて、ここまでやって来たのだ。

それなのに、諒はそんな電話などしていないと言う。その証拠に、履歴に残されていたのは諒の携帯番号ではなかった。ならば誰、とさっぱり心当たりなど浮かばない中、電話の中で聞いた短い言葉を思い出す。

電話の声は、場所と、それから「早く行け」と言っていた。だが、電話の主が諒からなら、「行け」ではなく、「来い」が正しいのではないか。だとすると、この声は、一体。

「で、でも、兄貴の声で……声に、似てた……」

「……あ」

困惑のまま小さく言葉を零すと、不意に湊と美奈子が短く声を上げる。それに怪訝に目を向けると、まだ些か釈然としないようながらも少し何かに気付いたようで湊と美奈子は他の方向へ視線を寄せた。

「バイク、貸してくれた人にちよつと似てる」

寄せた視線の先には、周防という刑事が居た。

バイクなど見掛けなかったし、他に誰か来たような様子も無かったというのに、まだ言うのか。大体にして、周防は慎と映子と共にここに駆け付けた。しかも車を運転して、だ。慎が乗り込む前から、映子と共に行動していたようなので、タイミング的にもそんな事は出来そうにない。

ちよつと似ているというだけで、幾ら何でも失礼だろう。そう思つて湊と美奈子を慎は諫めようとしたが、言葉と目を向けられた周防は何か気付いたようにはつと息を飲んだ。

「声……に、バイク……まさか」

「どうしたんですか？」

「！、い、いえ……何も」

尋ね掛けてみるものの、周防から返つて来たのは何でもないという答え。しかしその挙動はそわそわとしていて明らかに不自然極まりなく、何も無いと言うにはあまりにも説得力が無かった。

今も落ち着き無くサングラスのブリッジを指で押し上げる周防の様子を眺めながら、慎はふと車内で交わした言葉を思い出す。

弟の慎の思いは分からないと言つた周防。あれは、慎の思い自体が理解出来ないのかと思つていた。だが、あれは自分が「弟」ではないから、弟としての気持ち分からない、と言つたのではないだろうか。ならば、周防は「弟」ではなく、その反対。彼もまた——諒と同じ、誰かの「兄」だったのだろうか。

色付き眼鏡の下に浮かべる瞳の感情を洵の「兄」ではあるが同時に諒の「弟」である慎は読み取れず、ただ言葉なく見つめるのみとなる。それから諒へ目を向けた映子が、諒に寄り添いながら柔らかに声を掛けた。

「……ねえ、諒。慎君は……洵君も、貴方が思っているよりも子供じゃないわ。もつと、話す事があるんじゃない？」

「そうだな。……慎」

映子の言葉に静かに頷いた諒が慎を見つめ、慎もまた諒を見て頷きを返す。

「うん。洵とも、沢山話そう。だから——」
一緒に帰ろう。

雪はもう止んでいる。あれほど空を暗く覆っていた灰色の雲も少しずつ風に流れていき、残った雲間から眩しい太陽の光が差し込んで地面を明るく照らしていた。

13：死神（1）

洵と共に買い物済ませ、家まで戻る。

普段通りに鍵を出して解錠をしようとする、そこで玄関の鍵が開いている事に気付いた。

出掛ける時に、戸締まりはきちん確認した筈だ。不審に思つて玄関のドアを開けると、玄関先に出掛ける時には見なかつた男性用の靴が一組揃えて置いてあつた。

「兄貴……？」

「違う、諒兄ちゃんじゃないよ。こんな靴は持つてなかつたと思うから」

思わず入院している筈の諒が戻つて来たのかと思つて呟く慎に対し、洵がそう答える。

確かに言われてみると、今置かれている靴に見覚えは無い。勿論、慎や洵のものでもない。

だとしたら一体誰のものなのか。つい玄関先で思案に暮れて突っ立っていると、背後から声が掛かつた。

「どうしたの？」

振り返ると、そこには湊と美奈子が立っている。今日は湊と美奈子と共に、入院している諒の見舞いに行くという事で神郷家まで来て貰う事になつていた。

「あれ？ 時間にはまだ早かつただろ？」

「言つてた通りだと思うけど」

「え？ あれ？ そうだっけか？」

時間を確認しながら、伝えていた事を思い返す。その日は午前中買い物に行くからと慎が時間を決めたのだが、うっかり時間を言い間違えてしまつたらしい。自分の失態だという事に思い至つてあからさまにぼつの悪い表情を浮かべた慎に、洵が呆れた目を向けた。

「慎兄ちゃん、すっかりしなよ」

「うっ……ごめん。時間、言い間違えたみたいで……今、買い物から帰つて来たばかりなんだ。病院に行く用意がまだ出来ていないか

ら、取り敢えず家に上がっててくれないか？」

些か居堪れない気分になりながら慎がそう伝えると、湊と美奈子は構わない、と頷く。そこから改めて、何故玄関先に立っているのかという話に戻った。

買い物から帰って来たら、掛けた筈の鍵が開いているという事。玄関先に見知らぬ靴があつて、それは恐らく諒のものではないという事。それを聞いて、湊と美奈子が表情も変えずに相槌を打った。

「泥棒かな」

「撃退用に傘とか取つて来ようか？」

これに何と言えば正解なのだろう。取り敢えず、そこまで先制過激派でもない慎は必要無いからと宥めつつ、それでも多少不安はあるので湊と美奈子に付いて来て貰う旨を伝えて家の中に入った。

キッチンから何か音がする。リビングは荒らされていない。しかもこの音は家捜しというよりは、と音がするキッチンの方まで向かうと、そこには見知らぬ男がフライパンを握っていた。

「よつ、おかえり」

慎達に気付き、男が振り返つて軽く片手を上げる。あまりにも家に馴染み過ぎていて、慎は一瞬自分の家じゃなかったのかと錯覚した。

「た……だいま……？」

「何返事してるの」

つい反射的に答えてしまった慎に向ける、洵からの目が冷たい。いや、確かにそんな返事をするべき状況ではないとは思っているのだが。

いまだ呆けたように突つ立ったままの慎に、男は気にした風も無くフライパンを振る。キッチンに香ばしい匂いが漂いながら、男は更に言葉を続けた。

「悪いが皿を出してくれないか」

「え、いや、その前に……誰？」

男の名は、真田 さなだ あきひこ 明彦。警察に籍を置き、諒とも知り合いだという。

今日は真田の見舞いの為、ついでに諒の弟達である慎と洵の様子も見に来たという事だった。

「それはそれとして住居侵入罪」

「しかも勝手に冷蔵庫漁ってる」

湊と美奈子のコメントが手厳しい。実際、その通りではある。真田自身が警察に籍を置いているが、これは普通にお巡りさんを呼ぶ案件になっただけだ。

「しかし何だ、冷蔵庫にはあまり物が入っていないなかったな。ちゃんと栄養もあるものを摂っているのか。入っている水も古い、育ち盛りの若いもんが生命の根源たる水を軽んじるんじゃない」

「いや、だから買い物行って来たんだって」

一体何なんだこの人は。自己紹介はされたが。

買い物に行って買って来た物を仕舞いながら、慎は思わず溜め息を吐く。勝手に家が上がって来て、勝手に冷蔵庫を漁られた上に勝手に料理までされて、その上に栄養がどうか言われる筋合いまでは流石に無いと思う。

「有里達は昼、済ませて来たんだろ？」

「うん」

「食べて来た」

時間的に、病院に行ってからでは昼食には遅過ぎる。予想して来た答えに、慎は昼食にと買って来た袋を見遣る。チェーン店で、最近綾風市に出来たというハンバーガー店だ。それは元々慎と洵と二人で食べる為に買って来たから良いのだが、その上に真田が勝手に昼食を作ってしまったのでそれをどうしたら良いのかと頭を悩ませる。

「だよな。食べて来てなかったら、良かったら……って思ったけど……」

「食べるよ？」

「余裕」

「そっかー」

食べられるんだな。しかも余裕なんだな。何か普通に納得してしまった。

あっさり問題が解決してしまいがら、慎と洵、真田に湊と美奈子はテーブルを囲んで昼食を摂る事にする。

「遠慮せずに食べ。あり合わせだが中々いけるぞ」

そう言われても、その材料は神郷家の冷蔵庫から出したものなのだが。それであり合わせだがと言われても。しかも取って置いたお高めのカニ缶まで使われて、慎は地味に落ち込んだ。

「牛丼かプロテインくらいしか言わなかった真田先輩が栄養価がどうとかなんて……」

「でもチャーハンな辺り、やっぱり明彦先輩って感じ」
「だね」

ひそひそと、湊と美奈子が何やら言葉を交わし合っている。昼は食べて来たと言いなながらも普通に一人前を苦も無く平らげていく様に胃袋凄いな、とのんびりと思いを飛ばしていた慎は、そんな湊と美奈子を洵が些か訝るような目で見ていた事に気付かなかった。

「御馳走様。プロテインとか混ぜてなくて良かった」

「プロテイン混ぜるって何だよ」

「生憎と持ってなかったから……俺とした事が」

「……うわあ」

持つて来てなくてよかった。心底からそう思う。

ボリユーム的にはそんなに変わらない筈なのに先に湊と美奈子が食べ終わる中、真田が慎を見る。

「いふからでふように——ぐっ、ふ！」

「御行儀悪いですよ？」

「水どうぞ」

チャーハンを食べながら何か言い掛けた真田に対し、美奈子がテーブルの下で何やら行い、湊がコップを掴んで中の水を真田の口に突っ込む。

床の辺りから何やら鈍い音がしたから、多分、真田の足を踏んだかしたのだろう。勿論確かめる勇氣は足りてないのでしない。上に下に、同時に攻撃を受けた真田は奇妙な呻き声を漏らして暫くの間、テーブルの上に突っ伏した。

大丈夫なのだろうか。それに湊も美奈子も何かやたら真田に容赦が無いというか、微妙に扱いが雑というか。ここで出会ったばかりな

のに、第一印象があまりにもアレだったからなのだろうか。そうではないような気もするが、そうあってもおかしくない気もして、慎は結局そつとしておく選択肢を取る。

そうして昼食も食べ終えて、諒の見舞いに行こうとなった所で今度は洵から突然の宣言が放たれた。

「僕、行かないから」

「えっ」

「夕飯の準備とかしないといけないし」

「そんな長く居る訳じゃないし、夕飯の準備くらい俺も手伝って……」
「良いから僕の事は放っておいてよ!」

弟からの思わぬ強い語気に、慎は驚いて二の句が継げなくなる。果然と目を見開きながら見つめて来る慎に洵は数瞬、はつとしたように気まずげな表情になったものの、それ以上何も言わずに一人で二階へと上がって行った。

「洵、どうしたんだよ……兄貴の事、心配してたのに」

「何かあったの」

洵が上がって行った二階の方を見ながらいまだ少し呆けたように慎が呟くと、食器の片付けを終えた湊と美奈子が様子を尋ねて来る。やや声も大きくなってしまうから、先程のやり取りも聞こえていたのだろう。

何かあったのか、と訊かれてこの所の事を思い返してみても、慎には心当たりがいまいち思い当たらない。ただ、慎には思い当たらなくとも、洵には何かあったのかもしれない、と思うとあまり洵を悪く言う事も出来ずに悩ましげに首を横に振る事しか出来なかった。

「そんな覚えは……確かにこの間の夕飯は、ちよつと……あんまり、美味しく出来なかつたけどさ」

「まだおにぎりしか作つちや駄目だったんだね」

「それ本当に食べ物になってた?」

「なあ、地味に馬鹿にしてないか?」

「世の中には生命の危機を感じるのを意識なく作る人も居るから」

「明らかに馬鹿にしてるよな?」

絶対馬鹿にしている。しかも冗談っぽくなく、妙に真顔なものだから慎はちよつと傷付いた。

一先ず、慎も二階へと上がって洵の部屋の前で呼び掛けてみる。返事は無い。そつとドアに耳を寄せてみると何か話しているような声が聞こえて来たが、慎に向けてではないだろう。何となくそれ以上は無理に言うのも良くない気がして、仕方無くドア越しに自分達が出掛けたら玄関に鍵を掛けるように伝えてから再び慎は一階へと下りた。

慎が下りると、既に用意も終えた湊と美奈子、真田が待っていた。湊と美奈子から、どうだった、と直接声には出さずとも含んだ視線を受けると、慎は静かに首を横に振った。

「やっぱり、付いて行かないみたいだ。折角、有里達と行くって事だったのにごめん」

「大丈夫、気にしてないから」

「帰ったらまた改めて話したらいい」

「そうだな、兄貴にもちよつと相談してみる」

気にした風も無く答える湊と美奈子に慎は少し安堵して胸を撫で下ろし、諒にも話そうと頭の中で話題のひとつに加えつつ慎は手早く用意を済ませる。真田も慎の返答を聞いて、特に気分を害した様子も無く首肯した。

「そうか、君の弟は行かないのだな……偶々、そういう気分の時もあるだろう。病院までは、俺が車を出すから乗って行くといい」

13：死神（2）

真田の車に乗せて貰い、慎達は綾凧市の中央病院に向かう。

そこで事前に聞いていた病室まで向かうと、ベッドには諒、その傍らには映子が居た。

「兄貴。映子姉ちゃん」

「慎君。それに……」

慎の入室に気付いた映子の視線が、慎と共に来た人物へ向けられた。

「……真田」

「こうして顔を合わせるのは久々だな、神郷」

映子の視線に対して、言葉を継いだのは諒。諒の言葉を受け、真田が浅く頷いて応じる。

「俺は暫く、他で時間を潰して来る。先に弟と話していてくれ」

真田は映子へ向けて軽く頭を垂れた後、病室を出て行く。映子も真田に対して一礼で返しながらもその後少し眉を寄せて諒の方を見た事から、映子は真田とは面識が無いらしい。

病室のドアを後ろ手に閉め、慎は諒が居るベッドの傍まで近付く。

映子が出してくれた椅子に座りながら、慎は諒と向き合った。

「真田さんがここまで車を出してくれたんだ。それから、有里達も一緒に」

「……居ないようだが？」

諒の視線が、胡乱に病室内へ巡らせられる。今、この病室内に湊と美奈子は居ない。当たり前と言えば当たり前前の指摘に、慎は少し困ったように頭を掻いた。

「えーっと、何かちよつと他に病院内で用事があるみたいで……直ぐ来るって言ってたけど」

一緒に病院には来た。ただ、病室までは一緒に来なかった。

病院内で用事とは、しかも湊と美奈子どちらともとは、一体何だろうか。何処か怪我をしたとか、具合が悪いのかと訊いてみたが、そういう訳ではないらしい。どんな用事なのかは分からないが病室の場

所は教えてあるから、その内やって来るだろうとは思うが。

「洵は今日、付いて行かないって……でも、映子姉ちゃんが来てるなら、俺も行かなくてよかったかな」

「そんな事無いわよ。慎君が来てくれて、諒も嬉しいもの。そうでしょう?」

映子がくすくすと楽しそうに笑い、それに諒が無言で眼鏡のブリッジを指で押し上げる。

入院している間、身の回りの物は病院からのレンタルで済ませるの
で必要なものはほとんど無いそうだ。その間は綾凧署の署長である
諒の仕事は副署長や他の者が分担して回しているらしく、当然の事な
がら病院内へ職務上の書類などを持ち込む訳にもいかないので少々
ワーカホリック気味だった諒は入院中、時間を持て余しているらしい
とも映子が呆れ交じりに語ってくれた。

「大丈夫よ。いざとなったら、私が家まで取りに行くから」

「……兄貴、わざと映子姉ちゃんにそうさせてないといいけど」

つい諒には聞こえない程度に慎が小さくぼやいてしまった所で、病
室へ湊と美奈子が入って来る。

「こんにちは」

「有里君と有里さん……だったわね。お花まで、諒の為にありがとう」
「ついでだから」

病室に居る諒と映子に挨拶と共に軽く頭を下げた後、美奈子が映子
へ見舞いの花束を渡す。

湊と美奈子が来た所で、諒は自らの具合を話し出す。暫くは入院が
必要で、退院をしても直ぐには復帰出来ずに自宅療養が必要だとい
う。

当初、懸念されていた後遺症は今の所起こっていない上にその気配
も無い。長くそんな危険を抱えていた諒に対して慎は憤りも感じた
ものの、このまま適切に療養を続けていたなら問題なく日常生活を行
えるとも知って安堵した。

そうして諒から説明がなされた所で、一旦沈黙が下りる。長らく話
もあまり出来なかった状態が続いていた為にこうして腰を落ち着け

て話をする意識してしまうと、何から切り出すか躊躇ってしまう。沈黙の中、そわそわと落ち着きなく口籠らせる慎の一方で、先に口を開いたのは湊と美奈子だった。

「授業参観の日、総出で見に行っちゃって」

「後で凄く怒られたって」

「あ、有里達だって、その日は授業サボってただろ!？」

「よりにもよって、切り出す話がそれになるのか。」

思わず慎は赤面して腰を浮かすものの、発言主である湊と美奈子は慎からの指摘に気にした様子は無い。

確かにその通りではあるのだが、というか後で湊と美奈子も教師から注意されたらしいのだが、まず話すのがそれではなくたって良いだろうに。

病室内にも関わらず、つい声を上げてしまった慎とまるで素知らぬ顔の湊と美奈子を諒はそれぞれ眺め、静かに目を細めた。

「……随分と、迷惑を掛けてしまったようだな」

「兄貴……」

「……そうね、本当に」

そう言って、映子は座していた椅子から腰を浮かせて立ち上がる。

「担当医に、もう少し話を聞いて来るわね。それから諒、この子達は私が送って行くという事でいいでしょう?」

「……映子、お前にも随分と世話を掛けてすまない」

「……いいのよ。貴方は昔から、何も知らせようとしない癖に傍に置きたがるんだから」

あまり表情を動かさず、ただほんの少し眉根を詰めた諒に、映子は困ったように笑って首を振る。

互いに言葉も、浮かべる表情の動きも多くはない。しかしそれ以上に言葉の無い何か、二人にしか分からないものを以て交わされる空気に何となく慎は居心地悪く身を小さくした。

「やっぱり今日、俺も来ない方が良かった気がする」

「空気読み人知らずになってる?」

「じゃあ自分もって言う所?」

「有里達のは何か違う」

ぼそぼそとそんな事を話していると、諒がわざとらしく咳払いをして口を閉ざす。別に何も言っていないと言わんばかりの態度を心掛けようと居住まいを正し、それに映子が小さく笑って病室から出て行った。

「そうだ、洵ともちゃんと話してくれよ。今日付いて行かないって言ってたのだから、洵も色々感じた事が沢山あったからかもしれないし……」

「……分かった。確かに、洵にも悪い事をした」

諒が頷いて応じるのを見て、慎は少し安堵に胸を撫で下ろす。

何故洵があのような態度を取ったのか、慎はまだ量りかねている。諒にはああ言ったが、実際として諒が原因なのだとは分からない上に慎としても決め付ける気は無い。ただ、慎相手ではなく諒になら洵も慎には言い難い事を話せるかもしれないし、諒が洵とも話す事で慎が抱えていた懸念が少し減った気がしてそれだけでも有難かった。

そこで僅かばかり空気が緩んだのも束の間、ベッド上の諒の表情が真剣なものへと変わる。

「訊きたい事があるのだろう。多くを隠し、言わなかったのは否定しない。今日、全ての事を語り切れはしないだろうが——」

それでも、もう真実を隠せぬままでは居られないから。

諒の面持ちにつられて、慎の表情にも身体にも緊張が走る。その傍ら、湊と美奈子は紡がれる諒の言葉を、ただただ表情無く聞いていた。

13：死神（3）

陽が沈み、夜が覆い、影は生まれる。

「オルフェウス」

冥府よりも暗い深層から生まれ出でたシャドウを断ち切り、赤々とした炎が焼き払う。

人気の無い暗い場所が少しの間明るくなり、シャドウと炎が消えると同じくしてまた元の暗さへ戻る。後には再び何も無かったかのような静けさが戻った中、溜め息のような呼気が漏れた。

あれから——小松原を退けてから。シャドウはいまだ出現し、無気力症候群の人々は増えている。

無意識と有識を融合させるといふ小松原の企みは阻止した筈なのに。今もシャドウの出現は収束せず、人々の「何処かへ消えてしまいたい」という希死念慮にも近い思いは広がるばかり。

小松原は退けたが、稀人と呼ばれるペルソナ使い達がまだ居るからだろうか。稀人達の行方は現在、搜索中だという。元々は小松原が出資していた孤児院に居た者達らしく、リバス事件が綾風市を中心として起こっている事から主な潜伏拠点も綾風市の何処かなのだろうという予想だ。指示する小松原が居なくなつてからもあるのか、リバス事件も今の所は起こっていなかった。

既に、稀人達の潜伏先は幾つかピックアップが済んでいるという。今はそれらを一カ所ずつ潰している最中で、稀人達が見つかるのも時間の問題——その筈、なのに。

小松原の企みも、稀人達の行いも。実は、シャドウの出現や人々が無気力症候群となっているのは関係無いのだろうか。小松原や稀人達を止めた所で、「此処」に居るのは何の意味も無く、人々の不安から来る死への衝動は止められないというのか。

まるで、かつてのあの時のように。12体の大型シャドウを全て倒したら、影時間が終わると信じていた時のようだ。

イゴールには初日の綾風市に来た際に会ったきりで、あれから何の音沙汰も無い。勿論、力を司る者とも。

ベルベットルームの住人らの導きは無く、ただ在るのは自らと魂を代償にして深く沈めた死の化身のみなのだろう。

剥き出しにしたままの武器を布に巻き直し、周囲に他のシャドウの気配が無い事を確認してから今夜は寝起きしているマンシヨンへ戻る事にする。

『それでいいの？』

心の奥底、綾時が静かに問う。

問い掛けて来る意味は分かっている。その上で、何も言わずに口を噤んで自分自身に向けた問い掛けにすら無視をする。

それで良いのかと問われても、ならばどうしたら良いのか。そんな事を問い返した所で、答えてくれるものなど何処にも居ない。

まるで迷いの森の中。先の見えない、深い霧のただ中で宛ても無い何かを探すようだ。

そんな思いこそが、他ならぬ「影」を招くのだと知っていても。

14：節制（1）

夕食時。慎は諒と洵、三人でテーブルを囲んで夕飯を共にしていた。

揃って夕食など、いつ振りだろうか。諒が入院していたのもあるが、それ以前も諒が忙しく夕食を一緒になどという事は中々無かった気がする。それが原因はともかくとして、こうして食事を兄弟三人で摂る事がこそばゆくも嬉しい気持ちに満たされるのを感じながら、慎は諒に話を切り出した。

「それでさ、茅野の実家に行かないかって話になって……」

以前、肝試しをした時の事。学園内のガラスが割られていたり、設備がおかしな状態に変じていた際、学園には設備点検の業者が入った。あれの原因が結局何だったのか慎には知らされないままであったので不明のままだが、その学園内の設備点検のついでに寮内も点検を行う事になったらしい。それが今週末の予定であるらしく、その間は寮に居る生徒達は他の場所で過ごすさないといけないのだという。

そんな中で、寮住まいのめぐみからちょうどテストも近いからとテスト勉強会も兼ねてめぐみの実家に来ないかとめぐみから話があったのだ。同じ寮住まいの拓郎も、ちょうど良いからと話を受けて一緒に行く事になっていた。

「分かった」

「えっ」

「訊いておいて何だ。お前は前も……」

「うっ……わ、悪いと思ってるって……」

食事時にもかかわらず、始まった小言に慎は小さく呻いてから慌てて自らの非を認める。

天城旅館へ温泉旅行に行くという話になった時も、洵の授業参観の話を持ち掛けた時も。了承した諒に、相談を持ち掛けておきながら本当かと疑ったのを諒はすっかり覚えていたらしい。三回目も同じ反応をするのは慎としても流石に一言言いたくなるかもしれないと思うし、自分が悪いとは思っている。とはいえ御説教を貰うのは好きで

も何でもないので早く終わらないかと溜め息混じりに項垂れる慎に
対し、洵がくすくすとおかしげに笑っていた。

「有里先輩達、来られないのは残念だね」

「有里達なら、勉強しなくてもまた学年トップになっていそうだ」

めぐみの実家へと行くのは、話を持ち掛けたためぐみ自身と、慎、洵、
拓郎の四人。叶鳴に、湊と美奈子は行かない。

叶鳴はスピーチコンテストも近くなつて来たので、一人で集中した
いのかもしれない。そう思うと無理に誘うのも憚られた。

湊と美奈子にしても同様だ。他に予定くらいあつたつて、おかしく
はないだろう。風の杜学園では話す事も多いが、いつでも慎と行動し
ているという訳ではない。色々と活動的なようだから学園内に限ら
ず、外に知り合いも沢山居そうだし、あまりプライベートに無遠慮に
立ち入るのは良くないというのも分かっている。

頭では分かっているのだ。けれど、それでも。

「でも……何か少し、寂しいな」

ぼつり、とそんな呟きが口から零れる。

慎としては同じ時に転校して来た事もあつて、それなりに仲を深め
て来た方だと思う。多分、好かれているとまでは自惚れていなくとも、
嫌いだとは思われていない筈だ。

なのに湊と美奈子から感じる不思議な感覚は、いまだ消えないまま
で。まるで自分自身にすら、「仮面」を被っているような。

人にはそれぞれ「自分も他人も知っている部分」だけではなく、「自
分は知っていても他人は知らない部分」や「自分が知らなくとも他人
は知っている部分」、「自分も他人も知らない部分」もあるという。だ
から慎が知らない部分があるのは、ある意味で当たり前なのだろう。
もしかしたら、湊と美奈子も気付いていないのかもしれない。

それが慎に、何に対してなのかわからない寂しく悲しい気持ちを抱
かせていた。

「それで、えーと……茅野の実家っていうのが八尾って所にあるって
言っていたから、集合時間も含めてこの時間には家を出ると思う」

「……八尾、か」

「……兄貴？」

予定を話している時は何とも無かったのに、めぐみの実家の地名を言った所で諒が何か考え込むように眉根を寄せる。

どうしたのだろうか。確かに綾風市から多少遠くはあるが、温泉旅行に行った稲羽市よりはずっと近い筈であるのだが。口許に手をあてて思案気になった諒に慎が少し不安になって呼び掛けると、諒は僅かな沈黙を置いてから、いや、と首を横に振った。

「くれぐれも先方に迷惑を掛けないようにな」

「う、うん。それは勿論」

当然だ。世間一般の良識くらいは持ち合わせている。

戸惑いながらも頷く慎に向け、諒は静かに見つめて更に言葉を続けた。

「それから……気を付けて行って来い」

「……分かった」

市外へ出掛けるのはこれが初めてではない。許可を出した以上、諒も必要以上にあれこれ言う気は無いのだろう。

ただ、向けられた言葉が慎には何処か気になって、諒も何処か気にしているように聞こえる。

——あれから、雪降る中で慎のペルソナが諒のペルソナを断ち切った後から。

お互い、10年の欠けた時間を埋め合わせるように言葉を交わした。

10年前の事は勿論、諒からも諒自身が慎や洵に隠していた事も。だが10年という歳月はあまりにも長過ぎて、諒も病院での入院期間がやや長くなってしまった事もあって充分に全てを話せたとは言えない。今取り巻くこの状況だって、中々受け入れ切れないままなのだから一気に多くを知ってしまったたら慎一人では受け止め切れずに壊れてしまうのではないかと不安になったくらいだ。諒のこの態度も、まだ話していない部分に掛かっているのだろう。

それが分かったから、慎は反発せずに静かに頷く。今はまだ話しきれなくとも、きつと話してくれる時が来る。そう信じていて、そう信

じられるから。

14：節制（2）

八尾。その地名は八方の尾根が合流する地であったからとされ、谷筋が集まったその地は山々に囲まれて今も古い造りの家々があちこちに見られる場所であった。

「なあ、ちよつと休憩しようぜ」

「拓郎、少し前もそう言っただけでなかったか？ ……って言っても、俺も集中力保たなくなつて来た……」

めぐみの実家。古き良き日本家屋の二階にある部屋で、慎と拓郎は机の上に教科書やノートを広げたまま突っ伏す。

既に陽は暮れている。綾風市から八尾まではそれなりに距離があつたので、ここに到着したのも早い時間ではなかつたもののテスト勉強を始めてから随分と経っていた。

元より真面目だとは思うが勉強が得意だとはお世辞にも言えないので、どうしたって長時間となると集中力も切れて来る。ぐったりと情けなく呻く慎と拓郎を、洵は困つたような笑みで、めぐみは呆れ顔で眺めていた。

「もうっ、それじゃ今度のテストの結果がどうなつても知らないんだから」

「そうは言つてもよー……」

「そうだ、茅野。本当に良かったのか？ 邪魔になつてないといいけど」

ぶつく拓郎の横で、慎はめぐみにそう問い掛ける。

めぐみからの誘いに甘える形で乗つたとはいえ、他人の家に上がる以上少なからず気にはなる。諒から先方に迷惑を掛けないようにと言われた事もあり、改めて確認してみるとめぐみは少し迷つたように口籠もつた後に頷いた。

「いいの。わたしも一回、家に帰らないとって思つてたし……皆が来てくれた方が有難かつたから」

「……そっか。一宿一飯の、つて言う訳じゃないけどさ、上がらせて貰っているからには俺達が手伝える事があつたら言つてくれ」

「ありがとう、神郷君」

他の者が居てくれた方が有難い。普通、ただ自分の家に帰る時にそんな事は言わない。10年もの間、訪れていなかった家に戻って長らく会ってなかった兄と顔を合わせた慎には何となく感じるものがある。

それが何なのか、当のめぐみにしか分からないものだろうから慎にはそれとなく感じる事しか出来ない。ただそれでも、お節介なのだとしても、他の人間が居てくれた方が有難いとめぐみが言ったように、他人だから何か出来る事があるかもしれない。故に深く追及せずと言いつ添えた慎に対し、めぐみは小さく笑みを浮かべて礼を告げた。

まだテストの範囲は全て確認し切れていない。もう少しだけ進めた方が良さだろうか、と考えた所で、一階から声が掛かった。

「めぐみー、母さんが忘れ物していったみたいなんだ。追い掛けたらまだ間に合うから、渡してくれないか？」

「はい」

声の主はどうやら、めぐみの父からのようだ。呼び掛けに答えながらめぐみが立ち上がると、洵も腰を上げた。

「あ、じゃあ僕も一緒に……僕も気分転換、したいし」

「おっ、それじゃオレ達はDVDでも観てようぜ。オレ、持って来たんだ。ちよつと古いけど、イイぞ」

妙案だとばかりにむくりと突っ伏していた頭を上げて楽しげに鞆を漁り出す拓郎に、めぐみがすっかり呆れて溜め息を吐く。

「……はあ、もう。勉強する気無いんじゃない。じゃあ洵君、ちよつと行って来ようか」

そう言つてめぐみは洵を連れ、一階へと降りていく。

残された慎と拓郎はというと、テスト勉強をするかDVDを観るかの二択では当然楽な方を選びたくなるのが人間というもの。したがって、拓郎が持つて来たDVDを二人で観る事になった。

拓郎が持つて来たDVDはロボットアニメだった。慎はその手にはあまり詳しくなかったが、どうやら少し年代的に古いものようだ。あれこれと楽しそうに語る拓郎につられて、中々深い内容につい

慎も引き込まれてしまいそうになる。

ただ、心の何処か。奥底で何か引つ掛かる感覚に何となく落ち着かず、外を見遣った所で――外から、大きな音が響いた。

「!? な、何だ!?!」

「何かあつちの方向から……見に行こう!」

洵とめぐみは外へ出掛けた筈だ。何処へ行つたのかまでは分からないが、ざわめく胸は落ち着かずに身体は行動を急かさせる。湧き上がった心配に、慎と拓郎は急いで一階へ駆け下りて外へ出た。

この辺りの地理には詳しくない。方向音痴ではないが、物凄く感覚に優れている自負がある訳でもない。それでも心の奥底へ打ち寄せ、何か、慎を向かうべき方へと導かせていた。

山間に位置するこの地域は、家もあまり多くない。山々に囲まれた道路を辿るうち、青い欠片が飛び散つたのが視界の端に映つた。

「セイリユウ!」

湊の声が響き、それによつて喚ばれた猛々しい龍が強い風を巻き起こす。

辺り一帯を吹き飛ばすかのような風に一瞬足が止まり掛けるものの、銃らしきものを構えていた湊と美奈子が慌ただしく走っていく先を見て慎は目を見開く。そこには、めぐみの母と彼女を庇うようにして覆い被さっているめぐみ、それから脱力したようにへたり込んでいる洵の姿があつた。

「クソツ……! また、邪魔をして……!」

「壮太郎、早くしろ」

それだけではない。更に奥、湊が起こした強風を向けた方向――そこには10代から20代前後程度の者達が居た。その中には、以前にカラオケ店で見て慎達を襲つて来た少年の姿もある。だとすると、あの者達はペルソナ使いなのか。

前に慎達を襲つた事もある壮太郎と呼ばれた少年が忌々しげに舌打ちし、仲間らしき青年を抱えた大柄の男が急かす。その者達は近くに乱雑に止めたというよりも無理矢理止めさせられたようなバンに乗って走り去り、更に後ろから遅れてやって来た幾台かのパトカーが

サイレンを鳴らしながらその後を追って通り過ぎていった。

一体何があったのだろうか。思いながらも、今は洵やめぐみ達の事を優先すべきだ。慎と拓郎が洵とめぐみの許へ駆け付けると、既に先に湊と美奈子はその傍に寄り添っていた。

「リヤナンシー」

美奈子が、湊が持っていたのと同じ銃らしきものの引き金を引くと、黒衣の女が現われる。それと共に淡い緑の光が満ち、洵やめぐみを柔らかく包んだ。

「おかあさん……？」

少し呼吸が落ち着いたためぐみが薄らと目を開き、めぐみの母を見つめる。めぐみの母は呆然としたような表情で、身体に覆い被さっためぐみを見つめ返していた。

「めぐみ……あんた……」

「おかあ、さん……良かった……無事で……」

めぐみの表情が、安堵に綻ぶ。呼吸は落ち着きながらも少し動くには辛そうでやや眉を詰めためぐみに、めぐみの母の顔が瞬く間に今にも泣きそうに歪んだ。

「ああ……あの時も……あんたが助けてくれたんだね……？」

「……大丈夫だと思うけど、医者に診せて」

「早く」

震えた涙声を漏らすめぐみの母に、湊と美奈子がそう急かす。

出した言葉は短く、その面は無表情に近い。だが心なしか顔色は悪く、腰元のホルスターへと銃を仕舞ったその指先は、小さく震えていた。

もう少し離れた距離に居たら、気付かなかっただろう。比較的近くに居たからこそ気付けた感情のさざなみを感じ取り、慎は敢えて強い語気でめぐみの母を再度急かした。

「おばさん！ この辺りの病院や医者は!？」

「あっ……そ、そうだね……」

ようやく我に返っためぐみの母が、携帯を通して医者と呼ぶ。

携帯の通話口越しに洵やめぐみの事を説明しながら、慎は洵を背負

うと湊と美奈子の方を見た。

「……有里達は怪我、無いか？」

「大丈夫だから」

「平気だから」

「つつても、後で実は……みたいな事もあるかもしれないだろ。ついでに医者に診て貰いや良いし、めぐみん家で一緒に待ってようぜ」

めぐみを背におぶりながら、拓郎が言う。それに湊と美奈子が小さく頷いた所で、遅れてやって来た車から真田と戌井が降りて来た。

「慎……お前達もここに来ていたのか」

真田が慎達を見て、微かに眉を潜めて呟く。それを見て、慎は思わず目の前がカツと熱くなるのを感じた。

「あんた……！　まさか、有里達を巻き込んだのか!?　どうしてそんな!!」

真田が諒と知り合いなのは知っている。その諒がリバーズ事件を、ペルソナ使い達に関わる事柄を追っていた事を協力関係だった真田も知っていると後から諒に聞いた。それに諒は、湊と美奈子がペルソナを使う事を間近に見ている——つまり、それを真田に話している可能性が高い。その上、ついさっきまで他のペルソナ使い達が居て、それを追っているような様子だとするのなら。

たとえ察しが良くない方だとしても、おおよその推察は付く。声を荒げて慎が真田に詰め寄ると、その前を戌井が遮った。

「慎君、落ち着いて。それに、どちらもどちらとも意思なんだ」

「……っ！」

制止する戌井に対しても、慎は睨むような視線を向ける。

風の杜学園寮の管理人である戌井。まさか真田と知り合い、否、関係者だったなんて。ペルソナを使えるといってもただの一般人ではないか。慎に伝える謂われなど無いと分かっているも、それなら尚更、湊と美奈子は、と思った所で視界の端に真田と戌井を見つめる湊と美奈子の姿が映った。

平坦な無表情。真田と戌井、二人に向ける瞳が——感情は滲んでいない筈なのに、何故だかとても、悲しく寂しげに見えて。

それが慎には酷く見ていられないような気持ちになって、真田と成井から距離を置きながら洵を背負い直した。

「……ともかく、茅野の家まで行きましよう。話は、それから聞きますから」

14：節制（3）

陽はとつぷりと暮れて、代わりに夜の帳が下りる。

深夜、布団から起き上がった慎はトイレの為に二階から一階に降りていた。

急いで呼んだ医者の見立てによると、洵とめぐみは身体の消耗、つまり疲労状態ではあったが怪我も無く命には全く別状が無かった。めぐみの母に至っては何ともなかった。なので、何かあったら病院へ来るように、と言い結んで、医者は直ぐに帰ったのだった。

トイレに向かう途中、仏間でめぐみとめぐみの母が何か話しているのが聞こえる。あまり大きくない声量だからか、どんな話をしているのかまでは分からない。

何を話しているのだろう。気にはなるが、折角の母娘間の会話だ。わざわざそれを妨げに行こうと思える程、慎も無粋ではない。故に邪魔しないようになるとなるべく音を立てず、仏間を通り過ぎてトイレに向かう。

そうしてトイレを済ませた後、布団に戻ろうと来た道を戻る途中、縁側の方が何やら明るいのに気付いた。

月明かりにしては明る過ぎる。外の電灯にしても、縁側までそこまですっきり照らす程ではない。淡い青の明かりに誘われるようにして近付いてみると、何やら話し声が聞こえて来た。

『全てを掬い上げる事を望んでも、それが出来るとは限らない。知っているだろうか？』

「……でも、そう望んで、そうすると選んだから」

「それが、そう選んだ責任で、此処に在る意味だと思おうから」

『……だとしても僕は、そんな顔をして欲しくないな』

囁きにも似た小さな音量の話し声。

湊と美奈子と——後は誰だ？

不意に頭に掠めた疑問に慌てて慎が縁側まで駆け付けると、湊と美奈子が縁側に座っていた。

淡い青色の吊り提灯が暗い縁側と湊と美奈子の顔を照らす。慎が

縁側に来た事に気が付いた湊と美奈子が、少し首を傾げて慎を見た。「どうしたの?」

「えっ……と、その、話し声が聞こえたから」

些か言葉を詰まらせて答えながら、慎は辺りに視線を巡らせる。

縁側に居るのは、湊と美奈子のみ。他に誰か居た様子は無い。その筈なのに、他に誰か居たような——そんな気がしてならない。しかし湊と美奈子しか見当たらなかった以上、他に誰か居たのかと問うのも何故だか躊躇われて、そちらの疑問はぐっと飲み込む。

「……、座つても良いか?」

「別にいいけど」

湊と美奈子が座っている場所の傍を指さして問うと、短く許可の言葉が返る。慎はそれを聞いて湊と美奈子と同じように縁側に座り込みながらも、直ぐには次の言葉が出ずに黙り込んだ。

吊り提灯の明かりで、縁側周りだけが仄明るい。周囲は静かだ。元々山間部で辺りに建物も少ないからだろう。時々虫の音が聞こえて来るくらいで、後はこの場に居る者達の静かな呼吸音が耳に届いていた。

「……洵と茅野の事、ありがとな」

無言はそこまで続けられなかった。そう切り出した慎に、湊と美奈子は暫く無言の後に首を横に振る。

「でも」

「御礼なんて」

「洵と茅野を助けてくれただろ。……怒ってる、思ってるのか?」

何か口籠もるように口を閉ざす湊と美奈子に、慎は言葉を重ねる。続けた問い掛けに、湊と美奈子が顔を上げて慎を見た。

対称的なのに、酷くそっくりで、否、「同じ」に見える顔。何処までも平坦な無表情にも見える顔は、どんな感情が浮かんでいるのか分からない。否、そうではなく、感情を滲ませない為に無表情の仮面を被っているのか。

——だとしたら。それはとても、悲しい事だと慎は思う。

「……あのさ。俺は……何も出来てないのかもしれないけど」

「そんな事無い」

否定は間髪入れずに来た。慎に対しての言葉は直ぐに返るのに、その反対は躊躇するなんて。形容しがたい矛盾に、慎は何とも言えずに口許を引き結ぶ。

医者を呼び、洵とめぐみを診せた後。慎は真田と戌井から、ここに来ていた理由を聞いた。

あの、稀人と呼ばれるペルソナ使い達。あの者達は人為的にペルソナ能力を取り付けられた者達であり、研究自体は10年前に頓挫したらしいがそのペルソナ制御に「とある薬」が必要なのだという。その薬を製造していたのは、取締役がかつて人工ペルソナ使いを作り出す研究にも携わっていた事もあるひいらぎ製薬。これまでは同じく人工ペルソナ使いを生み出す研究をしていた小松原 啓祐——表向きは九条 稀也と名乗っていたらしい人物が秘密裏にひいらぎ製薬の社長、柊に対して半ば脅しに近い形で製造、融通させていたらしい。しかし、人工ペルソナの制御に必要な薬は非合法な代物。表には出せない物を製造していると、そんな噂であり真実が流出してしまった。その結果が、いつだったかのひいらぎ製薬社長の息子達の誘拐事件。そしてそれをきっかけに、ひいらぎ製薬社長である柊は今までの己の行いを告白すると共に、人工ペルソナ制御の薬の製造停止を決めた。

そこから、薬を融通されなくなった事。同時に小松原が行方不明になった事。その二つによって、痺れを切らして強引に制御薬を求めて来るであろう稀人達を捕まえる為にひいらぎ製薬と薬の取引という囷捜査を行った。この八尾という地を選んだのは綾風市よりも人口が少なく、ひいらぎ製薬の使わなくなった工場があるのでそこを取引場所として交渉した為らしい。

しかし、取引の最中に稀人達の中でペルソナ暴走が起こり、やむなく介入を早めた事によって捕縛作戦も稀人達に知らせてしまった。ペルソナが暴走した仲間を抱えて逃亡する稀人達を追っていた所で、偶々そこにめぐみの母や洵、めぐみが居て——巻き込まれてしまった。

「有里達の所為じゃない。有里達は守ってくれたし、有里達のお陰で

助かったんだ」

真田と戌井からは、ここに来ている理由だけではなく巻き込んでしまった謝罪も聞いた。

それについてはまた色々と思う事があるものの、今は決して湊と美奈子の所為ではなく、自らを責める必要など無いと慎は強く告げる。

慎達が駆け付けた時の湊と美奈子の行動を見て、湊と美奈子の所為だと責めるような人間だとは慎自身も思いたくないし思われたくない。そんな事を言うのは、あまりにも無責任で八つ当たりだとしても幾ら何でも酷過ぎる。

それに、今ここで湊と美奈子の所為にしてしまったら。今まで慎が、諒が、きつとそれ以外にも。湊と美奈子によって助けられた事を、救われた事を——此処に在る事を、否定してしまう。そんな事を、慎には出来る筈も無かった。

「だから、改めて礼を言わせてくれ。洵の兄として、茅野の友達として」

頭を下げて礼を言う慎を見つめる湊と美奈子の眼差しに浮かぶ感情を、慎には分からない。こんな事を言うのも、所詮はただの自己満足かもしれない。それでも、湊と美奈子が不必要に自分自身を責めるような所は見たくなかった。そう、誰かが、「そんな顔をして欲しくない」と湊と美奈子に言っていたように。

「諒兄ちゃん……兄貴も、そう言うと思う」

湊と美奈子がどうして真田や戌井に協力しているのか、慎は聞いていない。どうして黙っていたのか、という思いはあるが、それを問いつめる気にはなれない。

血の繋がった兄、諒だつて長い間、自分や洵に何も知らせておらず、隠してばかりだった。実の家族ですらそうなのだ、出会って一年も経っていない赤の他人ならば尚更の事。

めぐみの実家が八尾にある事は、湊と美奈子には言っていなかったから知らなかっただろう。ただ、ここへ行く事を話した時の、諒の様子を思い返す。

諒はこの場所、八尾、という地名に対して、何か思う所があったよ

うだった。真田と諒は共にこの件に関して協力して追っていたから、今回の囹捜査についても知っていた可能性が高い。

それを知っていた上で、これでもしも慎と洵が八尾へ行く事を諒が許可しなかったら。知らないままの可能性もあるが、今回の囹捜査を知ったら慎は諒に怒って問い詰めていただろう。行かなかつた事で慎と洵が巻き込まれなかったとしても、だ。

だが、諒は八尾に行く事を許した。もしかしたら巻き込まれるかもしれない、という可能性があったにも関わらず。

だからきつと、あの「気を付けて行つて来い」という言葉は。勿論、慎と洵に対してでもあるのだろうが、諒も湊と美奈子を気に掛けていたからなのだろうと慎は思う。ペルソナが使えなくなって、今も自宅療養で出向けない諒自身に代わって、慎に湊と美奈子を気に掛けるように託したのかもしれない、と。

自分の兄の事ながら、不器用というか何というか。そんな事を口に出したら、洵に慎兄ちゃんも似たようなものでしょと言われそうではあるが。

「……誰かの、何かの所為だって、そう言っていられたら楽なのだろうけどな」

「うん」

「そうだね」

洵やめぐみを傷付けたのは、稀人達だ。だが、稀人達も元々は身寄りも無く小松原に引き取られたが故に人工ペルソナ使いとなり、その制御に苦しんでいる。「それしか選べなかつた」のなら、行い自体は決して許されないものではあるもののある意味では稀人達も被害者なのかもしれない。

それに、その人為的にペルソナを取り付けるといふ研究。諒が入院している時に見舞いに来たひいらぎ製薬社長の柊から話を聞いたのだが、何と慎の両親もその研究に関わっていたのだという。両親はあまりにも非人道的な研究に嫌気が差して、そういつた事から一切手を引いたが——正直、その話を聞いた時、慎は驚きを隠せなかつた。

あの父と母が。慎にとっては優しい父と母で、そんな気配など微塵

も感じなかったというのに。諒も知ったのは、両親の死後だったらしい。

その研究も元々は他の大きな何かからであるらしいが、父と母も研究に関わっていた事は違いない。ならば今までリバーズ事件が起こつて、多くの無気力症候群が起こつて、稀人達という存在が居るのも、慎にとつては無関係だと、自分達の事を放り投げて誰かの所為だなんて言えない。

口にした通り、明確に誰かや何かの所為にした方が、きっと楽なのだろう。他の誰かや何かに自分の判断を任せて、大多数の意見にそれが正しいかどうかなんて考えずに流されて、何もかもから目を背けて、全部どうでもいいかのように、自分なんてないかのように。

——けれども、そうしてばかりでは駄目だから。

「もしも」なんて可能性を考えても、今が在る以上考えたって仕方の無い事だと分かっている。けれども、今在る状況があるからこそ、「もしも」を考えてしまう思いだつて理解出来る。

それに囚われてしまったら、どうなるのだろう。有りもしないやさしい思い出に抱かれて、それが幸せだと思いかもしれないけれど、それを何かは嘲う。

「なあ、有里達も今日はもう寝よう。それで、一緒に綾風に戻ろう」

湊と美奈子と目を合わせ、慎は言う。見つめ返した湊と美奈子が頷くと共に、心の奥底に穏やかな波が広がった気がした。

「ところでこれ、どうやって消すの」

「えっ、点いてたんじやないのか？」

「勝手に点けられて」

「ええっ……コンセント直抜きは駄目だろうから……スイッチ、何処だろうな……」

勝手に点けられたとはどういう事なのだろう。多分、普段は使っていないからと縁側の通路の隅に置かれていた吊り提灯の明かりのスイッチを見つげようと、周囲を探し回る。

そんなこんなで少しバタバタとしていたのを、気付かれたらしい。仏間から出て来たためぐみとめぐみの母に見つかり、一体何をしている

のだと揃って呆れられてしまったのだった。

15：悪魔（1）

スピーチコンテストの日。

慎は拓郎とめぐみ、湊と美奈子の五人で綾風市の市民会館に来ていた。

スピーチコンテストに出る叶鳴は先に会場に居て、一緒には行動していない。始まるまで少し時間があるらしいので、その前に少し会っておこうという事になっていた。

「ほー、結構人、居るんだな」

「叶鳴、応援してるからね！」

「めぐみさん、ありがとうございます」

きよろきよろと辺りを見回す拓郎の横で、張り切った様子のめぐみが叶鳴に激励を入れる。何だかコンテストに出る本人よりもやる気に満ちた様に、少し困ったように戸惑いながらも叶鳴が嬉しそうに微笑んで頷いた。

二人から滲み出る微笑まじさに慎の方まで何だか温かな気持ちを覚えつつ、慎も叶鳴に声を掛ける。

「俺も応援してる。洵も連れて行きたかったけど……ごめんな」

「いえ、洵君も御予定があるでしょうから」

気にしていないというように穏やかに答える叶鳴に、つい慎は申し訳ないような罪悪感を覚える。

今日、洵はこの会場には来ていない。何と、出掛ける用事があるというのだ。しかも、よりにもよって当日に。洵も叶鳴の応援に行くと思っていた慎は当然慌てた。

どうして。何の用事だ。そういうのは早めに言うものだろ。そんな風に問い詰めた慎に対して、洵から返って来たのは突き放すようなもので。結局、洵の言う用事が何なのか詳しく訊く事も出来なかった。

洵とて、他の用事くらいはあるだろう。それは分かっている。だが、何の用事かくらい言ってくれた方がいいのに。帰る時間とか、まさか洵に彼女とか——考えれば考えるほどおかしな方向に思い詰め

ていく慎に、兄の諒は洵の事は見ているから、と声を掛けて来たのだった。

諒がそう言うなら、と慎は洵の事を任せながらも、それでもやはり気になるものは気になるもの。些か気もそぞろに、コンテストの参加者はこちらにというアナウンスを受けて叶鳴と別れて自分達も見学者用の席へと向かおうとすると、そこで声が掛けられた。

「アラッ、アナタ達……」

振り返ると、そこには以前出会った雑誌記者——舞耶が居た。

「天野さん？」

「取材つすか？ 何か珍しいってか……」

めいめいに挨拶を述べてから、拓郎が訝るように首を傾げる。

確かに拓郎の言う通りだ。舞耶が担当している雑誌は、こういう少しお堅めの催しは扱っていないと聞く。その疑問に、舞耶は他の者が急に来られなくなったからと答えた。つまりはピンチヒッターというやつらしい。

「へー……そりや大変だ」

「今回は偶々よ。アナタ達は今日、どうしたのかしら？」

「叶鳴が……前に天野さんとも会った友達が、このスピーチコンテストに出るんです。私達はその応援で」

「そうなの？ 凄いいじゃない」

当の叶鳴はここには居ないが、それでも褒められると嬉しいものだ。自然と笑みが零れる中で、慎は舞耶に話し掛けた。

「あの……天野さん。本の事、ありがとうございました。担当じゃないっていうのに、紹介までしてくれて」

慎が舞耶に持ち込んだのは、前に家の倉庫で見つけた両親宛の手紙の事。子供が書いた小説に挿絵を付けて欲しいというものだ。

あれから、手紙の差出人へと慎は良かつたら自分が挿絵を描かせて欲しいという旨の手紙を書いた。随分と前、10年前の手紙だ。行き先不明で返って来てもおかしくはなかったし、相手方もすっかりそんな事など忘れているだろうと思つて半ば以上は駄目元だったが、幸いというべきか住所も変わっておらず、そして相手方も両親へ宛てた手

紙の事を覚えていたらしい。少し経ってから、是非、という返事が来た。

だが、問題はその後だ。挿絵を描きたいと伝えて、是非という承諾を得た。その後はどうしたらいい。スケッチブックに自分なりに絵を描いて、それを送るのもいいだろう。しかし元々は絵本作家である両親に対しての頼みなら、本にして出版する事も考えていたのだろう。ならば、と思っても、慎自身にそういう出版だのどうのという知識は全く無い。

それでどうしたらいいのかと悩んでいた慎は、以前にアイドルのステージイベントで舞耶の名刺を貰っていた事を思い出す。あの時は何となく慎が皆の代わりに受け取っただけなので、全然意識はしていなかった。正直、ちよつと何処仕舞ったつげと探すにもそれはそれで時間は取られた。それはともかくとして、名刺を探した慎はほぼ勢いそのままに舞耶に連絡を取ったのだった。

「私は担当の所に投げただけだから、気にしないで。でも良かった、どうやら良く話が進んでいるみたいね」

「はい。……あ、実際にそういう話をしているのは俺じゃなくて兄貴……兄ですけれど」

明るく何でもないというように軽く片手を振る舞耶に、慎は恐縮しながらも安堵に胸を撫で下ろす。

舞耶が担当しているのは若者向けの雑誌。絵本は明らかに担当違いだ。その上、慎自身はイベントで他の皆と纏めて差し出された名刺を預かっただけ。大して親しくもない。普通に考えても相当凶々しい上に迷惑だっただろう慎の相談に、舞耶は快く聞いてくれた。勿論、快く聞いてくれたといっても舞耶は絵本やらそちらの出版担当ではなかったのだ。舞耶に担当を紹介して貰う形ではあったのだが。

今は、兄の諒が出版に関しての細かい話を出版社の担当や話を書いた者の家族と連絡を取って進めている。出版社にも、挿絵を描いて欲しいという家族にも、慎が連絡を取ったのは最初だけ。というのも、連絡を取ったは良いものの慎には出版に関する話の進め方など理解している訳がなく、困り果てた末に、洵の授業参観だった日から少し

経った時——兄がまだ病院に入院している時に、慎は相談を持ち掛けたのである。

諒が慎の話聞いて先ず見せたのは、驚き。それから、困惑と呆れと、僅かにくすぐったくなるような何か。その何かは、慎には分からなかったが。

実はという訳でもなく、慎は諒に相談をした時点で挿絵を付けたり出版したりという手の事はほぼ考え無しだった。当然のようにその事に関しては、諒からは説教を食らった。しかし小言は忘れないながらも、諒は慎の相談を決して無碍にはせず、「お前がそうしたいのなら俺は反対しない」という事と、「手紙の家族と出版社との連絡や打ち合わせは引き受ける」という了承を伝えて来たのだった。

相談を持ち掛けたのは慎自身ではあるのだが、元は慎が勝手に連絡を取ったもの。それなのに諒に負担を掛けて良いのだろうか——そんな風に心配した慎に対し、諒は再び小言付きで「お前も少しは兄を頼れ」と言われてしまったのはそれ以上慎から言える事は無かった。

実際、出版社や手紙の差出人とのやり取りは、諒の方がずっと適任であった。退院はしたものの、いまだ自宅療養の身。少しずつ仕事はしているようだが職務上、出来る事などたかが知れている。故に、取れる時間はたっぷりであった。更に言うと、警察署長という諒の立場も大分有利に働いた。諒も人との打ち合わせには慣れていた上に、療養中とはいえ警察官という職業は信頼を得るには抜群の効果を発揮する。諒が言うには、手紙の差出人とは勿論、出版社の方も絵本作家であった両親との縁があったかららしいが。

もしかしたら、諒は慎からの相談からというだけではなく、両親へ向けた依頼だったからというのかもしれない。慎と血の繋がった兄弟であるのだから、諒にとっても大事な父と母だから。

そんな訳で、慎は挿絵を描くのみに専念している——そういう話を舞耶にも明かし、慎達は舞耶とも分かれてスピーチコンテストの発表会場へ向かう。流石に開始時間近くなると人もそこそこ混み合ってきて、ただ見ているだけの慎も些か緊張した。

スピーチコンテストでは、叶鳴は入賞を取った。風の杜学園では珍

しいようで、学園でも話題になるかもしれない。そんな風に話しながら、慎は湊と美奈子と帰りを共にする。拓郎とめぐみ、叶鳴とは少し前の道で既に別れていた。

「……なあ、有里。有里達は……夢ってあるか？」

神郷家へ向かう道を歩きながら、慎はふと湊と美奈子に問い掛ける。

脈絡のない問い掛けだったのだろう。湊と美奈子が揃って、どういう事だとばかりに視線を向けて来て、慎は少し頬を掻きながら首を傾げた。

「ほら、進路の紙書くようになって言われただろ？ あれでさ、守本にも夢って何だって話になって」

スピーチコンテストの少し前の日。公園で偶然出会った叶鳴と、そんな話になった。

かくいう慎自身も、進路など他人に言える程決まっていな。叶鳴と話した時も、逆に慎の方が叶鳴は凄いと思ったくらいだ。恐らく、クラスや学年でもはつきりとした進路が決まっている者は多くないかもしれない。だから慎としては本当に、何となくという気持ちで話を振ってみたのだが——湊と美奈子の返答は、僅かに遅れてやって来た。

「——知らず、周の夢に胡蝶と為れるか」

「胡蝶の夢に周と為れるかを」

「え？」

突然、湊と美奈子の口唇から紡がれた言葉に、慎は目を瞬かせる。いきなり紡がれた言葉を繰り返す事も出来なかつたので、意味を理解するなど以ての外。しかし何処かで聞いたような気がして、戸惑いの後に頭を抱えて唸る。

「何か聞いた事あるような……」

「ついこの前のテストで出たばかりだけど」

「え!? 嘘だろ!? いや待った、今思い出すから!」

確かに聞いた事がある気がする。この間のテスト。もう記憶が既に怪しい。

うんうんと唸る事暫し。考えた時間の割に、思い出せた事項は僅かだった。

「えーと……古典の、漢文のやつだよな？　それで、何の………どういうのだったっけ………」

「蝶になった夢を私が見ていたのか」

「私になった夢を蝶が見ているのか」

分かりやすい現代語訳で言われると、何となく思い出して来た。ただ、やっぱり何となくなので細かい所までは全然である。ついでにその時の古典の成績も思い出したくない。

というか、何の話をしていたのだったか。話が逸れていないか。

「有里、夢は夢でもそっちじゃなくて——」

話題を戻そうとするも、そこで湊と美奈子が前方へと目を向けるので慎は仕方無く前を向き直す。ちようど、家に着いてしまった。

玄関先には偶々出ていたのか、それとも今から帰るからという慎の連絡を聞いていて待ってくれていたのか、諒と洵が立っていた。二人の姿を見て、じゃあ、と踵を返す湊と美奈子を言葉少なに見送り、慎は諒と洵の許まで向かった。

「………慎」

「兄貴。ただいま………それから」

洵も、と言い掛けた慎の口許が、音を失う。

「慎お兄ちゃん、おかえりなさい」

耳に届く、柔らかな声。

それは弟の声だった。目の前に居るのも、間違いなく洵だった。けれど何故だろう。何か違う。別のようで、そうではないような、ずっと前から知っているようで。

思わず次句を継げずに持ち上げた視線は、何とも言い難い表情をしている諒を映す。

何よりも慎自身が、何と言ったらいいか分からない。

間違えようのないのに、ずっと前から知っていて、きつとその筈なのに。その先を決して口に出す事は出来ない。言ってしまったら、それこそ「違う」気がして。

恐らく区別はあっても絶対的な違いなど無いような——それこそ
湊と美奈子が言うような、「胡蝶の夢」のようだった。

15：悪魔（2）

綾風の総合中央病院。総合受付から離れた些か隅の方で、湊と総司は向き合っていた。

総司の休憩時間は以前に空のランチボックスを返しに行った時に聞いている。スタッフ用の休憩室に寄る際には一階の総合受付を通るといっているので、湊は一階で待ちながら病院内での業務の邪魔にならないように総司の休憩時間を見計らって声を掛けた。

「これ、お裾分け」

総司が湊から差し出された袋を覗き込むと、袋の中には幾つかミカンが入っていた。

このミカンは、めぐみから貰ったものだ。厳密には八尾にあるめぐみの実家に行った後、寮へ送られて来た。段ボール箱一杯に詰め込まれて送られて来たミカンはめぐみ一人では到底食べきれるものではなく、皆でどうぞという添え状の通り湊と美奈子含めた他の者達で分ける事になった。持って来たミカンは、少し多めに貰って来た分だ。ちよつと多めに貰っても良いかと聞いた時、それで足りるのかと言われた。自分だけで食べ尽くすつもりだと思われるのだろうか、そこまで食い意地張っているようには見せていないつもりなのだが。勿論食べられないのかと言われるが。

それはさておきとして、袋の中のミカンから視線を持ち上げた総司は湊を見た。

「良いのか？」

「前、そんなにお返し出来なかったし」

前、とは空のランチボックスを返しに行った時の事だ。ちゃんと洗って返したものの、御礼という御礼は出来ていなかった。温泉旅館に行った際にキツネから貰った葉っぱを添えたくらいか。あれも何となくお土産的な感覚で布包みの中に何の説明もなく添えただけなので、総司の方も偶々葉っぱが紛れ込んだものとしか思わなかったかもしれない。それについての言及もなかった。

持って来たミカンも、めぐみの実家からのお裾分け。湊が買った訳

ではない。故にこちらがした手間など大したものではなく、首を横に振って答える湊に総司が少し困った風にして同じく首を横に振った。「それは俺の方も助かったし、俺のはただのお節介みたいなものだからいいんだ。折角の友達からのお裾分けなのだろう？」

「……友達」

ごく短い単語に、忘れ掛けた鼓動が跳ね上がる。

鸚鵡返しな湊に、総司は何か気付いているような様子はない。ただ訝しげに目を瞬かせながら眉を寄せた。

「お裾分けなのだろう？　そういうのは、よく付き合いがある人からじゃ……あ、お隣さんとかか？」

今寝起きしているのはマンションなので、御近所付き合いといえはマンションの住人になるのだろうかが生憎と他の住人とは活動する時間帯が違うのか擦れ違ったりしないので特に交流は無い。

「御近所とかじゃなくて、クラスメイトから」

「なら、友達からじゃないか」

そう言つて少し笑つた総司の顔に、ふと何かを言いそうになる。

——何を、言おうとしていたのだろう。

何かを言おうとしていた。何か言いたかった。もしかしたら、いつか言つたのかもしれない事を。

けれどもそれが何なのか辿れぬまま、代わりに違う言葉を以て返す。

「なら、そこからまた友達にお裾分けしたっていいと思うから」

「えっ」

「こうしてお裾分けしたから。同じお節介」

喉から零れる言葉が何故だか少し引つ掛かる。どうしてだろう、もつと他に違う言い方が、単語があつたような気がする。確かに言つたような、そんなデジャ・ヴ。

湊と総司の横を、無気力症候群の患者を乗せたストレッチャーが通り過ぎていく。無気力症候群の患者は増えるばかりであるらしい。ここに来た際に、受付のソファでそんな話をしていたのを聞いた。

今の状況を、人々の意識を変えなくば、無気力症候群の患者は増加

の一途。

その果ては——否、そんな事にさせてはいけない。再び胸底が深く沈むのを感じながら顔を上げた湊と、総司の目が合う。

「……………どうかした？」

もしかしたら、さつきからずっと見ていたのかもしれない。平静を装って——否、そんな必要は無い程に、湊の方が思わず伺ってしまう程に。

見上げた視線の先、黙りこくったままの総司の瞳が、今にも雨が降り出しそうな曇天と似ていたから。

15：悪魔（3）

静かな病院内のある一室。

一人用の個室であるその、ベッドサイドに椅子を出して美奈子は座っていた。

白を基調とした病室内で、サイドテーブルに集まる色彩が白に塗り込められた無機質な印象をほんの少しだけ和らげる。

花瓶に生けられた紫とピンクのアネモネ。何かちよつと傾いて座っている気がするジャアクフロストのぬいぐるみ。コピーで画質が荒い予告状のカード。

あとは、椅子に座ってミカンを食べる美奈子当人とこの病室の患者のみ。

皮を剥いて、甘皮の処理もそこそこに一房ずつゆつくりとミカンを食べていく。めぐみの実家から送られて来たのを、お裾分けして貰ったものだ。実際はもつと多く貰っているのだが、こうして病室に持ち込んだのは一個だけ。『一個だけでいいの？』と綾時が余計な事を言ってきたが、ここでそんなに食べる気はない。全く以て失礼だと思う。

甘みと酸味が程良い加減のミカンを味わって食べながら、美奈子は病室内を改めて見回す。

椅子の近くに置いてあるゴミ箱にしおれた花々を都度捨てているが、そこはいつも綺麗にされている。つまり、定期的に病室内へは掃除が入っているという事だ。患者が居るのに掃除がされないというのもそれはそれで病院としてどうかと思う所ではあるので普通そうだろうとは思うものの、この病室内に漂う空気に——何処か埃っぽいような、放置されているような、置き去りにされたような感覚に襲われて胸がざわついた。

そんな胸のざわつきを誤魔化そうと目を外へと向けた所で、窓越しに一本の木が視界に映った。

細過ぎる訳ではないが、大きいという訳でもない樹。何の樹なのかは詳しくないので分からない。外は風が少々強いようで、木の枝先に

付いた幾らかの葉が揺れていた。

——あの木の葉が、全て落ちてしまつたら。

関係無く「どうにもならなかった運命」が心の海面に泡沫として浮かび上がり、弾けて胸底に異なる軋みを与えて来る。誰の所為でもないのだと、受け入れていても何も思わないのとは違う。

口に入れたミカンの最後の一房を飲み込み、剥いた皮をゴミ箱へ捨てる。手持ちのハンカチで軽く指を拭ってから、立ち上がると美奈子はベッドを覗き込んだ。

ベッドの上には、一人の少年が眠っている。名前を聞いた事はないが、ベッドに付けられたネームプレートには「来栖 暁」と書かれていた。美奈子が少年の顔を覗き込むように見つめても、少年が目覚める気配はない。恐らくだが、この病院に入院している他の意識不明患者と同じくずっと意識を取り戻していない状態なのだろう。規則的ながらも控えめに上下する胸と微かな呼吸音が、辛うじて少年が生きているという事を示していた。

朝も昼も夕も夜も、いついかなる時も。ただただ眠り続けたまま。きつと、彼には夢の中が現実のようなのだろう。この現実だって、よく出来た夢のようなもので。どちらが夢現か分かったものではない。

目覚めない方が、否、目覚めたくないから、この少年は眠り続けているのかもしれない。いつだって、日々が穏やかで幸せなものとは限らないから。奥底で軋みを上げる痛みにも、誰しもがいつまでも見て見ぬ振りも堪えられるとも限らないから。そんな事を思ったって、彼が本当はどう思っているのか知りようもないから分からないのだと分かっているけれど。

眠り続ける彼が見続けているのが果たして悪夢なのか、やさしい夢なのか——それとも現実と同じくらい、幸せで残酷なものなのか。美奈子には推し量る事は出来ない。

けれど、と行き場のない逆接の言葉が口から零れ落ちながら、美奈子は己の手を伸ばしてベッドの上に置かれた少年の手にそつと重ねて握る。

意識を取り戻さないままの期間が長かつたのだろう。肌は日に焼

けておらず、白い。ただ仄かに伝わって来る温もりが、ここに在ると
いう安心感を与えてくれた。

僅かに奥底から込み上げる何かに対しては、振り向かない。少しだけ指先を引くようにして、手を離す。

少しばかり捲れてしまったシーツは皺を伸ばして元通りにし、椅子はサイドテーブル近くに寄せてこちらも元の位置へ。

そうして美奈子が病室を出ると、そこは再びしんと静まりかえる。

——温もりを重ね灯した指先が求めるようにして僅かに動いた事に、
誰も気付かないまま。

16：塔（1）

それを一言で表すと、圧巻としか言えなかった。

「おめでとうございます！ 出店日から最速記録です！」

店員が興奮しながら、達成記念である金色のピンバッジを二つ分差し出す。それを湊と美奈子が一つずつ受け取ると、周囲から歓声と拍手が巻き起こった。

「凄い……」

「マジでやりやがった……」

めぐみと拓郎が半ば呆然としたような、感嘆の吐息を漏らす。かくいう慎も、ただただ目の前で成された出来事を見つめた。

放課後、慎とめぐみと拓郎、湊と美奈子の五人が訪れたのは綾風駅の前に新しくオープンしたビッグバン・バーガーというハンバーガーチェーン。何年か前は労働環境についてよろしくない問題もあったらしいが、今は全国あちこちに店を構えるほどとなっている。そのビッグバン・バーガーで行われているのは、ビッグバン・チャレンジという所謂巨大サイズの完食チャレンジ。今まで多くの猛者が挑み、そして敗れていったという。

そんなビッグバン・チャレンジをやってみないかと、湊と美奈子に提案してみたが——まさか、湊も美奈子も揃ってクリアしてしまうとは。

いや、出来るかも、とは思っていた。流石に慎とて出来そうもない者に提案なんてしないし、もしもギブアップしてしまうようなら責任持ってその分の料金は支払おうと思っていた。だが、こうしてクリアしてしまったのをいざ目の前にすると、本当に出来てしまったのかという驚愕が先に来てしまう。決して大柄ではない身体の何処に、あんな量が入るのか。胃袋ユニバースカ。

「それで、何だっけ」

チャレンジ達成者に対する周囲の視線やざわめきをもともせず——というよりはどうでもよさそうに、ジューズを読みながら言う。手は、慎達が頼んでいたポテトを掴まんでいる。まだ食べられるの

か。

「あー……何か、思い出的な……？」

「何の？」

直ぐ様突っ込まれて、慎はつい口籠もる。

湊にも美奈子にも、特に何かを気にした風はなく、実際何も気にしてはいないのだろう。ただ何となく何の話題だったのかと尋ねて、それに答えた慎の言葉について更に訊いただけ。それだけなのに、改めて問われると直ぐに適切な言葉が出て来なかった。

ビッグバン・チャレンジが終わり、挑戦者だった湊と美奈子が特に何か目立つようなリアクションもしていないので周囲の野次馬も興味を失っていったらしい。まだちらほらと視線は感じるものの、そこまで気にならなくなるくらいにはなっていた。

ポテトの塩気とジュースで湿った口許を動かし、慎は言葉を探す。飲み込んだ唾が、少しだけしょっぱかった。

「……この所のニュースとか、知ってるだろう？」

切り出したのは、無気力症候群の患者が増えているという話題。

以前からも患者自体は居たが、ここ最近はとみに増えている。ニュースでは、今日運び込まれた患者数は、なんて報じられているくらいだ。確固とした治療法はまだ見つかっておらず、街中を歩いていても無気力症候群に近い状態の者達がちらほら見られるまでになっていた。

慎が真田から聞いた限りでは、無気力症候群はペルソナを持つ者、もしくはペルソナ使いの素養がある者か過去に持っていた者以外がペルソナによる攻撃を受けると引き起こされるらしい。しかしそれ以外にも、人の深層である心の海——つまり精神が穏やかに保たれなくなつた時。例えば「ここから居なくなりたい」「このまま死んでしまいたい」といったネガティブ・マインドに支配された時、人は無気力症候群に陥るのだと。

「うん……悠美先輩も、セラピストの人から相談を受ける人達が物凄く増えたって話を聞いたって」

「こっ増えてっとな……」

深刻な顔をして呟くめぐみと、湧き上がる怯えを誤魔化すようにぶるりと頭を振る拓郎に慎は頷く。

「俺も……同じように、何も考えたくなくて、ここに居たくないって思うかもしれないし、思った事もある」

それは10年前の綾風市で、目の前で両親が死ぬのを見てしまった時。

両親の死を目の当たりにした慎は、そのショックで自失状態になっていたらしい。らしい、というのは慎にその間の記憶が無く、諒から聞いたからだ。その時は事故の記憶そのものを封印する事で持ち直したらしいのだが——その記憶が蘇った今でも、自身を保てなかったかもしれない。

自分の所為だと、こんな自分なんて居ない方が良いのだと。

「……辛過ぎる事に、一人で耐えられる人間は多くないと思うから。だけど、他に……こういう事やって楽しかったな、とか、皆でこう過ごしたな、って思い出があったら……乗り越えられるとまでは言えなくても、苦しい気持ちばかりにはならないから」

自分の所為ではないのだと、こんな自分でも居てもいいのだと。そう諒が言ってくれたように。

「だからさ、皆で……有里達とも一緒にこういう事やったんだ、って思い出せる事、増やしておきたかったんだ」

己を乱す「影」は、いつだって自らの心の海に潜んで消えないけれど。

でも、その影の中に温かな灯火を灯して、行き先を示す道標を作ったっていいと思う。ほんの僅かな思いでも、それが確かな絆へと育つ事もあるだろう。

慎自身、あまり上手く言えていない自覚はありながらも何とか伝えようと、湊と美奈子は感情の読めない平坦な表情からひとつ頷きを返す。ただ首肯一動作の中にも何処か雰囲気柔らかくなった気がして、慎は拓郎とめぐみと共に笑みを浮かべた。

拓郎もめぐみも、慎と同じく湊と美奈子の事を気にしていた。「友達達の為に何かしたい」と。きつとこんな下らない事でも、自分達には

思い出になったのだと——伝え切れているかは分からないし、ただの御節介だとしても。

「そうそう！ 悩みなんて、皆で分け合ったら小さくなるって言うし！」

「コレは一人で食べきったけど」

「全員でチャレンジはしてないよね」

「そ、それはそういうものだから！」

「じゃあ、LLサイズ、皆でシェアする？」

「まだ入るのかよ……」

「胃袋のサイズを同じと思わないでくれるか？」

16：塔（2）

ビッグバン・チャレンジを終えた帰り道、慎は湊と美奈子と共に歩く。めぐみと拓郎は寮住まいなので、帰りは別々だ。

陽は既に暮れ始め、今の空を染める夕焼けもあつという間に夜空の色へと変わるだろう。

「やっぱり有里達のアレ、凄かったよな。見てるだけで腹一杯になりそうだった」

あんなのがあるという事は、多分他の店舗でも実施している上にクリアした者も居るといふ事なのだろう。まだまだ知らない世界が存在するらしい、知る必要があるかどうかはともかく。

「写真には撮ったけど、洵や守本にも見せたかったな」

今日、洵は叶鳴達と一緒に居る。どんな用事かは洵に訊かなかったので分からないが、以前に叶鳴が出たスピーチコンテストの事なのかもしれない。あの時、洵はスピーチコンテストの応援へ行かなかったが、後から興味を持ったか気になったかしたのだろう。コンテスト当日に付いて行かなかった手前、慎達の前では訊き辛かったのかもしれないと思うと、洵が帰って来てもそれについてはあまり訊かない方が良さかもしれない。

叶鳴の方にこっそりと尋ねてみよう。そんな風に慎が思いながら家を目指して歩いていると、不意に携帯電話が鳴った。

ポケットから携帯電話を取り出して、液晶画面に映る着信相手を見る。映子だ。どうしたのだろうか、と思いつながら少し電話に出るか迷っている、隣を歩いている湊と美奈子が通話に出るよう促して来たので慎は電話に出る事にした。

「もしもし？ 映子姉ちゃん？」

ノイズの混じらない映子の声が聞こえて来る。疑問と少しの胸のざわめきを抑えつつ慎が受話口から聞こえる映子の言葉に耳を傾けると、そこから聞いたのはにわかには信じられない事だった。

「……洵と、守本が連れて行かれた……？ それに、兄貴が怪我したって……」

稀人達が、洵と叶鳴を連れ去った。それを助けようとした諒がペルソナによる攻撃を受け、負傷したのだという。

諒は今、病院に居る。映子は慎よりも先に連絡を受けて、病院に既に着いているという。慎も病院に来て欲しい、という映子からの言葉に了承を返して通話を終了させるものの、慎の頭は混乱と不安でひしめいていた。

どうして、洵と守本が。それに、怪我をしたという諒は無事なのか。じわじわと胸中を蝕む恐れにどうしたらいい、と彷徨った視線は、傍に佇んだ湊と美奈子を見る。

「行くこう」

「急ぎこう」

見つめ返す瞳は力強く、けれども険しく。それに少しだけ気が強く持ち直されて、慎は湊と美奈子と共に病院へと急いだ。

16：塔（3）

向かった先の病室には、諒と映子の他、榎崎が居た。

「兄貴！」

洵は、守本は、怪我は——と言いたい事があり過ぎて逆に何も言えなくなってしまうた慎の様子に、諒はひとつ頷きを返しながらも静かに落ち着け、と告げる。ここまで急いで来た為に息を切らせた慎の背中を、傍に来た映子が摩った。

事の起こりはこうだ。所用があつて綾風署へ行ったその帰り、ちようど洵も外に居るといふ事で迎えに行つた所、稀人達が洵と叶鳴を連れ去ろうとしているのを見つけた。当然、諒はそれを阻止しようとしたのだが——稀人から何か囁かれた叶鳴が突然、様子を豹変させてペルソナを召喚、諒へと襲い掛かり、不意を突かれた諒はそのまま洵と叶鳴が連れ去られるのを見送るしか出来なかつたという。

既にペルソナを持たない身である諒だが、かつてペルソナを宿していた人間はペルソナによる攻撃に対してある程度耐性が出来る。とはいえまだ療養していた状態では直ぐに動く事も出来ず、その場で動けなくなっていた所を榎崎が見つけたとの事だつた。

「そうだったのか……榎崎さん、ありがとうございます」

「いえ。偶々、近くに不審な車両を見つけたという通報があつてその辺りに居ただけなので……」

命に別状は無いらしいが、もう少し発見が遅れていたら取り返しのがつかない事になっていたかもしれない。そう思うとぞつとする胸中を掻き抱きながら慎が榎崎へと礼を言つと、榎崎は真面目な態度を崩さず首を横に振つた。

洵と叶鳴を連れ去つた稀人達が乗っていた車は直ぐ様手配が掛けられ、現在検問も行つていふとの事だ。榎崎が言うには、通報があつた不審車両というのも稀人達が乗っていた車の事かもしれないらしかつた。

「稀人達の指導者であつた小松原は、洵のペルソナ能力に執着していた。稀人達が洵を連れ去つたのも、洵のペルソナを何らかの為に使う

為だろう」

「だから洵を……。でも、守本はどうして……」

洵を連れ去る為に、一緒に居た叶鳴を人質代わりにしようとしたという可能性は考えられるので、共に連れ去ったという事自体には納得が出来る。だが、諒が言うには叶鳴は稀人に何か囁かれた後、まるでスイッチが切り替わったように雰囲気を変えて諒に向けてペルソナによる攻撃を行ったという。それは一体、どういう事なのか。

例えば、叶鳴の家族も一緒に人質に取られているとか——否、今日、洵と叶鳴が共に行動していたのは偶々だ。家族が人質に取られているという事なら、その場ではなく事前に教えて洵と二人きりになるよう誘導させる筈。

疑問を呟けども、それに対する答えは無く。何か言い掛けて身を起こそうとする諒を映子が慌てて留めさせた所で、病室へ真田が入って来た。

「稀人達の潜伏場所が分かった」

「！」

検問には掛からなかったようだが、防犯カメラに該当する車両が映っていた。

更に以前からの調査より、小松原が九条 稀也名義で所有していた施設の内、海沿いにある一カ所にて過剰な電力消費量が見られたのだという。そこに、恐らく稀人達も居るだろうという事だった。

あれから、稀人達——人工的に複数のペルソナを付けられた複合ペルソナ使い達の暴走を抑制する薬は製造を止めている。勿論、残っていた分も流通させていない。前に八尾で薬の取引に見せかけた囹捜査の件もあってリバーズ事件も起こっていない事から稀人達は表立った行動は避けていたようだが、流石に焦れて来たのだろう。とうとう強硬手段に及んだ、という訳だ。

「今、潜伏先に向けて突入の準備を進めている。だが、稀人達……ペルソナ使い達が大人しく投降するとは思えん。となると——」

「戦闘行為もやむを得ない。」

険しい顔で話す真田に、慎も思わず顔が強張る。

ペルソナ使いに対抗出来るのは、ペルソナ使いだけ。洵や叶鳴を一
刻も取り戻したい気持ちはあれど、それに伴う危険性を突き付けられ
て足が竦んでしまうのは致し方ないだろう。「真田」と短く咎めるよ
うな声を出した諒は勿論、口に出した真田自身も分かっているのか、
それ以上は明確に言葉として出す事無く黙り込んだ。

洵と叶鳴を助けたい。危険だとは分かっている、けれど。そんな思
いと共に、湊と美奈子ならば、と慎が共に来た湊と美奈子に意見を求
めようと病室内を見回した所で、そこに居た筈の姿が無い事に気付い
た。

「……有里達、は？」

「えっ？」

慎の口から出た疑問に他の者達が、ようやくそこで気付いたとばか
りに同じく周囲を見回す。

湊と美奈子は慎が映子からの連絡を受けて、共に病院へと来た。だ
から、この病室に来るまではちゃんと居た筈だ。それなのに、今は居
ない。

一体何処へ、と思うよりも、まさか、という思いが先に来る。それ
は可能性ではなく、確信として。

——恐らく、稀人達の潜伏場所を聞いた時。あの時から他の何より
も誰よりも早く、湊と美奈子は洵と叶鳴を助ける為に動いたのだと。

16：塔（4）

遠くで聞こえる波の音。その音と合わせるようにして、心の海底へ打ち寄せるものを手繰って足を進めさせる。

海沿いにある研究施設。真田が稀人達の潜伏場所だろうと言っていた場所だ。そこまでに至る道はロクに舗装されておらず、しかしそれ故に真新しいタイヤ跡を見つけるのは容易い。敷地内に止められた車の近くにあつた出入り口から内部に入ると、無機質で広々とした地下施設が広がっていた。

明かりはほとんどないが、電源は生きているのだろう。何かの僅かな駆動音が聞こえて来る。多少趣は違っていたが、かつて映像越しに見た桐条の旧研究施設と似ていた。

特に隠れる事はしない。監視カメラの類はあるだろうが、いちいち気にするのも面倒な上にそもそも潜入という意味でここに来ていない。目的は洵と叶鳴の救出だ。

奥深くに揺蕩う波のさざめきに従って、向かうべき場所へ。単調な通路と幾つかの部屋を経て、辿り着いたのは広さのある一室だった。

中央には幾つかのカプセルのようなものと、モニターや操作盤がある。カプセルのようなものの中には洵が寝かされており、その傍らには叶鳴が倒れ伏していた。操作方法など分かる訳もないので、湊と美奈子はそのまま真っ直ぐにカプセルの許に向かうと、カプセルの蓋をこじ開けて先に洵を出し、それから叶鳴を助け起こした。

「うっ……」

「ん……」

腕の中で、洵と叶鳴が微かに息を漏らす。洵の身体は少し冷えていたが、二人とも怪我をしている様子も無く安堵に胸を撫で下ろす。

洵は美奈子が、叶鳴は湊が背負って室内を出る。この場所が何なのかは知りたくない。どうせロクでもないものだど、考えずとも分かっていた。

「えっ……？ 有里さんに、有里君……？」

背中から意識を取り戻したらしい叶鳴の驚いた声がして、湊と美奈

子はそちらへ向く。洵も同じく目が覚めたようで、ぱちぱちと瞬きして湊と美奈子を見つめていた。

どうして、と叶鳴の口が動いてから、躊躇うように閉ざされる。それに強く先を促したりはしない。ただ歩けるか、と尋ねて、洵と叶鳴がどちらも頷いたので湊と美奈子は少し屈んで洵と叶鳴を下ろした。

「あの……私……私、は……」

「あのね。洵を、助けて欲しいの」

「洵君？」

何か言おうとして、しかし言えずにただただ口籠もるばかりの叶鳴をそっと制するように言い出した洵の言葉に、叶鳴が驚いて目を見開く。

それはそうだろう。自分自身を助けて欲しい、などと言うなんて。もつともな叶鳴の困惑を余所に、『洵』は続ける。

「……洵は、わたしとずっと一緒だったから。ひとりで居たい時だって、ひとりで居られなかったから。だから、あの子の所に、くじらの許へ行ってしまったの」

兄達の事は嫌いじゃない。けど、それが時として息苦しくも感じてしまう事があった。だから、安息を感じられたものの手を取ってしまった。だがこの身体は洵のもので、洵は生きているのだから、ここに戻るべきなのだ、と。

「他には何が出来る？」

『洵』と目の高さを合わせ、湊と美奈子は問う。

他の疑問は投げ掛けない。ただ短く、そう尋ねる言葉に『洵』は瞳目し、やがて小さく微笑んだ。

「……洵と、洵と一緒に居るあの子を助けて。そして、どうか止めて欲しいの」

「……止める」

言葉のままに反芻すると、『洵』が頷く。

「あ、あの、洵君……？ 先程から、何を言っ——」

傍目から見たら、明らかに意味の分からないやり取りだったのだろう。叶鳴が困惑しきった顔でおろおろと呼び掛けるもの、奥から聞こ

えて来た足音と気配にはつとして顔を上げた。

「出口はあっち。このまま走って」

感じる気配とは反対側、湊と美奈子が施設内へ入って来た出入口方面を示す。それに叶鳴が出入り口方面を一度振り返り、しかし直ぐには走り出さずに身体を震わせて俯いた。

「で、ですけど、でも、わた、私は……私、なんて……」

「他に頼めない」

「任せたから」

思い悩むよりも、すべき行動を。

思考する事が悪い事だとは思わない。人は考えるが故に人なのだから。だが、時として今成す事を指し示す事でただただ沈むばかりの思考を一時引き上げる事は出来るだろう。それが単なる一時しのぎでしかない事も分かっている。けれども、今の状況は正しく一時しのぎが必要な状況だった。

言葉を失って顔を曇らせる叶鳴に『洵』が近付き、その手を取って引く。そこから柔らかく「行こう」と告げる声には、はつとしたように叶鳴は顔を上げた。

「……ごめんなさい……」

「謝る必要なんてない」

いえ、と叶鳴が首を横に振り、滲む目許を拭って口唇を震わせる。「でも……私……謝りたいんです。めぐみさんにも、神郷君にも、榊葉君にも。それで許されるとは思っていませんけど、でも……謝って、それから……有里さんと有里君にも。だから、また……助けに、行きます」

そう答えた叶鳴の手は、まだ小さく震えていた。

『洵』もそれを知りながらも言葉に出さずに一度頭を垂れてから、ぎゅつと繋いだ手を握り直すと叶鳴と共に出入り口方面に向かって走り出していった。

湊と美奈子は暫くそれを見送り、その背中が見えなくなった所で少し前に感じていた気配と足音の方へ身体を向ける。しつかり武器は持ち出して来た。

頼りない照明の下、徐々に近付いて来る姿が見えて来る。八尾で見た複合ペルソナ使い。全員ではなかったのは、他の場所で何かしているのだろうか。分からないが、二人を逃がした方面に稀人達が居ないのは確認済みだ。ならば今は、この目の前の稀人達を相手にするのみ。

「ここは通さないから」

「行かせない」

片手は武器の柄を、もう片方は召喚器のグリップを。戦う覚悟は既に出来ている。

故に、その為の行動を己が意思に乗せた。

稀人達の潜伏場所と予想される旧研究施設は、外目からはそれらしい建物は見えない。真田が言うには地下に研究施設が広がっているらしく、その周辺一帯が九条稀也——小松原の所有となっていた。

病院から出た慎は、成井と共に研究施設へと向かっていた。

成井が運転する車内の空気は重苦しい。病院を出ると真田達から連絡を受けた拓郎とめぐみも合流して共に車に乗り込んだのだが、二人の方も深刻な顔をして黙り込んだままだった。

澱のように留まり続ける沈黙は、心中に更なる暗雲をもたらす。良くない循環だ。それを分かりながらも他に出すべき言葉も分からず、ただただ黙り続ける出来ない中でふと窓に移った姿に思わず声を上げた。

「洵！ 守本！」

慎の声と遅れてそれが示すものに気付いた成井が車を止め、一同が車を降りる。

研究施設に向かう途中の道。それとは逆走するように下って来る二人——洵と叶鳴の姿があった。

慎達が洵と叶鳴の許へ駆け寄ると、二人も慎達に気付いたのか些かまろび出るようにして足を速める。そこで急ぎ過ぎたのかよろめいた叶鳴の身体を、タイミングよく追いついた慎が支えた。

「良かった……二人とも、無事で……」

「ああ。連れ去られたって聞いて、心配したんだぜ」

思わず涙ぐむめぐみと肩の力を抜く拓郎を見ながら、慎も頷く。

ざっと見た所、洵と叶鳴に怪我は無さそうだ。勿論、後で病院で詳しく診て貰わないといけないだろうが、こうして目立った外傷が無いだけでも安心度が違う。

一同が一時の安堵を得た所で、一先ず車の中へ、と成井が洵と叶鳴を促そうとするも、それを洵と叶鳴が首を横に振って引き留めた。

「……私、皆さんに話さないといけない事があるんです」

こんな時にも思いかもしれないけど、どうしても話しておかないと

いけないから。

今にも泣き出しそうな悲愴な顔付きで告げる叶鳴の様子に誰も異を唱える事が出来ず、思わず揃って黙ってしまうと叶鳴は両手を握り締めながらぼつりぼつりと語り出す。

それは、叶鳴自身も認知していなかった事実。

自分は、ペルソナ使いの素養を持つ者を探す為に作られた人形だという事。ペルソナ使いの才能を持つ者達を見つける為に影抜きを流らせていた事。養護施設に居た事も、両親に引き取られた事も、山咲まゆりという養護施設時代の知り合いというのも、全てが偽りであつた事。この自分の人格ですら、ただプログラムに起因したものでしかないという事。

一度語ってしまったら、後は止めどなく言葉が流れていく。最初は冷静に努めていただろう声音も、後半になるにつれて弱々しく乱れて最後には泣き崩れるように両手で顔を覆つた。

「……人間そつくり動き、考える人形……まだ存在していたなんて」
呆然と呟く戌井の声が酷く遠く聞こえる。

「……ごめんなさい。本当は……本当に、私なんて、ここに居る価値も意味なんてなかった。何の意味も、いいえ、私なんて居なかつた方が良かったんです。そうしたら、きっと……」

「——叶鳴の馬鹿っ！」

ただただ懺悔を繰り返す叶鳴を、めぐみが強く抱き締める。その顔は酷く怒っているようで、同時に悲しんでいるようでもあつた。

「何でそういう事言うの!?!」

「めぐみさん……でも、私が居たから……他の方だって……」

「それは、そうかもしれないけど！　でも、そうじゃないよ！」

叫びながら首を振るめぐみの目許を潤んでいる。それにつられて、叶鳴の目許も赤みを帯びていた。

そんな二人の様子を慎と拓郎は暫し見守り、互いに視線を交わし合ってから頷き合う。そこから少しの間を置いて、慎は叶鳴へ声を掛けた。

「……なあ、守本。今聞いた事、嘘を言っているとは思わないけど到底

信じられないし、信じたくない。だけど、それが本当なら……確かに許されない事でも、だからこそ居ない方がなんて言っちゃ駄目だ」

過去を変える事は出来ない。仮にそれが出来るとしたら、最早それは人智を越えた存在であり、恐ろしく悪辣で残酷なのだろうと思う。故に人が出来るのは、今とこれからをどうするのかだ。

思い出すのは、10年前の出来事。諒は慎の所為ではないと言ってくれたけど、言ってくれたから、少しだけ心は軽くなったけれど忘れてしまっていた分、今になって滲み出す痛みがある。その痛みは和らぐ事があっても、事実自体を変える事など出来ないから抱えながら生きて行くしかないのだ。

「ねえ、叶鳴。一緒にこれから、考えよう？」

叶鳴を抱き締めるめぐみの腕の力が少しだけ緩まる。仲の良い姉妹にするように掌は髪の毛を、更に背中を柔らかく撫でた。

「私なんか……これからを、考えても良いのでしょうか……」

「良いとか悪いとかじゃねーだろ。これから考えるんだよ。そうしたいし、そうしようぜ」

「拓郎にしては良い事言うじゃない」

「何だよそれ!？」

まるで学園に居る時のような空気に、思わずというように叶鳴の顔が綻ぶ。小さく肩を揺らして笑みを零す様に、慎もめぐみも拓郎もほっとしたように肩の力を抜いた。

「そう……ですね。私が居なくなったら、私の所為で傷付いた人々が居る事まで否定してしまう……それに、有里さんと有里君にも約束したんです。許されなくてもちゃんと謝って、それから助けに行きます、って」

「そうだよ、だから……って、有里さんと有里君!？」

叶鳴の言葉に頷き掛けた所で、めぐみにとっては思いもよらなかった言葉に驚きの声上がる。

そういえば、湊と美奈子の事はめぐみと拓郎には何も伝えていなかった。叶鳴も「あつ……」と小さく呟いて、躊躇いがちに洵と叶鳴が研究施設から抜け出すに至るまでの事を語り出した。

慎達がやって来るよりも早く湊と美奈子が研究施設に到着し、洵と叶鳴を救出した事。そして湊と美奈子は、恐らく稀人達を足止めする為にまだ研究所内に居るだろうという事。

予想はしていたが、やはり湊と美奈子は潜伏場所を聞くなり助けに直行していたのか。急ぐ気持ちも焦る思いも充分に理解出来ていても、一言伝えてくれたって良いのにと恨み言のひとつでも言いたくなる。

「よっしや、じゃあ次は有里達を助けに行かねえとな」

「はい。……私も行かせて下さい」

「えっ、叶鳴!? 駄目だよ、折角逃げて来たのに」

ぱん、と気合いを入れるように掌を打った拓郎に頷いた叶鳴に対し、めぐみが心配そうに覗き込む。めぐみの心配はもつともだ。たとえ正体が何であろうとも、連れ去られて、そこから逃げて来たという事には違いない。恐怖も少なからず感じただろう。

ここで洵と一緒に待っていた方がいい。慎もそう思つてめぐみに続いて言い添えようとすると、叶鳴は固く首を横に振った。

「助けに行きます、って約束したのは私ですから、私も行かないといけません。それに……あの中がどうなっているのか、知っていますから」

「守本……」

握り締めた手も、声も震えながらも、それでも表情とそれが示す決意は固く。故にそれ以上諫めるのは叶鳴に対して失礼な気がして、慎は名を呟いただけに留めて洵と戌井の方を見る。

「戌井さん。俺達、有里達を助けに行きます」

「……分かっていると思うけど、あの中には」

「無理に戦う事はしません。俺達はただ、友達を助けに行くだけですから」

そもそも、慎達よりも湊と美奈子の方が余程ペルソナの扱いは長けているのだろう。数による有利性はあるかもしれないが、かえって邪魔になりかねない。それでも行かねばならぬと思うのは、何よりも慎達がそうしたいからという思いからだった。

「洵。お前はここで戌井さんと——」

「慎お兄ちゃん」

続けて洵に声を掛けようとすると、その慎の言葉を洵が遮る。普段よりも高く柔らかな声音に意識の何処かが引つ掛かり、次句を継ぎ損ねてしまっている洵は首にさげたロケットから白い羽根を出した。

「慎お兄ちゃん、これ。持っていて」

「持っていてって、お前、これ……」

押し付けられるように手に握らされたものに、慎は困惑して洵を見る。

洵が取り出した白い羽根。あれは、くじらのはねと呼んでいるものだ。両親が描いた絵本の題名にちなんでくじらのはねとは呼んでいるが、実際には何の羽根なのかは分からない。小さい頃にこの綾風市で洵と結祈が見つけて、それ以来宝物にしていた。

御守り代わりなのかもしれないが、大切にしている筈の宝物を渡すなんて。当惑しきりの慎に対して、洵の眼差しは真っ直ぐに向けられていた。

「頼んだの。洵を、助けてって」

洵はくじらの許に居て、そのくじらを苦しめるものが近付こうとしているから。だから助けてと、頼んだのだと。

一体、何を言っているのか。慎には洵の言葉がさっぱり分からない。けれどもこんな状況下で訳の分からない冗談を言うとも思えず、ただただ洵を見る。

洵はここに居るのに、洵を助けて欲しいだなんて、どういう事だろう。謎掛けをしている訳ではないと思うが、それなら一体何なのか。少し低い位置にある弟の顔をじっと見つめる。弟が生まれて来た時から、ずっと近くで見えて来た。そう、10年前までは「妹」とも常に一緒に——

「……結祈……？」

双子であるが故に「弟」とよく似たその顔に呟けば、

「そうだよ、慎お兄ちゃん」

10年前に喪った筈の妹の「結祈」が、弟の「洵」の顔をして困っ

たように頷いた。

叶鳴の案内を得て、慎達は研究所内へ入る。

洵——否、「結祈」は戌井に任せて来た。戌井は未成年だけで危険も想定される場所へ向かわせる事に少なからぬ抵抗があつたようだが、同時にペルソナを持たない為に足手纏いになるだろうという事も理解していた。それ故に申し訳無さそうに頭を下げる戌井に見送られ、慎は拓郎とめぐみ、それから叶鳴の案内を受けながら研究所に入った。

「有里達、何処に行つてんだらうな……」

「……あのさ、拓郎。腰引けてるなら外で待つてたら？」

「ななな、そ、そんな事ねえつて！」

通路を反響するやり取りが何処かいつかの肝試しの時に似ていて、少しだけ緊張した意識が和らぐ。

照明が全ては機能していないのか、通路は薄暗い。元々地下である為、外からの光も入って来なかった。

足音が床に反響し、震動が伝わって来る。電気供給は成されているらしいから、何らかの機械が動いているのだろうか。

「この角を曲がつて、それから——……えつ……っ？」

外に出た時とは逆の道筋を辿る叶鳴が角を曲がつた所で、その先に広がる光景に目を見開く。慎達も何だと前を向くと、同じように絶句した。

「……なに、これ」

呆然としためぐみの眩きは、この場に居る者達の心境の代弁。

明らかにそれらしい何かの施設といった風の無機質な通路。幾つかに分かれた部屋。それが続くものだと思つていた。

対して、今日の前に広がっている状態は何なのか。

狭い通路は無理矢理何かに広げられたように奇妙に壁が抉られ、隣接する空間を雑にぶち抜いたかのようにぽっかりと穴が開いている。側面に走る配管も奇妙にねじくれ曲がり、蛍光灯は粉々に割られていた。

叶鳴が言葉を失っている事から、洵——ではなく「結祈」と叶鳴が研究所内から出た際にはこのような事にはなっていないかったという事が分かる。こんな事になったのは、その後。

一体何が起こったのだろうか。それにこの惨状はまるで、深夜に風の杜学園で肝試しを行った時に似ていた。

心の奥底から、何かがざわざわと騒ぎ立つ感覚がする。酷く不快なそれに意識が引かれて視線の先が壁端に寄ると、そこから黒い塊のような「影」が飛び出して来た。

「！」

危険だ、と意識はする。だが思考に身体の反応が追いつかない。強張った身体は咄嗟に目を瞑るのが関の山で、その為に目の前に現われた姿に気付いたのはたつぷりと数秒が経過した後だった。

「有里……！」

飛び掛かって来た黒い塊のような「影」は既に居ない。

代わりに立っていたのは、それぞれの手にいつかも見えた武器を携えた湊と美奈子だった。

湊と美奈子がこちらを見遣る。同じように慎達も湊と美奈子の方を見て声を掛けかけた所で、思わず喉から出かかった息が引き攣った。

「……あ、有里、その……」

「怪我はしてないから」

出掛かった言葉を予想し、且つそれ以上の問い掛けを封殺するように短く言葉が返る。

無事で良かった。そう素直に言えたら、どれ程良かっただろう。確かに怪我は無いのかもしれない。だが、湊と美奈子が先んじて怪我は無いと言う意味は——風の杜ではない黒基調の制服からでも分かる程、その身に掛かった血の事を問うてくれるなという事だった。

本当はそんな事を言いたって、と問い詰めたい。しかし、続く言葉は慎達にそれすら許してくれなかった。

「それより早くここから逃げて」

「っ、有里達、何を」

「いいから」

にべもない。その言い草について言い募ろうとした慎を、拓郎が諫めた。

「今はそれどころじゃないって事だろ？ 確かに水臭えけどよ……こんな所、早く出ようぜ」

拓郎も湊と美奈子の言葉と態度に思う所が無い訳でもないらしいが、こんな場所でもうこう言っている時ではないのだろうという思考は働いたようだ。うっかり感情的になってしまったが、確かにその通りではある。この場所は小松原の研究施設であり、稀人達の潜伏場所。今、ここに稀人達が居ないという事は湊と美奈子が退けたのか撒いたのか、どちらかだと思いが襲われぬ可能性が無いとも言いが切れない。先程、襲って来た謎の黒い「影」にしてもそうだ。一刻も早く、外に出た方が良いだろう。

まだ幾ばくか納得出来ない思考を引き摺りながらも、外で待つ成井や洵と合流すべく来た道を引き返す。足下が少し覚束ないのは、この建物自体が些か震動しているからだろうか。

後ろを振り返ると、湊と美奈子も油断無く辺りを警戒しつつ最後尾で付いて来ているのが見える。それに少しほっとした所で湊と美奈子が同時に慎の方へ勢い良く振り向き、思わず慎が足を止めてしまうと同時に横合いから衝撃を感じた。

「っ、うわ!？」

予測など当然していない。思い切り身体がふらつき、床に全身が激突する——その直前。

視界に映ったのは慎の目の前に立ち塞がった叶鳴と、その身体を貫く細長い刃。

視界がぶれる。心が揺さぶられる。それは10年前、両親を喪った時と重なって。

「――!」

音を伴わない叫びはそれでも確かに、心の海に揺蕩う「もう一人の自分」を呼び覚ます。

エメラルドグリーンの体色を持つ騎士姿のペルソナが己の衝動の

ままに、携えた大剣を振るう。向ける対象は叶鳴を貫いた刃であり、更にその先に在る多数の輪を従えた巨躯。

得体の知れない巨躯から刃が切り離され、そこからどろりと半透明の何かが零れ落ちる。形の定まらないスライムにも似て、けれども何処か人のようにも見える。それが何なのか理解する手立ては慎には無く、ただ転げた拍子にくじらの羽根が胸ポケットから飛び出したのが見えた。

あつ、と慎が気付いて手を伸ばすも、遅かった。ふわり、と宙を舞ったくじらの羽根が目の中の巨躯に触れ、瞬間。

その場一帯を眩しく照らした。

強過ぎる光量に、目を開けていられなくなる。反射的に目を瞑ってしまうと同時に大きな揺れが襲い、ただでさえ無様に床と身体が仲良くしている状態なのに更に動けなくなった。

揺れはどれ程続いたのだろうか。そんなに長くはなかったのかも知れないが、いちいち数えてなどいられない。揺れが収まる頃には感じていた眩しさも無くなり、慎が恐る恐ると目を開くと天にはぽつかりと大きな穴が開いていた。

「な……」

仰いだ空には、青緑色をした不気味な月が浮かんでいる。当然の事ながら、慎がここに来る時にはこんな天井の穴もあんな月も無かった。そういえば、あの妙な巨躯も居ない。逃げたのだろうか。

しかし、それを考えるよりも慎の思考は直後に響いた悲痛な叫びに遮られた。

「叶鳴っ！ 叶鳴、しっかりして！」

何度も名前を呼び掛けるめぐみの声に、慎はつい先程の出来事がフラッシュバックする。

そうだ、あの時。自分が地面に転がる前に見た情景。前に立つ叶鳴と、その身体を貫く鋭い何か。

震える足を叱咤して、慎は立ち上がるとめぐみの声がした方へ向かう。そこには横たわる叶鳴を囲むようにして、めぐみだけではなく拓郎や湊と美奈子が居た。

「神郷……くん……よか、った……無事、で……」

「守本……？ まさか……」

薄らと目を開き、慎を見て微笑む叶鳴に慎は転ぶ直前に感じた衝撃の原因を察する。

まさか、あの時。あの妙な巨軀から庇う為に。——自分の所為で。

じわじわと胸底から言い知れない絶望が襲い掛かる。呼吸すら忘れてしまいそうで、はくはくと落ち着き無く言葉も出ないまま口を上下させる慎に、叶鳴は力無く首を振った。

「……これでいい、んです……きつと、これは……私の、私への、罰……。皆を騙して、沢山の人を傷付けた罪に対する……罰、だから……だから、仕方ない……きつと……」

「んな訳あるかよ！ だからって、こんな、こんなねえだろ！」

「そうだよ、そんな事言わないで……！」

悲しい告解を紡ぐ叶鳴に拓郎が激昂して声を上げ、めぐみが悲嘆に沈んだ声を出す。

慎が叶鳴の身体を抱き起こす傍で、湊と美奈子が腹元に受けた叶鳴の傷に向けて何かしている。以前、八尾で見せたようにペルソナによる治療だろうか。前よりも強い緑の光が傷を中心として叶鳴の身体を包み、しかし直ぐに消えて行く。腹元の傷は塞がらない。拓郎が傷口を手で押さえ、めぐみが傷薬を出して包帯を巻いていたがそこからは止めどなく血が流れ続けていた。

「……もう、いい、ですから……私は、充分、ですから……」

「そんな……そんな事無いだろ……？ 守本だって、こんな……」

ふるふると弱々しく首を振る叶鳴に慎は否定し、湊と美奈子は言葉そのものを無視して治療を続ける。だが何度淡い緑の光が傷口を覆っても、一向に血は止まらず傷は塞がらない。「何で」「どうして」と呟く湊と美奈子の顔色は薄暗い中でも分かる程に青白く、その呟いた声音も酷く震えていた。

床面を血が濡らす。血溜まりは広がり続けるばかりで、それが示す意味を理解などしたくなかった。

「……私……私も、私という存在も……全部、作り物だった……」

「そんな事無い！ だって、叶鳴はここに居るじゃない！」

塞がらない傷に自身も手が真つ赤に染まりながら言い募るめぐみに、叶鳴は微笑む。その焦点は、徐々に合わなくなつて来ていた。

「……はい。全部……作り物でも……私は……居たんです。作り物なら、いつそ……忘れられた方が、いい……きつとそうかも、しれない、けど……」

でも、とか細く弱くなり続ける声で、叶鳴は願う。

「皆さんが……私を、憶えていて、くれるなら……過ぎた事が、ニセモノじゃないって……思える、から……」

「……何当たり前の事言つてんだよ。ダチの事を覚えてんのは当然だ」

「忘れる訳、ないじゃない……これからだって、沢山、一緒に過ぎそうよ」

「そうだよ、守本。だから……」

湊と美奈子は無言。俯いたまま、叶鳴の願いの代償のように示される残酷な事実を認めたくないように、治療を続けていた。

憤はそつと叶鳴の手を握る。指先からはもう、ほとんど温度は感じられなかった。

「私……幸せ、でした。こんな風に、皆さんに……ああ、でも……」
微かに零れた望みは、叶う事も無く音に表す事すら許されずに。

ただただ温度を、動きを、瞳の光を失つて。

「守本……っ」

「っ、ちくしよおおっ！」

「叶鳴……叶鳴っ……いやああああ！」訪れた別れに、悲痛な慟哭が木霊した。

18：月（1）

陽が落ちて、代わりに恐ろしく不気味な青緑色をした月が浮かぶ。

叶鳴の身体を抱えた慎は何かによってほぼ半壊状態となった研究施設から外に出ると、車の傍で待機していた戌井と洵と合流した。

「……慎」

慎達が研究施設へ入っていた間に追い付いたのだろう。洵と戌井の他に、真田と諒も居る。諒は慎の様子を見て、何かを察したように声を掛けながらも無言で居る慎にそつと目を伏せた。

その場に居る者達は何も言えず、重々しい沈黙が流れていく。そんな中、湊と美奈子が相変わらず何も言わないまま海がある方角へ身体を向けた。

「……有里？」

言い知れぬ予感に思わず慎は湊と美奈子に向かって呼び掛けるも、それに対して湊と美奈子が振り返る事は無い。寧ろ直ぐにでも駆け出してしまいそうな様子に、つい湧き上がった焦りのままに語気を強めた。

「待ってくれ！ 何処行くんだよ!？」

そう言わないと、きつと湊と美奈子はまた黙って行ってしまう。それが酷く怖く感じて、咄嗟に声を上げると湊と美奈子は少しだけ慎達の方へ向いた。

「止めないと」

「止めるって……あの、デカイ何かをか？」

「……未確認の何かが、海へ向かっているという報告を受けたが……」
研究施設に居た奇妙な外観の巨躯。叶鳴を傷付けた存在。それから恐らく、小松原の執念の残骸であり無意識と有識を融合させようという欲望の成れの果て。

真田が呟くように、あれは研究施設を出てから海へと向かっているらしい。綾風市の海底、そこに在るといふ心の海の意識の集まりでもある「くじら」と接触すべく。

もしもそうなったら、人間は人間たる意思を失う。自己という境が

曖昧になり、精神的な死から肉体的な死まで導かれる事になるだろう。

そうさせない為に、あれを止めないといけない。そう思う理由も、その為に動こうとするのは分かる。けれども。

「……何で、それを有里達がやらなくちゃいけないんだ」

口から零れたのは、ずっと思っていた事。

あの巨大な何かは、人の身から独立して存在を成したペルソナだ。ペルソナに対抗出来るのはペルソナ使いが扱うペルソナ使いのみ。湊と美奈子が口にした事は無いが、今までも何度か見て来たから湊と美奈子がペルソナ使いであり、それも恐らくかなりの使い手であるのだろうというのも分かる。止める力があるのなら、それを使う。今、そういう状況でもあるのだろうかというのも分かっている。だが、それでも他ならぬ湊と美奈子がやらねばならないという事がどうしても納得出来ないままだった。

「あれは、有里達の所為じゃない。有里達がそんな風にする必要なんてない。確かに、このままじゃいけないっていうのは分かるけど……だからって、何で有里達ばかり……こんなに背負わないといけないのは間違ってる」

慎自身、そう言っている場合ではない事も、身勝手な言い分だとも分かっている。だが、そう言わないと、何よりも湊と美奈子がただただそれを受け入れてしまっているように思えて、誰も慮っていないように思えて、湊と美奈子もそれを感じないかのようにして辛かった。

綾凧に越して来てから、出会ってから、共に過ごした時間を長いとは言えないかもしれない。けれど、短過ぎるとも言えないと思う。たとえ全てを知らなくとも、知らされなくとも、分かる事はある。感じる事もある。

過ごした他愛の無い時も、自分達が傷付けられようとした時も、叶鳴を助けられなかった時も。湊と美奈子は、慎達と一緒に感じたり思ったりしていたのだろうかから。

「……そう選んだから」

「その責任、だから……」

「バカな事言ってるじゃねえ！ オレ達と何も変わんねえだろうが、なのになにかとか何かしなくちゃとかそんな責任も何もねえつてのに！」

「ねえ……選んだ事かもしれないけど、そう選ばなくちゃいけない事だったの？ そう選ばなくちゃならなくて、そう選んだとしたら……それは、悲しくて……寂しいよ。……頼ってくれないのも、信じてくれないのも」

短い湊と美奈子の言葉に、拓郎が詰め寄ってめぐみが掌を握り締める。それに湊と美奈子は無言。肯定でも、頷いていけないから沈黙を選んだ事を示していた。

拓郎もめぐみも、慎と同じ思いだ。きつと力不足なのだろう、足手纏いであるかもしれない。だとしても、湊と美奈子に行かせたくない。湊と美奈子ばかりに押し付けたくない。

そんな事をさせるのは——友達ではないと思うから。

「……行つて来る、から」

「有里！」

「この場所をお願い」

少しだけ振り返っていた顔が再び海へ向けられ、前触れも無く走り出される。

呼び止めようと腕を伸ばしても、既に距離は取られていて捕まえられない。その前を湊と美奈子が行く先を阻むように複数の黒い影が現われ、対して湊と美奈子は腰元から銃のようなものを取り出した。

引かれる引き金。淡い青の光と共に、また見覚えの無い半透明のペルソナが現われて影を消し去っていく。その後ろ姿は、もう慎達へ振り向く事は無かった。

「有里……」

行かせてしまった。止めたかったのに、止めたとしても行くのだからとは分かっている。

忸怩たる思いを抱える慎に、成り行きを見守っていた真田が近付いて来る。一度、腕に抱えていた叶鳴を見遣り、そこから再び慎を見た。

「……『彼女』の事についてだが。こちらに、似たものを研究していた施設がある。既に稼働は停止し、研究データもどれ程残っているか定かではないが……治療を引き受けさせて貰えないか。出来る限りの事をしよう」

「……何でそう言ってきたんですか」

叶鳴の正体は成井から聞いていたのだろう。知っていてなお、「治療」などと言い換える真田に少しの警戒を混ぜて問う。

「……そう頼まれたからだ」

「……っ」

慎の問い掛けに、真田は海辺の方角へ目を向ける。そこには誰の姿も無い。既に走り去った後で、今まさに海へ向かって走っているであろう者は。

やっぱり、行かせたくなかった。慎達には言わずに真田にそんな事を頼んで、誰にも何にも巻き込ませないよう駆け抜けるその様が、余計に寂しそうに見えるから。

海へ近付く毎に、空気に潮気が混じって来る。

じくじくと胸が、心の奥底が痛む。新たに開いた傷が血を流すように、古い瘡蓋が剥がれて膿み出すように。

歯を食い縛って、口許を引き結んだって、声が出ないだけで零れるものは止められない。止める術を知らず、癒す術だって分からない。自らで抱えるしかなくて、他と分け合う事も出来なかった。

ただ身体は、足は今すべき事の為に躊躇い無く動く。あの巨体はゆっくりとした速度で綾風の海へと向かっている。その目的は人々の集合的無意識でもある「くじら」なのだろう。「くじら」との接触を何としても阻止せなければならぬ。

無意識と有識の融合の危険を示すように、湧き上がるシャドウを通過しがてら片付けていく。空の月は見慣れ過ぎていた青緑色——影時間の月。現実が侵食されつつあるという証拠でもあった。

「綾時」

呼び掛けると、心の奥深くで共に在るものが応じる。

『それでいいのかい』

「思う所があるんだろ」

音無く身に纏った鎖を引き摺らせて問い掛ける綾時——否、「デス」に対して、問い掛けが含んだ意味を知りながらも敢えて無視して言う。

それでいいのか。そんな事を言われたって、だったらどうしたらいいとも言えない。言いたくない。「デス」の名を冠しながらも、長い間心の奥底に居た為か気遣うように少し悲しげな様に堪えているものが零れてしまいそうで、余計に言えなくなってしまう。ましてや、仕方無いだろう、なんて事も言いたくなかった。

「行つて」

勿論、それは綾時も分かっているのだろう。やはり気遣うような気配を滲ませながら、それでも駄目押しとばかりにもう一言告げると「デス」は襪褌の布を翻して湊と美奈子の頭上を飛び越えて海へ向け

て飛び立っていった。

「アス」ならば、「くじら」の中に居る者達を見つけ出す事も、接触する事も出来るだろう。くじらは人々の集合的無意識のひとつ、「死」の概念が人々に在る以上は拒まれる事は無い。

綾時に頼まれた事は託した。あとは、あの巨体をどうにかするだけだ。

海に近付き、湿り気を帯びた空気を吸い込む。

——そうだ、覚悟を決める。

戦う覚悟を、止めるのだと、守るのだという決意を込めて。その為に「此処」に居るのだろう、そう選んだ責任だろう。

地を蹴る足に力を籠める。綾凧の海際、まるで意識の彼岸と此岸を表すように、波打つ岸辺で巨軀と対峙した。

広がっていく闇は霧のように濃く深く、まるで現実が侵食されていくかのよう。青緑の月の下では影の方が多く、一段暗い場所から新たにシャドウが湧き出て来るのが見えた。

目の前の巨軀は、研究施設の時に遭遇した際とはその姿形が異なっている。巨大な体軀は変わらない。その周囲に浮かばせていたリング状の何かは身体に吸着させたかのように模様にも似た様相になっており、影時間に似た夜と同じ体色の上に這っていた。

「……っ」

尖兵のように襲い掛かるシャドウを片端から斬り払い、姿形を変えた巨軀を睨み付ける。

姿形を変えるのはこれまでも経験があつた。それなら良くはないのかもしれないが、まだ良い。だが、この目の前のモノはそれだけで済まされるものではない。

だってそうだろう、形は辛うじて人の姿はしていても——頭部だけではなく両腕両脚が、手足の代わりに人間達が生えていて、しかもあの稀人達の姿をしていたのだから。

おぞましく、悪趣味にも程がある。手足に成り果てた稀人達の眼窩はぼつかりと虚ろな穴を見せており、自我も意識も感じられない。この目の前のモノにペルソナを奪われ——つまり剥がされて取り込ま

れたのだろうか、それにしたってこんな姿として表さなくても良いだろうに。

少し荒れた波が足下に打ち寄せると、同時に足場が不気味に光って景色が変わる。

夜よりも深い闇はそのまま、頭上どころか足下一帯まで広がっている。ただ、完全な暗闇ではない。足元に何の光源なのか分からない薄紫の光が這っていて、何かの紋様のような形を描いていた。

例えるなら、影時間の時のように。この場一帯が異世界のようにでもなっているのだろうか。分からないし、きつと考えてもどうにもならない事なのだろう。今どうにかすべきなのは、この目の前のモノなのだから。

目の前のモノの手足が動く。海辺に近付こうとする。飛び上がらないのは、対峙する湊と美奈子を脅威と認識しているのか。それはそれで都合が良い。こちらに関心が向かっている限り、こちらを排除しなければならぬという意識が働いている限りは危惧すべき事態にはならない。

「ナンディ」

召喚器の引き金を引く。それが、戦闘開始の合図でもあった。

先に防御を底上げし、先んじて襲い掛かって来るシャドウを疾風で蹴散らす。続いて湊は剣を構え、目の前のモノへ向かって走った。目の前の本体らしき所から、灼熱の炎が放たれる。熱を持ち、嵐のように荒れ狂うそれを見切る一方で、美奈子がジャアクフロストを召喚して生み出した氷が炎を飲み込んでシャドウと目の前のモノの接近を防いだ。

纏わり付いて来るように飛び掛かって来るシャドウが煩わしい。剣と薙刀、それぞれで斬り払い、湊はマリンカリンをぶつける。効果範囲にあるシャドウは悩殺状態になったが、目の前のモノに効いた様子は無い。他の強敵でもそうだったが、状態異常を引き起こす類は効果が無いようだ。この分だと、ある程度の属性耐性も考慮しないといけないかもしれない。

間合いを詰める。つま先が地面を蹴り、袈裟掛けに一撃。手応えは

ある。ワンモア、とした所で右側からの腕が振りかぶられた。

素早く美奈子がペルソナをセイリユウへ切り替え、マハタルンダで威力を減衰。湊は振りかぶられた腕を剣で受け止める。威力は落とされたが、それでも随分と一撃が重かった。

受け止めた腕から、何かが放たれる。それを感じて美奈子が続いて疾風の魔法を放つが、相殺しきれずに湊も美奈子も後方へ吹っ飛ばされた。

「……ナタタイシ」

再び距離が離される。再度の接近を試みる為、ペルソナを切り替えて速度を上げる。湊よりも僅かに吹き飛ばされた距離が遠くなかった美奈子は、湊が体勢を立て直す間に目の前のモノの左足を削ぐように薙刀を横合いから振るう。身体が僅かに傾いたが、まだ浅い。横から振るった刃先を返し、そこから突き。右足から蹴りが繰り出されるのを避けたのを狙われて、目の前のモノの右足から空間が歪むような何かが放たれた。

「！」

美奈子が咄嗟に追撃を中断し、身を捻るも全て避けきる事は出来なかった。喉から小さく苦悶の息が漏れ、ふらりと身体を傾かせた美奈子を所々で同士討ちを行っているシャドウの群れを擦り抜けた湊が庇って目の前のモノの腕を斬り付ける。

先程の攻撃はかなりの高出力だと思うが、予め多少威力を減衰させておいたお陰で自然治癒で何とかなる。今は能力の底上げを惜しまず使う場面だ。間髪入れずに追撃を加えようとする湊に、美奈子は再びペルソナをジャアクフロストへ切り替えてタルカジャを掛けさせていた。

全身に、左右手足。それらが本来腕や脚のようではなく人間が生えている様になっているように、それぞれが別々に特性を持っているらしい。形作っている人間の意思はもう存在していないだろうに、個々で動いているように見える分一層悪質だ。

落ち窪んだ眼窩には何の感情も浮かんでいない。斬り付けても、痛みに呻いた様子も無い。呵責を生まないという点ではそうなのだろう

うが、ただ手足として生えているという部分が強調されているようで尚更にわざわざ人の形をしている意味が分からなかった。

左から腕が振り上げられる。湊はそれを避け、美奈子がラクンダを掛けるのに合わせてカウンターの一撃を放つ。目の前のモノが少し退くのが見えた。

やや後退した目の前のモノを庇うように入れ替わりにシャドウが湧き出る。一体ずつの力はそう無いようだが、際限が無い。

このシャドウは何処から湧いて出て来るのか。巖戸台の時も思ったが、それだけ人々の普遍的無意識が反映されているのだろう。倒した所でキリが無い。だが襲って来る以上はそのまま放っておく訳にはいかない。恐らくだが、この場所は目の前のモノの影響が大きい故に特に多く集まっているのだろうが、他の場所にもシャドウは出現しているのだろう。綾風市内で密かにシャドウを湊と美奈子が討伐していた事実から、この場のみに居るとは考え難い。

他は——他の者は。思考し、今の選択をした際に掛けられた言葉に詰まる息を飲み込む。突き放したのは自覚していた。深く沈んだ底で軋むものには目を背けた。この思考は、今は考えている場合ではないと。

左右、両側から剣と薙刀を振るう。傷付いた体軀から噴き上がるのは血飛沫ではなく、黒い煙のようなもの。周囲の暗闇と溶けて霧散していくそれは、目の前のモノが如何にヒトと逸脱しているのかまざまざと思ひ知らされた。

目の前のモノが右手を振り上げ、地面に叩き付ける。大きく足元が揺れ、仕方無く一旦攻撃を中止して剣と薙刀を支えにして食い縛る。威嚇か、何かの予備動作か。ならばその次に来るのは回復か大きな攻撃のどちらかだろう。

どちらもさせる気は無い。距離は離されてしまっている。直接的な攻撃が難しいのなら、残る選択肢はひとつ。

召喚器を構える。引き金を引くタイミングは互いに合図を交わさずとも分かり切っていた。故に、青い欠片が舞い散ったのは全く同時。

心の海に揺蕩う存在に向けて呼び掛け、喚ばれたのは敵対者の名を持つ悪しき蛇と、天界から堕ちた大天使——表す姿形は違えど、どちらも「同じ存在」。

二体のペルソナの姿が重なり合い、ひとつの力を生み出す。

「ハルマゲドン！」

18：月（3）

外がざわざわと騒がしい。

足立はさつき出て行った。急な出勤らしい。ミカンを食べる手を止めてぶつくさと言いながら出て行く前に、こちらを見遣る目に居堪れず逸らした。

総司とて、言いたい事は分かっているのだ。足立がそれを口に出して言わなかったのは、それが一番の意趣返しだからなのだろう。

気付いていた。この綾風市で起きている無気力症候群も、足立が駆り出されているという事件も、今この状況にも。気付いていても、知らないように、見えない振りをしていた。そうした所で何かかが変わる訳でもない。自分には何も変えられないから、それならば最初から知らないものとして、見えなかったのだとしたらいいのだと。

今だって、そうしたらいい。事件なら警察の領分だ。自分に出来る事なんて何も無い筈、なのに。

ふと、次なるミカンへ伸ばそうとしていた手がテーブルの上に置きっぱなしになっていた幾枚かの葉に触れる。前に、空のランチボックスを返して貰った時に袋に入っていたのだ。何処かで紛れただけなのかもしれないが、見覚えがある。見覚えがあるように思えた。

ひとつ思い出すと、そこから芋づる式に掘り起こされるのが記憶というものだ。今も深い霧の中、止まない雨の中の記憶。それから逃げ出してこの綾風市に来た今も、消えなくて止まない。

もういいじゃないか。内側から囁く声がする。ああそうだ、と受け入れて飲み込んで、あの時だって結局「真実」を知りながらもここに居る。

——本当に？

己が眼を見開いて、発するべき事があるだろうとはじまりの自分が囁く。

何を今更。そんなものは、もうここには何処にも無いじゃないか。それは消えた筈で、必要無い筈で。

——違う。

どちらともつかない自分が言う。消えてなど居ない。自分が思う限り、自分は消えない。ただ心の海に還っただけ。だつてそうだろう、「もう一人の自分」は自分が否定したい自分。今なお目を背けて見ない振りをしている自分が居て、けれども同時に真実を明らかにしようとしていた自分だつて居たのだから。

窓の外から、見た事は無い筈の不気味な月が見える。心の奥底のざわめきは波のようで、突き動かすものが果たして何なのか自分でも分からない。

けれどもそうしたいからと、そう約束したからと、誰に何に言う訳でもない想いのままに身体は外へ飛び出していった。

暗い昏い、心の海の底。

儂い星の光など届かない。冷たい帳が下りたまま、流れていく記憶の波に身を委ねる。

——行けよ、偽善者共……。

隔たれたものは深く厚く、近付いたと思つたら離された。

あんな事をさせたかつた訳じゃない。そうさせたくなかつた。たとえ許されない事だつたとしても、だからこそああなるべきじゃなかつた。

ならばどうしたら良かつた？ 何を選ぶべきだつた？ 何が正しかつたのだろうか。

——選択を迫る事が、かえつて君を苦しめているんだね。

もう何も考えていたくない。ただただ眠っていたい。だから眠り続ける。赤子のように膝を抱えて身体を丸め、誰からも何もものからも自分を守るように。

そうした所で何の解決になつていないのだからという事は分かつている。分かっているが、その事実すらも考えていたくない。思考しなかつたら、何も感じない。傷付かない。だから眠り続けていたい。

もう考えたくないんだ。向けるべき相手すら居ないのにそう訴え

た思いに、頭上から溜め息が降って来る。

ふわりと香る甘い匂いが、ああ何処かで聞いた声だと記憶の引き出しを漁る。鈍い思考は大した事も考えられず、ぼんやりと顔を上げる。そこには実父への復讐の為に二代目探偵王子として数々の事件を解決させていきながらも、その一方でそれらに関わる精神暴走事件を引き起こしていた者——明智 吾郎が居た。

何で明智が居るのだろうか。これは自分の認知が生み出したシャドウなのだろうか。だとしたら、この明智はこんな自分を笑いに、もしくは詰りに来たのか。そうかもしれない。

お前ならそうするかもな、と思いつながら、見上げる自分の面はさぞや間抜けに見えただろう。呆けた顔を晒す自分を見下ろす明智は、酷く忌々しげに舌打ちを零した。

「誰がテメエの思い通りになんざしてやるかよ」

嫌悪と憎悪が混じった声が懐かしい。

しかし、思い通りにしてやらないというのなら、何をしに来たのだろう。それはそれで神経を逆撫でしそうな事をつらつらと思っていると、眼前に銃口が突き付けられた。

ああ、成程。自分にはこうして野垂れ死ぬのが相応しい。そういう事だろうか。

誰にも気付かれず、何も残す事も目覚める事も無く。それも良いかもしれない。

こちらを見つめて、同じように見返した明智の顔は、やっぱり酷く面白くなさそうに歪んでいた。

「……いい加減に」

ぎり、と歯噛みした音が届く。

「いい加減、目を覚ましたらどうだ？ お前がウダウダ悩んでる事なんぞ、お前が見てる夢でしかねえんだよ」

指が引き金に掛かり、それが引かれると同時に。誰かが自分の手を引いた。

——これだけ寝こけていたんなら、「現実」だって同じ事だろうか？

「……」

目が覚める。途端に視界に広がったじやあくなフェイスに、冷静に意識が巡らず慌てて飛び起きた。

「うわっ!？」

叫び声を上げ、上半身を起こすと手許にジャアクフロストのぬいぐるみが転がり落ちて来る。目を覚ました直後、視界に映ったのはどうやらこれらしい。ただ、見覚えはあっても心当たりは無かった。

室内を見回す。病院の一人用の個室。カーテンを捲ると、見た事の無い青緑色の月が浮かんでいた。

常とは異なる色合いの月は、見ていると心の奥底を無遠慮に掻き乱して来る。嫌な感覚だ。まるで嫌な夢でも見ているかのような――否、きつとどちらでも同じ事だろう。

窓から視線を外すと、ベッド近くのサイドテーブル上に何か置かれている事に気付く。カードのようだ。手に取ってみてみると、それが何なのか瞬時に理解した。

何処かの転載コピーなのか、画質が荒い。色も何処と無く褪せていたそれはとつくの昔に人々の記憶から忘れ去られてしまった証左のようで、自分の行いが無駄でしかないと突き付けられているようだった。

こんなもの、今になって。一体何になるんだ。湧き上がった怒りの感情に従って、持ったカードをゴミ箱へ捨てようとするも、そこでゴミ箱の中に既に何か捨てられている事に気付いた。

花屋のシールが貼り付けられた包装紙とビニール、それからしおれた花。枯れてはいるが、完全に色褪せてまではいないからそこまで日は経過していない。その上に、食べられて皮だけになったミカンが捨てられていた。

サイドテーブル上、花瓶に生けられたデュランタの甘い香りが鼻腔を擽る。

夢うつつの挟間に、感じた温もりが指先に蘇る。ほんの微かで、気の所為だったのかもしれない。けれども気の所為ではないと、示すものがある。

心の奥に炎が灯る。否、きつとずっと、はじめから在ったのだ。そ

れを考えないようにしただけで、思いたくないとしていただけで。そして自覚したのなら、すべき事は決まっている。

故に自らから生まれ出でた衝動のままに、暁は病室を飛び出した。

19：太陽（1）

夜よりも暗い闇が、世界を覆っていく。

空に、陸に。被さった深い闇から、不気味に蠢く影が生まれ出でた。あれは研究施設でも、それよりも前に稀人達に出会った時にも見たものだ。

一体、あれは何なのだろう。見ているだけで、何だか心の奥底がざわついて落ち着かなくなる。だがそれを疑問に思う暇は無かった。這い出て来た影が通行人に襲い掛かり、襲われた人間が廃人状態になっっているのを目の当たりにしたからだ。

あんなものが、綾凧市じゅうに広がったら。想像するだに恐ろしい。

そんな事があつてはならない、と思うと同時に、湊と美奈子が慎達に託した言葉を思い出す。

この場所を頼んだ、と。恐らく、湊と美奈子はこのような事態になる事も想定していたのだろう。何故、分かっていたのかまでは分からない。だがそんな事は今どうでもいい事だ。それよりも、この不気味な影をこれ以上広げないようにする方が先である。

湊と美奈子がこの場所からあの巨軀の何かを追う際、群がって来る影を一掃しているのは見ていた。あれはペルソナで倒せる。だからこそ、この場を慎達に託したのかもしれない。ならば、たとえ非力だったとしてもその思いに応えたかった。

「クソッ！ キリがねえ！」

「どんどん増えていってる……」

慎と同じように、この場所で拓郎とめぐみはペルソナで向かい来る影の迎撃していた。

影はそこまで強力ではないようで、何とか慎達でも倒せはするが如何せん数に限りがない。ペルソナ使いではない者達——真田や成井、ペルソナを使えなくなっている諒は慌ただしく周囲の住民の避難を促していた。

半透明に透けた大剣が影を薙ぎ払い、消し去る。だがその端から新

たな影が生まれる。その繰り返し。ペルソナを行使する毎に体力、それとも精神力とでも言うのだろうか。それが消耗していくのも感じていた。

これではジリ貧だ。けれども、慎達が今出来る事はこれくらいしかない。湊と美奈子はあの巨体を追って行った。あれを放っておいたら、今以上の被害が出る。だからここは自分達で何とかしないといけないのに。

「慎！」

「神郷君！」

焦りは油断を生む。拓郎とめぐみの声にはっと慎が我に返った時には、直ぐ目の前に影が迫っていた。

避けられない。ペルソナの行使も間に合わない。辛うじて咄嗟に腕を前に出して頭を庇おうとした慎の前を、何かが立ち塞がった。

「!？」

しゃらりと、と鎖が音を鳴らす。その一瞬後、放たれた一閃は慎に襲い掛かろうとした影を容赦無く斬り払った。

「あ……」

目の前に現われたものが振り返り、慎は思わず引き攣った息を漏らす。

黒い襪褌布を被ったその足元は浮いており、地に足が付いていないどころか足が無い。先程、影を葬り去ったのは、襪褌布の下から伸びるすらりと長く真っ直ぐな剣。両端に分銅が付いた鎖はゆらゆらと揺れ、頭部にあたる部分はまるで骸骨のようだった。

これは、ペルソナじゃない。あの影のようでも、それよりも更に。向き合う足が震える。怖い。人類というものが存在して以来、決して切り離せぬ根源的な恐れ象徴。絶対的に抗えぬ行き先。

身体が傾ぐ。体勢を取り直す事も出来ず、ふらついた慎の身体を支えたのは異変を感じて駆け寄って来た諒だった。

「諒兄、ちゃ……」

縋るように慎が諒に目を向けると、諒も強張った顔で腕に力を籠める。よく注視すると、寒くもないのにそのこめかみから汗が一筋流れ

ていた。

目の前で黒い襪褌布の骸骨が宙に浮いている。それが僅かに動いたと思つたと同じくして、慎と諒の前へ洵——否、「結祈」が歩み出た。

「結祈！」

「大丈夫」

「結祈」が手を伸ばす。するとその指先に合わさるように光が場に満ち、その眩しさが和らぐと目の前には長い髪を揺らした結祈と赤い髪の少女が立っていた。

「ありがとう、洵を連れて来てくれて」

半透明の身体に、長い髪をなびかせた結祈が微笑む。

「結祈……洵、は……」

「洵は、洵の身体に戻つたよ」

慎を支える腕とは反対側、諒の腕に抱かれて眠る洵に向けて結祈が言う。そうか、と小さく安堵の他に複雑な色が滲む諒の眩きに、洵も洵の中に結祈が居る事を感じていたのかもしれない。

「洵」が無事であるという事に安心しながら、改めて慎は目の前に現われた結祈と赤い髪の少女を見つめる。赤い髪の少女は、以前見た事がある。一番古い記憶は、そう、両親を喪つた10年前のあの日。

「君は、アヤネ——小松原 彩音か」

小松原 彩音。小松原、という苗字は、あの小松原 啓祐と同じだ。という事は、この少女はあの小松原の娘なのだろうか。

諒の問い掛けに赤髪の少女、アヤネは頷き、悲しげに表情を歪める。

「くじらは苦しんでいる……わたしは、おとうさんを止めたかった」
研究施設の中で、叶鳴を傷付けられたショックで慎が反射的にペルソナを発現させてしまった時。あの時に巨軀から切り離されたペルソナとなった小松原と、慎が結祈に託されたくじらの羽根が触れた事によつて、アヤネは小松原に残つた精神に触れた。

「……くじらが、教えてくれたの。おとうさんは……わたしを、くじらの中から取り戻そうとしていた」

かつて、神郷両親も関わっていた研究。人工的にペルソナを作り出し、人に植え付けるといふもの。その第一の被験者であり、成功者が

娘の彩音だった。

だが、実験を繰り返すうち、ある意味で人の意識の塊とも言えるペルソナを重ねた彩音はこの研究が人理に反したものだとして理解してしまう。これはヒトがしてはいけない事。けれども研究に邁進する父を止める事も出来ず、彩音は綾風の家——くじらの許へ自ら沈んだ。被験者である彩音の行いにより、研究は水泡に帰した。神郷両親やひいらぎ製薬社長の柊も研究から手を引き、小松原と袂を分かって去った。父の小松原だけが、諦められずに寧ろ研究に対して執念を燃やしていった。

恐らく、その頃からだったのだろう。小松原の目的が、有識と無意識の融合ではなく——その狭間に揺蕩う娘を取り戻す事に変わったのは。小松原自身はそうとは口にしていなかったが、あの研究施設の中に彩音を元にしたクローンまで作り出していたというのだから間違いないだろう。

人のあるべき摂理をねじ曲げる行為。それは所詮、人には不可能な事であるし、実際それは大きな歪みとして現われた。

最早、あの巨軀に小松原の精神は残っていない。あるとしたら、ただの妄執であり空っぽの器を満たす意識を求める本能的な何かだ。

「だから、止めなくちゃいけないの。このままじゃ……」

アヤネの言葉を引き継いで、結祈が言う。その先は、慎でも察する事が出来た。

広がり、増え続ける影。空に浮かぶおぞましい青緑色の月は、絶望的な状況をこれでもかと言わんばかりに照らし出して来る。

その中で、慎は一際濃い暗闇が集まる一点を見つめる。あの巨軀が目指す方角。湊と美奈子が向かって行った方向でもある。

『それを止める為に、戦っているんだ』

今まで黙っていた黒い檻襦布から唐突に言葉が発せられて、慎は思わず大きく肩を揺らす。

話せるのか。びっくりした。意識すると、やはりどうしても恐怖を先んじて感じてしまう。だが、不明瞭でノイズ混じりな、この黒い檻襦布のようなものから発せられた声は何処か聞き覚えがあった。

何処で聞いたのだろうか。少なくとも、このような姿には見覚えが無いのだが。思いながらも、慎の口から出たのは別の言葉だった。

「……有里達なら、って事か？」

くじらの許に居た洵の精神を連れ戻すよう、洵の身体に残っていた結祈が頼んでいたのは湊と美奈子の筈だ。だが、実際に洵の精神とアヤネを連れて来たのはこの黒い檻襦布。この檻襦布と湊と美奈子がどんな関係であるのかは分からないが、湊と美奈子にはこの黒い檻襦布の存在に心当たりがあるという事になる。逆に言えば、この黒い檻襦布も湊と美奈子を知っているという事だった。

『僕は信じているから。信じているんだ、だけど——』

言葉は最後まで続かない。特に影が集まるその一点に夜よりも昏い闇色がたわみ、それよりも禍々しい混沌が膨らむ。

淀んだ空気が噴き上がる。咄嗟にペルソナが持つ大剣を前に掲げるが、ほんの僅かな細い糸にも似た一筋の切れ込みが暗闇の中に入るだけ。あとはその場に踏み留まるだけで精一杯だけだった。

「有里っ……」

あの中には、あの中心には、湊と美奈子が居るのに。今もきつとこうして、迫り来る危機を防ごうと、皆を守ろうとしているのに。そんな湊と美奈子を、一体誰が守って、助けてくれる？

自分では力不足だ。そんな事は分かっている。だけど、願ったって良いじゃないか。湊と美奈子は、自らの身など顧みはしないだろうか。

誰か、誰でもいい。どうか、と切なる祈りを籠めて、慎は叫ぶ。

「有里達を、俺の友達を……守って、助けてくれ……！」

——その声に。

『……まさか』

黒い檻襦布が驚いたような、僅かに呆然としたような声を漏らす。それにどういふ事だと顔を向け掛けた慎の横を擦り抜け、目の前に出来た一筋の空間の切れ目へ目掛け——「誰か」が二人、同時に飛び込んで行った。

19：太陽（2）

身体から気力がごっそりと抜けた感覚が襲う。

今まで使っていたペルソナよりも遙かに強力なペルソナによる合わせ技だ、その分負担も大きくなる。意識していないと足元がふらつきそうで、何とか臨戦態勢は崩さないままに目の前へ放たれた光が治まっっていく様を注視する。

ニユクスを封印した時以外で、出来得る限りの最大出力。その筈だ。周囲にシャドウは居らず、闇も薄らいでいる。ならば、無意識と有識との融合を阻止出来た筈だ。

だから、でも――。

そう浮かび上がる泡沫は、何からであつたのだろう。

分からなくて、しかし意識的であれ無意識的であれ、思いは「現実」を招く力となる。それを知っていた筈なのに、我に返った時にはもう遅かった。

「――っ!？」

薄らいでいた筈の暗闇の色が元のように、否、もっと色濃く変わっていく。一気に膨らんだ闇が弾け、その衝撃で湊と美奈子は立っていられず何メートルか弾き飛ばされた。

曖昧模糊とした輪郭が膨れて弾け、茫洋とする内に流動的な肉体を形成していく。光すら吸い込む黒い体色に点々と影時間の月のような青緑色の斑点が這い、手足は手と足という境を失って長短様々な幾多の触手が伸びている。辛うじて人のような姿形はしていたがその体長は人間のそれではなく、顔のない頭部には代わりに血濡れたような真つ赤な舌が伸びていた。

あれを、何と呼んだら良い。元の月色に戻らぬ青緑色の月下で咆哮する、闇色のあれは。

名状するにも心の奥底が拒む感覚。闇より深い混沌が形を成したそれに、ただただ向き合う恐れが逆に立ち上がねばならぬ危機意識を働かせた。

闇と共に触手が広がり、襲い掛かる。半ば反射的に武器を振るって

払うが、闇は——現実への侵食は止まらず速度を増して全てを覆っていく。景色はあつという間に闇に吞まれ、不気味に光っていた足元すら今は空虚な黒ばかりでそこが地面であるという事すら分からなくなってしまうようだった。

『お前達がする事には、何の意味も無い』

目の前のモノが声を発する。小松原のものでも、誰のものでもない。泥の中に居るようにやけにくぐもっていて、その癖やたらよく響いて来る。

「そんな事無い」

武器の柄を握り直し、目の前のモノの触手を斬り払う。再び横合いから新たな触手が生まれ、それに対しても薙ぎ払うが目の前のモノが効いているような様子は無かった。

『お前達は何の為に「此処」に在る?』

目の前のモノが問い掛ける。決まってる。何でそんな事を訊くのだろう。

このままでは、無意識と有識が融合されてしまう。それはイコール自己の喪失であり、緩やかな人類の停滞と死だ。

『世界を、『死』で覆わせない為』

巖戸台の時のように。ニユクスの降臨を防ぎ、人類に「死」を触れさせない為。

その為に「此処」に居る。「此処」に在る。だからこそ、今の状況を止めねばならない。

目の前のモノの両脇から、新たなシャドウが現われる。召喚器を素早く引き抜き、破魔の魔法で蹴散らす。眩い光が一時周囲を照らしたものの、直ぐに深過ぎる闇に吞まれて戻った。

『それこそ、無意味だというのに。お前達の存在そのものが、無為なのだからな』

目の前のモノの声は嘲うように言う。全てを呪い、罵倒し、詰る音。聞きたくない。そう思うのに、声はやたらとよく聞こえる。聞こうとしないように意識する程、それが強く感じられるようだった。

『お前達は、知っている。分かっている筈だ』

どきり、と本来なら止まっていた筈の心臓が強く高鳴る。

何を、何が。咄嗟にそう言い掛ける口は動かない。詰まらせた息に目の前のモノは嘲う。知らぬ訳がない。分からぬ訳がない。相対しているのは普遍的無意識でもある。ならば、自分自身も当然含まれるのだから、と。

『元より、「此処」にお前達は存在しないのだ』

この綾風で活動するにあたって、能動的に調べるだけではなくただ過ごすだけでも流れて来る事柄で、湊も美奈子も差違と有無は感じていた。例えば、巖戸台で関わった組織や、絆を深めた者達。それに、とイゴールに言われた言葉が蘇る。

——此処は貴方がたの知る世界ではありません。

此処は幾多にも枝分かれしたひとつの可能性なのだ、と。

そう言われた時点で、否、それよりも前に、感じてはいた。何か異なる。それは「ある」事であり、「ない」事でもある。

「……だからって、何もしない事にはならない」

「このまま何もしないままなら、それこそ『此処』に居る意味が無くなるから」

たとえ、そこに「自分」が存在しなくとも。

絞り出した声は固く、伴う表情も硬くなった。けれども反駁しないままであつたのなら、どうしたらいいのかすら分からなくなってしまうそうだった。

そんな恐れなど見透かしているかのように、目の前のモノはただただ狂った嗤い声を上げる。シャドウは増えながらも襲い掛かって来ない。代わりに深い闇が這い回り、何処とも知れぬ深淵へと手招きするように蠢く。同じように、湊と美奈子も武器の柄を握り締めるだけで精一杯だった。

『違うだろう？』

混沌より這い出たモノが嘲う。

違う、そうではない。そんな事を言った所で、ただの戯れ言にしかならない。

『世界に「死」を広がるのを防ぐ為に「此処」に在る？ そんなモノ、

元からお前達は居ないのだ。お前達が居ない世界を、お前達がやらねばならぬ理由は何処に在る?』

——何でお前なんだ。

違う。あれは、そういう意味じゃない。かつての言葉が悪意となつて突き刺さる。そんな事で、そんな思いで、思い出したくなどないのに。

此処には、「自分」を知る者は居ない。覚えていないのではなく、元々「自分」が存在していないのだから、当たり前だ。「自分」が知つていても、「自分」を知らない。知らなかったのだ。「自分」が存在していないまま、関係無く彼等や彼女等は生きている。あの出会った日々も、無くて同じだったのかもしれないという思いと共に。

「で、も……」

でも。だけど。そんな逆接の言葉から先は続かない。

『人類に「死」を近付けさせぬ為。それはただお前達が「此処」に居る為の言い訳でしかない』

目の前のモノは容赦無く続けられぬ先を勝手に紡ぎ、嘲う。酷く耳障りで、けれども塞ぐ事は決して出来ない。聞きたくない思つても、それは聴覚を越えて伝わって来る。

違う、嘘ではない。そう思うのに、「自分」を否定するなど何処かで声がする。何処か、何処までも昏い深淵の水底。

『「此処」に在るのは、「此処」に居る意味は、他でもないお前達が望んだのだ』

望んでなんていない。望んではいけないと思つているのに。

目の前のモノは言う。心の海に揺蕩うそれに代わつて。

『生きていたい』のだとな』

それは、許されぬ望みだった。

大いなる封印。自らの魂を代償にして、「死」の普遍的無意識でもあるニクスを封印するもの。魂を引き換えにするとすなわち、肉体的な死を意味する。

あの時。自らの命の意味を見出したが故に、選んだ道に後悔は無かった。仲間達を信じてもいた。だから、この魂を賭けると決めた。

大切だったから。ずっと何もかもがどうでもよくて、「自分」すらなくて、生死の境すらよく分からずにただ在るだけの日々だったのに。それが「自分」と向き合い、仲間と出会って、共に日々を過ごして。どうでもいいような事だってあったけど、それがとても掛け替えのないものとなっていた。

この魂を賭けても救いたいと思った。守りたいと思った。その為なら、この魂など惜しくもないと思った。それは、偽りではなく本心だった。だからそう選んだ。

けれど——もつと生きていたかった、と。

まるで死んでいたようになっていた自らが、駆け抜けた日々で生きて進み出したのを感じたのと同じように。「その先」を考えるようになったのも、事実だった。

「そんな、事……」

無い、と否定の言葉を続かせる事は出来なかった。辛うじて出た声すら頼りなく掠れていた。

手が、足が震える。ぐらぐらとする脳を直接揺さぶるように、嘲弄が続く。

『無い？ 嘘を吐くな。幾ら口先で誤魔化した所で、心は偽れまい。望んだのだろう、此処はお前達から先の世界。ただし、お前達は居ない。存在しない。お前達に何の意味も持たない』

感謝するがいい。そう尊大に、残酷に、目の前のモノは嘲う。

もしも。あのまま皆と同じように、同じ時を生きられたのなら。もつと沢山の思い出を、絆を、一緒に笑って紡いで過ごせたのなら。守った世界がどうなっていくのか、生きて確かめていけたのなら。

それを人は、未練や心残りとも言うのだろう。本当に後悔など無かったとしても、一方で浮かんでしまう思いもある。だが、それは「自分」が取った選択に対して矛盾したものでもあった。

『気付いているだろう。本来ならば、有り得ぬ事が在る事を。お前達が居なくば、起こらなかつた事を』

本来なら、有り得ぬ事。「此処」が「自分」の存在しない世界だとしても、本来ならば起こり得ぬ事があったのは分かった。それはシャド

ウの出現であり、そして——目の前で零れ落ちたものたちの光景。

「自分」が居なかったら。そうとは限らないだろうという事も分かっていて。目の前のモノが言う事は全てその通りではない筈だ。それでも、そうだとしても、その上でもっと他の可能性を探してしまふのは人の業でもあるのだろうか。

『それらは全て、お前達の罪なのだ。許されざる事を願い、在るべきではない意味を知らながら望む。何と傲慢で、愚かな事か。所詮、お前達はこの世にあつてはならず、何の意味も無いというのになあ！』

全ては無意味で無価値。そう目の前のモノは繰り返す。

何をした所で、何を言った所で。全ては何にもならない。元々存在しないのだから、何を及ぼす事も出来やしない。

ただ、ひとり。他にも、何にも、誰にも、顧みられる事も無く。それは許されない思いを抱いた報いで、それ故に「自分」が存在してはいけない世界を引き寄せた。

夜よりも昏い闇は全ての境目を失わせていく。息も、鼓動も、聞こえない。当然といえば当然なのかもしれない。本当ならもうとつくと止まっていて、肉体すら無かったであろう筈だから。

思考が奪われていく。闇に足が取られて動けなくなる。

『お前達の所為なのだ。こう在る世界も、全てに……そしてお前達が望んでしまった先も』

抗えない毒の嘔きが耳元へ、否、心の奥底へ流し込まれていく。苦しくてどうしようもなくて、目の前のモノが嘲っているのだけが分かる。

あの時、自らが選ぶべき道を。命の答えを、見つけた筈なのに。『生に意味などないと知るがいい！ 答えなど、どこにもないと泣くがいい！』

目の前が真っ暗になる。八つ裂きにされたように感じたのは身体か、それとも身体に宿る心か。

天地も前後も左右も分からなくなる。ただもがいて足掻いて、それでもどうにもならなくて。

そんな「自分」は助けを、救いを、そうではないような何かを求め

ているかのように。助けは自分から振り払ったのに、助けを求めながら何て身勝手だろう。此処にはかつての仲間はいない。助けを求めようとしたってそんな資格も、そもそも元より「自分」は居ないのだから、誰にも何にも気付かれる筈なんてないのに。

武器を掴む手が緩む。絶望に塗れながら倒れ伏しそうになる。深い闇が手招くのは、底無しの地獄で。

「あとは任せてくれ」

「バトンタッチだ」

そんな湊と美奈子を支えたのは、小さな笑みを携えた総司と暁だった。

20：審判（1）

総司が湊を、暁が美奈子を支えながら、数瞬お互いに顔を見合わせる。

——誰なのだろう。

浮かんだ思考は全く同じ。何処かで、否、何処で出会ったのか。そう思いながらも、それを深く考える暇は与えられなかった。

目の前のモノが形を変えていく。鮮血のような舌は体色と同じ闇色に変わり、四肢が幾重にも分かたれて伸びていく。ぬめった表面はまるで海洋生物のようで、その表層に這っていた点々とした斑状のものは無機質なヒトの容貌を模したモノ——「仮面」が張り付いたようになつていた。

背筋に改めて、怖気が張り付く。同じくして左右から現われたシャドウからは、耳障りな金属音のようなものが響いていた。

おぞましさが増したそれにふらつきながら前に出ようとした湊と美奈子を総司と暁は背中に庇い、目の前のモノと相對する。

あれは何と呼ぶべきなのか。幾つもの名が思い浮かびそうで、そのどれもが正しくどれもが正しくないようにも思える。まるで、「誰にでも成れるが誰でもない」であるかのように。

目の前のモノの脇に控えていたシャドウが襲い掛かって来る。人間の普遍的無意識のひとかけら。もう一つの側面。

それに対抗するのは——「もう一人の自分」。

息を深く吸い込む。心の海にゆっくりと波が広がっていく。長らく意識していなかった。目を逸らして、考えないようにして、逃げていた。だがずっとそこに在ったもの。

我は汝、汝は我。我は汝の心の海からいでし者。

『ペルソナー！』

闇色を逢魔の黒翼が喰らい、青白い稲光が撃ち払う。

はじまりの「仮面」。幾多の仮面を変えて何者に成ろうとも、己のはじまりだけはきつと他に無かった。だからたとえどんなに目も当てられないような己であつても、自分であるが故にこの「愚者」は共に

在る。

『ククク……愚かな者達よ。道に迷い、外れしお前達が出る幕など既に無いわ』

左右のシャドウが倒されても、目の前のモノは嘲う様を変えずに再び新たなシャドウを生み出す。

愚者から始まるアルカナの旅路。それを辿りながらも、結局は明確な答えを出せぬまま逃げてしまった。確かにそれは目の前のモノの言う通り、「愚者」に違いはないのだろう。

それでも、と総司と暁は手に持つて武器を握り締める。この武器は持ち込んだものではない。流星にそんな事をしたら銃刀法違反まっしぐらだ。この武器は、ここへ飛び込んだ際に足下に落ちていた。

何故なのかはさっぱり分からない。それでも、本当に出る幕など無いというのなら。

「それなら、此処に居る事だつて無かった筈だ」

だが「此処」に居る。それは、「此処」に在りたいと思うから。そこで、何かを望まれているから。その何か、何なのかを総司も暁も全て知る訳ではない。ささいなものから、身勝手なものだつてあるだろう。大衆とはそういうものだ。自分ではない何か、自分の願望を押し付けて委ねようとする。あるいは、それこそ出来の悪い自作自演なのかもしれない。

それに、と過ぎ去つた光景は、戻らないから戻れないと知つていても。

「戻れなくても。取り戻せなくても。そこから歩み出す事が出来ない訳じゃない」

前へ踏み出し、迫り来るシャドウを斬り払う。シャドウがどろりと闇に溶ける中、目の前のモノがその巨体から幾多も触手を伸ばして来た。

「来い、イザナギ！」

総司は己が「仮面」の名を呼ぶ。眼前に現われたカードを握り潰すと、青い欠片が砕けると共に冥府へ下りた国産みの一柱が顕現した。

目の前には深い闇。それはかつて、総司自身が逃げ出してしまった

あの場所を覆っていた深い霧のようだ。あれも現実を侵食するモノであつたのだろう。

今、ここではない場所。真実から目を背けて、晴らされるべきものを消して飲み込んで。

『無駄な事を！ 今更悔いて、罪滅ぼしとでも考えるか！』

一斉に伸ばされて来た触手を斬り払うと、その先端から黒い霧のようなものが増き上がる。

罪滅ぼし。そう、知りながらも明らかにしなかったのは、紛れもなく自分の罪なのだろう。あれは総司自身が選んだものだとか、かの共犯者となつた時から、否、それよりも前から分かつていた。

あの時こうしていたら。そんなもしもは数え切れない程考えた。けれども考えた所で何かが変わる筈も無く、ただただ精神をがりがりと削られるだけ。擦り切れてしまった心は耐えられずに逃げ続けたままで居る。

「そうかもしれない」

噴き上がる黒い霧は武器を振るっても消せない。そのまま総司を覆い隠さんとする前に、イザナギの青白い閃光がそれを撃ち払った。

愚かな自分を、それでも痛みにも耐えられなかったから少しでも和らげたくて。誰の為でもなく、ただ自分の為にと今ここに居るのも違くない。

だから総司は目の前のモノの言葉に否定せず頷く。それはかつて、もう一人の自分に対して受け入れる事と同じように。

本来なら許されざる事に対して、逃げてしまった事。仲間を思いながら、それ故に寂しさからかの者の手を取ってしまった事。それは大いなる罪なのだろう。

今更どう足掻いた所で、犯した罪が消える事は無い。目の前のモノが言う通りだ。過去に戻りたいと思つても、それが出来ないと同じく。

けれども。総司が抱えた罪に堪えきれずどうにかしたいと思うと同時に、どうにもならないと分かっている上で他の思いを抱く事があつたとしてもそれは矛盾にはならない。戻れぬ過去を思い、その上

で未来へ手を伸ばして進む事があるように。

黒い靄が雷撃によって散らされ、前方が開ける。周囲は暗く、しかし退けるべきモノが目の前に分かりやすく在った。

「だが、それだけじゃない。だから——無駄だと勝手に決め付けるものじゃない！」

振り上げた刀が、目の前のモノに張り付いた仮面の貌のひとつを両断する。

青白い光を発して割れ消える面。続けて次撃を放とうとした総司に目の前のモノが太い触手を振りかぶり、叩き付ける前にそれをイザナギが受け止める。直後に迸った電流が、靄から何かへと形になろうとしたものも焼き散らした。

ゆらゆらと黒い靄が集まる。絶えず揺れ蠢いて不定型な何かが新たに形を成す前に、それを暁が斬り裂いた。

怪盗服のコート裾が揺れる。この怪盗服を身に纏ったのは、どれ程久し振りだっただろうか。どうするべきか選択に迷い、しかしどちらも選べなかつたまま、ただ眠りの中を貪り揺蕩い続けた。

『かつては疾うに過ぎ去った。今のお前達が成すべき事など何も無いのだ』

目の前のモノが嘲い、シャドウをけしかける。シャドウが振るう腕を暁は後ろへ飛び退いて躲し、そのまま勢いを付けて横合いから武器を振るって腕を薙ぐ。長らく動いていなかったというのに、身体は鈍さを感じないのはここが一種のイセカイだからであろうか。怪盗姿になったのもそうだろう。

どうする事も選べずに、現実を考えないよう深い眠りの中に居た。だが、そんな風に眠り続けた所で変わらないままで居られるのは自分だけ。自分がどうしたって、周りはそのままでは居てくれない。歳月はいつだって誰に対しても等しく流れていく。故に自分へ無情に選択を迫って来ていたのだというのは知っていたのに。

「知っている」

そう、知っているのだ。何も考えたくないとした事は、自分が変わらないままで時間が過ぎる事で選択そのものも何もかもが消え去っ

た。どちらかを選んだ先にある結果すらも。

今はもう、あの時どうするのかとすべき選択も行動も意味は成さない。目の前のモノが言う通り、成さねばならぬと課された役割は無い。

「今成すべき事は無くとも、これからしたい事が無くなる訳じゃない。戻れない時があっても、これから進む時はある」

深いふかい眠りの淵に逃げ込んだ代わりに、何も変えられずに置き去りにしていったのはきつと、選べなかった自分に対する消せない罰なのかもしれないと思う。

それでも、時間は等しく流れていく。どんな者に対しても、何があつたとしても。

心に蒼い炎が宿る。考えたくないと思つていても、忘れ得ず心の海で燃え続けた反逆の精神。

「奪え、アルセーヌ！」

奈落に繋がれた略奪者が翼を広げる。同時に放たれた呪怨の波が、目の前のモノの面のひとつをどろりと溶かした。

際限の無かつたシャドウの出現がふつりと止まる。代わりに目の前のモノの再生が先程よりも早まっていく。シャドウを生み出すよりも、回復や再生を優先させたのか。つまりは、ダメージが通つているという証拠でもあつた。

地を這うようにして伸びながら襲い掛かる触手を斬り払う。僅かに止まる動き、それが再び動きを見せる前に流動的な身体部分と思しきものへとペルソナによる攻撃を行う。

黒よりも黒々しく思える巨体に何か変化があるようには見受けられない。だが、目の前のモノは明らかに総司と暁を排除しようと動いている。総司と暁の攻撃が無意味ならば、そんな事はしない筈だ。

そう思いながら総司と暁がペルソナと武器による攻撃を行い続ける一方で、目の前のモノの聞き煩わしい声が続く。

『まるで、否、正しく負け犬であり敗者の遠吠えだな。全て、お前達にとっては終わった事。「旅路の果て」なのだ』

知恵の実を食べた人間は、その瞬間より旅人となった。

アルカナが示す旅路、淡い希望を託した未来。それは可能性を掴む強い意志と努力。

心の奥底へ耳を傾け、生きる輝きを見つめて。

答えを決する為に向き合う勇氣、知り得た導きを経て、心を通じ合わせながら。

命から得た可能性で可能性へと進み、正しい答えに辿り着く為に、己を見つめて決した道が、永劫に時を巡る残酷な運命でも。

苦難に耐え忍ぶような窮状でも、故にこそ新たな道があり——そして先に待つものが、いかなるものにも等しい絶対の終わりだと。

そう、アルカナは示した。

『——ペルソナー！』

かつて巖戸台で限り無くニクスに近いものと相対した時のように、目の前のモノから闇より深い波動が放たれる。

対して身構える総司と暁の背を見た湊と美奈子は、その隣へと駆け出すと共に召喚器の引き金を引いた。

常世に下った奏者が二体、同時に炎を放つ。押し寄せる波動と炎がぶつかり、周囲に火の粉を撒き散らす。幾ばくかは威力を減衰出来たようだが、充分ではなく防ぎきれなかった余波が襲い掛かって湊と美奈子、総司と暁は膝を付いた。

「……でも、それなら、どうして」

目の前のモノに張り付いた無数の面がこちらを見る。それが浮かべる表情は何なのか。嘲笑か、それとも他のものか。分からない。恐らく、見る者によって変わるのだろう。人があらゆる時や状況、人に対して幾多の仮面を被って生きているように、こちらから見える表情が変わって思えるのと同じように。

身体的にも、気力的にも大分消耗している。それを自覚しながらも、湊と美奈子は総司と暁と共に決して諦める事無く目の前のモノを見据えた。

『「死神」の後の、アルカナがあるの?』

「愚者」から始まり、終わりを示す「死神」まで。

そこから「命の答え」を見つけて「世界」——「宇宙」まで至った

が、本来、タロットで言う大アルカナの数は始まりでありゼロを示す「愚者」を含めて計22。

「死神」の後、「世界」の前。つまり、「節制」から「審判」まで。死を越えた旅の成功の間。

一体、それには何の意味がある？ 意味が無いのなら、人は「その先」など思わない。作らない。

「それはきつと、『死』の先にも意味があるから」

湊と美奈子が、「命の答え」を見つけた世界。あの場所に、肉体的な死を迎えた湊と美奈子は居ない。けれども、湊と美奈子が守りたいと思つた大事なものたちはそこに居る。その先がある。それが「死」を越えたその後となるのだろうか。

翻つて、今立つ世界。綾風市という、湊と美奈子が存在していなかつた場所。存在しない筈の場所に、けれども今確かに此処に在る。

ならば、今在る「此処」は——きつと「死神」が示した終わりの先。その意味を成す為に、在るのだろうか。

『ふはははは！ ならば、その先さえも無に、終点とさせてやろう！ この世には、どうにもならぬ事があるのだと、それが運命なのだとな！』

嘲弄に満ちた哄笑と共に、目の前のモノから絶えず膨らんでは弾ける泡が生まれて浮き上がる。

来る。心の奥底から警鐘が鳴らされるのを感じる。迎撃しなくては。湊と美奈子、総司と暁が同時に思い、しかし身体が行動として反応を起こさせるよりも早く、真つ黒な泡沫は直ぐ目の前まで迫つて来ていた。

「――！」

ぞわり、と背筋に得体の知れない何かが這い、それが跡形も無く消え去るまで一瞬。

眼前に広がったのは、赤々とした鮮やかな焰。煌々と、直接目にしたら視覚まで焼き尽くされそうな程の眩しさは、決して手が届く事無くどうにもならなかつた「太陽」のようで。

紅蓮の焰は襲い掛かつて来た形にならぬ泡沫だけでなく、目の前の

モノをも容赦無く包んで焼いていく。その焔に対して目の前のモノが全身を震わせて纏わり付いた焔を振り払いながら、黒い体表から、そこに張り付いた仮面から、そのどちらでもない所から、焔と共に現われた姿へくぐもった怨嗟を吐き散らした。

『やはり貴様か……！』

「それはこつちの台詞だ」

湊と美奈子、総司と暁の目の前。混沌の中に這いずる目の前のモノに立ち塞がる者が居る。

カチリ、と青年が手にしたジッポが音を鳴らす。

生み出された焔にも似た、鮮やかな赤いライダース。少し硬そうな毛質の茶色髪は特徴的で、何よりも驚いたのはその青年が——以前、湊と美奈子にバイクを貸してくれた者であった事だった。

『周防……達哉あ……！』

——周防？

周防。湊と美奈子には、その苗字に聞き覚えがある。確か、綾凧署に周防という苗字の刑事が居た筈だ。

眼前に現われた青年と、あの周防という刑事。瓜二つという訳ではないが、面差しが似ている。だからなのだろうか、否、違いかもしくない。湊と美奈子を見つめる達哉の眼差しを受けて、心の海に揺蕩う、ほんの微かな温かさに自然と身体に再び力が灯った。

「相変わらず、運命だの何だのと同じ事ばかり言う」

巨軀を焼き払わんとする焔を振り払った目の前のモノに対して、達哉は静かに言う。

『影は、闇は、お前達人間そのものだ。お前達の意識に在る渴望から、生まれて来る。いつだろうと、ずっとなあ……』

「なら、また同じ事を言うだけだ。そんなものは後出しの予言と変わらないと、そして」

膝に力を入れた湊は総司を、美奈子は暁の身体を支えて共に立ち上がる。

湊と美奈子は共に改めて目の前のモノと向き合う総司と暁を見つめ、総司と暁も同じように見返して同じ眼差しで頷く。そこから湊と

美奈子、総司と暁を見守る達哉に力強く頷き返した。

『ハーツハツハハ！ よかろう、貴様ごと、また絶望を抱いて滅びの世界に墮ちるがいい！』

目の前のモノが嘲いに来る。けれども今は、湊と美奈子、総司と暁に背を向け、同時に目の前のモノへ真つ向から向き合う達哉の声の方がよく聞こえた。

「見せつけてやれ。——これも全部、運命だったってな」

心の海がざわめく。我を、自分を喚べと声がする。

向かい来る日が、決して明るいものだとは限らなくとも。突き付けられた「旅路の果て」の方がやさしく、その先が更に辛い終わりなき戦いだとしても。

この心が、意志が、此処に在るから。故に心の海からの喚び声のままに、己が「仮面」を叫んだ。

『オルフェウス！』

湊と美奈子の声が重なり、姿形は異なりながらも同じ「もう一人の自分」が現われる。

目の前のモノが触手を伸ばすよりも早く、二体のオルフェウスが腕を掲げて炎を生み出す。同質量の炎が互いの熱量と威力を高めながら、同じ一点を穿つ。

形状を黒い靄と化して炎撃から逃れた一部の触手が足下を這って湊と美奈子へ襲い掛かって来たが、その先にはそれを予想していた達哉が待ち構えていた。

「ペルソナ……ッ！」

赫々とした衣が同じ色の焰と共に翻る。

烈日と蒼穹の支配者には、目の前の黒い闇も宿弊とはなり得ない。すべからず照らす源が、形になりかけた靄や触手をことごとく射し焼いた。

幾多も伸びていた触手がぼろぼろと焼けて崩れていく。それを恨むように、黒い体軀に這った表情の無い貌が首となって擡げ、言葉にならない叫びを上げた。

一息吐いている暇は無い。今はその時ではない。故に、湊と美奈子

は続けて召喚器の引き金を引く。

『タナトス！』

幽玄の奏者と入れ替わりに現われたのは、冥府へ死者の魂を運ぶ役目を負った死の化身。

背負った無数の棺桶が、それを繋ぐ鎖と共に音を立てる。携えるのは飾り気の無い一振りの刃。目の前のモノを刈り取る為の得物。

感情の無い無数の貌が上げる怨嗟に被せてタナトスが吼え、駆け出す。その「仮面」の名に相応しく、向かう先に在る存在の命を死へ変える為に。

目の前のモノの幾つもの面から何かか吐き出される。衝撃波のようなものも一緒だ。それらが定める標的は大きく剣を振りかぶったタナトス。しかしそれらは、別の呪怨の波によって飲み込まれた。

「アルセーヌ……！」

タナトスの体躯に隠れて控えていたアルセーヌが高らかに黒い翼を広げ、感情の無い幾つもの貌が吐き出されるものを飲み込み、時として撃ち落とす。その間にタナトスは目の前のモノとの距離を詰めていた。

装飾の無い刃は、無慈悲に与えられる死の象徴。魂を刈り取る死神の鎌と同義だ。タナトスは一切の躊躇い無く、黒い巨軀から無数の貌へ伸びる首のような部分を刈り取った。

黒い体軀から離された貌が、別の何かへ形を変えようとする。そうはいくかど、アルセーヌが現われた反対側からもう一体が飛び出した。

「……イザナギ！」

長い鉢巻が揺れ動くと共に、その身から繰り出されるのは切り離された貌の数を超える斬撃。真つ二つと言うには生温い。その原型が留めぬ程に切り刻まれ、駄目押しとばかりに放たれた雷光が跡形を消し去った。

目の前のモノの巨体に、幾多も伸びていた触手も、張り付いていた無数の貌も今は無い。原形質の黒い何かだけが在る。

「湊」

「美奈子」

美奈子が湊を、湊が美奈子を、同じタイミングで呼ぶ。抱く思いも同じ。従って、それに伴う行動も同じだった。

刻印が施された召喚器を持ち上げる。銃口を突き付ける先は、お互い直ぐ隣に在る湊であり美奈子だ。

通常、召喚器によるペルソナ召喚は自らが自らに向けて撃つもの。他人に対して向けるものではない。だが今、直ぐ傍らに在るのは他人ではない。本当ならば、巡り会う事も無かつただろうから、ある意味で誰よりも何よりも遠かつた。けれども同時に、何よりも誰よりも近い存在——「もう一人の自分」。

故に、その引き金を引く事に何の躊躇いも無かつた。

『メサイア……！』

心の海で幽玄の奏者と死の化身が溶け合い、白き救世主の姿を成す。

場に光が満ちる。闇を退け、影を払い、明けぬ夜を打ち消す。

『グッ、ヌウウウ……ッ!?!』

目の前のモノが呻き、僅かに後退する。

ここに、かつて結んだ絆や存在は居ないけれど。此処で感じたものもあるから。

それを感じられるから、走り続けよう。目の前の悪意を知つていても、向き合おう。

……だから。

「——終わりにしよう！」

今、此処に在るから。目の前のモノが嘲うなら、その望む通りに人の可能性を示そう。

メサイアから放たれる極彩色の一撃。更に、全方向から全員による総攻撃を叩き込んだ。

『これが……これが、何という矛盾か……！』

黒い巨軀はもう無い。在るのはその残骸。既に、夜と共に消え掛けている何かだ。

泥か、霧か。液体とも気体とも、ましてや固体とも判断付かない。

何かも分からないまま、目の前のモノが形を、姿を失っていく。

それでも、声は小さくなっているが目の前のモノからの声は聞こえて来た。

『いいだろう……だが、覚えておくがいい……！ 全ては一にして、一は全て……お前達が、人間が居る限り、そう望む者が居る限り、決して滅びる事など無いのだと……！』

「どうでもいい」

否、実際はどうでもよくはないが、目の前のモノに対してはそう返す。

影は普遍的無意識から生まれ出でたもの。心の海から出でるペルソナと同じ。目の前のモノが言う通り、人間が在る限りは死の概念と同じく消えようのないものなのだろう。

「人間が在り続ける限り、望む者が居るように望まない者だって居る」

「それも知っているし、いつだって忘れない」

生を感じ、死を忘れ得ぬように。

嘲う声が次第に小さく、哄笑も聞こえなくなっていく。そうして黒い何かの滓が消え去っていった後の空には、淡く青白い月が浮かんでいた。

20：審判（2）

終わりの無い影の出現。それが止み、今まで綾凧全体を覆おうとしたそれらが溶けて消えていく。

それはまるで、波が広がるように。その波が静かで平らな水面と変わるように。

心の奥底に、言いようの無い安堵感が広がっていく。その感覚に遅れる形で、何かが終わりを迎えたのだと悟った。

「消え……た……？」

影が消えた。綾凧を覆い尽くさんとした深くて先の見えない黒い闇も薄まり、辺りの暗さは見慣れた夜の暗さに変わる。空には、いつもの青白い色の月が在った。

ペルソナの酷使の所為だろうか。身体に疲労感が纏わり付きながら慎が肩で呼吸を繰り返していると、視界に黒い襪褌布が映る。

分銅の付いた鎖を揺らし、剣を携えたその襪褌布の姿は透けていた。否、透けていく。それを黒い襪褌布も感じているのか、ゆらゆらと揺れる黒い襪褌布から声が漏れた。

『……信じていたよ』

信じていた。何を。湊と美奈子が、綾凧ひいては世界に黒い影であり人々が死に向かう衝動を食い止める事を。それをやり遂げる事を。

黒い襪褌布の短い言葉とは裏腹に大きな意味を持つ事に、慎は思わず身体の力が抜ける感覚を覚える。しかし黒い襪褌布が次に向けた言葉によって、慎の思考は慌ただしく移り変わる事となった。

『君達はどうするの？』

黒い襪褌布の骸骨のような顔が向けた先は、結祈とアヤネ。

結祈とアヤネも同じように綾凧市から影が消えていくのを見つめ、それから問い掛けにアヤネは首を横に振った。

「わたしは、くじらに還るだけ。くじらの中に在るものだから」

くじら。普遍的無意識の集合体。人々の死に向かう衝動によって一時浮かび上がり、アヤネもこうして姿を現したがそれが遠ざかればくじらも深く在るべき場所へ沈む。くじらと溶け合ったアヤネもま

た、同じように心の海へ還るだけだという。

そう語りながら、アヤネは慎を見る。諒も慎の傍らに立ち、アヤネの言葉を待った。

「……羨ましかった」

くじらの中に沈む事は、アヤネ自身が決めた事だった。

これはしてはならない事。あつてはならない事。だから、と思う一方で、あの実験を受け入れたのは父に褒めて欲しかったからだだった。

父に喜んで欲しかった。父の為なら、辛い実験も耐えられた。人為的にペルソナというものを取り付ける行為をしてはならぬと思い、自らをくじらの中に溶け合わせた後でも、父に愛されたい思いは変わらなかった。

だから、10年前の綾風の海辺で。

父と母と、子供と。仲の良い親子。それが羨ましくて、妬ましかった。

どうして、わたしはお父さんにただ愛されたかっただけなのに。どうして、それなのにあんな風に愛し、愛されているのだろう。わたしはそれが叶わなかったのに。

わたしも欲しかった。欲しくて手を伸ばして、それはペルソナに覚醒した慎によって、叶わなかったけれど。

少し透け始めたアヤネから、10年越しに秘せられていた思いが心に直接流れて伝わって来る。

彼女、アヤネもペルソナ研究の被害者だった。父という大人の都合に振り回され、肉体という軀から解放されても父への思いに苦しんだ。

それでも。

「……俺はまだ、君を許す事は出来ない」

兄、諒に支えられながら、慎はアヤネに言う。

両親が許されざる研究に加担していたのは分かっている。アヤネも哀れな被害者だったというのも分かる。アヤネを追い詰めた張本人である小松原を、父を責められなくて、協力していた慎達の父と母に理不尽さの矛先を向けるのも理解出来る。たとえば父の為とはいえ、

人体実験同然の事をされて、それ故に綾風の海中に沈むのをアヤネ自身を選んだのだとしても、そう追い詰めた者達が幸せにしているのを見たら、怒りだっただけでなくなるだろう。

けれど、慎にとつては。否、諒や洵と結祈にとつても。たとえどんな事をしていたとしても、大好きな両親であったのは変わらない。

10年前の出来事を思い出してまだ経っていない事もある。時が経てば薄まるかもしれない痛みや感情は、しかし思い出してからあまり経っていない分まだまだ深く根強かった。

「俺は……憶えていようと思う。父さんと母さんがした事で、君が父さんと母さんに何をしたのか。だから、君も憶えていて欲しい。君がそうした、父さんと母さんの事を」

喪った人は戻って来ない。犯した罪も消えない。

大人が作り出した禍根を子供が背負うべきではないと、父と母と共にペルソナ研究に加担したひいらぎ製薬社長の柊が言っていたけれど。それによって子供達に起こった事が無くなる訳ではない。

ならばどうしたらいいか、なんて、きつと適切な正解なんてものは無いのだろう。それでも取り戻せず、消えないというのなら。

その痛みを、消えさせないという想いに変えて。否定せず、抱き締め続けていよう。

無意識に拳を作つて強く握り締める慎の手を、諒が上から己の掌で包んで重ねる。そして結祈もまた、アヤネの手を取った。

「洵じゃないけど、わたしが一緒に居るよ」

もう寂しくないから、と結祈は微笑む。

ひとりで居たくなかったから、アヤネはひとりになりたい洵をくじらの許へ連れて行った。

けれど、洵はまだくじらの許に行くべきでは無いから。洵の身体には、洵が居るべきだから。

結祈の言葉にどうしたらいいのか分からないように、けれども何処か泣きそうに手を握り返すアヤネに結祈は寄り添いながら、慎と諒、それからまだ眠っている洵を見た。

「諒お兄ちゃん、慎お兄ちゃん……洵。皆、仲良くしてね」

「……結祈」

「大丈夫。わたしはずっと、ずっとお兄ちゃん達や洵の心の中に居るから」

だから寂しくないよ、と結祈が笑い、アヤネと並び合う。

結祈、と慎と諒が結祈に向かつて手を伸ばす。しかしその前に何処からか白い羽根が目の前を覆い、それが全て消え去る頃には結祈とアヤネの姿は無かった。

「結祈……」

「……結祈は、俺達の心の中に居る。これまでも、これからも、ずっと……そうだろう?」

「……うん」

伸ばす先の無くなった手を下ろす慎に、諒が穏やかな声音で告げる。それは慎に対してだけではなく諒自身にも言い聞かせているかのようで、慎は静かに頷いた。

『……おかえり』

そこで不意に、唐突に黒い襪襦布が小さく言葉を漏らす。

姿や気配から感じる恐ろしいものとは裏腹に酷く柔らかい響きに慎と諒が我に返るようにして黒い襪襦布の方を見ると、黒い襪襦布の姿は既に薄れてほとんど消えかけていて、その透けた先に見知った姿が近付いて来るのが見えた。

「有里!」

慎が思わず叫んだ時には、黒い襪襦布の姿は無い。まるで最初から居なかったように消えてしまったその姿よりも、慎の意識は戻って来た湊と美奈子に向けられていた。

こちらへ向かつて歩いて来る湊と美奈子を挟んで、灰髪の青年と黒髪の少年が互いに身体を支えながら歩いている。誰だろう。慎には覚えが無い二人だ。知らない二人、それにどうしてだろう。もう一人居た筈なのにと有り得る筈の無い思考が意識の端に掠めながらも、両者が湊と美奈子と支え合っているように見える様に慎は何故だかとても安堵した。

湊と美奈子が顔を上げ、慎達の方を見る。目が合い、何かを言おう

と口許が動いた——と思ったのも束の間、目の前で湊と美奈子の身体が前のめりに倒れた。

「あ、有里……い！」

慌てて慎が駆け寄りながら腕を伸ばすが、それには距離が遠い。

両脇に居た灰髪の青年と黒髪の少年も気付いて身体を支え直そうとするが、間に合わない。むしろ逆に引つ張られて、両者とも体勢を崩し掛けてしまっていた。

このままでは、四人纏めて転倒してしまう。思わず顔を青ざめさせる慎と倒れ掛ける四人の間に、さっと誰かが割り込んだ。

「あ……」

その誰かは主に湊と美奈子を抱き留め、次いでその両脇に居た二人も支えて転倒を防ぐ。

危うく目の前で転倒を免れた事に対して慎はほっとしつつ、四人の身体を支えたその男を見つめた。

いつの間に現われたのだろう。それも誰だろう。分からないし、知らない。真田や成井からは綾凧市に迫っていた脅威にあたり、関係する別の機関か何かからも協力を仰ぐとか何とか言っていたような気がするが、その関係者だろうか。

倒れた時点で、湊と美奈子は意識を失ってしまったらしい。男にぐったりと身体を預けながら、その目は伏せられて静かな寝息を立てている。一方で灰髪の青年と黒髪の少年は、自分達の身体を支えた男を少し呆けたような顔で見上げていた。もしかしたら、あの四人にも慎と同じくこの男が誰なのかは分かっていないのかもしれない。

そんな四人をしつかりと支え、男は湊と美奈子、それから灰髪の青年と黒髪の少年の頭を労うように掻き乱す。

「よくやった」

そう紡ぐ口許は、酷く艶やかに。

白み始めた空の下、男の片耳を飾るピアスが夜明けの光に美しく煌めいた。

21：世界（1）

教室の窓から見える空は青く、日差しも暖かで良い天気だ。

青緑色の月が浮かび、黒い影が綾風を覆い尽くさんとしたあの夜。あの夜が明けたのを境に無気力症候群の患者は何事も無かったかのように一斉に元の状態へ戻り、リバーズ事件もぱったりと起きなくなつた。

あの夜の事は真田や戌井が関わる組織と警察による情報統制で、表向きには集団ヒステリーによる混乱という事にされている。勿論、人の口に戸は立てられぬもので、ネット上やらゴシップ誌には色々ある意味真実に近いような事も書かれていたりして騒がれてはいる。しかし同時に、人の噂も七十五日。それも世間の他の話題に紛れて、目立たなくなっていくだろう。

真田と戌井からは、あれから所属する機関の他に外部から介入があり、指揮系統や組織そのものが刷新される予定だという。それで今は色々慌ただしくなっているという事だったが、そう話す真田と戌井は何処か安堵しているようでもあった。

今、この教室内に湊と美奈子の姿は無い。

湊と美奈子は転校するのだという。転校先は知らない。その行き先を、慎は知らされていなかった。

知らされたのも、決まったのも急な事だったらしい。今日にはもう綾風市を出るようで、学園内にも居なかった。

慎も元々、転校して来た身だ。色々な都合で急に転校になってしまふ事だつてあるだろう。それを頭では分かっているも胸はざわざわと落ち着き無く、気付くと慎は授業中にもかかわらず勢い良く立ち上がっていた。

「……どうした？」

教壇に立つ教師、小田桐の視線を受けて、そこで慎は我に返る。

今は授業の真つ只中、しかも指名された訳でもないのに突然勝手に立ち上がる。不審に思われて当たり前だ。クラスじゅうから一斉に慎へと視線が集中し、慎は酷く居たたまれないまま立ち竦んだ。

恥ずかしい。居堪れない。何か言おうにも上手い言い訳などひとつも浮かばず、明らかに挙動不審な状態で居る慎を小田桐は暫く無言で見つめた後に小さく息を吐いた。

「……顔色が悪いな。授業はいいから、保健室まで行くといい」
「……え」

思わず慎が小田桐を見ると、表情を変えないままの小田桐と目が合う。

「一人で行けるな？」

その前に言われた事を考えるのなら、その問い掛けは保健室へ、だったのだろう。だが、慎を見る小田桐の目はそれ以外の意味を含んでいるようで、それを察するというよりも都合が良い方にと考えるようにして慎は頷いた。

鞆を手に、顔色が悪いと言われたようには見えない慌ただしく急いだ足取りで席から教室の外へ向かう。教室を出る直前には慎を見つめる拓郎とめぐみ力が強く頷き、慎もそれに無言ながらもしっかりと頷き返してから教室を出た。

教室から廊下へ。廊下から下駄箱へ。下駄箱から校舎の外へ。授業中の為、校舎外のグラウンドでは他学年が体育の授業を行っていた。

授業中なのに一人で校舎から出て来る慎に、訝しげに幾人かの生徒達から視線を向けられるが構っていられない。半ばグラウンドを突っ切るようにして慎が走っていると、校門を舞子が開けている所だった。

「大橋先輩！」

舞子に気付いて慎が声を上げると、ジャージ姿の舞子が慎一人分通れるくらいに校門を開けて手招いた。

「気を付けてね！」
「ありがとうございます！」

立ち止まっている余裕は無く、舞子も引き留める事はしない。擦れ違い様に声を掛け合うに留め、慎は舞子が開けてくれた校門から外に出た。

向かう先は綾風駅。何処へ転校するのかとは聞けなかったが、何処かへ行くのなら大体は綾風駅からの電車で行く事になる。

そう判断した慎が一心に息を切らせて綾風駅へと目指して走っていた所で、その慎の横に一台の車が停まった。

「慎」

「あ、兄貴……」

車のパワーウィンドウが下げられ、運転席から諒が呼び掛ける。

「何をしている」

「それ、は……」

どうして、と慎が言うよりも先に、諒が問うて来て慎は口籠もる。

諒の疑問は尤もだ。諒はまだ自宅に居る事も多いが、少しずつ仕事に復帰している。今日も綾風署に行つたのかしたのだろう。対して、慎は時間的に授業中である事が丸分かりだ。これでは詰問されても仕方無い。

つい狼狽える慎に諒の思案は数瞬、諒は慎へ短く乗れ、と車のロックを開ける。慎がほとんど言われるままに車に乗り込むと、諒はパワーウィンドウを上げ直してからハンドルを握った。

「綾風駅でいいな」

問い掛けではなくほとんど確信的な確認に、慎は頷く他ない。否、慎が応答するよりも早く、車は綾風駅へ向かって走り出していた。

「その、兄貴……」

「……洵から、転校の話聞いてからのお前の様子がおかしいと聞いた。まさかと思つて、学園の近くを走らせてはみたが」

いまだ何と言いつ出したら良いのか分からずに窺い見る慎に、諒が前方を見たまま言う。

転校の話。それは勿論、慎や洵の事ではなく湊と美奈子の事だ。急な転校の話に多少は思う所も様子も違つたりするだろうとは思ふが、洵には諒にわざわざ相談する程におかしいと思われていたらしい。道理で今日、洵から何か物言いたげな目で見られていた訳だ。

弟にそこまで心配されるなんて。湧き上がる不甲斐なさに、慎はシートベルトを握り締めながら肩を落とす。

「洵に……弟に心配させるなんて、情けないな」

「……兄として、不甲斐ない姿は見せたくない……か？」

思わず漏れた言葉にそう返した諒に、はっとして慎は諒を見る。

諒の視線は、運転中である為に前方を見たままだ。しかしその表情は何処かむつすりとして、けれどもそれでも何となく自分自身含めて揶揄めいたもので——以前に、周防という刑事が言っていた言葉を思い起こさせた。

もしかすると、諒も周防に同じような事を言われたのかもしれない。今の慎と同じ気持ちをも、諒も抱いていたのかもしれない。ふと浮かんだ思考に心の奥底に何とも言えないくすぐったさが湧き上がりながら、慎も鞆を抱えて前へ向き直した。

まだ明るい内の平日、交通量は多い方ではない。渋滞に引つ掛かる事も無く、車は順調に綾風駅に辿り着く。

駅前のロータリーに車が停まり、慎は車から降りて綾風駅構内へ入る。

しかし、そこからどうしたらいいのか。湊と美奈子は何処に居るのか、そもそも駅内に居るのかさっぱりだ。駅構内といってもそれなりに広い為、あちこち探し回っても下手すると擦れ違いに、なんて事になりかねない。

駅構内を行き来する人波の中、正しく慎は右往左往としてしまう。その癖に気ばかりがやたら急いてしまっていると、不意に慎の手がそっと握られた。

「神郷君、あそこですよ」

柔らかな声音と共に慎の手を握ったまま指し示されたのは、駅の窓口近く。そこには確かに、湊と美奈子が立っていた。

見つけた。そのまま衝動的に湊と美奈子の許へと駆け出し掛けた。慎だったが、そこでふとある事に思い至る。

——今の、声は。

聞き覚えのある声であり、聞ける筈の無い声。はっとした慎が顔を上げると、そこには微笑んだ叶鳴の姿があった。

「もりも……」

守本、と呼び掛ける前に、呆けた瞬きひとつ経るよりも早く。気が付くついで先程まで慎の手に触れていた感覚も、目の前に居た筈の叶鳴の姿も無くなっていった。

まるで幻か、それこそ白昼夢。けれどもそれで済ませるには心の奥底に柔らかな何かが強固確固として残っていて、慎は静かに手を握り締めた。

「……ありがとう、守本」

眩きは心の海へ。小さく礼を告げ、慎は湊と美奈子の許へ向かう。

「湊！ 美奈子！」

「……慎？」

大声で呼び掛けると、慎に気付いた湊と美奈子が振り返って見つめて来る。

どうやら、電車に乗る時間にはまだ余裕があるらしい。間に合って良かった。それに見つけられて良かった。安堵に胸を撫で下ろし、慎は鞆から二冊の本を取り出した。

一冊は「くじらのはね」。慎の父と母が描いた絵本だ。

それから、もう一冊は――

「これ……本にするには間に合わなかった、けど」

慎の父と母宛に送られて来た、挿絵を描いて欲しいと書かれた手紙。

その手紙の差出人の息子が書いたという小説であり、手紙の中に書かれていた話。

慎が家の片付けをしていた時に見つけ、湊と美奈子に返事をする事を提案され、差出人に連絡を取り、舞耶の仲介と諒の協力を得て慎はこの話に絵を描いた。

ただ、本として出版に至るにはまだまだ先の話で、湊と美奈子に渡したのは第一稿の電子データを出力して簡単にホチキスで留めたものだ。本と言えるかどうかすら分からない。

そんな中途半端な代物でも、どうしても湊と美奈子には見て欲しかった。渡さないといけない気がした。

何故なのかは慎でも分からない。返事を書く事を湊と美奈子から

促されたからというのものもあるのかもしれないが、それ以外にもあるような気がする。慎には分からないし、知らないが、何か大事な意味や価値があるような——そんな気がした。

湊と美奈子は、「ピンクのワニ」と題名が記された本をじっと見つめている。そしてそれを大事そうに、大切そうに「くじらのはね」の絵本と共に受け取った。

「……ありがとう」

「大切にする」

そこからぽつぽつと授業中にもかかわらず抜け出せた事について気を回してくれた面々や心配してくれた弟や兄の事も話し、そこで一度言葉が途切れる。

まあまあ広い駅構内、昼間故に人通りは然程多くは無く、通行の邪魔にならない限り会話程度では特に咎められる事も無い。とはいえ、まだ電車の時間には早いらしいとは聞いていたがあまり引き留めるのも宜しくないだろう。

それを湊と美奈子も察したらしい。普段は空気読み人知らずなのに、どうしてこういう時の思いは読むのだろう。それが理不尽で、けれども何とも湊と美奈子らしいとも慎は思った。

「……あの、や」

「何？」

不思議そうに首を傾げて、湊と美奈子が慎を見る。

言葉が幾つも浮かんで、しかし中々口から出て来ない。上手く回らない。沢山言いたい事があるのに、ばらばらに散らばって纏まらない。

それでも、言わなくては。伝えなくては。言わなくたって想いが伝わる事もあるのだろうけど、それに甘えてはいけない。何より、言葉に出して伝えたかった。

「……っ、俺！ 絶対、忘れないから！ 湊と美奈子と、皆で過ごした事も、一緒に……沢山の事を思った事も、覚えてる……！」

同じ日に転校して来て、同じ時間を沢山過ごした。

湊と美奈子がこの綾風で、慎達と過ごした事を慎は覚えている。そ

れはこの綾風で起こった事の所為で、決して喜ばしい事ばかりではなかつたけれど。怒って、泣いて——きつと湊と美奈子も、そうだった。その時は感じていなかつたけれど、掛け替えのない時間だった。

「ずっと……いつだって、友達だって……！」

だから、忘れない。覚えている。それがこの綾風から居なくなつてしまふ、湊と美奈子が「此処」に居た証でもあり意味でもあると思うから。同時に、慎の願いでもあるから。

傍から見たら、格好が付かないにも程がある様だつただろう。ただただ思いの丈をぶつける慎に、湊と美奈子は少し呆然としたように目を瞬かせた後、揃つて微笑む。

それは春の桜のように暖かく優しくも儂げで——けれどとても、綺麗だつた。

駅から出て、慎はロータリーに停まつている諒の車へ戻る。

ロックが解除されたドアを開けて助手席に座ると、張り詰めていた身体力が一気に抜けた。

「会えたのか」

「……うん」

隣の運転席で静かに問い掛ける諒に、慎は小さく頷いて答える。

湊と美奈子が行つてしまふ前に、会う事が出来た。伝えたかつた事も、渡したかつた物も言えたし渡せた。

これで良かった筈なのだ。ちゃんと約束だとも伝えられたのに、けれど。

「うっ……う、あ、……う、あああつ……！」

どうしてだろう。悲しくて苦しくて、涙が止まらない。

本当は、本当なら、湊と美奈子に会えた時点でもう泣きそうな気分だつた。もう会えないかもしれない、そんな恐ろしさがあつた。涙を流して、湊と美奈子に気掛かりに思われたくないのもあつた。みつともなく、泣くのを見られたくないのもあつた。

もつと、何か。そう願ひ、望んでしまふ。欲張つてしまふ。

他にも何か出来たのではないか。言えたのではないか。そう思えども、湊と美奈子はきつとそういう何か更にとという事を望んだりしないであろう事も分かっていた。

頭の中では納得していても、心の底で騒がしく揺れ動く「自分」が居る。

世の中にはどうにもならない事もあるのだと、深い奥底で何かが嘲う。

そんな事は分かっている。分かっているから、込み上げて来る涙を湊と美奈子の前では堪えて見送った。受け入れていて、こうしようと選んで、それでも溢れる感情だけは誤魔化せなかった。

ぼたり、ぼたりと止め処なく溢れる雫が重力に従って、嗚咽を漏らす慎の膝上を濡らしていく。

そんな慎に諒はただただ黙って、静かに慎の思いを受け止めていた。

21：世界（2）

慎と別れた後、湊と美奈子はまだ電車に乗り込む時間には余裕があるという事でトイレを済ませてからはそれぞれ別々に行動していた。

湊はというと、駅内の売店を眺めていた。しかし別に何か買う気は無かったので、特に商品を手取るような事もしない。ただぼんやりと売店に並ぶ品揃えを見ていた所で、不意に視界に入った姿に湊は思わず小さく声を漏らした。

「あ」

音となったのが、何だか前にも漏れ出てしまったものと同じに思えたのは多分気の所為ではないだろう。そして同じように、視界に映ったその人物——総司も、湊の存在に気付いて目を見開いた。

他人の事は言えやしない鬱陶しそうな前髪の下から覗く目が湊を捉え、総司は湊の許へ歩み寄る。そこから湊の前に立つと、互いに小さく会釈を交わしてから次の言葉が出るまで僅かな間が出来た。

「今日は……」

「もう、行かなきゃならないから」

「……そうか」

全て言われる前に返した答えが、言葉足らずだとは思わない。総司も湊の言葉に、僅かに視線を落として頷いた。

漂った沈黙は数秒。駅内のアナウンスやざわめきが耳に付くよりも先に、総司が何か思い付いたように顔を上げる。

「ちよつと待っていてくれ」

言うや否や、総司はその場に湊を留めて一旦そこから離れる。

一体、どうしたというのか。待っていて欲しい、と言われた湊は、まだ時間がある事もあって首を傾げつつも一先ず総司に言われた通りにその場で待っている事にした。

程なくして湊の許に戻って来た総司は、一旦離れた時には持っていなかった紙袋を湊へ手渡した。

「俺から、良かったら」

総司に手渡されるままに湊は紙袋を受け取り、その中身を覗き込

む。

紙袋はこの売店の物で、どうやら土産物コーナーで買って来たらしい。ただ、その中身は。

「ありが……あのさ、これ東京土産じゃ」

「電車の中で食べてくれ」

「君、マイペースって言われない？」

パッケージにデカデカと書かれた東京銘菓の文字。そうでなくとも、土産物の類に詳しくない湊でも分かるくらいに有名な東京土産だった。

湊の指摘を聞いているのか聞いていないのか、言葉を続ける総司について湊の口から珍しく突っ込みが漏れる。空気読み人知らずと言われる事はあるが、上には上が居るものだ。羨ましいとかは全然思わないが。

折角わざわざ買って貰ったものであるし、食べ物に罪は無いと思うので有難く貰っておく。受け取った紙袋を湊が手に提げて持った所で、ひとつ頷いた総司が静かに切り出した。

「……俺も、もう出て行こうかと思う」

何処を、それから何処へ、とは言われなかった。

問うのは多分、野暮だ。訊かれる事を求められてもいないのだろう。故に湊は総司へ視線だけ向けると、総司はまたひとつ頷く。

「都合のいいものだけを見て、目を塞いでばかりではいけないから。今度こそ、同じようにはなれなくたって、向き合ってみせる」

ちゃんと、己の双眸を開いて見据えていこう。

見たくないものを見ないようにして、都合のいいものばかりを見ようとして、本当に見なくてはいけないものまで目を背けて見落としていた。そうしてはいけないと知っていたのに、先の見えない深い霧のような不安と怯えにどうしたらいいのか分からなくて、孤独の寂しさを勝手に感じているだけだった。

かつてと同じように、とは思っていない。時の流れはいつまでも同じようにはしてくれない。けれども時間が経ったからこそ、改めて見えて来るものだってあるだろう。感じられる事だってあるだろう。

自分はひとりではないのだと、気付けたように。

「……そうだね」

心の海を通して伝わる穏やかな波に、湊も頷く。

愚者から始まるアルカナの旅路。ヒトが知恵の実を手にしたが故、神が創りし樂園を追われた瞬間から始まったもの。

始まりがあるのなら、その先には必ず終わりがある。かつて辿っていた旅は一度、歩みを止めたが為に終わってしまったのかもしれない。けれど、また旅を始めたっていい。また歩み出してもいいのだから。

総司が真つ直ぐに逸らさない瞳で湊を見つめ、手を差し出す。湊も紙袋や慎から渡された冊子を持っていない方の手を出して、お互いに手を握り合った。

「だからまた、君ともいつか会おう。——世界は繋がっているから」

最初の挨拶である筈の互いに手を握り合う行為は、今は再び会う為の別れとして。

約束だ、と。

21：世界（3）

一方、美奈子は電車の発車時刻までの間、駅内の花屋へ立ち寄っていた。

店先に並んだ色とりどりの花や植物。それらを眺めていると店の奥から店員が出て来て美奈子は顔を上げるが、その店員の姿を認めると目を見開いた。

「あれ……？」

「このバイト、始めてみたんだ」

美奈子の疑問を汲み取って、花屋の店員——暁が答える。

濃い緑色のシツクなエプロンはよく似合っていて、花屋のバイトではなくともぴつたりに見える。今の時間、暁以外の店員は居ないようだった。

この店がバイトの募集をしていたかどうかまでは記憶が曖昧だが、その辺りは大した疑問ではない。暁の返答を聞きながら、美奈子はポケットから一枚のカードを取り出した。

「これ。もう、来られなくなったから」

そう言って差し出したのは、この花屋のスタンプカード。暁は美奈子から差し出されたそれを受け取り、裏面のスタンプ台紙面を見た。

一定金額毎に押されるスタンプ。カードに印刷された台紙には、上限のスタンプ数が全て押されて埋まっていた。

ただ一度、二度来るだけではスタンプ満了にはならない。つまりは全てスタンプが押されるくらいにそれだけこの花屋に訪れたという証拠で、その事実には暁は黒縁眼鏡の奥で双眸を細めた。

「……ずっと、見守ってくれていたんだな」

あの長いながい眠りから目覚めた時。病室のゴミ箱に、この花屋のシールが貼られたビニールが捨ててあった。暁がこの店のバイトをしたいと思ったのもその為だ。

勿論、溜まったスタンプ分全てが暁だけの為という訳ではないのだろう。ただのついでなのかもしれない。だがゴミ箱には萎れた花もあって、ベッド脇のテーブルには花以外も置かれていた。それは、一

度だけではなく少なくとも二度以上病室に訪れていたという事だ。

他の誰にも、気付かれない中でも。暁自身が自分の事も他の事も考えたくないと思つて、眠り続けていた中でも。いつ目覚めるとも分からない中でも。

気付いてくれていた。暁の事を考えて、思つていてくれた。ひとりきりなどではなかった。

「ちよつと待つていてくれ」

一人深い息を漏らした後、暁は美奈子にそう言い留めてガラスのウインドウケースを開ける。

美奈子は不思議に思いつつも電車の発車時刻にはまだ余裕もある為、取り敢えず頷いてから言われるままに待ちながら暁の行動を眺めた。

暁はガラスのウインドウケースからバラの花を取り出し、作業台の上に置くと手慣れた手つきでラップピンクしていく。取り出してから幾分も掛からない。仕上げにピンク色のリボンを持ち手に結び、それを携えて再び美奈子の許に戻つて来た。

「これ、俺から」

これ、と示されたのは、暁と美奈子の中に挟んだ真っ赤なバラの花束。

「……お金は？」

「スタンプカード貯まった分の割引と、あとは俺のバイト代から天引きして貰う」

店のスタンプカードは満了すると幾らか分の割引があると書かれていたが、目の前にあるバラの花の本数は割引分を軽く超過しているだろうと美奈子でも分かる。些か何うような美奈子の問いと視線に、暁はやや気恥ずかしげに眼鏡を弄りながら続けた。

——俺の気持ちを受け取つて欲しい。

鮮やかな深紅のバラへ吹き掛かる吐息に花卉が揺れながら暁はそう告げ、花束の向きを変えて美奈子へ差し出す。美奈子がそれを受け取り、腕に抱えると柔らかなバラの花卉が頬や口許を擦った。

「ありがとう」

目の前の瞳とよく似た色のバラを抱える美奈子の姿に、暁は口許を緩めながらも僅かに眉を下げる。

「……俺にはまだ、見合う言葉を口に出来る資格はないけれど」
ずっと眠りの淵に逃げ続けていた。

何も選びたくない、何も考えていたくないと、そう思つて閉じ籠もっていた。その結果、自分は何も変えられず、自分も何も変わらず、ただ時間の経過によって全てが変わつて選択や思考すら意味を成さなくなった。

けれども、もうそんな風には思いたくない。もうあの時と同じ思いも選択も出来ないけれど、これから何かを選び、何かを考える事は生きている限り終わらないから。それが人間というものだと思うから。どうしたらいいのかと考えて、そうしたいと思ひ、選ぶ自分の未来を——必ず取り戻して、自分の答えを掴めるように。

そうして、またいつか。自分が秘めたものに相応しいと思えた時、今度はちゃんと口に出して伝えよう。

敢えて約束はしない。離れていたって、同じ星を見ているから。ならばきつとまた会える、と。

22：宇宙

時刻表通りに電車が到着し、駅のホームからそれに乗り込む。

控えめに揺れる車内で座席に並んで座りながら、湊と美奈子は窓から外を眺めた。

遠ざかっていく綾凧市の景色。決して長くはなかったが、短くもなかった。流れていく景色の幾つかは見覚えのあるもので、訪れた事もある。過ぎ去っていく街並みを引き立たせる、透き通ったスカイブルーの空が眩しかった。

窓越しに差し込んで来る陽光に目を眇め、そこからまた座席の近くまで視線を戻す。持ち抱えているのは、くじらのはねの絵本とピンクのワニの冊子、東京銘菓が入った紙袋に真つ赤なバラの花束。この綾凧に来た時には、持っていなかった。あの場所であって、得たものだった。

「美奈子」

「湊」

湊から美奈子へ、美奈子から湊へ。僕、と湊が言い、私、と美奈子が言う。

全く異なる面立ち。正反対のようで、どちらとも浮かべる表情や滲む感情は違い無く同じだった。

「楽しかったね」

「会えて良かった」

有り得ない事だった。本来なら、無い筈の事だった。思ってしまった事を利用してしまったが故の事でもあったけれど、それだけじゃなかった。

出逢えた者が居た。紡ぎ深めた絆があった。感じ合えた想いがあつた。生きたその先が存在した。

同時に言葉を紡ぎ、声が重なって、想いが同じ心の海で溶け合う。

どちらからともなく互いに寄せ合った肩が触れ合い、温もりを伝え合う。全く同じ温度であると知りながら、同じ温かさから込み上げる心地良さを分け合って感じ取る。

湊と美奈子が座るシーートの反対側、いつの間にかそこに座っていたファルロスはそんな湊と美奈子を微笑んで見つめていた。

「二人とも、お疲れさま」

柔らかに労うファルロスの声が、酷く遠くに聞こえる。

……何だかとても眠い。

空がこんなに綺麗で、陽の光がこんなに眩しくて。間近に重なり合った温かさが、心の海に積み重なって揺蕩う気持ちだが、こんなにも心地良くて。

瞼が重くなる。瞬きする事すら億劫になって来る。ぼんやりと霞む視界の中で、ファルロス、否、綾時だろうか。どちらも同じだから、どちらもしかもしれない。どちらとももの姿が湊と美奈子を穏やかな表情で見守っていた。

「本当に、ほんとうに——よく、がんばったね。だから今はゆっくり休んで、僕はずっと君達の傍に居るから。それから、また……」

その先はもう聞こえない。繰り返していた呼吸も、刻んでいた鼓動も。

ただ目を閉じると、何処かで見た蝶が羽ばたいた気がした。